

士官候補生の異世界漂流

サイレントグラス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある士官学校で2年目を迎える。

そんな主人公永遠勇輝は事故によって異世界に迷い込んでしまう。

彼はたった一発の空砲しか入っていない時代遅れの銃しか持っていないかった。

元の世界に戻るためにも死ぬわけにはいかない。

たった一人で新たな世界に放り込まれた彼は趣味の知識と士官学校での経験、手にした銃を武器に戦う。

その放浪と戦いの先にあるものとは？

目次

第1章 漂流

プロローグ「士官学校の日常」

1

遭遇

13

邂逅

18

出発

23

半世紀ぶりの復活

29

出会い

34

ギルド

41

初依頼

47

鍛冶師

54

パーティー

60

仲間

67

療養

74

獣人

81

新たな剣

88

決闘

96

買い物

103

特訓

109

旅立ち

116

キャラ紹介1章

123

第2章 獣人の国

銃声

125

寄り道

134

(外伝) 士官候補生の追憶

141

救出作戦	321
救いの誓い	314
ツンデレ剣士	307
襲撃者	297
嵐の前	290
再会	281
第一王子	274
災いの影	265
縛道は鬼畜	256
庭園	247
謁見	240
転生	230
迫り来る真実	
仲違い	223
ノシヨの夜	217
対空戦闘	207
乗り物	201
魔導士官候補生	194
感謝状	186
戦いの後	180
マーハリク防衛戦	173
非常呼集	166
兄と妹	160
(外伝) 着校日	153
襲撃	146

覚悟	329
鎮魂の轟き	337
囚われの王女	342
作戦終了	351
カナとケーネ	358
望郷の月	365
交渉のカード	372
喧騒の合間に	377
帰路にて	386
帰路にて	393
その2	

第1章 漂流

プロローグ「士官学校の日常」

メインキャラ紹介

永遠 勇輝（とわ ゆうき） 性別 男 血液型A

某士官学校に通う学生で2年生（大学相当で4年制）、男だけの3人兄弟の長男でミリタリー系のオタク気質だが、表面的なコミュニケーションだけなら問題なくこなせる。無意識にすぐ他人と自分を比較してその度に劣等感を感じてしまいネガティブになりがちな残念な性格。もちろん友達は少なく、運動や勉強は中の下か下の上（自称）とりあえずこんな感じの主人公です。人生初の創作ですが温かい目で読んでいただけたら嬉しいです。あとプロローグめっちゃ長いです。

2000年 4月1日

ついに迎えてしまった。

そんな後悔やこれから起こるだろう苦難への不安を滲ませた思いを抱きつつ朝を迎える。

「第2学隊 起床！ 日朝点呼集合！」

去年から毎日のように聞かされウンザリしているやかましいラッパと週番の掛け声を聞いて自分も同じ部屋の人も飛び起きた。

実際はほとんどの場合放送がかかる少し前に目が覚めているのだが、放送があるまではベッドの中で待つしか無い。

飛び起きてからは慣れた手つきでシーツと毛布をたたんでベッドの上に置き、上に着ていたTシャツを脱ぎ、作業着のズボンを履いた上裸の格好に帽子を被ってその手には真っ白なタオルを持ち部屋を出た。

そのまま走って寮の前で整列、乾布摩擦をしながら点呼を取る。

冬も終わりに差し掛かっているものそれでもさすがに朝早く上

半身裸で外に出ると少し肌寒い。

第2学隊は四つの中隊、そして一つの中隊に三つの小隊で構成されている。

ちなみに人数はおよそ500といったところで4階建の寮の1フロアごとに同じ中隊というふうになっている。

勇輝は去年は233小隊・・・第2学隊の3中隊の3小隊という意味・・・だったが今年からは213小隊である。

寮は1階から1中隊となっているのでいちいち階段を昇り降りしなくて済むようになったのは嬉しいところだ。

勇輝は同じ学隊に留まる「残留組」なので中隊だけの引越して済んだが、多くの学生は違う学隊から来ていたりするために点呼でどこに自分の中隊、小隊が整列しているのか判らず右往左往して上級生が怒鳴るというたぶんこれも恒例行事なんだろうなと思いつながら見ていた。

そんないつもより少し遅くなった点呼の後にはあらかじめ決められている場所の清掃だ。

新年度最初の清掃場所は洗濯室だった。

ここは各フロアの東西に一つずつある洗濯機と乾燥機が5つある部屋で学生全員がここを時間があるときに使っている。

だが、ここは清掃において厄介なポイント「水場」に属しているのだ。

水回りは常に汚れやすく、清掃手順も複雑、限られた時間で完全に済ませるのは一年間やってきた2年生でも少しキツイところである。

「気を付け！　清掃かかれ。」

清掃道具のほうきやちりとり、水の入ったバケツに雑巾とメラニンスポンジを揃えて立っていると清掃監督の3年生が指示を出して作業を慌ただしく開始する。

「ここにホコリ残ってんぞ、しっかり見ろ。」

「遅ーぞ、ちんたらしてんじゃねーよ。」

「ハイッッ!!」

次々と飛んでくる指摘（罵倒含む）を作業の手を緩めないように気を付けつつ出せる限りの大声で叫ぶように返事をする。

なんとか時間以内にきれいにしたら残った時間はメラニンスポンジと雑巾を手にとって廊下の汚れを終了の号令がかかるまでひたすら落とす。

出来るだけ踵を擦らないように歩けば全く汚れはつかないのだが、大急ぎで廊下を走ったり、自覚が無いのかわざとなのか足を擦って歩く上級生によって毎日たくさん黒っぽい線状の跡が出来上がっている。

これでは典型的なたちごっこである。

・・・全くこんな効率の悪いことをいつまでやるのか。

そう呟きたいのをかろうじて飲み込みながらスポンジを擦り続けているとやつとその時がきた。

「1ツ中隊撤ツツ収ー1ツ!!」

「ハアアイツ！」

三年生の代表が大声でその号令をフロアの中央で叫ぶと各所で這いつくばっていた2年生全員が立ち上がって同時に返事をする。

そうしたら大急ぎで自分の元の清掃場所に置いてあるバケツの水を流して他の道具を回収して自室の清掃ロッカーに放り込む。

こうして朝の清掃が終わった。

清掃を終えたらすぐさま寝室のベッドを見る。

すると案の定点呼に行く前に畳んで揃えて置いたはずのシートと毛布がぐちゃぐちゃに散らばっていた。

これが俗に言う「台風」で畳み方が汚いのはもちろんそうでなくとも全員の毛布が散らばされることもある。

大抵新年度や新学期はどんなにきれいにしても見事にやられる。

「はあ、やっぱりとばされたか。」

ここでやつとそれらしい言葉をゆっくり発するとそれに見合わない速さでもう一度畳み直してベッドの端に揃えて置いた。

寝室を出るとまた清掃ロッカーからほうきとちりとりを取って隣の居室の土間のちりやほこりを取る。

3人いる同部屋の同期は各々新品の雑巾や掃除機を持って部屋の机や窓、フロアマットを掃除している。

同じくこの部屋にいるはずの上級生は部屋掃除の時にはすでに食堂に行つて朝飯を食べているところだろう。

「このくらいでよくない?」

「もうメシいこうぜ。」

「あとあの机の上拭いたら終わるから待つて。」

そんな会話の後に3人で机を拭いている同期を待ち、準備ができたら4人で寮を出て食堂に走つて行つた。

食堂に着くと入り口につながる階段から行列ができていた。

そのほとんどは勇輝たちと同じく部屋掃除をしていた同期たちだ。

列に並んで少しずつ前進して階段を上ると食堂まで行列のまま入つて行く。

朝食はセルフサービスで最初にお盆と箸を取る。

お盆の感触がやけにザラザラしていたので見てみると角がひび割れて少し欠けている。・・・ハズレを引いたみたいだ。

行列が無かったら取り替えていたのだが後が詰まっているので今回は諦めるしかない。

次はパンとそれにつけるマーガリン、サラダ、パックの牛乳を取る。

パンはいつも違う種類がある程度の周期で出てくる。

今回はたぶん8枚切りと思われる食パン3枚とマーガリンで正直あまり好きではないし、そんなに食べれない。

最後に紙パックのカフェオレを取つた。

こちらはデザート枠で当たりの時はプリンやヨーグルトなのだが、今回のようにカフェオレやオレンジジュースだったりもする。

帽子を左脇に挟んでお盆を持ちながら4人が座れそうな場所を見つけて食べる。

この後もいろいろあるので満足に味わったり最後まで食べることはできないので食パン1枚とサラダを残して牛乳とカフェオレは休むことなく一気に飲み干して片付けた。

また4人は隊形を組んで走って自室に戻って行った。

部屋に戻ったら課業で着る制服の準備をする。

艦〇れのT督の軍服をそのまま紺色にしたような制服をプレス（アイロンがけ）をしてどんな小さなシワも見逃さず、ラインはピンと立つくらいにしっかかりかける。

そして革靴は丁寧に磨いて言葉通りピツカピカのツヤツヤに仕上げられる。

最後に真鍮製の制帽の正面につける帽章と襟章2つを金属磨きで磨く。

どちらもサイズは異なるが士官学校のエンブレムとなっていて、これを磨く作業のことを使用する金属磨きの名前からとってピカールと呼んでいる。

「俺先にプレスするから、靴磨くかピカールやっというて。」

「いや、もうどっちも終わってるんだけど。」

「じゃあ靴磨いとくからプレス終わったら教えて。」

こんな感じで各部屋に1、2台しかないアイロンを同部屋で話し合っとうまく使っている。

服装の準備を済ませたら手提げ鞆に今日の授業で使う教科書とかを放り込んで寢室に行き、髭を剃る。

そしてさつき手入れを済ませた制服に袖を通すとまだプレスしたばかりなので少し温かい。

そうこうしているうちに課業整列の時間が来たので鏡を見て問題がないのを確認したら部屋を出た。

朝の点呼のように寮の前にたくさんの学生が整列している。

しかし点呼と異なるのは皆きつちりと制服を着こなしていること

と、中隊ごとではなく班ごとに整列していることだ。

班は学年でまとまっているので後ろに上級生が立つ事はなく気が楽でいい。

全て班長が班の人員の確認を済ませて週番に報告すると今度は週番が当直の教官に報告する。

これで課業整列は終了し、班ごとに隊列を維持して授業のある教場へと向かう。

この学校は大学相当の教育をしているのだが、他の大学と違って朝イチの清掃で激しく動き回り、その後も準備とかでまったく休めていないのだからほとんどの学生は眠ってしまう。

勇輝を含めて頑張ってる者は少ない。

なんだか先生がちよつとかわいそうに思えてくる。

そんな授業が午前に2つ入っている。

午前最後の授業が終わり挨拶を済ませると、さつきまで寝ていた学生も含めて全員が走って食堂へと向かう。

昼食は朝食と違って下級生が全てを準備するのだ。

この時におかずのおかわりや上級生の好みのドレッシングなど限られたものを巡って同期の間で仁義なき戦いが繰り広げられる。

足に自身のある者が奪い合いに興じている中他の学生はご飯や汁物をよそったり、上級生の箸やお盆をが欠けたりしていないかチェックして回り、問題があったら下級生の無事なものと交換する。

勇輝はどこぞの寺だったか神社だったかが年明けにやっってるような超密集レースをする度胸も実力も持ってないのでおとなしく箸の準備をする。

ぼちぼち準備が終わりに差し掛かったあたりで上級生がちらほらと食堂にやってきて自分の席に座る。

「おい〇〇、俺のメシがべちゃべちゃなんだけど。どういうこと？」

「誰だこのテーブルのお盆チェックした奴、XXさんのやつヒビがあるぞー」

そんな声が聞こえてくるが大抵は言われてる奴は当事者ではなくとぼつちりがほとんどであるが、ここで私ではないとは言えない。とにかく何か言われたら身に覚えがなくても耐えるしかないのだ。そして勇輝の前の席にも上級生がやってきた。

「お疲れ様ですー！」

その上級生が座るのに合わせてお辞儀をする。

「失礼しますー！」

そう言つて準備が終わり何もすることがなくなったら自分も席に着く。

これからが勇輝の苦手な時間である。

「全学隊気を付けー！食事始めッ！」

全学隊を総括する週番が号令をかけて食事が始まる。

食事中は目の前の上級生と何かしらの話をしなければならぬという訳の分からない伝統がある。

これは上級生の間でもよく思っていないものもいるが、そうそう変えられるものでもなく下級生は面白そうな話題を考えて話しかけなければならぬ。

ミリタリー趣味のある勇輝はその分野でならそれなりに話ができるが他はからつきしで毎回口クな話が出来ず苦労している。

実際にこの時の話がつまらないという理由で何度もシバかれて勇輝の嫌いな時間となっている。

「○○さんは今週末どこに外出するんですか？」

こんな感じのありきたりな会話（質問）くらいしか出てこない。

・・・誰もがコミュ力高く面白話題持ってるわけないだろ。毎回そんな独白をしながらなんとか昼食の時間をやり過ごす。

今回前に座った上級生はあまり話をするのが好きではなかったのか勇輝が話し掛けても口クな返答はなかった。

これはこれで気まずくてキツイがとりあえず乗り切った。

食事を終わると食堂から走って寮に戻って午後の授業の準備などをする。

それからベッドメイキングを始める。

朝に畳んで置いてある毛布をなるべく崩さないようにどかして下にあるシーツをはじめに広げて上端をベッドマットの下に入れ込み両端に三角折りを作る。

この最初の段階がかなり重要でシーツの張り具合はもちろんのと三角形も出来る限り正三角形となるようにしなければならぬのでスピードも大事だが慎重に折り込む。

次にもう一枚シーツを広げてその上に毛布を上端からおおよそ手の平くらい離して広げる。

そうすると毛布の下のシーツが離してはるスペースの分だけ見えているのでその部分だけ毛布の上に折り重ねてベッドマットの下に入れ込む。

最後にまだ入れ込んでない下端の毛布を一枚目のシーツと同様に三角形折りを作る。

これまたクオリティのハードルが高いのだが、シーツと違って厚みもあつて張りにくいだけでなくなかなか綺麗な三角形になってくれないのだ。

納得がいくまで数回やり直してそれなりのものができたら仕上げに全体を引っ張ってマットの下に入れ込んで毛布の張りを極限まで突き詰める。

「ふう、こんなもんかな。」

今回はちよつと手こずつたのでため息混じりの独り言が出た。

正午にまた課業整列があり、その後は午後の授業が午前同様にあつた。

最後の授業が終わつたらまたもやダツシユで寮に帰る。

課業時間が終わつたら次はクラブ活動の時間なのだ。

この士官学校には大抵の運動部は存在していて射撃部や銃剣道部などのマイナーなものもあつてレパトリーは豊富である。

その中で勇輝が所属しているのは「儀仗隊」だ。

高校生バージョンの士官学校に存在しているものひとつを除いて

日本でここにしかない部？である。

寢室で制服を脱ぎ、運動用のジャージに着替えて透明ビニールテープと真っ白で軍手のような滑り止めのついた手袋をロツカーの引き出しから無造作に取り出し、部員の証である帽子をかぶって武器庫に向かう。

フロアの中央にある武器庫の前に行くときまだ他の人は来ていなかった。

・・・まったく、僕が一番乗りかあ。

そんなことを考えながら大きめのため息をつく。

とりあえず帽子を脱いで武器庫の入り口前に置き、向かい側にある教官室に鍵を取りに行く。

教官室の扉の前で息を整えて軽くノックをして返事を確認してドアを開け部屋で再専任の教官（3佐だから少佐クラス）に頭を10度下げて無帽の敬礼をする。

「入りますッ！儀仗隊2学年、永遠学生は一中隊武器庫の鍵を受領しに参りました。」

要件を述べると一番奥に座っていた教官が金庫から鍵を取り出して勇輝に渡した。

「帰りますッ！」

もう一度3佐に敬礼をして回れ右をして部屋から出る。

さっそく武器庫を解放して中に入って見渡す。

・・・去年の中隊のたいして変わらないけどちよつとレイアウトが違う。

そこには7〜8つの銃架があり、一つにつき小銃と銃剣が20ずつ収まってきれいに並べられておりちよつと壮観にも感じる。

この学校に来る前から興味があつてネットとかでよく見ていた64式小銃や89式小銃の実物が目の前にたくさん並んでいるのだからその手の人には気分が高まる光景だ。

しかし、一つだけ違う銃が収められた銃架が手前に置かれている。

それは64式よりもさらに細長くほとんどが木で覆われていてグ

リップが存在しておらず武器としての無骨さというよりは美しさを感ぜられる。

・・・やっぱりM1はいいね。

銃架からその銃を搬出しながらそう思った。

M1ガーランド小銃、それがその銃の名である。

かつては全学生がこの銃で訓練をしていたらしいが64式が採用されてからは儀仗隊が使用するものと一部のストックを除いてどこかにやってしまったらしい。

「おつかれー、おっもう銃出てんじゃん。」

「早いな。ご苦労さん。」

ぼちぼちメンバーが集まったので銃を持って練習場に向かった。

練習場に着くとすでに他の学隊のメンバーは揃っていた。

「はいコンニチハー。」

「こんにちはーッ！」

「今日は新年度一発目の練習だけどさっそく空砲打ちまーす。そんなに軽くアップしてから射撃の隊形とるように。」

部長の最初の挨拶が終わったら練習場の中央で向かい合って二列に並んで互いにM1を回したり投げたりする技を相手に見せて細かい点を指摘して改善する。

「永遠よかったな。一発目から射撃できるなんてな。」

「そうだね。」

1学隊の同期が話しかけて来たが、まったくそのとうりで早く射撃がしたくてたまらなかつた。

「ハイ、アップ終了！弾薬受領！」

部長がそう呼びかけてメンバーが今度は同じ方向を向いて互い違いに並ぶ。

位置についたら片膝をついてM1を地面に対して真っ直ぐ立てて槓桿を引く。

もちろん弾が入っていないので最後まで引き切るとそこでボルトが止まる。

最後にトリガーガードにある安全装置を掛けて待機する。

全員の準備が完了すると弾薬を受領して来た武器係の上級生が並んでいるメンバーに一発ずつ配って行く。

「はい、いっぱーつ。」

「イッパーツッ！」

しつかり弾を受け取ったことを伝えながら弾薬をじっくり眺めて異常がないか確認するがその弾はくすんだ色をしていて何度も再利用していることがよくわかる。

1学年の時に撃った64式の7.62mmとほとんど同じで空砲のため傍目にはただの空葉莢にも見えるが、火葉が入っているであろう葉莢内の空間は真っ赤な樹脂で蓋をされている。

実際に飛翔する弾頭部分がない状態でもさすがは7.62mmでそれなりのおおきさがある。(まあ89式の5.56mmは撃ったことがないが見せてもらった時にはその小ささに驚いた。)

「弾頭確認」

「異常ナーシツ！」

「安全装置確認」

「異常ナーシツ！」

「よし！弾込め！」

そういつたやり取りの後に弾を込める。

M1はクリップ式で8発装填出来るが中途半端な数では入れられないし、まずクリップも持っていない。

しかし、一発だけなら直接薬室に放り込めば撃てるのだ。

「弾込めヨーシツ！」

弾薬をしっかりと薬室の奥に入れてボルトをゆっくり戻して報告する。

何人か手こずっているが大抵はボルトが硬いのが原因で流石に70年くらい前からあるM1では仕方のないことでもある。

そうこうしてなんとか全員が装填を完了したのを武器係が確認する。

「安全装置、閉鎖状況確認」

「異常ナーシツ！」

「再度目視で安全装置確認」

「異常ナーシツ！」

ちやんと弾を込めて安全を確保したことを確認して武器係が部長に報告する。

「射撃の位置ッ！」

部長の一声で練習場中央に横一列で並ぶ。

その移動では安全のため走らずに歩くのだが、そこで事件は起こった。

「あっ！」

少し右後ろを歩いていた同期がつまづいて銃を落としそうになった。

「ッ!!」

ただでさえ普段の練習でも銃を落としたら武器係からこっぴどくシバかれるのでとっさに足を出して止めようとする。

銃剣をつけるための部分より少し下を膝で支えて最悪の事態は防げたと心の中でホツとする。

しかし、足で止めたM1銃口は勇輝の顔に向いていた。

反対側の銃床が地面についた時に乾いた大きな音とオレンジ色の光、そして戦争映画とかでよくあるキーンという耳鳴りとを最後に勇輝の視界は真っ黒になった。

遭遇

「あれっ?」

勇輝は耳鳴りとまだオレンジ色の光で眩んだ視界に混乱しながらも自分の銃はしっかりと保持していた。

・・・どういう事だ?あの音は空砲の音だろうし視界が眩んでいるということは発砲を結構近くで見たという事だ。

いや、あの時銃口は僕の目の前に:!!

まさか僕は死んだのか?・・・

そして麻痺していた視覚や聴覚がだんだんと回復して行って周囲の状況を見てさらに奇妙なことに気づく。

勇輝は木々が生い茂る森の中に立っていたのだ。

さつきまでいたはずのアスファルトの地面の開けた練習場ではなく足元には土や雑草に覆われている。

そして周りには誰一人としていなかった。

・・・ここは一体どこなんだ。どうして誰もいない?

とりあえず僕は怪我とかはないみたいだけど状況が状況がまったく理解できない:

ッ!さてよ、もしかしてテレポートか?それとも異世界か?・・・

勇輝は若干ミリタリーに偏っているがある程度広めのオタク知識は持っているし、最近やたらと身近になってきていた異世界モノもいくつか知っていた。

・・・まずは周囲の確認をするしかないな。

何がいるかわからない。慎重に探索しよう。

まずはこの木はなんなんだ?特に変なところはなさそうだがなんとも言えないな。とりあえず移動するか。・・・

念のためM1の銃口を下に向けて保持してゆっくりと進み自分の身が隠せるほど大きな木の幹に近づいて恐る恐る顔だけを出してその向こうを見る。

どうやらこの森は結構広いみたいで変わらない風景が続いている。

幸い木はそんなに密集していないので歩き難いわけでもなく、太陽の光も十分届いて明るい。

しばらく進んでいるとそれは現れた。

・・・なんだアレは？人：じゃなさそうだな。持っているのは剣？・・・

勇輝は木に隠れて顔を覗かせて謎の存在を観察する。

大きさは人の中学生くらいかももう少し小さめのように色は赤っぽい茶色？

耳が尖っていてその手には鉋の様な剣が握られている。

足元には血まみれの鹿の様な動物が横たわっている。

どうやらコイツが仕留めたらしく首元付近が特に血に染まっている。

・・・もしかしていわゆるゴブリンってヤツか？

だとしたらアイツ単体じゃないよな？近くに仲間がいるかもしれないな。

どうする？逃げるとしても元来た方向に戻るか？それとも迂回する？

なら迂回先で仲間に出くわすかも：しばらく周辺を警戒しつつやり過ぎずとしよう。・・・

この選択は間違っではないなかったかもしれないが遅すぎた。

さっそく周辺確認をしようと顔を引っ込めて振り向いた時ヤツがいた。

振り向いた直後は気づいていなかったみたいだが、勇輝がヤバイと判断する頃にはあちらも気づいた様で目が合ってしまった。

「キィィィー!!」

猿に近い様な金切り声を上げて剣を持った手を掲げた。

「待て！戦うつもりはない！」

苦し紛れに呼びかけてみるも言葉が通じていないのかそもそも見逃すつもりはないのかこっちに向かって走って来た。

「やるしかないのか。」

M1の安全装置を解除して身構える。

空砲とは言えども近距離であればかなりの威力があるのだ。

しかし相手にどれほどのダメージを与えられるかはわからないのでただでさえ近づかなければ効果がないがゼロ距離射撃で仕留めるしかない。

まだ問題はある。

それはM1自体の耐久性でこれがかかなり重大である。

この銃が現役だった第二次大戦や朝鮮戦争の頃ならともかく60年以上経った状態ではM1の大部分を占める木製パーツの経年劣化が酷く戦闘に耐えられる可能性は低い。

勇輝の銃も様々な技に使用して時には落としてしまう事もあり機関部右側面に見た目ほど酷いわけではないが大きなヒビが入っている。

つまりはいつ折れてもおかしくないのだ。

・・・できれば攻撃をM1で受け止めて隙を突いてゼロ距離射撃を与えたいけど銃が壊れる可能性が高い。一か八か相手の初撃を避けてすかさず突き出して撃つしかない。・・・

ヤツは尚も走って来ている。

まだ最初に見つけたヤツが来て不利になる前になんとかして突破しなければ。

もうすぐ攻撃が来る、剣は上に振り上げられているのおそらくそのまま振り下ろすつもりなのだろう。

これだけあからさまにどう攻撃してくるか教えてくれるのならば避けるのは難しくない。

「見え見えだっ！」

M1を構えて剣を受けると見せかけて左後ろに身を引いて振り下ろしをかわす。

ヤツは少し驚いて隙ができたが返す様に横に振ろうとしている。

「遅いっ!!」

素早くM1を腰だめに構えて頭に向け突き出しすかさず引き金を

引いた。

あの時と同じような乾いた爆音とオレンジの炎が出てヤツの顔面を穿った。

若干の反動で勇輝が仰け反るのと同時にヤツは吹っ飛んだ。

そして少しの間痙攣していたがそのうち動かなくなった。

「やったのか？」

もう弾がないがM1を向けて近づいて確認する。

流石に顔は見れないがどうやら死んでいるようだ。

「悪いが武器を貰うぞ。」

そう言っただけで握られていた剣を奪ったところで後ろから最初のヤツが近づいて来る足音が聞こえて来たので近くの木の後ろに隠れる。

すでにM1は利用価値が薄いので負い紐を伸ばして背負い剣を握りしめる。

隠れて2分と経たないうちにもう一体がやって来た。

気づかれないように注意しながら観察してみると、あたりをキョロキョロと見回し、その後仲間の死体に近づいて何か調べている。

・・・不意打ちには持ってこいだな。やってやる。・・・

幸い相手は背を向けてしゃがみこんでいる。

足音を立てないようにゆっくりと剣を構えながら近づいていく。

・・・あと少しで届く。・・・

そう思った時ヤツはふと振り向いた。

「ッッ！」

「ヤアアアアッ!!」

気づかれたのなら対応される前に速攻で決めるしかない。

雄叫びを上げながら駆け出したからか相手は驚いて動き出しが遅れているようだ。

ヤツが剣を掲げて防御しようとしたが間に合わなかった。

勇輝の剣は斜め上から振り下ろされ肩口から一気に斬りつけた。

相手は血を吹き出して倒れた。

「倒した・・・よな？これで安全か？」

もちろんその質問に答える者にはここにはいない。

しばらく周辺を見渡してみたが気配は感じられなかった。

肩の力が抜けて一気に疲労が勇輝に襲いかかった。

それだけでなくおそらく人ではないとは言え、生き物を2体…片方
に至っては銃で殺すのとは違い、自分の手で斬り殺したのだ。

そして自分のしたことに恐怖し、大きく動揺する。

急に心身の両方に大きな負担がかかったのだ。

勇輝は尻餅をつくようにへたり込むとそのまま気を失った。

邂逅

勇輝が目を覚ますと辺りには真っ白で何も無い空間が広がっていた。

自分の格好は変わっていないがM1も奪った剣も持っていない。

・・・ここはどこだ？僕は確かゴブリンみたいなやつを2体倒して・・・そのあとどうなったんだ？・・・

「ここはあなたの精神世界とでも言ったら解りますか？」

「ーッ！誰だ！」

「私はまあ神といったところです。あなたたちの暮らしていた世界と先程あなたがたどり着いた世界の管理を担当しています。」

頭の中に声が響いてくるのは変な感じで姿は見えない。

・・・神だつて？もう本格的に異世界ものだな。そうじゃなくても凄いいことだけど。・・・

「本当か？この際なんでもいいから色々説明してください。まず私は死んだのですか？」

勇輝は矢継ぎ早に質問する。

「それでは説明させていただきます。厳密に言うとおあなたはまだ死んでいません。あの時銃の暴発で死ぬところをギリギリで時間を止めて一時的にあなたを私が管理しているもう一つの世界に避難させたのです。緊急だったので場所は選ばせませんでした。が・・・」

「そうなのか。まだ生きてるのか。良かった。それにしても本当にオンボロだなあM1も、安全装置も掛かってたのに暴発するなんてなあ。それにいきなり森の中で変なヤツに襲われるし。」

・・・でもなんで時間を止めてわざわざ避難させてまだ助けたんだ？・・・

「心の中を読むようで申し訳ないですが、あれはこちらでも想定外の事故で誰も死ぬはずではなかったのです。私が少しでも気づくのが遅かったら死んでしまっていました。」

「そうだったんですか。結局この後はどうなるんですか？まずは元の世界に帰れるんですか？」

「安心してください。まずあなたは死んでいないので戻ることはできません。私以外が担当だったら見落としてしまったでしょうね。死んでいたら転生などはできても帰ることはできなくなっています。私ってあまり仕事ができるわけでは無いですが間違いで人を死なせたりそれを見捨てることだけは絶対にしません。」

「・・・あれ？なんかこの神さま結構真面目？異世界モノだと大抵やらかしてるイメージなのに。この人？そこらの神よりしつかりしてない？・・・」

「あのー？聴こえていますよ。私はともかく他の方のことは言わないでください。そういう方は大抵私の先輩なので。」

「ごめんなさい。ツていうかいるんですか!?!」

異世界モノでありがちなうっかり人を死なせてしまう神さまたちが実在するという驚愕な事実を知ってしまった。

「そういえば、すぐに戻れるんですか？」

「そのことなのですが、そのまま戻ってもまたすぐにあの銃の暴発を顔に受けてしまうので少し時間を戻してから送り返します。ただ、これは結構複雑な作業でそれなりに時間をかけないといけません。先輩方はもしかしたらこの作業が嫌でワザとミスを見逃しているのかもしれないですね。」

「・・・ちよつと今ヤバそうなこと聞いてしまったな。多分面倒だからやらないんだな。それにしても本当に真面目なんだなあ。僕も真面目だけが取り柄だからなんか分かるな。・・・」

「とりあえず元の世界の時間をあなたが暴発を回避できるくらいに巻き戻したら帰れます。それまでは異世界で過ごしてもらいます。本当に勝手に申し訳ないですがそのお詫びとしてある程度は補填なども用意します。」

「ふうーん…、作業はどれくらいかかるんですか？あと、補填っていわゆるチートっていうやつですか？」

「作業に関していうと、世界の時間を巻き戻すのはかなりの難しいことではつきりとは言えませんがもしかしたら数年くらいかかるかも

しれないです。本当に申し訳ありません。」

「いえっ！神さまは悪くありませんよ！死ぬところを見捨てずに助けに来てそんな面倒なことまでやってくれるんですから。」

「そう言ってもらえるなら嬉しいですね。補填に関してはそういう認識でいいと思いますが、まだ死んでいない人となると少し限度はあります。出来るだけ実現できるようにしますので考えてください。」

「えーっと、それではちよつと時間をください。」

「・・・どうしようかなあ。下手すると数年はあの世界で暮らすのか。特典どうしようかな。あっそうだ・・・」

「あの、その世界では魔法つてありますか？」

「ありますよ。主に火・水・土・風・木の5属性で他には数は少ないですが光と闇、それから日常生活や特殊な用途の無属性といった感じですね。こちらもあり多くありませんが複数の属性も使えます。」

「・・・やつぱりあるんだ。ならやつぱり使えた方がいいよな。けどあんまりイメージ湧かないなあ。とりあえず生き残れるようなものは欲しいな・・・」

「身体能力の強化は私の学校で体力検定つてのがあるんですけど、それで全部一級を取れるくらいにできますか？」

「ちよつと待つてくださいね。…………問題ありませんよ。これくらいでいいんですか？もう少しくらいはいけますよ？例えば岩を素手で砕いたりとか。」

「・・・それつてちよつとつていうのか？僕はあくまで常識の範囲内で良いや。体力検定7級でボーダーギリギリの僕からしたらオール一級でも十分バケモノのようなもんだし・・・」

「ちよつと興味ありますけどそこまではいらないます。魔法も一般よりそこそこできるくらいでいいです。」

「結構控えめなんですね。そうしておきます。」

「ただ、これだけは外せないのがあって…時空間魔法みたいなもので収納には困らないこと、見たものの名前とか詳細を知る能力と、自衛隊の個人装備もその中に加えてください。」

「わかりました。頑張ってみます。これくらいいいですか？」

「あと最後にできたらもっと人受けが良くなったらいいですね。いや冗談です。どのみち変わらないでしょうし。」

「それはもう十分良いと思いますよ。ちよつとあなたのことを調べてみましたが決して悪くありません。言うとすれば周りに恵まれてなかったかもしれないですね。ですからちよつぴりの幸運を祝福として与えます。」

「本当ですか？これで良いんですか？私みたいな人間で。」

「確かにあなたは今まで他人から受け入れられたり認められたりされてこなかったみたいですが。私はあなたを見捨てません！」

・・・ほんとに良い人？だなあ。目がウルウルしてきた。まあ今なら泣いてもいい…かな？・・・

勇輝は今までの人間関係の苦労とそれを理解してくれて、今の自分を受け入れてくれる存在に出会えた2つの幸せに涙を流しそうになって目をずっとパチパチさせている。

そのうち涙が頬を伝うのを感じた。

不思議と雨の時とは違って不快感はなく、ただそうなっているとことだけははつきりと分かっている。

「補填はこれで結構です。とにかく元の世界に帰れるまで生き残ります。」

「出来るだけ作業が早く終わるようにしますのでどうかご無事で。頑張ってくださいね。」

勇輝は片手でサツと涙を拭いながら上を向いてほとんど使ったことがない表情筋をぎこちなく動かして笑顔を作った。

「神さまも頑張ってください。私をここまで見てくれた人？ならたとえ10年だって生きてみせます！だから無理はしないでくださいね。」

「優しいんですね。あなたに祝福を。」

そう言葉を交わすと真つ白な空間にキラキラとした輝きが降り注ぎ勇輝を包んでいった。

「私はあなたを見捨てません。あなたを見てくれる者がいること

を忘れないで下さい。」
勇輝は光に包まれ気付くと森の中で目を覚ましていた。

出発

勇輝は神とのやり取りを終えて森で目を覚ました。
ちゃんとM1を背中に背負っているし、剣もある。

そして側には勇輝が仕留めた2体のゴブリンが血まみれで倒れている。

「……さっきのは本当のことだったのか？とりあえず何か試してみるか。でも魔法とかはどうするんだ？魔法は後回しにするか。……」

勇輝は足元に落ちていた石ころを拾った。

「……身体能力くらいは試せる。特に苦手だったボール投げなら分かりやすいはずだ。まあ、ボールじゃなくてただの石ころだけどそれでもどれくらい飛ぶかわかる。……」

「ツー」

ソフトボールでは全く遠くに飛ばなかった野球投げで石ころをある程度開けている方向に投げる。

すると石ころをは風を切るかのようなスピードで飛び、40mくらい先と思われる木にぶつかった。

おそらくもう少し飛んだと思われるがこれでも十分すぎる距離だ。

勇輝はこの投げ方でソフトボールをギリギリ30m飛ばせるかどうかだったのが軽すぎて全く飛ばなさそうな石ころでここまで飛んだのだ。

「……マジか…ありえないが本当みたいだ。ということとは他も結構いけるな。スポーツができる身体能力が高い人たちはこんな気分なんだな。どうりでできない人の気持ちに分かんわけだ。こっちは必死にやっても足元にも及ばなかったのに。……」

勇輝は突然の変化に喜びを感じながらも一方で複雑な気持ちになった。

「…そうだ。アレやってみよ。」

背中に背負っていたM1を取り負い紐を邪魔にならないようにき

つく締めて銃床を右手で支えて右肩につけた。

銃を担ってている時の基本姿勢「担え銃」だ。

そこから銃床をしっかり掴んで肩から外して右腕を肩の高さまで上げて左手で銃の木製部分の先端付近を掴んだ。

銃口は真下から若干前の向きで止まった。

今度は右手を勢いよく下に下げて銃を体の横で回転させ、1・5回転して銃口が上になったところでキャッチして止まったらそのまま床尾を右足の真横に着くように銃を地面につけた。

この一連の技が「マリン立て銃」で儀仗隊の基本的な技の一つである。

「……………すごい。銃が軽くて思ったとうりに動かせる。」

この技は基本的であるからこそ技量がよく分かるのだ。

・・・こんなピッタリに床尾と右足をつけるように置けるなんて…、キャッチもブレずにガッチリ止められた。どうやら筋力とか以外にも動体視力や制御力も上がっているみたいだな。・・・

「ヨシッ！ならー！」

勇輝は決心したようにもう一度銃を担ってもう一度「マリン立て銃」の姿勢に移る。

銃がもうすぐ1・5回転する。

「ッー！いけるー！」

回転している銃を受け止めた。

しかし、銃の動きを止めることはなかった。

本来キャッチするところを掴んで回転に沿うように右手を後ろに回してすぐに手首の限界が来る。

そこで右手を離し、今度は左手で銃の真ん中付近を掴んでさらに回転させて銃口が真後ろを向き、腰付近で体と水平になったところで右手を再び出してキャッチして固定した。

これだけでは終わらない。

銃床を持っていている左手に力を入れて思いっきり回転をかけながら上に放り投げる。

M1はブレることなく回転しながら頭上まで上がった。

ちようど回転して銃口が上を向いた時に意を決して右手を突き出して銃の先を掴んでそのまま担った。

「……できた。」

少し震えた声で呟いた。

「……まさか儀仗隊のトップメンバー数人しかできないこの技がちよつとヒヤツとしたけど難なくできるなんて……」

勇輝が挑戦したこの技は「マリン立銃」の発展技で通称「小技」と言われる高難度技の一つである。

銃を落としてしまう危険性が高いため、かなりの技量がある者しか練習することさえ許されない技だ。

「……本物だ。僕だって下手ではなかったけど小技なんて出来ない。それがここまで出来たのならもう疑いようが無いな。……満足げに負い紐を緩めて右腕を通して森の中を歩き始めた。」

しばらく歩いたところで勇輝は奇妙なものを見つけた。

それは木の根元に立っていたが、うっそうとしげる森には違和感たっぷりであった。

「木の立て札……だよな？なんでこんなところに。」

念のためM1を肩から外して周囲を警戒しつつ立て札に近づくと何やら書いてあった……日本語で。

「魔法は使うものの魔力と想像によって発動するものであり特に詠唱などは要らず各々それっぽい名前や詠唱をして想像を固めて発動している。」

無属性魔法の一つである時空間魔法の中には異次元に繋ぐことであらゆる物を収納したり取り出したりできるものがある。

基本的には手に触れて収納することを念じれば収納できる。

取り出す時は取り出したものをイメージすれば取り出せる。

異次元に何が収納されているかを確認したりするために自分自身が異次元空間に入ることが出来る。」

「……どう考えても僕に宛てるよなコレ。本当に親切だなあの神さま。そうか……大抵はイメージだけで何とかなるのか。とりあえず

名前とかは僕が知っている作品から色々引つ張ってくればいいかな？そうときたら実験だ。・・・

勇輝は手頃な木に右手の手の平をむけて狙いを定めてイメージした。

「メラッ！」

すると手の平から赤橙色のソフトボールかそれよりもう少しくらい大きな火球ができて真っ直ぐ飛んで行き、目標の木に命中した。

当たった瞬間に炎が広がって着弾点から半径1mくらいの焦げ跡を作った。

「おお：すごい。威力は十分だな。じゃあ今度はコレだ！」

次は人差し指だけを隣の木に向けた。

「破道の四：白雷ッ！」

指先から白い電撃が細く一直線に伸びて行き目標の木を貫いた。

・・・これも結構いいな。練習すれば狙撃もできそう。他にも色々やりたい技はあるけど残りの魔力がわかんないから無駄使いはやめよう。・・・

「最後にこれだけはやっておきたいな。」

M1を別の木に構えてサイトを覗き照準を定める。

「破道の四：白雷。」

ゆっくり呟くように言って引き金を引くと先程と全く同じ閃光が駆け抜けて木を貫いた。

「よし。狙撃ならこれでいける。」

M1を下ろして近くの木にもたれかかり休息をとることにした。

・・・魔力って休んだら回復するよね？・・・

休息を取っている勇輝だったが何もしないのも退屈だったので時空間魔法を試すことにした。

・・・収納したり取り出すぶんにはそんなに魔力使わないだろう。やってみるか。実験あるのみだ。・・・

勇輝は練習に行く前にポケットに入れていて今まで忘れていた透明のビニールテープを取り出して手の平に乗せた。

・・・念じればいいんだよな。……………こうか?・・・
するとビニールテープは瞬間移動するかのように消えた。

「よしっ!今度は…。」

引き続き手を広げて想像をする。

・・・ビニテ、透明ビニテ・・・

すると消えた時と同様に手の上にビニールテープが現れた。

ある程度使っていて減っていた厚さも変わらなかつたので同じものである。

・・・こんな感じか。それなら本番と行きますか!・・・

まずはM1を収納する。

「来い!9mm拳銃!」

勇輝が声を上げるとあらかじめ拳銃を握るようにならしていた右手にピツタリ収まるように9mm拳銃が現れた。

・・・ついに実物を手に触れることができるとは…言葉にした方がイメージしやすく気持ち的にちよつと早いな。あれっ、マガジンが空だ。弾は別なのか。装填までやるか。・・・

拳銃の弾はベージュ色の紙製の箱に20発入っていた。

・・・確か9mm拳銃は装弾数が9+1だったな。それならマガジン2つと2発余るな。……………試し撃ちするか。・・・

マガジンをもう一つ出して弾を込める。

「フル装填ってやっぱりきついな。なかなか入らない。」

勇輝はM1と64式しか撃つたことがない。

M1は一発ずつしか撃たないし、64式も半分の10発を訓練で撃つただけだ。

……………ちなみに64式の射撃は200mで散々だった。

・・・射撃の技量は上がっているのかな?筋力とかは上がっているから照準が安定したり反動をうまく抑えられるとは思うけど。・・・
なんとかマガジン1つのフル装填ともう一つは2発だけ込めてある。

2発入ったマガジンを拳銃に挿し込んでスライドを引く。

あとは狙って引き金を引くだけだ。

20mくらい離れた手頃な木に狙いを定める。

銃はしつかり保持されていてあまりブレないので狙いやすい。

「ツッ！」

ゆっくり引き金を引くとM1や64式とは違う音と反動が勇輝を襲った。

少し驚いたあと木を見るとおおよそ狙ったところに当たっている。

「もう一発！」

今度は構えてすぐに撃った。

慣れてしまえば反動もほとんど抑えられた。

弾はさつきより上に着弾していた。

流石にしつかり狙わないと近くに当てられないようだ。

・・・射撃も要練習といったところかな。やっぱり拳銃もいいな。・・・

勇輝は心なしか少しにやけていた。

半世紀ぶりの復活

・・・そういえば異次元空間に入れるって書いてあったよな。一回確かめて見るか。装備品の確認もしたいし。・・・

勇輝は何か門のようなものを想像しようとしていたがイマイチイメージが固まらなかったのでとりあえず空間にぼつかりと空いた穴を開くイメージをした。

すると目の前に自分が余裕で入れる大きさの円が現れた。

その向こうは真つ暗でこちらからは見えない。

・・・何も見えないな。何か突っ込んでみるか。・・・

ちようど近くに枝が落ちていたので、拾ってゆつくりと突っ込んでみる。

枝の半分くらいを入れたところで同じように引き抜くと枝は特に変化はなかった。

・・・よし、入ってみるか。・・・

得体の知れない真つ暗な円に向かって歩き始めてそれを通り抜けると一面がクリーム色?の空間がどこまでも広がっていた。

・・・装備品とかはどこかな?ていうかどんな感じで置いてあるんだろうか。無造作に転がっているのか?・・・

その疑問の答えはすぐにわかった。

「このロッカー・・・僕が学校で使ってるやつじゃないか!・・・でも中身が増える。」

ロッカーには士官学校の制服や作業服が入っているがそれ以外にも入っていないはずの陸海空の制服や迷彩服が入っていた。

引き出しには弾帯や水筒などの携行品が入っている。

・・・どうやら身につける類のものはこのロッカーにあるようだな。・・・

隣には銃架が置いてあり、さつき収納したM1に64式小銃、89式小銃だけでなくMINIMIや110mm個人携行対戦車弾もあった。

・・・本当に一式あるなあ、カール君もあるじゃないか。これなら火力も大丈夫かな。・・・

武器を一通り見ている時にソレは勇輝の目に留まった。

「あれは！キング・オブ・バカ銃!!やっぱりあったか。こいつは使わな
いかな。始めて見るけど結構ゴツイな。」

「各種の銃剣に儀礼指揮官用のサーベルもあるじゃん。」

その後もしばらく装備品を物色してマニア心を満足させていた勇輝だった。

・・・装備はこんなもんかな？あとコレも。・・・
選び終わったらさっそく身につける。

その完成した装備一式はナニカがおかしかった……………。

着ているのは陸上迷彩の新型である4型で弾帯も3型だ。

頭には88式鉄帽を被っている。

弾帯をサスペンダーで吊るし、右側面に9mm拳銃のホルスター、その後ろ隣に予備マガジンポーチ2つつ分、背中側にはダンプポーチを着けている。

ここまではそこまでおかしくはない。

だが弾帯の左側面には指揮官用のサーベルが下げられていたのだ。

だがよく見ると部隊で使われているものではなく士官学校のエンブレムが元からある桜に加えて鞘や鏢にあしらわれている。

これは儀仗隊でも使用されているものなのだ。

「二度サーベル下げて見たかったんだよね。この世界なら剣の方がいいだろうし。」

迷彩服にサーベルというわけのわからない組み合わせもだが、もっと重要な問題があった。

・・・銃剣もサーベルも刃が付いてないんだよなあ。銃剣なら刺突になら使えるだろうけどサーベルには強度的にも厳しいな。さてどうしたものか。・・・

しばらく考えた後に名案を閃いた。

・・・魔法で何かしらごまかせばいいんじゃないやね？風魔法あたりでも

纏わせてれば切れるかな？試しにやってみよ。．．．
勇輝は装備を身につけて外に出た。

武装した勇輝の前には腕くらいの太さの細い木が生えていた。

この木をサーベルの試し切りに用いようとしていた。

．．．どんな感じならいいかな？ナ○トの風のチャ○ラを纏わせたクナイみたいにやってみるか。．．．

事前に風魔法単体で試してみたが、木を切り倒すまでは出来ず細かな切り傷をたくさん残したただけだった。

儀仗隊の舞台で何度も見た指揮官のサーベルさばきを見よう見まねで真似して抜き放った。

そして風を刀身に纏わせる。

「ハアアッ！」

上段から斜めにサーベルを振り下ろした。

「あれ？」

振り抜いた後は異常に軽くなっていて違和感を覚えたがすぐになかった。

．．．刀身が無い!?壊れた!?

サーベルの刀身は木の半分にも達しないところで止まっていた。

どうやら強度が足りなかったようだ。

．．．やっぱり見かけだけのちやっちい模造刀じゃキツかったか。ちようどいいや今度はアレを試す。．．．

刀身を木から抜いて持ち手の近くに置き、手の平をかざして懐かしい映画のワンシーンをイメージした。

「レパロー！」

すると刀身が持ち手のところにくっついて元に戻った。

どうやら成功したみたいだ。

．．．うーん．．．さすがはハ○ーポ○ターだ。これならもしかしてア

○ダケ○ブラ使えるのか?．．．

サーベルは使えないので少々装備を変更する。

・・・サーベル使いたかったけど今は諦めるか……。・・・
異次元にサーベルを戻して代わりに取り出したのはM1だった。

「レパロー！」

銃の各部にあるヒビやキズが次々と無くなっていき、機関部右側面の大きなヒビ割れも直っている。

「これでまた戦えるな。よろしくな。」

今までボロボロでいつポツキリ折れてしまいかわからない状態でたくさんの技に挑戦して落とすこともあった。キズやヒビ割れの一つ一つが勇輝の儀仗隊でこの銃と共に歩んだ思い出だった。

しかし、今では木製パーツにキズ一つ無く美しくもある姿をしていた。

・・・経年劣化の分まで直せたかはわからないが60年以上も戦ってきたんだ。きつとやっていける。あとは……。・・・

今度はクリップと実弾、そして銃剣を取り出した。

「クリップに装填するの難しいな。マガジンとは比べ物にならないな。」

何度も並べた弾が崩れて詰め直しになったがなんとか8発詰めることができた。

・・・コイツをさっそく本体に装填するか。・・・

クリップを入れるため思いっきり槓桿を引くと目の前をくすんだ真鍮色の空薬莖が飛んでいった。

勇輝はそれを拾い上げた。

・・・そうか、ずっと入っていたのか。お前のお陰で生き残る事が出来たよ。ありがとな。・・・

普通は薬莖が射撃した後には排出されるはずだが、儀仗隊が使用している空砲は火薬の量が少ないのか射撃してもボルトが下がりきらず薬莖が内部に残ったままになるのだ。

このことも1発だけしか装填しない理由だった。

勇輝は気をとりなおして引ききってボルトが止まっているM1を取りフル装填のクリップを押し込んだ。

ボルトを戻して安全装置を解除し、ゆっくりと構える。

手頃な木に向けて引き金を引いた。

「ツツ！」

空砲より少し低い轟音が耳に響き、大きな反動が肩を叩きつける。

その後も射撃を続けて最後の1発を撃ち終えると甲高い金属音が響き渡り、空のクリップが飛び出してボルトが止まった。

・・・異常ないな。やつぱりいいね。この音は・・・

クリップを拾って的にしていた木を見ると10cmくらいの円に収まっていた。

・・・距離が近いけどまあまあかな。とにかくコイツは完全復活した・・・

以前までサーベルが下げられていた弾帯の左側面はM1用の銃剣と予備のクリップを入れた適当なポーチが付いた。

「それじゃあぼちぼち出発しますか。」

負い紐を緩んで肩にM1を背負った迷彩服の青年は再び森の中を歩き出した。

出会い

・・・そういえばちよつと腹が減ったなあ。迷い込んだのが多分午後5時くらいでそれから色々あったから本当なら夕食を食べてるはずなんだよな。・・・

今まで通った森の中でも特に食べられそうな物は見当たらなかった。

さすがに腹が減ってはしょうもない。

・・・なんとか食料を見つけるか、人に合わないとな。・・・
腹が時折音を鳴らして空腹感がいつそう強くなる。

森の中を歩き続けると次第に周囲が明るくなり木の密度も減ってきた。

どうやら森もあと少しで抜けられるようだ。

「あれは…道か？」

森の終わり近くであまり草も生えておらず土肌を露わにしている線が現れた。

・・・おそらくここを馬車とかが通るよな。そうでなくてもこの道に沿っていけば人がいる。・・・

勇輝は道に沿って進み始めてすぐに森を抜けた。

森が後ろに小さく見えるくらいに歩いたところで遠くに何かが見えたので双眼鏡を異次元から取り出す。

・・・これ：護衛艦とかに置いてあるやつか。・・・

艦長の気分で双眼鏡を覗くと2頭の馬に引かれている馬車が見えた。

そこそこの大きさで人が乗っているのか荷馬車かはわからないがとりあえず馬を操る人は見える。

・・・やつと人に会えるな。食べ物とか分けてもらえるかな？・・・
しばらく歩いて馬車が近くまでやってきた。

「おーいー！」

声を掛けると馬車が止まった。

「んっ？あんたこんなところを一人でどうしたんだい？」

優しそうな感じのおじさんが馬の間から声を上げた。

見た感じ40くらいかもう少し若いがそれでも十分年上だ。

・・・良かった。言葉は通じているみたいだな。意思疎通が出来なかつたらさっそく詰んでた・・・

「ちよつと旅に出ていたのですが、森の中で襲われて：荷物を残してなんとかここまでできたんですよ。ただ、食べ物を何も持つてなくて：。もしよろしければ何が分けていただけませんか？」

「そいつは災難だったな。干し肉と水を少しくらいなら分けてやれるが、あんたはどうするんだい？」

「とにかく街に行こうと思っっています。特にあてはないです。そういえばこれからあの森を通るんですか？」

「ああ、そのつもりだよ。ただ今は魔物が出るらしいから本当は護衛を付けたかったんだが、どこも忙しいみたいでな。幸運を祈るしかないね。」

どうやらこの馬車は荷馬車のようでおじさん以外は乗っていないみたいだ。

おじさんは仕方ないといった感じで答えた。

「それでしたら食べ物も分けていたたく代わりに私が護衛しますよ。ですので：一緒に一緒にさせてもらえませんか？」

「本当かい？それくらいなら全然構わないが戦えるのかい？」

「大丈夫です。それなりに戦えます。」

「それなら願ったり叶ったりだ。ちよいと狭いが乗ってきな。」

・・・食べ物も確保できたし街にも行けるみたいだ。助かるな。・・・
勇輝はお礼を言って馬車の荷台に乗り込んだ。

荷台の上で干し肉と水を分けてもらってさっそく食べてみた。

・・・結構硬いし、おつまみのビーフジャーキーと同じかそれ以上にしょっぱいけどまあ悪くはないな。・・・

ガタガタと揺れて乗り心地は悪かったが訓練で何回か乗ったカーゴの荷台とたいして変わらないのであまり気にならなかった。

外の景色が見える分こっちの方がいいかもしれない。
しばらく馬車に揺られていると再び森の中に入った。

・・・今まで歩いてきたのはなんだったんだ…。まあ人に会えたからプラマイゼロかな。・・・

時間の合っていない腕時計を見ると森に入って30分くらい経っていた。

「兄ちゃん！魔物だ！」

おじさんが焦った顔で指差す先にはあのゴブリンが5体いた。

手には剣……後ろの一体だけは弓を持っている。

勇輝は肩からM1を外して後方で弓を引こうとしている一体に狙いを定めた。

「やらせない！」

M1から放たれた弾丸はゴブリンのみぞおち付近を貫いて貫通した。

撃たれたゴブリンは貫通した穴から血飛沫を上げて小さく吹き飛んだ。

・・・これで弓は押さえた。あとは4体だな。・・・

勇輝は荷台から飛び出して馬車の前に立つ。

「着剣！」

腰から銃剣を抜いてM1に取り付ける。

ゴブリンは最初は仲間が大きな音とともに吹き飛ばされたことに驚いたが、すぐに仲間の仇に向かってきた。

「クソッ！」

すぐさまM1を構えるが銃剣を先端に付けたことで取り回しが重くなり、慣れていなかったためうまく照準が定まらない。

2発撃って先頭のゴブリンの胴体になんとか当てて倒し、もう1発で隣にいたやつ頭の頭に命中させた。

・・・よしーヘッドショットーあと2体で、こっちの残弾は4か。・・・残り2体は構わず接近してきた。

勇輝も応戦するがもうすぐ至近距離まで来る。

「止まれーッ！」

2 発撃って1体を倒したところで最後の1体が迫って来たが照準は間に合わない。

「クウッ！」

M1を振り上げて機関部近くで剣を受け止める。

機関部は金属部品で丈夫だったので剣を受けても特に問題なかった。

すぐさま振り払って床尾で胴体を叩き怯ませる。

「くらえー！」

M1の向きを素早く変えて銃剣をゴブリンの心臓がある辺りを突き刺した。

ゴブリンはあまり体重が無いらしく突かれた勢いで上に持ち上がり、勇輝はそのまま地面に叩きつけた。

「ふう、ヒヤッとした。」

刺さった銃剣を引き抜き一息ついた……が、それが大きな隙になった。

「兄ちゃん！後ろだ！」

おじさんの叫びにビクツとして一瞬反応が遅れた。

後ろを向くと剣を持ったゴブリンがこっちに迫っていた。

……まだいたのか。……

すぐにM1を構えて撃ったがゴブリンの上を掠めるだけだった。

「ーッ！ヤバイー！」

ゴブリンが剣を振り下ろしてきたのを慌てて避けようとして後ろに尻餅をついた。

さらにもう一度剣を振り下ろしてくるが、勇輝はそれよりも早くM1を突き出してゴブリンの胴体に銃剣を刺した。

「グギイ……！」

剣は届かないがまだゴブリンはもがいている。

勇輝も体勢が悪いためこのままでは押し負ける。

「これで終わりだー！」

そう言ってM1の引き金を引いた。

轟音の直後に勇輝に返り血が飛び、ゴブリンは後ろに吹き飛んだ。そして薬莖とともに特徴的な高い音を響かせてクリップが排出された。

「……危なかった。」

近くに落ちていたクリップを拾ってダンプポーチにつっこみ新しいクリップを取り出そうとした。

「助けてくれー!」

その声に振り向くと剣を持ったゴブリンがおじさんを追い詰めていた。

おじさんは木に背中をつけていてもう後がないようだ。

・・・M1は撃てない。ならこっちでやるしかない!・・・

M1を置いてホルスターに収まっている9mm拳銃のグリップに手をかけた。

拳銃を抜きながら安全装置を解除し、軽く狙いをつけて撃ち続けた。

はじめの2〜3発は外れたみたいだが、その後の3発は確実に当たった。

ゴブリンは仰向けに倒れた。

近づくとまだ息があったので一思いに頭に1発撃ち込んだ。

「大丈夫ですか? さっきはありがとうございます。」

「…ああ、助かったよ。それにしても変わった武器だな。まだ耳が痛い。」

「まあちよつと特別なんですよ。それより早く離れましょう。」

二人は馬車に戻って歩いた。

途中でさつき倒したゴブリンが1体這いずりながら近づいてきていた。

「悪いけどドメだよ。」

最後の2発を叩き込んでスライドがストップした。

ゴブリンは息絶えている。

勇輝はマガジンを交換してM1を拾って戻った。

その後は襲撃も無く、森を抜けてしばらくすると街が見えてきた。石造りの立派な壁がそびえ立ち、道の先には大きな門が開かれている。

「兄ちゃん、あれが「コヨースカ」だよ。この辺りでは結構デカイ街だぜ。」

「へえ、そうなんですか。やっと一息つけそうですね。」

「そういえば街の門をくぐるには通行税がかかるが払えるか？銅貨3枚だ。」

「・・・マズいな。お金なんて持ってないし、それどころかシステム自体も全く知らないぞ。・・・」

「え、えーと、実はお金も食料と一緒に失ってしまったんですよ。ははっ・・・」

「そうかい。あんたもついてないな。ここは護衛してくれた礼に払ってやるよ。大した額じゃないしな。」

「本当ですか！助かります。」

「・・・とりあえず目立つM1は収納しておこう。銃剣は短剣の類だと思ってくれるだろう。・・・」

勇輝はおじさんの計らいのおかげで難なく街に入ることができた。馬車が大通りの入り口近くで止まると、そこでおじさんと別れた。

「兄ちゃん、達者でな。」

「本当にお世話になりました。ありがとうございます。」
そして勇輝は大通りへと向かった。

「・・・何をすることも拠点だったり資金を集めないとな。今日の宿もお金がないと入れない。となるとやっぱりギルドか？・・・」

勇輝は思案しながら歩いていると果物を売っている屋台のおばさんに声をかけられた。

「その変わった格好した兄ちゃん！このリンゴを買わないかい？今ならとっても甘いよ。」

「・・・変わった格好だと……。ああ、そうか迷彩だもんな。・・・すみません、今お金がないもので。ちよつと聞きたいんですけど、こ

の街のギルドかみたいなところってありますか？あつたら場所も教えてください。」

「それだったらこの大通りの先の街の中心にあるよ。この街は初めてかい？」

「つい先ほど来たばかりなんです。ありがとうございます。ごうございました。」

親切なおばさんに礼を言つて大通りを進む。

ファンタジーでよくありそうな中世風の大通りを進むと目の前に大きくて立派な建物が見えて来た。

・・・多分あれがギルドだな。さつそく行つてみるか。・・・

ギルドに向けて歩き出した勇輝は通行人の若い男性にぶつかった。

「おっと、すみません。」

「オイッ！どこ見てやがんだ！……変な格好しやがつて。ふざけてんのか？とりあえず有り金だしな。」

・・・えっ、やばくない？こんな大通りで白昼堂々ど？・・・

「聞いてんのか！いい度胸じゃねーか。さつさと出さないと大怪我するぞ。」

周りを見るといつの間にか仲間と思われる男に囲まれていた。

数は全部で3人だ……よく見ると酔っ払ってる。

「もう知らねーぞー！やつちまえー！」

目の前の男が向かつてくる。

・・・流石にここで銃は使えないよな。銃剣は危ないし、3人相手に接近戦はきつい。……そうだ！・・・

「破道の一……衝！」

人差し指を向けて唱えると指先が小さく光つて男が吹っ飛んだ。

・・・これなら大した怪我にもならないだろう。・・・

「この野郎！よくも！」

他の二人も襲つて来るが同じように吹っ飛んだ。

「すいません。この酔っ払い3人を衛兵にでも突き出してください。」

困んでいた野次馬に後を任せて勇輝はギルドの方向に向かつて逃げるように去つていった。

ギルド

…さつきはひどい目にあったな。酔っ払いだっただからまだ良かったけど、やっぱり迷彩はやめところかなあ。…

勇輝はいったん人気のない横道に入って自分の異次元空間に入った。

「迷彩の柄が珍しいのかな？それなら学校の作業着ならいいかな。」

ロッカーの前に立って作業着の掛かったハンガーを手に取る。

…作業着なら色がOD一色になるくらいしか変わらないけど、一応迷彩よりはマシかな。あと、鉄帽も重いから作業帽でいいや。…

鉄帽を脱いで作業帽に着替える。

そして帽子を被りロッカーの扉の裏に付いている鏡で自分の姿を見してみる。

…ご丁寧に名札まで僕のやつだ…。これじゃ学校の中とたいして変わらないじゃないか。いつそう武装してるのがおかしく感じる。…

自分の中では違和感が残るが、とりあえず着替え終わったので外に出る。

「ここがギルドかあ。どんな感じなのかな。まずは登録かな。」

しっかりと造りの木の扉を開けると昔やっていたモン○ンの集会所みたいな空間が広がっていて、テーブルでは数名の男女が、カッブ片手に談笑している。

勇輝は受付に真っ直ぐ歩いてカウンターの人に話しかけた。

結構若くて綺麗な女の人だ。

「すいません。この街に初めて来たんですけど、冒険者の登録できますか？」

「もちろんできますよ。それではギルドカードを発行しますので向こうの突き当たりの部屋に入ってください。そちらで手続きをします。」

「ありがとうございます。」

受付の人が指した部屋に向かっていると、テーブルにいた男が声をかけてきた：酔っ払っている。

「よお、あんた見ない顔だな。変わった格好だが、戦えるのか？」

「……うーん……、まだおかしいのか。これは諦めるしかないな。……」

「これは私の故郷の動きやすさを重視した普段着みたいなものです。この街に来る途中の森ではゴブリン10体くらい倒しました。」

「……ちよつと数盛ってキリ良くしたけどたいして変わんないよね。……」

「フン、そうか。マア頑張んな。」

「どうも……。」

これ以上絡まれないように早足で部屋に向かった。

部屋に入ると中央に腰くらいの高さの柱状の大理石のような石が置いてあり、その隣には少し年上っぽい男の人が立っている。

「ようこそ、ギルドカードの登録ですね。それではいくつかの質問に答えてください。」

そう言つて石の上に手を乗せると石が青白く光った。

「まずはあなたの名前と年齢を言ってください。」

「えーと、永遠勇輝で、年は20です。」

「それでは種族は……ヒトですね。次は今使っている武器を教えてください。いくつかある時はどれか一つでも構いません。」

「……種族ってことは他にも色々いるんだな。やっぱりエルフとか？……」

「武器は銃を使っています。」

「あの、銃って何ですか？」

「ああ、魔道具の類だと思っただけなら結構です。」

「……マジか……銃の概念自体が存在しないとは。……」

「以上で質問は終わりです。カードを発行するので受付で受け取ってください。」

男の人がそう言うとも何も書かれていないカードを石の上に乗せていた。

とりあえず部屋を出て広間に戻った。

待っている間に壁の掲示板を見ていた。

依頼と思われる沢山の張り紙が貼っており、下には赤い丸がいくつか書かれている。

・・・この文字：不思議となんとなく理解できるけど、書けるかと言われたら自信ないな。赤丸の数が難易度かな。すぐに出来そうなものを探しておこう。・・・

依頼の物色をしていると受付の人に呼ばれた。

「ギルドカードの登録と発行が終わりました。こちらになります。」

さっきの部屋で見たカードを渡してきたので受け取った。

ギルドの紋章らしきものが描かれている裏面には質問に答えた内容が記されていて、一番上の名前の下にはランクEと書かれていた。

「あー、このランクってどういった感じなんですか？」

「このランクは初めがEで始まって依頼をこなしていくとAまで上がり、特別な試験などを突破すると最高のSランクになります。」

「へえー、そうなんですか。ありがとうございます。さっそくなんですけどこの依頼を受けたいのですが。」

勇輝は掲示板から取ってきた依頼書を受付に出した。

「これは、Dランクですが、大丈夫ですか？」

「ええ、問題ありません。」

勇輝が受けた依頼はゴブリン6体の討伐だった。

なんでも街はずれの村の周辺に小さな群れが出没したらしい。

ゴブリンなら森の中でたくさん倒したので十分やれると思った。

しかし、勇輝が選んだ理由は他にもある。

「それでは頑張ってくださいね。」

「はい！頑張ります！」

手続きを終えた依頼書を持ってギルドを出た。

・・・わざわざ街から出る事になったけど、今日の宿は確保出来たし、依頼もそんなに難しくない。ここからしっかり稼いでいくぞー。・・・

勇輝が受けた依頼は討伐だが、依頼してきた村が依頼内容で泊まり

がけの場合は空き部屋を提供するということだった。

今の勇輝にはもってこいの依頼だった。

馬車で村まで行き、依頼主の村長に挨拶をした。

「はるばるご苦労だね。よろしく頼むよ。今日はもう日が暮れかけてるからあそこの宿の空き部屋を使ってくれて構わないよ。」

「ありがたく使わせていただきます。そういえばどの辺りから魔物は襲ってくるんですか？」

「そうだね、よくこのこと反対側の西からやってくるよ。村の若い男達でなんとか追っ払っているんだが、なかなか手に負えんくての。」

「安心してください。返り討ちにしてやりますよ。」

「それは心強いのに。頼りにさせてもらおうよ。」

話を終えた後夕焼けに染まる村の中でゴブリンがやってくる場所を確認して作戦を立てた。

・・・結構障害物が少ないから狙撃でいけるかな。あとは、念のためトラップも仕掛けるか。・・・

村の人に許可を貰って異次元から取り出した指向性散弾（クレイモア）を周辺に仕掛けて近づかないように言った。

「ついにコイツの出番だな。」

一通りクレイモアを仕掛け終わった勇輝はとある銃を取り出していた。

それはM1と同じような形をしているが暗いOD色に大きなスコープが載せられている。

・・・対人狙撃銃・・・M1より少し短いけどずっしりとしているな。スコープの調整も兼ねて試し撃ちをするか。・・・

およそ100m先に村人に頼んで用意して貰った薄い木の円盤を何枚かとして置いてある。

部屋の中で椅子に座り、テーブルに二脚を展開して窓から銃身を突き出した。

しっかりと頬付けしてスコープを覗き、倍率の調整をして円盤の中心を狙い撃つ。

ダーン!!

今までとは比べものにならない轟音が響き、二脚を使っているにも関わらず強烈な反動がきた。

・・・すごいな……。さて、どうなったかな?・・・

ボルトを引いて空薬莖を排出して戻し、スコープを覗いて的を見る。

弾痕は中心の右上の端を抉るようになっていた。

・・・着弾修正は大きく大胆について教官が言ってたなあ。・・・

64式の射撃をした時に教官から言われたことを思い出してスコープのレティクルを動かした。

「次はどうかかな?」

今度は隣の円盤を狙う。

「ツッ!」

・・・やっぱり反動とか音がキツイな。まあ慣れるしかないね。・・・
ボルト操作を終えて的を確認する。

弾痕は中心の少し真上にあつた。

・・・よし。左右は良いみたいだな。あとはもう少し下だな。・・・

さらに射撃する。

「今度はどうだ?・・・あれ?」

弾痕は上下はピツタリだったがまた右にズレていた。

・・・上下と左右を片方だけをいじっても、もう片方に影響が出るみたいだな。とにかくあと少しだ。・・・

その後3発撃つてやつと満足のいく結果になった。

「これでよし。調整は大事だよなあ。」

銃の中でもさらに好きなジャンルの狙撃銃を撃つことができ気分が高揚していたが、その後大きな音に驚いた村人達に謝って回るこ
とになった。

日が暮れた後宿の食堂で食事を食べた。

ここに来て初めてのまともな食事だ。

少し硬いパンに野菜が色々入っているスープと少しの果物が出て

来た。

「先程は驚かせてしまつて、申し訳ありませんでした。このスープとても美味しいです。」

勇輝は宿のおばさんに話しかけた。

「そうかい、作つた甲斐があつたよ。それにしても本当に驚いたよ。あれがアンタの使う武器なのかい？」

「はい。あれで遠くの敵を倒せるんです。」

「へエ、すごいもんだね。」

「できたらお肉も出してやりたかつたんだけど魔物に鶏を襲われちゃつてね。」

「明日はそいつらを私がキッチリ討伐するので安心して下さいね。」

食事を終えたあとは部屋に戻つて異次元空間に入り、色々な銃の予備マガジンに弾薬を装填していた。

一通りの作業が終わつたら部屋のベッドに横になった。

・・・指がめっちゃ痛い…。今日一日ですごいことがたくさんあつたなあ。何回か死にかけるし、銃をたくさん撃つたし、魔法まで使つたし……。でも一番は異世界に来たことだよな。そういえばあの神さますごく真面目で優しかったなあ。声しかわからなかつたけどどんな人？なのかな。・・・

いろいろ考え込んだあとクタクタだったので勇輝は目を閉じて眠りについた。

初依頼

「知らない天井だ…。」

そんなセリフを吐きながら魔物の襲撃の生き残りの鶏の鳴き声で目を覚ました。

時間にガチガチに縛られた学校での暮らしの癖で腕時計に目をやると、午前6時過ぎになっていた。

「…あれー？昨日寝た時はこの世界に来た時からズレていて午前10時くらいだったぞ。こんなところに電波飛んでる訳ないし…。まあいいか。ある程度は頼りにできる。…」

ベッドから起きて身だしなみを整えると食堂で朝食のパンとスープの残りをもらった。

「さてと、任務開始といこうかな。」

村人に借りた梯子で比較的広めな西側の家の屋根に登って対人狙撃銃と双眼鏡を出した。

あとはスナイパーよろしく襲撃が来るまでひたすら待機だ。

「暇だなあ。」

腕時計を見ると30分くらい経っていた。

「…これだけでもキツイのに同じ体勢で何日も待ち続ける本職のスナイパーってやっぱり凄いな。…」

あまりに退屈だったので差し入れでもらったパンをかじりながら双眼鏡で村を眺めてみた。

「…そんなに広くはないけど子供とか若い人も多いな。畑も元気そうだし、魔物の襲撃を除けばかなりいいところだな。みんな優しいし。…」

「これは守るしかないでしょ。」

勇輝は改めて気を引き締め、双眼鏡で村の外を見た。

「ーッーアレはっー！」

双眼鏡の視界の端に映り込んだ森で何度も見た影を勇輝は見逃さなかった。

「来たぞー！魔物が来たぞー！」

勇輝が屋根の上で叫んで村人に知らせる。

・・・まずは観察だ。距離はまだ結構ある。1kmはありそうだ。数は・・・多いな、情報が違ったのか？どう見ても10体以上はいるぞ。・・・

「まだ試していないけどあの数相手ならコイツの出番かな。」

勇輝は異次元からMINIMIを取り出してベルトリンクにつながれた弾薬をセットした。

念のためMINIMIに使用できるM4のマガジンもポーチに入れておく。

「うん、準備完了！」

再びMINIMIを戻して対人狙撃銃を構えてスコープを覗く。

「一匹も村には近づけない！」

スコープの調整してある有効射程に獲物が来るまでじっと待ち続ける。

勇輝の叫び声を聞いて村は一気に騒がしくなった。

若い男達は古い剣や槍を持って村の入り口を固め、それ以外のものは家の中に隠れて窓を硬く閉ざした。

「本当にそこから倒せるのか？あんたに期待してるぞ。」

槍を持った村人が屋根の上に寝そべっている勇輝に声をかける。

「大丈夫です。皆さんは入り口を守ってください。」

「わかった。頑張れよ！」

村人は入り口の守備に行った。

・・・そろそろ射程圏内だな。厄介な弓持ちから片付ける！・・・弓を持つているゴブリンの頭に狙いを定めてトリガーを絞る。

「キャラじゃないけど・・・、狙い撃つぜツ！」

某スナイパーの台詞とともに対人狙撃銃が火を噴き、弾丸が飛んでいく。

それは集団の真ん中付近にいたゴブリンの頭に命中して破裂する

ように血を撒き散らしたのがスコープではつきりと見えた。

・・・なかなかエグいな。スナイパーは弾が敵にめり込むのをアツプで見なきやいけなからつらいつって言われるのがよくわかるなあ……

「…とりあえず、ひとおーっ！」

すぐさま次弾を装填して慌てふためいている集団の中で動いていない者に照準を合わせる。

今度は心臓を狙って撃った。

撃って少しの間を置いてそれは命中した。

「ふたあーっ！」

淡々と薬莖を排出し、次の標的を狙う。

立て続けに仲間を2体やられて動揺していたゴブリン達は埒がわからないと思ったのか一気に走り始めた。

・・・立ち止まらないのは賢明な判断だが、隠れる場所もなく真っ直ぐに向かって来るのならただの的と同じだ！……

「みいーっっ！」

「よおーっっ！」

「いっーっっ！」

残りの3発も命中して群れのおよそ半数を仕留めた。

対人狙撃銃の装弾数は5発である。リロードしてもいいが、距離が縮まってきているので武器を切り替える。

勇輝は狙撃銃を収納して屋根から降りた。

そしてゴブリンが向かってきている村の入り口に走って行き、村の男達と合流した。

「あんた、どおしたんだ？ 奴らはどうした？」

「先程5体仕留めました。あと、6〜7体はいます。私を入り口の前に出してください！」

「分かった！ 気をつけろよ！」

「はい！」

入り口を開けてもらってMINIMIを取り出して陣取る。

「さーて、何体残ってるかな？」

生き残ったゴブリンは勇輝がクレイモアを仕掛けたエリアに差し掛かっていた。

そして、スイッチとなるワイヤーに触れる。
ドオーンツツ!!

離れた場所からでも空気が震えるのが分かった。

・・・かかってくれたみたいだな。最後はここで迎え撃つ!・・・
MINIMIを構えていると爆発で巻き上げられた土煙の中から
4体のゴブリンが飛び出してきた。

皆どこかしらに散弾による怪我を負っているようで、ところどころ
血を流している。

・・・これで終わりにする!・・・

突進してくる集団に向けて機関銃の掃射を始める。

毎分725発の弾丸の嵐が次々と命中してゴブリンを貫いた。

10秒くらい撃ち続けて引き金から指を離れた時には1体も立っ
ていなかった。

「お…終わったか?」

後ろから村人たちがおそるおそる出てきながら尋ねる。

「はい、終わりましたよ。これで安全です。」

「あんだ、ナニモンなんだ…。」

その後は村人と協力して片付けをした。

「これが依頼の報酬じゃ。ご苦労だったの。また何かあったら頼り
にさせてもらうよ。」

「こちらこそありがとうございます。皆さんお元気で。」

勇輝は報酬のお金が入った袋を受け取った。

・・・やっぱり現代のお金と比べると重たいな。お札とかはないだ
ろうしなあ。どのみち収納すれば関係ないけど。・・・
村から街に出る馬車に乗せてもらって街に戻る。

・・・今日のお昼と宿はどうしようかな。とりあえずギルドに行こ
う。・・・

大通りで馬車を降りてギルドへ行く前に屋台を見て回った。

「あつ、おばさん！昨日はありがとうございました。」

昨日ギルドへの道を教えてくれた果物売りのおばさんがいた。

「おや、変な格好のお兄さんじゃないかい。ギルドには行けたみたいだね。よかった、よかった。何か買って行くかい？」

「それじゃお言葉に甘えさせてそのリンゴを一つください。」

見た感じ色が良くて甘そうに見えたリンゴを指差した。

「あいよ。銅貨2枚だよ。」

「……さてと、銅貨もあるけど、銀貨で払ってその価値を確かめよう。……」

「すみません、銀貨1枚をお願いします。」

「おや？ちよつと面倒だね。」

おばさんはそう言いながら、ジャラジャラと銅貨を数え始めた。

「はい、お釣りの銅貨13枚だよ。しっかり確認しな。」

「……大丈夫です。ありがとうございました。」

銅貨を一時的に腰のダンプポーチに放り込んでリンゴ片手に別れを告げた。

「……銀貨1枚で銅貨15枚かあ。ちよつとキリが悪いな。……
そう思いながらリンゴをかじる。

「おつ、甘い。いいね。」

リンゴの甘さに唸りながらギルドへと向かう勇輝だった。

ギルド前に到着する頃にはリンゴを食べ終わっていた。

正面の扉を開けて受付に向かう。

「こんにちは、依頼達成の報告にきました。」

「あら、こんにちは。ゴブリン6体討伐の依頼でしたね。ご苦労様です。」

勇輝はポーチから村長の証明書を出して受付の人に渡した。

「この証明書にも書いてありますけど、ゴブリンは依頼内容の倍の数がいきましたよ。てっきり6体だと思っていましたのです驚きましたよ。」

ちよつと大きさに苦労したというアピールをする。

「そうでしたか…、こちらの情報に誤りがあったようなので追加の報酬をお出します。ご迷惑をおかけしました。」

「まあ、なんとかあったので気にしませんよ。他の群れが合流でもしたのかもしれないですし、仕方ないと思いますので。」

「今後は情報の信憑性をもっとしっかり確認します。……こちらが追加報酬になります。」

受付のお姉さんはカウンターの下から報酬が入った袋を取り出してカウンターに置いた。

……ふう、村で貰った報酬よりちよつと重たいな。謝罪も含まれてるのかな。……

勇輝は袋を受け取った後、思い立ったように尋ねた。

「あの、この街で手頃な宿ってどこにありますか？」

「手頃ですか…。それならギルドを出て左の方に少し歩いたところにいいところがありますよ。『猫の月』という宿です。悪い評判は聞きませんし、ご飯が美味しいと有名です。」

「ありがとうございます。」

勇輝は受付を離れて外に出ようとした。

「あつー！待ってください！最後に伝えることがあります。」

「どうしたんですか？」

「ギルドカードのランクの更新をするのでカードの提出をお願いします。勇輝さんが達成した依頼はDランクなのであなたのランクがEからDになります。」

「ああ、そうでしたね。それではお願いします。」

士官学校でも使っていた身分証ケースに入れてあったギルドカードを取り出して手渡した。

身分証ケースは勇輝の胸ポケットにチェーンでしっかりと縛着されていて士官学校の身分証とマイナンバーカードも入っている。

「確かに受け取りました。すぐ終わるので少々お待ちください。」

お姉さんがカードを持ってカウンターの奥に行き、5分くらいして戻って来た。

「お待たせしました。これであなたはランクDに昇格しました。この

調子でどんどん頑張ってくださいね。」

「ありがとうございます。頑張りますよ。」

勇輝は今度こそギルドを出て「猫の月」へと向かった。

・・・まだギルド正面の大通り以外は見たことがないからいろいろ散策しようかな。・・・

ギルドを出て左に歩くと大通りと違って屋台ではなくしつかりとした店舗が並んでいた。

雑貨屋や服飾店をぎつと見ながら歩いていると、ある店の前で足を止めた。

・・・武器屋だ。ちよつと見ていこう。・・・

店には剣や槍、斧などが展示されていて誰もサビ一つない。

「すいませーん。だれかいますかー?」

店の奥に呼び掛けると店主と思われる青年が出て来た。

筋肉質でガタイがいいがたぶん同年代だ。

「おう、呼んだか。何か用か?」

「いや、ちよつと聞きたいことがあるんですよ。ここの武器ってあなたで作ったんですか?かなり立派ですね。」

勇輝は店の武器を見回しながら言った。

「悪いが俺は売ってるだけなんだ。ここの武器は向かい側の家のジジイが打ったものだ。ジジイが打ったものを俺が売ってるんだ。あのジジイは腕はいいんだけど店をやるには頑固すぎるんだ。」

「そうなんですか。ありがとうございます。」

「あんた、ジジイのところに行くのか?やめといた方がいいぞ。」

「まあ、ダメ元でなので別に構いませんよ。」

そう言って向かいの家に向かった。

鍛冶師

「ごめん下さーい。だれかいませんか?」

勇輝は扉を叩く。

「さつきからうるさいぞ。この前武器を納品したろう。……ん? 誰じゃお前さん。」

しゃがれた声を出しながら頭と髭が真っ白の老人が扉を開けて出て来た。

高齢のためか腰が曲がっていて、162cmという低身長 of 勇輝より少し背が低い。

「失礼しました。私は永遠勇輝というものです。あちらの武器屋に置いてある武器はあなたが作ったんですよね? ちよつとお話をしたいのですが。よろしいですか?」

「なんじゃ、突然やって来て。儂は忙しいじゃ。出直すんじやな。」

老人は面倒くさそうに家の奥に行こうとしていた。

……確かに頑固そうだな。こういったタイプの人はひたすら自分の仕事に熱心なタイプ……というかそれ以外興味が薄い。それなら……

「待つて下さい! あなたの腕を見込んで見てもらいたいものがあるんです!」

勇輝がさがるように言うと、老人の動きが止まった。

「ほう、いったいどんなものじゃ? つまんなかったら承知せんぞ。」

ゆっくりと振り返って老人は戻って来た。

「仕方ない…中に入りな。茶は出せんぞ。」

「お気遣い結構です。お邪魔します。」

勇輝はテーブルと椅子のある部屋に案内されて座った。

家の中はお世辞にもきれいとは言えず、工具らしき物や書き殴りのメモがたくさん散らかっている。

目の前のテーブルはかろうじて肘をつけられる。

「それで見せたいものってなんじゃ。」

「それは……これです。」

そう言つて勇輝はあのサーベルを取り出して老人に見せた。

サーベルを見せた途端に老人は目を見開いた。

「お前さんーちよつと触らせてくれんか。」

勇輝が了承するよりも早く引つたくるようにサーベルを取った。

「装飾が凝つてるのお。そんなことはどうでもいい、なんだこの軽さは。レイピアに匹敵するぞ！」

老人がサーベルを抜いて刀身を見てまた驚いた。

「なんじゃ？刃がついとらんじゃないか。それにしてもこの刀身はどんな金属でできているんじゃ？」

・・・この世界には合金が普及してないのかな。・・・

「えーと、確か鉄と鉛を混ぜた物だったと思います。他にもあつたかもしれないですが。お爺さん、これを戦えるようにすることはできませんか？」

「これは無理じゃな。儂のことはヘトスと呼べ。刃を付けたところで強度が足りん。それよりもこの剣を譲つてはくれないか？この金属を調べたい。」

「駄目ですかあ、それなら別に構いませんよ。ただ、頼みを聞いていたみたいです。」

「頼みつてなんじゃ？」

ヘトスはサーベルが気になるのかそわそわしている。

「まずはこの剣と同じ見た目で戦いに使えるものを作って欲しいことです。それから……。」

そういうと勇輝は弾帯に付けているM1の銃剣と64式、89式の銃剣を取り出してテーブルに置いた。

「これらにも刃をつけて十分な切れ味を与えて欲しいのです。」

ヘトスが銃剣を興味深そうに見る。

「これまた変わった短剣じゃな。これも刃がついとらんのか。アンタ戦う気があるのか。まあこいつは使えそうじゃな。」

「そうですか。なら受けていただけますか？」

「刃を付けるのはすぐに終わるが、剣は何日かかかるぞ。腕がなるわ

い。さつさと終わらせてあの金属を調べたいしの。」

「交渉成立ですね。完成したら、私はこの先の「猫の月」に滞在する予定なのでそちらに知らせてください。」

「おう、任せとけ！終わったらファイに持ってかせる。……ああ、ファイは店をやってるガキのことよ。」

「……あの店の人、ファイっていうのか。とりあえずこれで近接武器はなんとかなりそうだな。……」

「それでは、ヘトスさん、よろしくお願いします。」

そう言つて勇輝は軽い足取りで家を出て宿を探した。

宿屋「猫の月」はヘトスさんの家のすぐ近くにあった。

「……見た感じは悪くなさそうだな。」

宿の扉を開けるとカランカランと小さなベルが鳴った。

「ハイ、今行くよー。あら、お客さんかい？」

店の奥から恰幅のいいおばさんが出てきた。

「あの一、一週間の宿を取りたいのですが、あとお昼もいただけませんか？」

「一週間だね。それなら宿での食事代も含めて銀貨4枚だよ。ただ、今日のお昼はさつき終わったから残り物になるけどいいかい？」

「4枚ですね。……どうぞ。お昼はそれで構いませんよ。」

弾帯に脱落防止の金具を介して取り付けていた袋から銀貨を取り出しておばさんに渡す。

「それじゃあ用意するから向こうの食堂で待つてな。娘に持ってかせるから。」

「わかりました。」

勇輝は食堂に入って手頃なテーブルについた。

しばらくすると、若い女の子が皿を持ってやって来た。

多分勇輝より少し若い……高校生くらいか。

士官学校では見ることでできない長い金髪に整ったスタイルをしている。

「ハイハイー！お待ちどーさん！ちよつと冷めてるけど、それでもお

母さんの料理は美味しいって有名なんだよー」

・・・何この子元気だな。うちの世界じゃあんまりこういう人はいなかったから新鮮だな。これが誰にも害のない無邪気な明るさというやつか。・・・

感心しているうちに目の前に皿が並べられた。

「それじゃあごゆっくりと。食べ終わったら声を掛けてくださーい。」

「ありがとうございます。……いただきます。」

さつそくスープをいただくと、確かに冷めているが、とても美味しい。

・・・この宿は当たりだな、ありがとう、受付のお姉さん。・・・
教えてくれたギルドの人に感謝しながら完食した。

「ごちそうさまでした。よろしくお願いします。」

「ハイ。」

勇輝は席を立ち、自分の部屋に行った。

勇輝の部屋は2階にあり、中は掃除が行き届いている。

・・・いい感じだ。・・・

椅子ではなくベッドに腰掛けてしばらくぼーっとした。

・・・なんかここに来てからみんな優しいなあ。いや、逆に今までが悪かっただけか？でも表面上の付き合いだけだからなあ。とにかく閉じきった日本や、士官学校よりは全然マシだ。・・・

弾帯を外してベッドに寝っ転がる。

・・・それにしてもさつきの子可愛かったなあ。……………いやっ、何考えてんだ！深夜の酒とアンダー18ダメゼツタイ！・・・

一瞬の思考を去年の夏期休暇前に教官が言っていた言葉を持って振り払う。

・・・ギルドで依頼でも見てくるか。・・・
弾帯を装着してギルドに出発した。

・・・なんか手軽な依頼ないかなあ？・・・

勇輝はギルドの掲示板の依頼書とにらめっこしていた。

「リザードマンの巢の殲滅…ダメだBランク以上だ。リッジウルフ4頭か…どうしよう。」

いつの間にか独り言まで言っただけで迷っていると後ろから声を掛けられた。

「あのー……。」

「どうかしましたか？」

相手は杖を持ってベレー帽みたいな帽子を被った緑色の瞳の少女だった。

「もしよかつたらこの依頼でパーティを組みませんか？ほかに誰もみつからなくて……。」

少女はおどおどしながら勇輝に依頼書を見せた。

「暴れイノシシの退治…デカくて手がつけられないのか。ランクもDだしたいして難しくなさそうだな。……失礼ですが、あなた年は？」

「じゅ、16です……。」

……緊張でもしてるのかな？僕みたいに駆け出しなのか。それにしても結構年下か。ちよつと心配だな。……

「そうですね。私でよければ一緒にしましょう。ちよつと手頃な依頼を探していたので。」

勇輝がそう言うのと少女の顔が少し明るくなった。

「本当ですかっ！ありがとうございます！私はカナといいます。よろしくお願いします！」

そう元気に話した。

……一気に元気になったな。いいことだ。笑っている方が可愛い。いやだからなんでそうなるんだ！……

「…ゴホン、私は勇輝です。こちらこそよろしくお願いします。」

そしてお互いにギルドカードを交換した。

パーティを組むときはこうするらしい。

「4つも年上なんですわね。…このじゅうっていう武器はなんですか？」

……あれ？もしかしてあまり離れてないと思われてた？…まあ気

にしないでおこう。身長ばかりはどうしようもない。・・・

「私の魔道具の類だと思ってください。それは後でお見せします。」

カナのギルドカードを見ると武器は魔法の杖、種族は獣人と書いてあった。

・・・獣人？てつきりヒトだと思ってた。・・・

「勇輝さん、ヒトだったんですね…。帽子を被っていたので耳を隠していると思ってました。」

「それは失礼しました。…あれっ？私の耳帽子とか関係なく出てますよ。」

そう言っつて勇輝は自分の耳に指を指す。

「すつ、すいません！帽子ばかりを見ていたばかりに…。」

「いえ、別に気にしませんよ。もしよかったら帽子を取ってくれませんか？」

勇輝は作業帽を取って髪を触るとそう言った。

「ここですか？ううー…分かりました。」

カナは恥ずかしそうに帽子を取るとくりいろの髪と同じ色の犬のような耳がぴよこつと立っていた。

しかしその耳はすぐに倒れてしまった。

どうやら恥ずかしいと倒れるらしい。

「も、もういいですか？」

泣きそうな声で言ってきたので申し訳なくなった。

「ごめんなさい。もう大丈夫です。」

ちよつと涙目になっていたカナが素早く帽子を被った。

「それでは気をとり直して行きましょうか。」

「は、はいー！」

勇輝が受付で依頼の参加手続きを済ませて言うとかナがついてきた。

・・・なんか可愛いな。あれが本物のケモ耳かあ…いかにいかに！アンダー18だから！・・・

もやもやした気持ちをなんとか押さえつけて出発した。

パーティー

「カナさんはいつから冒険者をやっているんですか？」

街の中を歩きながら勇輝は振り向いてカナに尋ねる。

「ひゃいつー先月からです…。」

急に話しかけられたので驚いたのかおどおどしている。

「…怖がられてるのかな？それとも、もともと控えめなのか？…：「そうなんですか。私は昨日なつたばかりなんですよ。旅をしていてこの辺りに来たのも初めてで…わからないことばかりです。そういえば、カナさんはどういった魔法を使うのですか？」

「えと…私は水属性の魔法が得意で特に発展系の氷魔法が中心です。あと、少しですけど回復もできます。他の属性はあまりできないです…。」

話の後半で杖を両手で抱きしめてうつむきがちに話した。

帽子でその顔は見えない。

「…一般の魔法つてこういう感じなのか。あんまり色々な属性を大っぴらに使わない方がいいようだな。わざわざ教える必要はないし、切り札は多い方がいい…。」

「いいですね。私はそんなに使えないので十分ですよ。それより、怪我をした時には頼りにさせていただきますね。」

「はっ、はい…。」

自身なさげだったのがちよつと元気になったように見えた。

「勇輝さん、もうすぐ門に着きます。い…一緒に頑張りましょう！」

カナが勇輝の後ろを指差した先を見ると街の門がそびえ立っていた。

「そうですね。頑張りましょう。」

「…またこの森か。因縁でもあるのか？…。」

勇輝の依頼の目標である暴れイノシシは街のすぐ外にある森に出没しているようだが、この森は勇輝がこの世界で初めて来た場所である。

「私はこの森の方から向こうから来たのですが街の近くにこれほどの森があるというのも物騒ですね。」

「ですからこの街は冒険者の存在が欠かせないんです。」

「……せめて道の周辺くらいは安全を確保するべきだよな。ちよつと森を切り開くとかしないのかな?……」

「でも、冒険者の仕事を奪うことになるかもしれないですが、道の周辺だけは森を切り開いて安全にした方がいいんじゃないんですか?」

森の入り口で聞いてみた。

「そういう意見もあるんですけど、この森は周辺のマナの循環を担っているみたいで傷つけてしまうと、農作物とかの不作にもつながってしまうらしいですよ。」

「……そういうことか、それじゃあ街も少々残してらつてことか。……それでは行きましょう。」

二人は森に入ってしまった。

森に入つてしばらくすると奇妙な光景を発見した。

表面が大きくえぐられていたり、倒されている木がちらほらでてきた。

「この匂い……さつきまでこの辺りにいたみたいです。周辺の状況を見るとかなり気が立っているみたいです。倒されてる木を見るとかなり大きいみたいです。」

今までのカナの雰囲気とは違って冷静に情報を集めている。

「……さすがだな。やっぱり嗅覚がいいのかな。……」

「すごいですね。そんなことまで分かるんですか?」

「……はいーじゅ、獣人なので……。」

勇輝が話しかけるとカナははっとしたようにおとなしくなった。

「……カナさんはもしかして……。」

勇輝はカナに正面を向いて呼びかけた。

「嗅覚での推測以外は獣人かどうかは関係ありませんよ。それはあなた自身の素晴らしいところですよ。もっと自信を持ってください。私は差別をするつもりはありませんし、すごいと思ったらすごいと言

ます。」

「……………ありがとうございます。」

まだぎこちない返答だったが、その声には喜びが感じられるような気がした。

「……これが正しかったらいいんだけど。……
気を引き締めて、さらに森の中を進む。」

「……ッ！勇輝さん！」

ゆっくり歩いているとカナが突然立ち止まった。

勇輝も足を止めてカナを見る。

カナは被っていた帽子を取って耳をピンと立てる。

「近くにいます。」

どうやら音でわかったらしい。

「どの方向か分かる？できたら移動してるかどうかも。」

少し声量を落としてカナに聞く。

「あつちの方角です。少しずつ離れていつてますけどすぐに追いつけます。」

カナは目を閉じながら音が聞こえる方角を指差した。

「それじゃあ追跡しよう。何か変化があったら教えて。」

「はい。」

二人は大きな音を立てないように慎重に進んでいった。

「勇輝さん！今度はこっちに向かってゆっくり向かってきます！」

「なっ!?とにかく身を隠そう！」

勇輝は近くの茂みを指差し、隠れた。

「うまく隙を突いて仕留めます。今のうちに言っておきますけど、大きな音がしますので私が言ったら耳を塞いでください。」

そう言っつて対人狙撃銃を取り出して弾を装填する。

「分かりました。……………もうすぐ見えます！」

カナがそう言っつてすぐに木の向こうから大きな毛むくじやらのイノシシが歩いてきた。

「……デカイ……。あれが暴れたら厄介だな。……」

「カナさん、耳を塞いで。」

「はい！」

カナは両手で耳を押さえている。

その仕草は可愛げである。

勇輝はスコープを覗いて目標を視界に捉える。

・・・どこを狙うか・・・やっぱり脳天か？外したらあまり効かなさそうだな。

結構タフそうだし、一撃でやるか・・・

ゆつくりとこめかみと思われる場所に狙いをつける。

「喰らえ！」

轟音とともに7・62mmの弾丸が放たれた。

しかし、引き金を引いた瞬間にイノシシが顔を横に動かしたのを見た。

・・・マズイッ！・・・

弾丸はイノシシの右目に命中した。

スコープの向こうで目標は大きな鳴き声を上げながら頭を振り回している。

・・・しくじった！もう1発だ！・・・

すぐさまスコープから目を離して次弾を装填するがその時に隣を見るとカナが必死に耳を塞いで震えていた。

・・・カナさん、ごめん！・・・

もう一度スコープを覗くとイノシシは怒り狂ってキョロキョロと敵を探していた。

もう一度轟音が響いた。

隣からカナの怯えた声が聞こえる。

2発目は肩の上に当たった。

あまり効果がなかったようで怯まずにこちらの方を向いた。敵を見つけたのか大きな唸り声を上げて突進してくる。

・・・これはヤバイ！もう狙撃は無理だ！いったん逃げないと・・・

カナはまだうずくまって震えている。

「カナさん！」

勇輝は狙撃銃を収納し、カナの手を引いて茂みから出て走る。カナは耳をパタンと倒して青ざめた顔をしているが、なんとか付いてきている。

後ろから駆けてくる音が大きくなってきている。

「クソッー！ここに隠れよう！」

二人が隠れられる大きな木の後ろに隠れる。

カナは木に背中をつけて座り込んでしまう。

後ろから鳴き声が聞こえた後に木をなぎ倒す音が聞こえた。

姿が見えなくなつて手当たり次第に木に突進しているようだ。

二人が隠れた木は倒されはしないだろうが、安心はできない。

・・・どうする？とにかくやるしかない！・・・

勇輝は64式小銃と予備マガジンを取り出してマガジンをポケットに放り込んだ。

「カナさんはここに隠れてて。」

「えっ？どういうことですか？まっ……」

勇輝は最後まで聞くことなく64式を持って飛び出した。

「こっちだー！」

飛び出した勇輝は最初に単発で2発撃つたが特に効果はない。

射撃してすぐに隠れていた木から離れるように走った。

それを片目で見ると鳴き声を上げて追いかけてきた。

・・・ダメージは与えられなかったけど陽動はできたみたいだな。・・・

ある程度走つて一瞬止まって振り向き射撃する。

イノシシはなおも追いかけてくる。

「タフすぎるだろー！」

嘆きながらも走つて木の後ろに隠れる。

そして突進する足音が聞こえてきてもうすぐ接触するということころで勇輝は横に飛び出した。

イノシシは突進の勢いで勇輝が隠れていた木をへし折ったが、敵の姿を一瞬見失った。

勇輝はその隙に側面の位置について残り数発のマガジンを交換してセクターを「タ」から「レ」にしてしっかり構えた。

「倒れろーっ！」

イノシシが振り向いて突進しようとしているところに怯まずフルオートの20発を正面から叩き込んだ。

顔や頭に次々と命中して血を吐き出して突進のスピードが若干落ちたが、勇輝の目の前にたどり着くと勢いよく立派な二本の牙を振り回した。

勇輝は小さなバックステップをしたが、間に合わず空中で牙に振り払われて近くの木に背中から激突した。

「グハアツ……」

朦朧とした意識の中イノシシが呻き声を上げて力なく倒れていくのを見た。

イノシシも限界だったようだ。

勇輝はよろよろと立ち上がった。

左手はどうやら骨が折れているようで膝から先が動かない。

64式を離して右手でホルスターから9mm拳銃を抜いてふらふらとイノシシに近づく。

イノシシはまだ息があり、足をばたつかせてもがいている。

勇輝はしにかけのイノシシの目の前に立って安全装置を解除してハンマーを起こし、頭に向ける。

パン！パン！パン！

素早く3発の銃弾を叩き込むとイノシシは息絶えた。

その後勇輝も後ろに倒れた。

身体感覚が薄くなっていく。

……Dランクで相打ちかあ……将来の国防を担う幹部候補生失格だな……

眩くことも出来ず、心の中でそう思う。

「勇輝さーんっ！」

カナの声がかすかに聞こえた。

「勇輝さん！しっかりしてください！私が傷を……」

そこまで聞こえたところで勇輝は意識を失った。

仲間

視界がうつすらと広がっていく。

明るい緑色の風景の中心にぼんやりと栗色が見えた。

何度か瞬きをすると少しずつ視界がはつきりしてきて栗色の中に2つの綺麗な緑色が目に入った。

少ししてそれがカナの瞳だということがわかった。

「……カナ……さん？良かった。無事だったんだね。」

うまく力が入らないが必死に言葉を発した。

「勇輝さん……、無茶すぎです……。心配しましたよ。」

「ごめんね……。君にはたくさん怖い思いをさせた……。……。本当にごめん……。」

隣でうずくまって震えていたカナの姿を思い出し、謝罪の言葉を口にする。

「そんなことっ！気にしてません！あなたは私を助けるために一人で飛び出した！私が臆病じゃなかったら……。」

カナの目には涙が溜まっていた。

そしてそれが勇輝の顔に落ちる。

その涙で勇輝はカナの膝の上に頭を乗せている事に気がついた。

「僕はどうなったんだい？どれくらい経った？」

「あの後私が回復魔法で応急処置をして手当をしたんです。私の魔法じゃ完全に直せなくて……。一部は氷魔法で凍らせて止血してます。」

そう言われて感覚がまだあまりない左腕を見ると一部が血が混じって赤くなった氷に覆われている。

「ありがとうございます。あなたのおかげで死なずに済みました。あなたは私の命の恩人ですね。」

そういつて笑いかけた……。つもりだ。

「それなら……恩返しにして欲しいことがあります！」

カナはそう言って声を上げる。

「これからも私と一緒にいてくださいっ!!」

決意のこもった言葉が届いた。

「……………わかりました。それではこれからもよろしくお願いします。」
今度は本当に笑えたと思う。

そしたらカナは嬉しかったのか緊張の糸が切れたのか泣き出した。
勇輝は右手に持っていた拳銃を置いてゆつくりと腕を持ち上げて
カナの頭を撫でた。

栗色の髪はサラサラしていて時々触れた耳はふわりとしていた。
そして腕を降ろすと勇輝は再び眠りについた。

勇輝が目を覚ますと木にもたれ掛かっていた。
すでに日が暮れていて森は真つ暗になっていた。

目の前に焚き火が燃えていて、見回すとカナがすぐ近くで杖を抱き
しめて眠っていた。

近くに64式小銃と9mm拳銃が置いてあった。

……ずっと見張ってくれてたんだな。64式は収納するか。……

「よいしょっと、痛っ！」

ゆつくりと立ち上がると体中が痛い。

左手は木の棒と布で固定されている。

よろよろと歩き、64式と拳銃を拾って拳銃はホルスターにしまっ
た。

そして火の前であぐらをかいて焚き火に木の枝を放り込む。

パチパチと音を立てて火が燃え上がった。

……見張りはいいいけど腹が減ったなあ。日が暮れる前には帰れる
と思ったのにな……。こんなことになるなんて。カナには迷惑をかけ
たなあ……

眠っているカナに近づいて起こさないように優しく頭を撫でた。

……カナの耳はふわふわだな。犬かな、それとも狼？……

揺らめく炎の影に心なしかカナの表情が安らいだように見えた。

時折腹が鳴るのに顔をしかめながら見張りを続けた。

夜が明ける頃には腹の鳴る音もかなり大きくなって、徹夜明けの精
神を大きく削る。

「……あれ……勇輝さん？」

その声に振り向くと眠たく目をこすっているカナがいた。

「おはようございます。左腕の治療ありがとうございます。」

「ーッ！私いつの間にか寝ちゃってた……。勇輝さんもう大丈夫なんですか？」

恥ずかしさからなのか顔を赤く染めていた。

「何か食べ物を持ってませんか？あれから何も食べてないのを思い出してしまったもので。」

腹が鳴ってこちらも恥ずかしい思いをする前に尋ねてみた。

これはちよつとした意地っ張りだ。

「…はいーちよつと待ってください。」

カナはローブの中から小さい鞆を出してその中からパンと干し肉を出した。

「…どうぞ。」

「ありがとうございます。……うん、美味しい。」

カナが半分にしたパンと干し肉数切れを食べる。

「あのイノシシはどうしますか？」

カナが乾いたパンをなんとか飲み込んで聞いてきた。

「ちよつと試したいことがあります。」

勇輝はそう言って立ち上がるとイノシシの死体に近づいて触れて念じる。

するとイノシシは一瞬で消えて収納された。

……よし、成功だ。……

「……………、今のは何ですか!？」

しばしの間唾然としていたカナが口を開く。

「私の魔法で、異次元に色々なものを出し入れ出来るんですよ。この中にはいろいろ入ってるんですよ。……ウツ……」

ちよつと得意げに語っていると調子に乗った罰なのか腕が痛んだ。

カナはまだ驚いている。

「食事も済ませた事ですし、そろそろ街に帰りましょうか。」

「……………そうですね。」

時折カナに肩を貸してもらって森を抜けた。
カナの肩は年相応に小さく、柔らかかった。

門までたどり着くと衛兵が二人を見て驚いていた。
事情を知らせると余裕のある馬車を手配してくれてすぐにギルド
に行くことができた。

もちろんギルドでも誰もが目を丸くして2人を見ていた。

「大丈夫ですか…？」

受付のお姉さんが恐る恐る聞いてくる。

カナが依頼書を受付に出した。

「ちよつと腕をやられましたか？なんとか無事です。確認お願いしま
す。一応イノシシも持ってきましたよ。」

「どういう事ですか？持ってきた？牙だけでもいいんですよ。」

受付のお姉さんはまさかといった感じで話す。

「それではギルドの外に出しますね。」

勇輝がそう言ってカナに支えられながら外に出たのでギルドの職
員が2人ほど付いてきた。

ドアを開けて外に出ると手の前にかざして念じた。

すると、ところどころ血が固まっている巨大なイノシシの亡骸が現
れた。

ギルドの職員だけでなく通りすがりの街の人たちも皆驚いて軽い
パニックになっている。

「デカイ……、こんな奴を仕留めたのか…。」

「ゴイツは森の主クラスじゃないのか？」

職員が驚きの声を上げている。

いつのまにか野次馬がイノシシと勇輝たちを囲んでいた。

「とりあえず手続きをお願いします。早くゆつくりしたいですし。」

勇輝が呆然としている職員に言うとなんかははつとして中に入って
いった。

「カナさん、中に入りましょう。」

「はい。」

いつの間にか帽子をかぶっていたカナとギルドの中に入る。

「本当に丸ごとなんですね…。依頼達成おめでとございます…。」

受付のお姉さんは明らかに引いている。

「こちらがもともとの報酬とそれから特別報酬です。」

カウンターから二つの袋を出して置いた。片方は小さい。

「特別報酬ってどういう事ですか？」

「今回あなた方が討伐したのは推定Cランク以上の魔物だったのと牙だけでなく丸ごとを持つてきたことに対する報酬です。」

「…また情報ミスか…：：：ガバガバだなあ全く。とりあえず報酬が増えたからいいか。…」

「それからこの結果を踏まえてお二人をランクCに昇格と致します。」

「…ランクアップは嬉しいけどさっさと済ませてくれ。…」

そう思いながらもギルドカードを渡してその間に報酬の袋を受け取る。

小さな袋には金貨が3枚入っていた。

「すごいじゃないですか！金貨3枚ですよ！やりましたね。」

「…カナが大いに喜んでいいるということは結構すごいんだな。…」

そうこうしているうちにランクアップの手続きが終わったみたいなのですぐにギルドを後にした。

2人で街の中を歩いてしばらくしてすると勇輝が口を開いた。

「さて、この怪我はどうしようかな。」

「それだったらこの街の教会に腕のいい魔法使いがいると聞いたことがあります。」

「それじゃあ、教会に行こうか。」

目的地は決まったので再び歩き始める。

途中で食べ物いくらか買ったりして収納した。

「勇輝さん、あそこです！」

カナが指差す先に立派な石造りのそれらしい建物が建っていた。

大きな扉を開けると教会らしく沢山の椅子が並んでいて正面の奥には女神か何かと思われる石像があった。

すると奥から修道女が出てきた。

あまり若くはなさそうだが、とても優しそうで不思議な雰囲気をもとっている。

「あら、どうされたのですか？」

「ちよつと腕を怪我しまして…、ここに腕の立つ魔法使いがいると聞いたもので、治療を頼みに来ました。」

「そうだったのですか。それなら私が治療致しましょう。」

・・・えっ!?この人だったのか。・・・

「本当ですか！是非お願いします。」

2人は彼女の後について行き、聖堂横のベッドの並んだ部屋に入った。

・・・ここは病院のような機能もあるのか。・・・

「それではここに座ってください。・・・じつとしてくださいね。」

座った勇輝の左腕に両手をかざしてそういうと、優しい光が勇輝を包んだ。

だんだんと身体の痛みが引いていき、カナが消しきれなかった傷跡まで消えていった。

そのうち左手の感覚も少しずつ戻って来た。

「……これで大丈夫です。あなた自身の力が十分にあつたのでほとんど治せました。でもしばらくは安静にしてくださいね。」

「ありがとうございます！何かお礼を…。」

「何も要りませんよ。私は貴方の身体の治癒力を高めただけです。」

そう言つて左腕の固定具を外すと左腕は何もなかったかのように動いた。

「すごい…、私じゃ治せなかったのをこんな簡単に…。」

カナも目の前の奇跡に驚いている。

「あまり無理をなさらないようにしてくださいね。貴方達に神の祝福を。」

修道女は2人に向かって手を組んで祈りを込めた。

「ありがとうございます！」

2人は教会を後にした。

「私は宿に行きますがカナさんはどうしますか？」

「それでしたら私も一緒に行きますっ！まつ、まだ心配なので。」
「フンツ！という擬音語がつきそうな様子でカナが迫って来た。

「わっ、分かりました。」

その気迫に押されながらも軽い足取りで「猫の月」へと向かった。
すると宿の少し前で勇輝は声をかけられて横を向いた。

そこは昨日行った武器屋でファイが手を振っていた。

「アンタ昨日ジジイに会ったんだって？しかも交渉するとは驚いたぜ。なんかすごい楽しそうにしてたからちよつと引いたよ。」

「まあ、すごい興味を示していましたからね。」

「それで今朝ジジイがアンタに渡してくれって言ってコイツを渡してきたんだ。受け取ってくれよ。」

ファイがそう言うのと店の奥から3本の銃剣を持ってきた。

それを手にとって鞘から抜いてみると、しっかり刃が付いている。

「確かに受け取りました。ヘトスさんによろしく伝えてください。」

「おうよ。伝えとくぜ。そういえばその嬢ちゃんはどうしたんだ？」

ファイがそう言うときカナはびくつきとして勇輝の後ろに隠れた。

・・・人見知りかな。可愛い……………

「ああ、この子は依頼で一緒に来たんですよ。」

「そうかい、じゃあな。」

2人は店を出た。

療養

ファイに別れを告げて宿に2人は向かった。

扉を開けると小さなベルが鳴る。

「ハイハイー！宿屋「猫の月」ですー！…あれ？勇輝さんですか。お帰りなさい！今お母さんいないんですよねーつと……後ろの人は誰ですか？」

おばさんではなく娘が出てきた。

相変わらず元気だが、勇輝の後ろに隠れたカナのことが気になっているようだ。

「カナさん？悪い人じゃないから隠れないでください。」

優しく言うのとゆつくりと下を向いて杖を持っていない手で帽子を押さえながら勇輝の後ろから出てきた。

「うう、カナです…。よろしくお願いします…。」

…こりや完全に人見知りだな。娘さんみたいな陽気な人は最初はきついだろうなあ。ちよつと分かるな。…

勇輝も元の世界では同年代の陽気な女性は苦手だった。

なぜなら彼女らには無邪気さは無く、口を開けば他人の悪口やかからかうようなことばかりで勇輝はうんざりしていた。

…娘さんは悪い人じゃないんだけど、時間がかかるかな。…

「カナちゃんって言うんですね。魔法使いなんだ！どんなのが使えるの!？」

「ううー…。」

宿屋の娘は妹ができたかのように次々と話しかける。

カナはうつむき続けてちよつと可哀想に思えてきた。

…まずいな。ちよつと可愛いけど助けてあげるか。…

「ごめんなさい、カナさんは人見知りでするのが苦手みたいなんですよ。」

勇輝がカナの斜め前に入るようにして口を開いた。

「そうだったんですか。…カナちゃん、ごめんね。勇輝さん、お昼はここで食べますか？」

「はい、そうさせていただきます。あと、カナさんの分もお願ひします。」

「ハーイ！それじゃあ、食堂で待つててください。」

娘はそう言つて店の奥で行つた。

それから2人で食事を食べた。

今度はあつたかい食事だったが、おばさんではなく娘が作ったよう
でちよつとクセがあつた……マズイとは言つていない。

食事を終えた後は自分の部屋に入つたが、なぜかカナもついて来
た。

「あのー、カナさん？………休みますか？」

仕方ないのでカナも部屋に入れた。

「……あれ？これつて女の子を部屋に連れ込んでない？ーツヤバイ
！いや、僕は大丈夫、大丈夫。絶対何もしない！……

重大な事態に気がついたがもう既に遅く、自分の良心を信じるしか
ない。

「…カナさんはどうされるのですか？私はしばらくここで療養しま
す。」

出来るだけ動揺を悟られないように気持ちを落ち着かせて言つた。

「私は……勇輝さんのそばにいたいです。」

ちよつとうつむいて赤い顔をしながら呟くように答えた。

「えっ？」

驚きが口に出てしまつたが、もともと表情があまり作れない勇輝の
顔は変わらない……はず。

「ダメ……ですかあ？」

カナが少し顔を上げてこちらを見ながら頼りなさそうに聞いてき
た。

「……ダメだ、可愛すぎる。二次元ならともかく三次元でこれは耐
性がなさすぎる！だが、ここまで言うのを断ったら可哀想だよな。恩
返しに約束しちゃつたし……」

「………いいですよ。けど本当に何もありませんよ。」

「いいんです。私がそうしたいんです。」

「まさか、ここまで懐かれるとは……。本当にいいのか？……
勇輝は装備を全て外して、9mm拳銃のみを残して収納した。
拳銃は念のため枕の下に入れておく。」

「今までの疲れからそのままベッドに入り込む。」

「それじゃあ、好きにしてください。」

「はい。」

カナは椅子に座ってベッドに寝ている勇輝を見ている。

「……本当に大丈夫か？どうしてここまで……。……
考えても埒があかないので無理にでも目を閉じて眠ることにした。
しかし、疲労がたまっていたのですぐに眠りについた。」

勇輝が目を覚ますと何やら手に何かの感触があった。

それはほのかな温もりがあった。

「……なんだこの感触は!?!……」

勇輝はゆっくりと顔を向けるとそれはカナの手だった。

彼女はテーブルに突っ伏して眠っているようだが、勇輝の手をしつかり握っている。

腕時計をみると4時間くらいは眠っていたようだ。

身体の調子も悪くない。

勇輝の手を握っているカナの手を優しく払ってベッドから起きる。

「……よし、起きてないな。風邪を引かないようにしてやらないとな。……」

「ありがとう。」

カナの背中にゆっくりと毛布をかけるとローブの裾から栗色の尻尾がのぞいていて、時折揺れていた。

「……そういえばカナの後ろを見たことがなかったけど、こんな尻尾があったんだ。……可愛いな。モフりたいけど起こしちやいそうだから諦めよう。……」

「ちよつとだけ残念だった。」

名残惜しそうに振り返ってカナの背中を見て、勇輝は部屋を出た。

・・・そろそろ夕食の時間のはずだ。・・・

腕時計を見てそう思いながら食堂に行くと既に何人か来ていて食事が出るのを待っていた。

癖で人があまりいない席に座って待つこと数分で食事が運ばれ始めた。

「お待ちどおーさん！今日のメインはお母さん特製のイノシシの肉を煮込んだ香草煮だ！スパイスで臭みのない逸品だよ！」

宿屋の娘がそう言いながら皿を持ってくるとテーブルの所々で歓声が上がった。

・・・イノシシってもしかして・・・まさかね。けどみんなの反応を見るにかなりうまさうだ。・・・

勇輝の前にも皿が運ばれてきた。

スパイスでほんのりと赤くなったスープの中に大きなイノシシの肉や野菜がゴロゴロと入っている。

「いただきますー！」

勇輝は勢いよく食べ進めた。

・・・うますぎて箸が止まらない！……箸じゃないけど。・・・

この味が気に入った勇輝は滅多にしないお代わりをした。

「あの一、すいません。」

「ハーン！どうしたんですか？勇輝さん。」

お代わりを食べ終えて娘を呼んだ。

「この料理を一人分用意してくれませんか？部屋に持っていきたいのですが。」

「もちろんいいですよ。けど、食べ終わったら食器はすぐ持ってきてくださいね。」

「わかりました。ありがとうございます。」

勇輝は料理を持って部屋に音を出来るだけ立てないようにして帰った。

夕食の皿を持ってそつと部屋の扉を開けて中に入った。

明かりを点けていないので窓から入る月明かりだけが部屋の中を照らしている。

部屋の真ん中のテーブルと椅子には毛布を被ったカナの背中が寝息をたてながらすかに上下していた。

やましいことはないが抜き足差し足で歩いてテーブルの空いているスペースに持つてきた料理を置いた。

しかしこの判断は間違っていたかもしれない。

皿を置いた途端にカナの耳がピクツと動いた。

・・・ヤバイ・・・

「ううーん、スンスン……………」

カナの敏感な嗅覚が目の前の料理の香辛料の匂いに反応した。

そして目を覚ましてゆっくりと体を起こした。

「ふあゝゝ……………」

両手を上げて大きく伸びをしてあくびをする。

背中にかけていた毛布が落ちたのも気付いていない。

・・・まだ寝ぼけているみたいだな。彼女のためにもこっそり部屋を出よう。まだ間に合う。・・・

音を立てないようにスツと部屋を出てドアを少しだけ閉める。

「あれ？勇輝さん？……………これは…勇輝さん！」

ドアの向こうで様子を伺っているので料理と毛布のどちらに反応したのかはわからないが、勇輝がベッドにいないことは確実に気づいたようで不安そうな声を上げたのがわかった。

少ししてから勇輝はドアを音が聞こえるように開けて中に入った。

「勇輝さんっ！」

カナは振り向いて勇輝に飛びつくようにして抱きついた。

「ごめんなさい。また眠ってしまっていました…。目が覚めて勇輝さんがいなくなつてて…不安になりました。」

抱きついているので表情はわからないがローブの中の尻尾が動いているのは見ることができた。

「大きいですよ。とにかくあんなどころで寝てたら風邪を引きますよ。食事をもらつてきたので是非食べてください。今度の料理はと

でも美味しいですよ。」

カナは勇輝を離してテーブルの上の皿を見る。

「私のためにですか？…ありがとうございます！」

少し離れていてもカナの嗅覚は料理の匂いを捉えて、そのいい匂いに目を輝かせていた。

「いただきます！」

毛布を拾いながらカナを見ると美味しくそうに料理を食べていた。

尻尾もローブの中で揺れているようだ。

・・・可愛いな。でもこの後はどうするんだろ？・・・

勇輝はカナがこの後はどうするのか気になっていた。

「ごちそうさまでした！美味しくかったです。」

「それは良かったです。作った宿の人も喜びます。では私が食器を下に持って行きます。」

「いえっ！悪いですよ。私が持って行きます。」

「構いませんがああ娘さんのところですよ。」

「ふえ？うう……。」

やっぱり苦手なのかとても迷っている。

・・・ちよつと意地悪だったかな。・・・

「それじゃ私が持って行きますけどカナさんもついて来てください。」

「……はい！」

カナは一気に元気になった。

食器を持った勇輝の後ろにカナがぴったりとくっついて食堂へ向かう。

「すいませーん。食器を片付けに来ました。」

「ハイー！こつちで預かりまーす！」

恒例の娘が皿洗いの途中だったのか手をエプロンで拭きながら出てきた。

もれなくカナが後ろに隠れる。

「あれ、カナちゃんまだいたの？お母さんの料理どうだった？」

「お、美味しかったです。」

まだ怖がっているが返事はできた。

「そう、お母さんも喜ぶよ。」

勇輝は部屋に戻ろうと後ろを向く。

「あつ、勇輝さん！ちよつといいですか？」

娘に呼びかけられて振り返る。

「ちよつと勇輝さんに話したいことがあるんですがね…。カナちゃんもお話する？」

「うう……。」

「カナさんは先に部屋に戻っておいてください。すぐに戻りますから。」

「…はい。」

カナは小走りで部屋に戻っていった。

「それじゃあお話ししましょうか。」

勇輝が娘と向き合おうと娘がテーブルに座った。

獣人

「それでお話して何ですか?……えーと……。」

「ああ、私はエリナよ。……話つてのはカナちゃんのことなの。」

勇輝はエリナの座っているテーブルの前に座る。

「やっぱりそうでしたか。」

「勇輝さんが先に部屋に戻してくれたから助かりましたよ。昼は気づかなかつたんですけどカナちゃんって、獣人だったんですね……。」

「それがどうかしたんですか?。」

エリナの言い方に少し疑念を抱いて聞き返した。

「夕方にあのイノシシの肉を仕入れた時に聞いたんですよ。獣人の少女とボロボロの緑色の変な格好の青年がギルドに来たって話を。あれって勇輝さんのことですよ?今はもう怪我をしてないみたいですよ。」

「……やっぱり噂になってたのか。しかもあのイノシシの肉って僕らが仕留めたヤツだったのか。……。」

「確かにその話は私たちのことです。」

「やっぱりそうだったのね。なら質問だけど、そのあとカナちゃんがずつとくつついてたりしてなかった?。」

「……:そういうえば昼食を食べた後に寝たんですけれど、その時もさつきまでずつとつきつきりで側にいました。まあ、私が起きた時には寝ちやつてたんですけれど。」

「あちやー、やっぱり……。」

エリナが片手を額に当てて目を閉じて上を向く。

「えっ、それが何か問題でもあるんですか!?!」

驚いた様子で勇輝は聞く。

「狼とかがって群れの仲間が怪我をした時は治るまでずっと一緒にいるって知ってる?。」

「……:そういうえばなんかのケモミミっ子がヒロインのアニメでそんなこと言ってたのを聞いたことあるな。……。」

「ええ、私も聞いたことはありますよ。……もしかして！」

「そういうことよ。カナちゃんの行動もそれと変わらないの。つまり勇輝さんはカナちゃんの大事な人ってことよ。ただ仲が良いだけじゃここまでではないわ。」

「私がカナさんの……………」

「……つまりは好きな人ってことか!? 会って1日くらいなのに! 何か深いわけでもあるのか? ……」

「獣人の娘はそうならずと一途よ。けど、それで捨てられて心に傷を負う子もたくさんいるの。」

エリナは悲しそうな顔をして思い出すように話した。

「……エリナさんの友達かだれかがそうだったのかな。……」

「カナちゃんはまだ若いわ。それにとつてもカワイイから、どうかあの子のことは捨てないであげて……………」

エリナが勇輝の手を握ってすがるように言った。

「私もカナさんの悲しむ顔は見たくありません! 私は絶対にカナさんを捨てたりなんかしません! それに約束もしましたから……………」

勇輝は固く誓った。

するとエリナは微笑んで勇輝の手を離した。

「良かった。じゃあ私からも約束よ。あの子のことを捨てないでね。」

「はい。約束です。」

「……捨てない…か。絶対にそんなことするもんか! ……」

そう決意を新たにしてカナの待つ部屋に戻った。

「すいません。カナさん、お待たせしました。」

ドアを開けながら申し訳なさそうに勇輝が部屋に入る。

「あつー勇輝さん。何を話してたんですか?」

勇輝の姿を見て嬉しそうに尋ねてきた。

「……エリナさんとあんな話をしていたって言えないよな。……」

「ああ、カナさんの部屋のことですよ。今は隣の部屋も空いてるから使っているということでしたよ。」

勇輝は適当に話の内容を誤魔化した。

・・・こういう時に無表情が役に立つんだよな。でも、騙してるよ
うでちよつと罪悪感を感じるなあ。・・・

「私は……………勇輝さんのそばに居たい…です。」

「なツ!?カナさん!？」

この部屋は勇輝一人で取っているので勿論ベッドは一つしかなく、
サイズもそんなに大きくない。

「勇輝さんがイヤなら…私はテーブルと椅子で構いません。」

カナの決意は固いようで意見を変えそうにない。

・・・そんなところで寝たら今度こそ本当に風邪を引いちやうじゃ
ないか!そんなことはさせたくない。……いつたいどうすれば
…。

勇輝はしばらく葛藤を繰り返したが、単純な答えにたどり着いた。

・・・もう一緒に寝ればいい!絶対に、絶対に手を出さない!これ
でみんな幸せなはず!・・・

夜が更けたからか勇輝の考えは少しブツ飛んでいた。

「そんなところで寝たら風邪ひきますよ。……はあ、私のベッドで寝
てください。」

・・・ついに言ってしまったな。持ってくれ!僕の自制心!・・・
「本当にいいんですか…?」

「あなたが無理をして風邪を引いたら私が悲しみます。」

勇輝がそう言った途端にカナの顔が真っ赤になった。

「私はもう寝ます。まだちよつと疲れているので。私のことは気にし
ないでください。ちゃんと毛布を被ってくださいね。」

赤くなつてうつむいたままのカナを尻目にベッドに寝そべる。

「おやすみなさい。カナさん。」

「お、おやすみなさい…。」

どうやらまだ恥ずかしいようで椅子の上で固まっている。

勇輝は疲れと眠気に抗えず、すぐに眠った。

それからしばらくしてカナはなんとか立ち直っておそるおそる
ベッドに入った。

「勇輝さんの匂いがする…。」

カナが眠りについたところで勇輝はかろうじて目を覚まして、カナの半分しかかかっていない毛布を見た。

勇輝の右側にカナは丸まっているので自分の左側の毛布を引っ張ってカナにかけた。

これで勇輝の左腕はむき出しになってしまったが、それでも良かった。

そして今度こそ二人とも眠りについた。

朝日が昇り、窓から太陽の光が差し込む。

士官学校で起床ラッパに慣れきっている勇輝は6時の少し前に目覚めた。

ただ右腕に違和感を感じる。

・・・そうだ！カナさんは!?!・・・

勇輝が顔を右に向けるとカナが勇輝の右手に抱きついて寝ていた。しかもその寝顔は勇輝の目の前にある。

・・・ツ！声を出すところだった・・・危ない危ない。本当に可愛いな。あつ、まさか手を出してないよね…………。いや、まさかね…………。

記憶を整理してそれらしいものはなかったので一安心する。

しかし、カナが右腕にがっしりと組みついているので動けない。

すると、カナが右腕に顔をスリスリと擦りつけた。

・・・ヤバイ！可愛い!?!…………耐えろ、耐えろ…………

どちらにしろ今日は療養で予定はないのでもう少し寝ることにした。

その時に左腕がかなり冷えてしまっていることに気がついた。

・・・まあ、これくらい気にしないさ。寒くなんかない…………

勇輝は士官学校では絶対にやりたくてもできない二度寝を決行した。

再び勇輝は目を覚ました。左腕の時計を見ると1時間少し寝ていたようだ。

相変わらず右手には………感触がない。

おそるおそるチラツツと横を見るとカナは勇輝の腕の中………体にくっついていた。

………ツツ!?腕だけじゃなく!?!?

獣人ということもあるからか、カナはとても暖かい。

そして勇輝はフリーになった右手でカナの頭を撫でた。

………この耳の感触と髪の毛のサラサラがたまらないな。………

「うーん。」

もう少し軽く撫でるべきだったようでカナがゆつくりと目を開けてしまった。

「………勇輝………さん?」

「おはようございます。」

やっと状況を理解したようでその顔は一気に赤く染まった。

「おはよう………ございます………」

二人はゆつくりと起き上がった。

カナはまだもじもじしている。

耳がピクピク動いているのがまた可愛い。

「朝ごはんを食べましょうか?」

「………はい!」

二人は食堂に向かって部屋を出た。

「みなさん、おはようございますー!」

エリナが料理の乗った皿を配っている。

………エリナさん、いつも元気だなあ。あの若さでよくやるよ。………

「あつ、勇輝さんおはようございますー!カナちゃんもおはよう!」

「おはようございます………」

エリナが持つてきた料理を軽く平らげて席を立つ。

「ぐちそうさまでした。」

「どうもー………そうだ、カナちゃん、ちよつといい?」

エリナはカナに近づくと何か耳打ちをした。

隣の勇輝には全く聞こえない。

だんだんとカナの顔が赤くなっていく。

・・・オイオイ、何を吹き込んでるんだ？・・・

耳打ちが終わった後エリナは勇輝にサムズアップをした。

・・・イタズラではないよな。いったい何を話したのやら。・・・
考えても分からないので、まだ顔が赤いカナを連れて部屋に戻った。

部屋に戻ると勇輝は特にやることもなかったのでM1と64式の分解整備を始めた。

一通りの整備道具もあつたのでやることにしたが、89式は扱ったことがないので今回は諦める。

・・・もう一度異次元空間を探してみるか。分解手順の説明書かなにかがあるかも。・・・

M1も64式も滅多にない射撃で銃身内が黒く汚れていた。

M1に至っては銃剣で戦つたので血が付いている。

外観の血や土の汚れを落とし、内部の金属部品は汚れを落としてから油を塗布して錆を防ぐ。

一通りの整備を終えて2丁の銃を収納する。

その一連の動作をカナはずっと見ていた。

「銃つてあんなにたくさん部品があるんですね。」

「はい、その組み合わせをしっかりと叩き込まれましたよ。」

若干の苦笑いで返す。

「私は耳や鼻が敏感なのでちよつと苦手です。」

勇輝はイノシシと戦つた時の銃の音に怯えて震えていたカナの姿を思い出す。

「でも、勇輝さんのそばで戦えるように頑張つて慣れます！」

今のカナは気迫に満ち溢れていた。

「カナさん・・・カナさんはどうして私なんかと一緒にいたいのですか？」

勇輝はずっと気になっていたことを聞くことにした。

二人の間に静寂が訪れる。

しばらくしてカナが口を開いた。

「私がいうのもなんですが…、勇輝さんを放っておけないような気がしたんです。優しく、私のために一人で飛び出して…勇輝さんが一人で行ってしまうのが不思議と嫌で耐えられなかったんです。」

そう言うカナの顔はどこか清々しい。

たぶんこれがカナの本心だろう。

「そうだったんですか……。私もまだまだですね。カナさんのような人を不安にさせてしまうなんて。」

勇輝はなんとなく気まずく感じて後ろを向いて窓のそばに立った。すると、後ろから不意にカナが抱きついてきた。

「ッ!?」

急だったので驚いて声が出ない。

「勇輝さん、私は勇輝さんがいないと不安です。…けど、それで勇輝さんが悩んでしまうのなら我慢します。」

「……………」

カナが背中で泣いているのを感じてなにも言わず振り返って正面からカナを抱きしめた。

「我慢しないでいいんですよ。こんなにも私のことを思ってくれる人を私は悲しませない!」

ゆっくりだが、それでも語気を強めて言った。

カナが声を上げて泣き始めた。

勇輝は時折頭を撫でて抱きしめた。

新たな剣

「もう落ち着きましたか?」

「……はい。」

泣いていたカナは落ち着きを取り戻し、勇輝とテーブルを挟んで椅子に座っている。

「ちよつとこれからの話をしましょう。」

「えっ? どういうことですか?」

「この宿の滞在時間もあまりないですよ。それなのでそろそろ旅に出ようと思っているんです。」

「……カナさんはどうするのかな?……そういえばカナさんのことをあまり知らないな。……」

「そういえば、カナさんのご家族はどうされたのですか?」

勇輝が質問するとカナは暗い顔をした。

「……しまった。これは失敗だったか?……」

勇輝は質問したことを後悔した。

「それが……なにも分からないんです。冒険者になる少し前以前のことは何も覚えていないんです。気がついたらギルドに行つて冒険者になってました。……親も故郷も友達も、なにもかも……無いんです。」

カナは暗い顔のまま俯く。

「記憶喪失……! そうか……。ごめんなさい。辛いことを話させてしまった。」

「……そういうことだったのか。だから他人を求めていたのか。……今までのカナの行動にもある程度説明がつく。」

「いいんです。今は勇輝さんがいますから。」

カナが顔を上げて微笑んだ。

「よしっ! 決めました。」

カナの顔を見て勇輝は決心した。

「あなたの記憶を取り戻す旅をします!」

「勇輝さん!?! それは……」

思わぬ答えにカナは目を見開いてあっけにとられている。

「なので、私から言わせてもらいます。……………一緒に旅に出ようっ！」
……言っちゃったなあ。なんかプロポーズみたいになっちゃったけど、後悔は無い！どうせ旅する予定だったし。仲間がいる旅は楽しそうだ。……

後悔はしていないが勇輝は恥ずかしさを必死に堪えて顔が熱くなってきた。

「……………はい！一緒に行きましょう！」

きれいな緑色の瞳に涙を浮かべながらも笑顔で応えた。

「そうと決まれば、いろいろ準備ですね。特に食料や水を集めなければ。」

「でも、馬車もないのでそんなに多くの荷物は持てないですよ。」

「大丈夫です。私の魔法で荷物はなんとかなります。」

勇輝がそう言って以前買って収納した屋台の食べ物を取り出した。

どれも買った時の状態だけでなく温度まで保たれている。

……これは思ってもなかったな。収納したものの状態が固定されるのか？

温度までキープされてるとは……………。

そんな驚きを隠して食べ物のカナに分けた。

「あつたかい…。これで食料と水を保存するんですね。」

「そういうことです。食べ終わったら買い出しに行きましょう。」

二人で食べているとドアがノックされた。

「勇輝さん。いますか？」

どうやらエリナのようなようだ。

「いますよ。どうかしましたか？」

扉を開けて答える。

「近くで武器屋をやってる幼馴染のファイっていうやつがいるんだけど、そいつが勇輝さんに用があるって。あいつと知り合いなの？」

……ファイさんが来たということはアレができたのか？……………ん？

エリナさんとファイさんって幼馴染だったの!？……………

ちよつとした衝撃の事実を知ったが冷静を装う。

「はい、ヘトスさんの仲介になっていただきました。」

「えっ！あの頑固なジイさんと!?!」

どうやらヘトスさんは近所で結構有名らしい。

「ええ、ちよつと頼んでいたものがあって、出来上がったらファイさんに持ってきてもらうことになってたんです。」

勇輝はワクワクしながら階段を降りていった。

エリナを置いて軽やかな足取りで入り口に向かう。

一人で飛び出してしまったと思っていたが、後ろにはカナがぴつたりくっついていた。

二人が一階に降りると、受付の近くの椅子にファイが布に包まれた細長い荷物を持って座っていた。

「おう！ジジイからの届けもんだぜ！受けとんなっ！」

ファイがそう言って勇輝に荷物を手渡した。

勇輝が包んでいた布を解くと部活で見慣れたサーベルが現れた。

鞘に施されていた桜や士官学校のエンブレムの装飾も再現されている。

しかし、刀身は重く、模造刀のような鏡つぼい銀色から少し鈍い色になり、本物の武器として生まれ変わっていた。

「おおー、ジジイもいいもん作るじゃねーか。スゲー気合い入ってるな。アンタ、ジジイに何したらこんなモン作ってもらえるんだ？」

ファイがサーベルを見て驚きの声を上げる。

・・・ファイさんが、ここまでいうのならかなりの業物みたいだな。ヘトスさんに頼んで正解だった。・・・

「勇輝さん、この剣オシャレでかっこいいですね。」

後ろからカナがひよっこり顔を出してサーベルを見る。

「おつ、嬢ちゃんコイツの連れだったのか。この前は偶然後ろにいただけだと思ってたぜ。」

ファイがカナを見て声をかけると、カナはまた引っ込んだ。

「…………オレ、何かしたか？」

露骨に避けられてファイはちよつとショックを受けていた。

「ああ、この人はちよつと人見知りなんです。気にしないでください。」

勇輝がフォローを入れる。

「勇輝さーん、置いてかないでくださいよー。」

エリナが遅れてやって来る。

「エ…エリナ…、よう。じゃあ、オレ帰るわ。」

エリナを見てファイは慌てた様子で帰った。

「あれー？ファイ帰っちゃった。」

エリナは不思議そうにしている。

・・・ファイさん、エリナさんとなんかあったのかな？でもエリナさんはなんとも思ってたな。・・・

勇輝はファイにヘトスさんにお礼を伝えることを頼んで見送った。

勇輝とカナは再び部屋に戻っていた。

「カナさん、ちよつとこの剣の試しに付き合ってくださいませんか？」

「はい、お手伝いしますー！」

カナは嬉しそうに了承する。

・・・本当に嬉しそうにしてるなあ。ちよつと癒される。・・・
「なんか手頃な依頼を探しますか。ちよつと準備します。」

勇輝は弾帯の左側に再びサーベルを下げた。

ダンプポーチはあまり使うことがなかったので用途に富んだポーチに変えた。

開きっぱなしのダンプポーチより容量が減るが、ちゃんと閉じられる方が使い勝手がいいことがわかった。

・・・9mm拳銃の空になったマガジンは適当に空いてるポケットに入れるか、収納すればいいからな。・・・

「準備できました。それでは行きましょう。」

「はいー！」

二人はギルドに向かった。

「今度はコボルト3体か…：弓は使わないけどゴブリンより大きくて

力が強いのか。」

「今度こそ何かあったらわたしが援護します！」

二人はギルドでDランクの依頼のコボルト退治を受けて、馬車に乗っている。

今度は想定外は無いと信じていたい……。

「勇輝さん、接近戦になるので無理はしないで下さいね。」

「わかりました。もしもの時は銃を使います。また怖がらせてしまうかもしれないので、先に謝っておきます。」

再び震えていたカナの姿を思い出す。

……できれば銃は使いたくない。カナを怖がらせることなんかしたくない。絶対にサーベルだけでカタをつける……。

「そんな、謝らないでください！私のことはいいですから……。」

カナはぎこちない表情で言った。

……きつとカナは無理して言ってる。そんな我慢はさせないぞ。……

勇輝は固く決心した。

馬車を降りて二人はコボルトが出没するエリアへと歩き始める。

馬車でそのまま進んで危険に晒すわけにはいかないからだ。

周囲はあまり草が生えていない溪谷地帯で起伏があり、大きな岩もたくさんある。

隠れ場所には苦労しないのでどこから襲われるかわからない。

「カナさん、後ろは任せました。」

「わかりました！」

勇輝はいつでもサーベルを抜けるようにしながら進む。

後ろにはカナが杖を構えて耳を立てて周囲を警戒してくれている。

「ッ！勇輝さん！あの岩の影から来ますっ！」

カナが優れた聴覚で襲撃を察知する。

その後岩の影から二足歩行のオオカミのような人型の魔物が2体剣を振りかざしながら出て来た。

グルグル……

・・・威嚇するように唸っているとところからみてどうやらコイツがコボルトで間違いないようだな。あと1体どこかにいるはずだ。・・・
「カナさん！奥のヤツを任せます！倒せなくてもいいので近づけないでください。それから、あと1体いるはずなので注意を！」

「わかりました！任せてください！」

勇輝はサーベルを抜き放つ。

その刀身は鞘の装飾とうって変わって鈍く光り輝き、重厚感がある。

勇輝が剣を構えるとコボルトが横に並んで向かってきた。

2体で同時に仕掛けるつもりのようなのだ。

「カナさん！」

「氷よ、切り裂け！」

カナが杖を向けると先端が光り輝き氷のツブテが生成された。

それはコボルトに向かって射出された。

「ーッ!？」

コボルトは剣を振り回して氷を弾こうとするが、数が多くて捌ききれず身体に傷をいくつも作る。

しかし、それは片方だけで、もう片方には足を止めない程度しか飛んでこなかった。

2体の足並みは乱れ、氷の粒の攻撃を集中されたコボルトはその場に止まってしまった。

もう1体は進み続けて勇輝に迫る。

「カナさん、上出来です！」

勇輝はサーベルを握りしめて走り出した。

コボルトが上段から剣を振り下ろす前に勇輝のサーベルの横一閃が早く届いた。

胸下を横に深く切り込まれ、コボルトは血を吹き出して後ろに倒れた。

・・・なんて切れ味だ…、こんなあっさり切れるなんて…。・・・
「もう大丈夫です！」

勇輝がそう言うのとカナが攻撃を止めて、コボルトは勇輝に斜め上か

ら斬りかかる。

冷静に攻撃を予測していた勇輝はサーベルを両手持ちにして受け止める。

コボルトは力に任せて押し込もうとしてくる。

「ハアアアアッ！」

勇輝が雄叫びを上げて剣を上弾く。

押し戻されて隙ができたコボルトを左の肩口から斜めに斬り下ろした。

斬られたコボルトは1体目よりも勢いよく血飛沫を上げて倒れた。

「よしっ！」

勇輝は自分の剣で始めて勝利したことに喜んで油断していた。

「勇輝さん！後ろ！」

カナが叫んで勇輝が振り返ったらコボルトが飛び出してきた。

・・・こんな近くに隠れていたのか！油断した！・・・

とつさに防御の構えを取ったが甘かったようで、コボルトの攻撃でサーベルが弾き飛ばされた。

「しまった！」

もう一度剣が振られる。

勇輝はかろうじて後方に身を引いてかわし、9mm拳銃に手をかけようとした。

・・・クソツ！魔法じゃ間に合わない！自分の決心も守れないのか僕は！・・・

心の中の迷いが9mm拳銃をホルスターから抜くのを一瞬ためらわせた。

その一瞬は戦いにおいて致命的な隙となり、コボルトの攻撃が迫ってきた。

・・・斬られるっ！・・・

勇輝は思わず目を閉じた。

「勇輝さんに手を出すなー!!」

カナの声が聞こえて目を開けると拳くらいの大きさの氷の塊がコボルトの腕を直撃して握られていた剣を弾き飛ばした。

コボルトは痛みにも悶えている。

「今だ！破道の四、白雷！」

指をコボルトに向けて唱えると白い閃光が走り、コボルトの心臓を貫いた。

胸に小さな穴を開けられてコボルトはしばらく立ち尽くした後、膝をついて倒れ息絶えた。

「……助かった。」

勇輝はカナを見るとまだ興奮状態のようで、息を荒げて杖を向けている。

時折り見える犬歯は普通の人よりも長く鋭い。

「もう終わったよ。カナさん……ありがとう。」

勇輝はカナに近づいて小さな両肩に手を置いて落ち着かせる。

少しずつ呼吸がゆっくりになり、肩の力が抜けたのか杖を下ろした。

「勇輝さん……。」

カナが落ち着いたのを確認して勇輝は落ちているサーベルを拾って納刀する。

「帰りましょう。」

そう言ってカナを連れて溪谷を後にした。

決闘

勇輝とカナは街へと向かう馬車に乗っていた。

勇輝は落ち着いているが、カナはいまだに周囲をキョロキョロと見たりして落ち着きがない。

「カナさん、先程は助かりました。あの時私は確実に斬られると覚悟していましたが、カナさんのお陰で無事ですみました。」

カナの正面を向いて頭を下げる。

「僕はまだまだ未熟です。一時の気の迷いで危機に陥ってしまいました。これからあなたと旅に出ても、危険な目に遭わせてしまうかもしれません…。」

カナは驚いた様子で聞いていた。

「そんなことありません！だって…勇輝さんはあの時私に気を遣って銃を使うのを躊躇ったんですよね？それは…つまり…私が勇輝さんの足手まといになっっているんじゃないや…。」

カナが最後まで言おうとしたが勇輝に頭を撫でられて何も言えなかった。

「そんなことを言わないください。すべて僕の覚悟が足りなかったことが原因なんです。」

「…自分はウジウジ言ってるのに…、卑怯にも程があるよな。つくづく救えないヤツだな、僕は…。」

勇輝が手を下ろす。

「僕はカナさんを守るようにもつと強くなります。」

カナを真っ直ぐに見てそう言う勇輝の目は揺らぎなかった。

「勇輝さん…。」

二人を乗せた馬車は街に入った。

二人はギルドの扉を開けて中に入る。

受付のお姉さんに依頼達成の報告をする。

「この前ボロボロだったのが嘘のようですね。……これが報酬です。」
「ありがとうございます。」

銀貨少しと銅貨が入った袋を受け取ってギルドを後にしようとする。

「兄ちゃん、ちよつと待ちな。」

テーブルに座っていたグループの一人が勇輝に声をかける。

「随分と立派な剣を持つてるみたいだが、使いこなせてんのか？オレには飾りのように見えるな。」

身軽さを重視した鎧を着た騎士風の男が勇輝のサーベルを指差して言った。

・・・結構痛いところを突いてくるな。何も言えない。・・・

「確かに私は未熟です。ですが、鍛錬して使いこなせてみせます。」

勇輝は静かに言い放った。

カナは勇輝の後ろにだつて男を睨んでいる。

「そうまでいうのなら、オレと決闘しな。お前がどれくらい未熟か教えてやる。」

男が立ち上がって勇輝の前に歩き出して言った。

男はそこまで身体が大きいわけではないが引き締まっっていて身長は勇輝より頭一つ高い。

「判りました。受けて立ちます。」

少し見上げるように言つて承諾した。

「勇輝さん!？」

カナは心配そうな顔を向けている。

・・・どう見ても不安だよなあ。実際僕も自信ないや。けど、逃げるわけにもいかない。・・・

男が受付のお姉さんに何か話すと勇輝を呼んでギルドの奥へと向かった。

カナは一瞬立ちっぱなしだったが、はつとして勇輝の後についていった。

ギルドの奥には階段があり、地下へとつながっていた。

見たところかなり広い空間が広がっている。

確かにここなら決闘だけでなく色々な練習もできそうだ。

「こんな空間があつたんですね。」
ギルドのお姉さんにそう言う。

「ここはもともとSランクへの昇級試験をするためにあるんですけど、そう滅多に使われないので魔法などの練習に使ったり、今回みたいなことにも使われません。」

カナと受付のお姉さんを残して勇輝と男は広間の真ん中へと歩いていった。

二人が向かい合つて立ち止まる。

離れたところからカナとお姉さん以外にも上にいた人たちが見物に来ていた。

「オレの名はガーラだ。最初に言つとくが、魔法も飛び道具もナシだ。剣だけで、殺すつもりで来い。」

「判りました。勇輝です。未熟なので本気で行きますよ。」

勇輝は拳銃をホルスターごと収納し、余計なポーチ類も収納した。

二人は剣を抜いて構える。

ガーラの剣は真つ直ぐで両刃の両手剣だが、刀身の幅はそんなに広くないので一般的なロングソードよりは取り回しが良さそうだ。

「それじゃ、行くぞー！」

ガーラが素早く距離を詰めると両手で斜めに切り上げてきた。

勇輝はぎこちなく両手でサーベルを握り、上段から振り下ろして抑え込んだ。

「どうした？軽くてこんなんじゃ話にならねーぞー！」

上から押さえて有利なはずなのに勇輝の剣は押されて始め、ついにガーラに振り払われてしまった。

「ーッ！なっ！」

「片手で使う剣を両手で握つてもたいして変わらねーよっ！」

勇輝は後ろに下がって体勢を立て直す。

「オラッー！」

今度はガーラの剣は上から振り下ろされた。

左手を刀身に添えて両手で受け止める。

「そんなんで止められると思ってんのか？」

少しずつ押し込まれてついにガーラの剣が勇輝の左肩に触れて刃が食い込み始めた。

「そんなんで嬢ちゃんを護れんのか？」

痛みに歯をくいしばりながら肩を見ると少しずつ血が滲んでODの作業着に赤黒いシミが広がり始めている。

その向こうにはカナの姿が見えた。

遠目でもひどく動揺しているのがわかる。

「クソーッ！」

勇輝は踏ん張っていた足に力を込めてジャンプするようにして前に飛び出した。

刃がさらに肩に食い込んだが、ガーラに体当たりをすることができた。

ガーラは後ろへ下がり、その隙に勇輝も距離を取った。

痛みを堪えて肩を押さえている。

「どうした？ さつきからやられてばかりだぞ。 さつきと来いよー！」

「クツ…言われなくても！」

勇輝はサーベルを構えて走り出す。

「ハアアッ！」

大振りで横に斬りかかるがガーラも剣を振り上げて勇輝は身体ごと振り払われて吹っ飛んだ。

「甘すぎるんだよ。かわすべきものと受け止めるものも区別出来ず、冷静さを欠いた攻撃、どれも全くなっていない！」

吹っ飛ばされた勇輝は背中から地面に着き、苦痛に顔を歪ませる。

…駄目だ…経験が全く違う。けど、絶対に一太刀入れる！…

勇輝はよろめきながらも立ち上がり、サーベルを構えた。

「どうした？ 来ないのか？ それならこっちから行くぜ！」

…よく見るんだ。剣が通る場所、向き、力のベクトルを…

恐怖に負けそうになりながらも、ガーラの剣から目を離さない。

ガーラは斜め上から再び左肩を狙って振り下ろしてきた。

「ッ！」

勇輝はサーベルの剣先を下に向けて防御の姿勢を取ったが、足は強く踏ん張らずにいつでも動けるようにしている。

ガーラの剣がサーベルの刀身に触れるがその勢いは殺されず、刀身に沿って直撃コースから外れて勇輝の左を掠めた。

「これでッー」

がら空きのガーラに向けて手首を返してサーベルを上段から振り下ろしにかかる。

「よくいなしたけど、まだまだだ！」

サーベルがガーラを捉える前にシヨルダータックルを受けて勇輝の身体が浮いた。

「またもや背中から地面に着いて大の字になった。」

「勝負ありだな。さっきの動き…、センスは認めるが、基本がなつてねー。」

「……そうですね。完敗です…。」

決闘は勇輝の完敗で幕を閉じた。

「お前、あそこの嬢ちゃんを護りたいんだろ？強くなりたいか？」

剣を収めたガーラが勇輝に近づく。

「強く…なりたいです。護れるように…。」

勇輝は倒れたまま痛みを堪えて呟く。

「オレが鍛えてやる。いつまでもビギナーズラックは通用しないからな。」

「えっ…？」

勇輝は驚いてガーラを見上げる。

「勇輝さーん！大丈夫ですか?!いい、いま治します!」

カナが泣きそうな顔で駆け寄って肩の傷を治療する。

遅れて受付のお姉さんも歩いてくる。

「ガーラさんも相変わらずですね。もうちょっと手加減してください。」

お姉さんが呆れたようにガーラに言う。

「それなんだが、またしばらくここを使わせてくれ。」

ガーラがお姉さんにそういうとお姉さんは微笑みながらため息をついた。

「本当に物好きですね。ほどほどにしてくださいよ。」
毎度のことといった感じで了承する。

勇輝は治療を終えて体を起こしてサーベルを収める。

ガーラが勇輝の方に振り向いてニヤリと笑う。

それを見てカナが勇輝を守るかのように身を寄せてガーラを睨む。

「これからお前のことを鍛える。いつておくがオレはかなりスパルタだぞ。」

「ハイッ！よろしくお願いします！」

精一杯の返事をした。

「まあ、今日のところはゆっくり休みな。明日またここに来い。」

そう言っただけでガーラは立ち去り、見物人も帰っていった。

「あの人がいつもあんな感じで新人の面倒をよく見てくれるんですよ。ちよつと怖そうですけど、結構優しいんですよ。」

受付のお姉さんが勇輝達に楽しそうに話した。

勇輝はカナの手を取り立ち上がると砂を払ってギルドを出た。

ギルドを出た二人は街で旅に必要な物を買出しにいった。

「僕の魔法ならそのまま保存できますけど、念のため保存が効くものも用意しておきましょう。」

「はい。私もある程度は携帯しておきます。」

屋台で色々な食べ物を買っては収納し、今度は食料品店で野菜や果物、調味料を買った。

その後、干し肉などの保存食も買った。

食材もだが、なんといつでも水を大量に保存できるのはかなり便利だ。

「そういえば一応服なども買っておきますか。カナさんも同じローブばかりでは辛いでしょう。私も毎回変な格好とは言われたくないですし。」

・・・でも、買った服は街中でだけ着ることにしよう。制服とかを

着なくなったら元の世界の自分を完全に見失いそうだし。・・・

カナがとても恥ずかしそうに顔を赤くする。

「わたしは…いいですよ。このままでも…。」

カナは遠慮するが勇輝にはなんとなく我慢しているのがわかるようになつていたので諦めない。

・・・ちよつとアプローチを変えてみるか。僕も恥ずかしいけど・・・。

「いやあ、僕は違う服を着たカナさんも見てみたいですね。ははっ……。」

・・・なんとか言い切ったけど、めちゃくちゃ恥ずかしいな。・・・

「ッ!?うう……。」

言われたことに驚いてもじもじしている。

だが、どこか嬉しそうだ。

「はい…。行きましょう。」

二人は服を売っている店を探して中に入った。

買い物

「どれにしようかなー。個人的にはためく感じがいいなー。」
もれなく厨二病な勇輝は服屋で自分のアンテナに引っかかる服を探していた。

カナは少し離れた女性服のエリアで店員に話しかけられておどおどしている。

・・・見た目も重要だけど、一応は普段着になるから着心地も気にしないと。麻はザラザラして苦手だ。・・・

色々な服を見て迷っているところある服が目飛び込んできた。

それはなんかのRPGとかで出てきそうな旅人の服といった感じで、それに加えて裾などがゆつたりしていて風が吹いたらはためきそうである。

・・・なんか吟遊詩人みたいだなあ。けど一応旅人だからこんな感じの方がいいかな。・・・

「すいません、これください。」

近くの店員に言って購入する。

・・・意外と高かったな……。まあそれなりに立派だったからな。そういえばカナさんはどうなったかな？・・・

勇輝は周りを見回すとカナはまだ迷っているみたいだった。

「カナさん、どうですか？何か気に入っているものはありましたか？」

「ひゃい!？」

後ろから声をかけられてカナはビクツとする。

「勇輝さん…びっくりしました…。」

恥ずかしそうにうつむいている。

「どの服もきれいで私なんか似合わないですよ…。」

「そんなことないですよ。試しに何か着てみたらどうですか？」

「えっ!？ちよつとそれは…：…わかりました…。」

顔を赤く染めて何着か服を持って試着室に向かう。

・・・なんだかんだで色々着るんじゃないか。楽しみななあ。・・・
試着室仕切りの前でワクワクしながら待つ勇輝を店員が微笑まし

くみていた。

兄妹だと思われているんだろう……たぶん。

「勇輝さん、準備できました。」

そう言っただけの中からカナが出てきた。

その格好はいかにも町娘と言った感じで露出は控えめで、尻尾を意識しているのかスカートはかなり長い。

それでも今までローブで体のラインがわからなかったが、今はスタイルの良さがはつきりとわかる。

小さな肩にきれいにくびれた腰、そして胸は……意外と大きかった。

「……あれ？思ったよりもデカイ……。獣人からかわかんないけど16でこれか……。？異世界の常識はうちの世界とは違うな。……」

「……似合ってますか……？」

恥ずかしそうに顔を赤くしながら自信なさげに聞いてくる。

「……………ああ！いいと思うよ。」

しばし見とれていて返答が遅れてしまった。

その返答を聞いてカナは今にも蒸気を上げそうなくらい真っ赤になった。

「つ……次行きますー！」

逃げるように仕切りの中に隠れていった。

この後数回にわたって同じようなことを繰り返したが、結局は最初の服に決まり、ほかにパジャマっぽい服も買った。

その後タオルがわりの適当な布を何枚か買った。

「そういうえば獣人の人たちって全く見かけないですね。」

勇輝が街中を歩きながらカナに言った。

「えーと、いるにはいるんですけどみんな耳や尻尾を隠してるんです。さっきの屋台の人もそうでしたよ。」

「……えっ？そうだったの？全く気づかなかった。……」

「どうして隠れているんですか？」

不躰に尋ねると、カナは周囲を見渡してひっそりと耳打ちする。

「今は種族間での仲が険悪になってて私たちはこうするしかないんです。」

カナが急に近づいてきたのでちよつとドキツとしたが、動揺をなんとか隠した。

・・・戦争でもしてるのかな？でもなんか可哀想だな。・・・

「でもさっきの服屋さんもそうでしたけど、私達用の服とかも置いてくれている店もあるんですよ。この帽子も屋台の人がくれたんです。」

カナが帽子を被り直す。

「へえー、優しい人もいるんですね。でも悲しいですね。獣人であることを隠して生活しないといけないなんて。」

勇輝はカナ達獣人の人に同情した。

勇輝達は宿の近くまで来ていた。

そして武器屋を見た勇輝はカウンターにいたファイに声をかけた。

「ファイさん、こんにちは。この前はありがとうございました。」

「おう！勇輝…とカナちゃんだったな。どうしたんだ？」

ファイがそう言うのとカナは隠れようとしたが少しだけ体を出している。

・・・おつ、ちよつとは克服してるのかな。いいことだ。・・・

カナの成長？に感心しつつファイに切り出した。

「普段使い用でもしもの時は護身用にも使えるナイフはありますか？

そのうち旅に出る予定なので色々と使えそうなものが欲しいので。」

そう言うのとファイがニヤけた。

「それならいいモンがあるぜ。ちよつと待つてな。」

ファイが店の奥に入っていく、しばらくすると小さな木箱を持って来た。

「開けるぞ、驚くなよー。」

はしやいだよな声を出してファイが蓋を開けると真っ黒の刃のナイフが入れられていた。

「コイツはあのジジイが気に入ったやつにしか売らなつて言った自信

作だぜ！切れ味は保証する。アンタならジジイも喜ぶだろう。」

勇輝はナイフを手にとって軽く振ってみる。

グリップには何かの革が巻かれていて手によく馴染む。

長さや軽さもちょうど良く、かなりのものだ。

「凄いですねこれは。いいんですか？こんなものを。」

勇輝も驚きを隠せない。

「ああ、ちよつと値が張るが構わないぜ。金貨一枚だが、いけるか？」

「わかりました！買います！」

食料や服を買って所持金が心許ないがこれだけは絶対譲れない。

「まいどありっ！アンタいいモン買ったぜ。」

勇輝はファイにお礼を言うのと軽やかな足取りで宿に戻った。

二人は宿の扉を開けた。

聞き慣れたベルの音とともにエリナが出て来た。

「あら、おかえりなさいーい！もうすぐお昼が出るから食堂で待っててね。」

そう言っただけで慌ただしく店の奥に入っていった。

二人は食堂で昼食を済ませたが、今回はエリナが作ったらしく独特な味付けだった。

周りを見ると他の人も微かに苦い顔をしている。

そこにエリナが出て来たので途端に表情をごまかした。

「カナちゃん！今日のぐ飯どうだった？」

「……おいしかった……です……よ？」

言葉も途切れ途切れで顔は若干青くなっている。

「……オイオイ、誤魔化しきれてない！ちよつとカナにはきついんじゃないのか？なんか可哀想に見えてきた。……」

気がつくときカナは勇輝に助けを求めするように泣きそうな目で見つめていた。

「……なんだろう、めっちゃ可愛い……。でも助けられない。……
「そう!?良かった〜！それじゃおかわりする?」

エリナは嬉しそうにおかわりをカナに勧める。

カナはさらに顔を青ざめさせて勇輝を見た。

もう本当に涙が出そうになっている。

・・・ヤバイ・・・エリナさん天然入ってる！流石にこれ以上は無理だ！・・・

勇輝が意を決して割って入った。

「それでしたら私がいただきますよ！カナさん少食なので。」

ちよつとやけくそに言ったが、周りの人達はよくやったと言わんばかりの目を向けていて中にはこっそりサムズアップする人もいた。

勇輝の目の前に皿が出された。

勇輝は決死の覚悟で食べ進めて、体が異常を訴える前に決着をつけた。

しかし、立ち上がろうとした直後意識が朦朧とした。

・・・ウツ・・・、我が生涯に一片の悔いなし・・・。

立ち上がってそのまま後ろに倒れて意識を失った。

「見慣れた天井だ・・・。」

勇輝が目覚めると自分の部屋のベッドの中だった。

・・・なんか三途の川渡りかけてたような気がする・・・。

近くの椅子にカナが座っていた。

「良かった…。勇輝さん目を覚ましたんですね。すごく心配しました。」

「あの後どうなったんですか？」

「他のお客さんと協力してここまで運んで来ました。あと、これを渡されました。」

カナがテーブルの上に置かれているカゴを見た。

カゴの中にはいくつかの果物が入っていて、紙切れが添えられていた。

紙切れには「勇氣あるものに捧げる」と書かれていた。

・・・なんか他のお客さん達から英雄扱いされてる!？・・・

勇輝はそれを見て苦笑いをした。

「本当に勇輝さんには助けられました。」

カナが勇輝の手を握った。
・ ・ ・ なんか大げさだなあ……いや、そうでもないか。 ・ ・ ・
実際に死にかけてた勇輝は否定できなかつた。

特訓

なぜか宿で死にかけた勇輝はその後特に何もせず、ゆっくり休むことにした。

さつそく買った服に着替えてベッドで寝そべっている。

カナは椅子に座って居眠りをしている。

その姿に癒されながらあることを思い出した。

・・・そういえば、神さまに頼んだ補填で確か物の名前や詳細が分かる能力があつたな。完全に忘れてた・・・ちよつと試してみよう・・・

収納していた果物をいくつか取り出してじつと見つめてみる。
すると頭の中に文字が浮かんで来た。

「リンゴ：一般的な果物／新鮮」

・・・なんか変な感じだけどこんなもんかあ。これはどうだ？・・・
別の果物を持って見つめてみる。

「フォレストベリー：街はずれの森で自生する固有種／熟れ過ぎ」

・・・マジかつ！食べないでおこう・・・

暇な時間を潰すために貯蓄した食材の選別をやっていたら日が暮れた。

腕時計を見るとそろそろ夕食の時間だった。

勇輝はカナを優しく起こして食堂に行った。

食堂で出された料理をじつと見つめてみた。

「野菜のスープ：エリナの母が作ったスープ／美味」

その情報を見て勇輝はホツとした。

「勇輝さん、さつきは大丈夫でしたか？」

エリナが勇輝に声をかける。

「なんかたまーに料理を食べたお客さんが倒れるんですよね。なんでですかね？」

エリナさんの料理だよと言いたいが、周りのお客さんがやめとけと
いうように首を振っていたのでやめた。

「いやー、なんででしょうね。私もわかりません。」
「適当にごまかした。」

食事の後はすぐにベッドに入った。

・・・今日はつかれた。決闘でボロ負けするわ、料理で死にかけるわ、散々だった。・・・

明日からガーラとの特訓があることを思い出し、早めに寝た。

次の日の朝にいつのまにかくっついて寝ていたカナを見て眠気が一瞬で吹き飛んだ。

二人がギルドの地下に行くとガーラさんが木の剣を2本持って立っていた。

「おはようございます、ガーラさん。さっそくお願いします！」

そういうとガーラは木剣を一本投げて勇輝の足元に刺さった。

「今日はこれで基本を叩き込んでやる。しっかりと付いて来いよ。」

そして勇輝が木剣を取り、構えると打ち合いが始まった。

「違う！そこはこうだっ！」

「ーッー！」

打ち合う中で適宜指導が入る。

戦いながらなので対応するのが難しいが、手加減してくれているのか、ギリギリで対処できるようにしている。

「ハアアー！」

「おっ、やるじゃねーかっ！だが、詰めが甘いぞー！」

すぐさま剣を弾かれて勇輝の胴体に一撃を食らう。

勇輝が膝をつくとかナが駆け寄ろうとしたが手を上げて制止した。

「まだまだ……。」

「おう、その調子だ！」

そんな特訓が4時間ほど続いて昼になったので休憩に入った。

受付のお姉さんが差し入れのサンドイッチを持って来てくれた。

鑑定したが問題なさそうだ。

「そういえば、お前がたまに見せる剣さばきなんだが、どこで覚えた

「？」

サンドイッチを頬張りながらガーラが尋ねる。

「昔別の街で見た人の動きを見よう見まねでやってるだけです。」

「・・・ほんとはアニメとか映画で見たやつだけど……………。」

そう心の中で呟きながら答える。

「まあ、それならいいんだが、今のままじゃ付け焼き刃感がひどいからな。基本ができないと効果を十分に発揮できんぞ。」

「はい。」

「よし、食い終わったら再開だ！」

その後も特訓が続き、終わって外に出る頃には夕暮れになっていた。

「また明日も来いよ！」

「……………はい。」

体中の痛みを堪えて返事をした。

結局一度も攻撃を当てることができなかった。

宿に戻ったら部屋でカナが体中の痣やキズを治してくれた。

「勇輝さん、あんまり無茶しないでください。見ててずっと心配してるんですよ。」

ちよつと頬を膨らませてカナが言った。

怒っているのだろうが可愛かったのであまり耳に入らなかった。

「あまり怪我しないようにもっと上達するよ。」

軽く返事をする。

「それで怪我したら意味ないです！」

再びカナが突っ込む。

「そうですね。気をつけます。」

食事の時間が来たので食堂に降りて席に着いた。

運ばれて来た料理をじっと見つめてみた。

「???…エリナが作った煮物？／食材不明／危険」

……………うん、ヤバイ……………。」

神の祝福をもってしても解析不能のエリナの料理を他のお客さんと協力してなんとか完食した。

ちなみにその後はトイレがかなり混んだ。

勇輝は部屋に戻ってまた明日に備えて早く寝たが、すぐに寝付けられず、しばらくしてカナが潜り込んできたので余計に眠れなくなってしまうた。

勇輝の記憶では確実に1時くらいまでは眠れなかった。

次の日も一日中特訓に明け暮れた。

相変わらず一撃も与えられないが、勇輝が怪我を負うことは少なくなっていた。

「少しはマシになってきたじゃねーか！」

「私だって負けません！」

「まあ、一太刀も食らってないけどな。」

この日もボロボロになって特訓を終えた。

ずっと見ていたカナに小言を言われたが、心配故のことなので真摯に受け止めた。

・・・カナさんの怒ってる顔が可愛い……。い、いや！最近たるみすぎだ！このままじゃ間違いを起こしてしまう。気を引き締めなければ。・・・

動揺するがなんとか気持ちを落ち着かせる。

幸いこの日の夕食は美味しかったので生き返るような気分だった。

そしてベッドでカナにくつつかれるのを耐える苦行をこなす。

そのような日常を過ごしていると宿に宿泊する最後の日になった。

特訓でもやつとまともに戦えるようになってきていた。

「くらえー！」

「なっ!?!」

ガーラの木剣が宙を舞って地面に落ちた。

「やるようになったじゃねーか。合格だ！」

「やった！今までありがとうございました！」

木剣を拾って戻ってきたガーラにお辞儀をする。

「まあ、オレは本気じゃなかったけどな。ここまでやれば後は自分の力で上達するだろう。オレは基本を教えただけだ。」

「マジですか……。でもこれからもっと頑張ります！」

「勇輝さん！やりましたね。」

カナが駆け寄ってきた。

「カナさんも、今まで付き合ってくれてありがとうございます！」

「……実際ずつと見てくれてたし、キズも治してくれたからね。……」

「そんなお前にちようどいい依頼がある。これで自分の腕を確かめてみるといい。」

ガーラがそう言うのと丸められた依頼書を取り出して勇輝に渡した。

「コボルトの群れの討伐……？数は……7体!?Cランクですか!？」

「大丈夫だ。今のお前にならやれる。」

ガーラが力強く頷く。

勇輝とカナは馬車に乗って溪谷へと歩いていた。

……今度こそ僕一人でやり遂げてみせる！……

無意識にその歩みは速くなっていた。

溪谷に辿り着き、周囲を警戒しながら進む。

すると崖下に差し掛かった時に進路上を塞ぐようにコボルトが現れた。後ろを振り返ると逃げ場を塞ぐように隠れていたコボルトが出てきた。

「前方に4、後ろに3体か……。カナさん！」

「はい！」

カナは勇輝から離れて距離を取った。

コボルトの何体かが、追おうとするが勇輝がそれを防ぐ。

「僕が相手だ！」

まずは2体が向かってきた。

勇輝はじっくりと観察して攻撃を予測し、1体目の攻撃を受け流しながらすり抜けてもう1体の前に躍り出て横一閃を食らわせた。

すかさず体を回転させて1体目の背後から斜めに斬りおろして一

瞬で2体を倒した。

・・・すごい：思ったとおりには体が動く。これなら！・・・仲間をやられて動揺していたがすぐに立ち直った1体が向かってきた。

しかし、攻撃を容易くかわされて心臓付近を刺し抜かれた。

剣を抜くとコボルトが力なく倒れた。

「今度はこっちからだ！」

勇輝がサーベルを構えて低い姿勢で突進して先頭のコボルトを下段から振り上げて切り捨てた。

残りの3体が慌てて勇輝を囲む。

後ろにいたコボルトが斬りかかってきたのを察知してかわすと隣のコボルトが続けて向かってきたのをステップで一気に接近して懐に入り、サーベルを突き刺す。

サーベルを抜きながら最初に斬りかかってきたコボルトを切り捨てる。

最後の1体は自暴自棄になったのか剣を前に突き出して突進してきた。

勇輝はタイミングを見計らってサイドステップでかわし、隙だらけの背中を渾身の力で斬り下ろす。

斬られたコボルトは突進の勢いのまま前に倒れた。

「……やったぞ。よっしゃー！」

勇輝は自分の成長に感嘆の声を上げてガッツポーズをした。

「カナさん、もういいですよ。」

サーベルを振って血を払い、剣を収めながらカナを呼んだ。

「勇輝さん…、すごかったです。あんなに鮮やかに7体も倒すなんて…。」

「さっさと帰ってご飯を食べましょう！」

「はいっ！」

二人が馬車に乗って街に帰った時には日が暮れかけていた。

ギルドに戻ると入り口でガーラさんが待っていた。

「おう！その様子だと、上手くいったみたいだな！」

「はい！ガーラさんのおかげです！」

「その調子で頑張れよ。」

ガーラが近づいて肩を叩いた。

「自分に惚れてる女をしつかり護ってやるんだぞ。」

ガーラがこっそり耳打ちをした。

「なっ!?ガーラさん！」

「じゃあなー。」

ガーラは手を振りながら街中を歩いていった。

カナは首を傾げている。

「依頼達成ご苦労様です。上手くいったんですね。あんな楽しそうなガーラさん久しぶりに見ましたよ。……これが報酬です。」

受付のお姉さんがにつこり微笑んで報酬の入った袋を渡す。

Cランクなだけあって多めになっていた。

「お姉さんも差し入れありがとうございます。」

お姉さんにお辞儀をして礼を言う。

「いいんですよ。こうして新人が成長するのを見るのが楽しみなんです。」

そう言うとお付のお姉さんは笑った。

・・・もしかしてお姉さん結構年上?・・・

そう思っていると謎の寒気を感じたのですぐにギルドを出て宿に帰った。

旅立ち

勇輝とカナは入り慣れた「猫の月」の扉を開ける。

ベルの音が鳴り、エリナの母が出迎える。

「あらっ、お帰りなさい。今日で最後ね。今夜の料理は腕によりをかけて作るから楽しみにしていてね。」

・・・もう最後かー。今夜はしっかりと味わって食べよう。・・・

宿の奥にある風呂で汗を流したら食堂に向かった。

「ハイ！勇輝さん、カナちゃん、今日はご馳走だよ！」

エリナが元気に登場し、皿を並べていく。

「私も頑張って作ったからたくさん食べてね。」

・・・今さらつとヤバイ事言っただけだった？この中に混じってるのか!?!

カナも状況を理解したようで青ざめた顔をしている。

・・・せめてカナさんには食べさせないようにしなければ!どれだ? いったいどれがハズレなんだ!・・・

勇輝は片っ端から解析を行った。

その結果2皿混じっていることが判明した。

その2皿をさりげなく自分の方に引き寄せて自分の近くにあった安全な皿と位置を交換した。

カナには気づかれていないようだ。

・・・最初になんとかして片付けてから美味しい方を味わおう。そのためにも倒れるわけにはいかない!・・・

血の気が体中から引いていくような感覚がしたが、我慢して食べ続けた。

・・・うう：あと少し・・・

残り一皿の僅かを残して腕が止まってしまった。

「勇輝さん? 私もそれ食べます。」

カナさんが手を伸ばして残り僅かな料理を取ろうとした。

「ええい！」

最後の力を振り絞って皿を掴み無理矢理かきこんだ。
カナは唾然としている。

「・・・ふう、なんとかか・・・食べきったぞ・・・。後は大丈夫だ。・・・
しばらく意識が遠のいたり腕が無意識に震えたりしたが、美味しい料理を食べてなんとか復活した。」

周りで見えていた他の客は真相に気づいたらしく涙を堪えているものや、勇輝を讃えるジェスチャーをしていた。

その後は美味しい料理を食べて幸せな気分になった。

「どう？美味しかったでしょ。まだまだあるから食べてね。」

エリナがそう言いながらあの料理をさらに追加しようとした。

「・・・マズイ！もうダメだ！・・・」

勇輝は諦めかけたその時・・・奇跡が起きた。

「エリナちゃん！その皿オレにちょうだい。」

「俺んところにも！」

他の客がエリナに声をかけた。

「えっ？でもこれは・・・」

「エリナさん、いいですよ。あの人たちにも食べさせてあげてください。」

断ろうとしていたエリナに勇輝がフォローする。

「じゃあわかりました。」

渋々エリナは料理を頼んだ客のところに持っていった。

「カナさん、そろそろ帰りましょう。」

「えっ？はい。」

カナと一緒に席を立ったが、振り向くと助けてくれた客が任せろと言うようにガッツポーズをした。

「・・・ありがとうございます！あなたたちのことは忘れません！・・・」

2人は食堂を出て部屋に戻った。

「勇輝さん、エリナさんの料理ってありましたか？」

部屋に戻るとカナが質問してきた。

「そういえばありませんでしたね。たぶん勘違いだったんですよ。」

・・・真実は彼らのみが知る。彼らの名誉のためにも黙っておこう。・・・

カナは首を傾げている。

「明日にはこの街を出るので荷物の確認をしましょう。足りないものは明日の昼までに買います。」

「私はもともとあまり何も持っていないので大丈夫ですよ。」

・・・本当に大丈夫か？まあほとんどこっちで用意してるから何かあってもなんとかなるかな。・・・

勇輝は久しぶりに異次元空間に入って備蓄品の確認をした。

カナには教えていなかったのでかなり驚かれた。

「びつくりしましたよ！あんな空間に入れるなんて！」

「そういうば言ってますませんでしたね。驚かせてごめんなさい。」

・・・さて、足りないものもないようだし、早めに寝るか。・・・

「明日から旅なので早めに寝ましょうか。」

「あ、はい……先に寝ていてください。」

カナが顔を赤くして言った。

・・・今まで何も言わずに寝て、僕が寝たのを見計らって入ってきてるからな。いざ一緒に入るとなると恥ずかしいのか。……………僕もなんだけどね。・・・

「分かりました。カナさんも早めに寝てくださいね。」

・・・あまり言ったら可哀想だからやめとこう。・・・

とりあえずわざと右腕を横に広げて寝ることにした。

途中本当に寝てしまっていたが気づくと11時になろうとしていた。

そのときゆつくりと毛布が動かされた。

・・・きた……………

カナがいつものポジションである勇輝の右側に入ってきた。

毛布の中に入り込むと勇輝の右腕をどうしようかしばらく迷ったようだが、腕を枕にすることにしたようだ。

・・・！ツ！狙い通りだ。・・・

右腕に乗せられたカナの頭の重みとサラサラとした髪の毛の感触に癒された。

しかし、ずっと腕を出していきつくなかったので寝返りを打つ振りをしてカナの方に体を向ける。

しばらく待つて目をゆっくりと開けるとカナは勇輝の腕枕で眠っていた。

・・・可愛いなあ。僕ができるのはここまでだ。・・・
今度こそ勇輝は眠った。

朝になって目を覚ますと、右腕はカナの頭の感触がするが、左手には別の感触がした。

・・・ん？なんだ？・・・

おそろおそろ確認すると勇輝の左手はカナの体の上にあった。

「ーッ!？」

かろうじて声は出さなかったが、勇輝は動揺した。

ローブで分かりにくかったが、おそらく左手はカナの胸の上に置かれている。

・・・ヤバイヤバイ！これはマズイ。・・・

カナを起こさないようにゆっくりと左手をどかす。

どうやら起きていないようだ。

・・・ふう、なんとかなった。・・・

勇輝が安堵の息を漏らすとカナが目を覚ましてその目があった。

「あっ・・・」

カナの顔がみるみる赤くなっていく。

勇輝が耐えかねて飛び起きる。

「勇輝さん・・・どうかしましたか？」

カナが顔を赤らめながら尋ねる。

「柔らか・・・イエッ！なんでもありません！」

うっかり心の声を出しそうになって慌てて取り消す。

カナは首を傾げるが、その後微笑んだ。

「おはようございますー！」

「お…おはようございます。」

無垢な笑顔で挨拶されて、勇輝はドキツとしながら挨拶を返した。

「あら、おはよう。」

「おはようございます。もう朝食たべれますか？」

下に降りるとエリナの母がいた。

「パンと牛乳だけだからすぐ出せるわよ。食堂に行つてね。」

「はい。ありがとうございます。」

食堂で朝食を済ませた。

勇輝は部屋に戻ると異次元空間の中で迷彩服に着替えてサーベルやホルスターなどがついた装備一式を身につけた。

空間を出るとカナも準備を済ませたようだ。

「それでは出発しましょうか。」

「はいー！」

2人は下に降りた。

「おや、2人とももう出るのかい？」

「はい、お世話になりました。」

エリナの母がいたので声をかけた。

「ちよつと待つてね。エリナー！」

「ハイー！どうしたの、母さん？」

エリナが奥から出てきた。

「エリナさん、一週間お世話になりました。これから旅に出ますがここでも思い出は忘れません。」

「…特に食事は…。」

「そうなんだー旅に出るのかー。そうだ！カナちゃん！」

エリナがカナに耳打ちをする。

カナは笑顔になって頷いた。

「…何話したんだろうな。…」

「それじゃ、元気でねー！」

「ありがとうございますー！」

2人は「猫の月」を出た。

「ファイさん！いますか？」

「いるぜ！どうしたんだ？」

ファイの武器屋にも挨拶する。

「いろいろお世話になりました。このナイフはありがたく使わせていただきます。」

「おう！大切に使ってくれよ！旅もがんばれよ。…そうだ、ジジイも今いるぜ。ちよつと待つてな。」

ファイが店の奥に行き、しばらくするとヘトスを連れて出てきた。

「ヘトスさん、銃剣とサーベルありがとうございました。」

「フン！儂は条件を守ってだけじゃ。こつちこそあの剣をもらってありがたく思つとる。儂が作った剣を折つたら許さんぞ。」

「はい！大切に使います。」

2人に挨拶をして武器屋を後にした。

「最後はギルドですね。」

ギルドの扉を開けると久しぶりに迷彩服で来たので注目を浴びた。

「今までお世話になりました。」

「いえいえ、気をつけて旅をしてくださいね。他の街でもギルドを頼ってください。」

受付のお姉さんに挨拶をする。

「あつ？勇輝じゃねーか。どうしたんだその格好？」

後ろからガーラさんがやってきた。

「ガーラさん！この服は私の元いた集団の服なんです。それよりも鍛えてくださってありがとうございました！」

「こつちが勝手にやっただけだから気にすんな。のたれ死ぬんじやねーぞ。」

「大丈夫です！ガーラさんの教えを活かします！」

「そうか、頑張れよ！あと、嬢ちゃんもな。」

ガーラはニヤツと笑いカナを見た。

「皆さんお世話になりましたー！」

2人はギルドを出た。

「それじゃあ、どこを目指しましょうか？」

勇輝はカナに向かって尋ねる。

「それなら…獣人が多く住んでいる東の国に行きたいです。何か思い出せるかもしれないので。」

「そうと決まれば出発しますか！」

「はい！」

街の門をくぐり、2人は東に向かって歩き出した。

キャラ紹介1章

人物（主に名前があるもののみ）

・永遠勇輝（とわ ゆうき）

主人公で高校を卒業して士官学校に入校した。厳しい一年間を耐え抜いて2年目の初日の部活中にM1ガーランドの暴発というアクシデントと手違いで人が死ぬのを見逃せない真面目な神様の機転によつて異世界にやつて来た。

九州出身で硬すぎるほど真面目であり人間関係に恵まれない典型的な報われない体質。しかし、異世界の人々とのコミュニケーションによつて少しずつ柔らかくなってきている。ミリタリー寄りのオタクだが、ほかのジャンルもそれなりに知っている。性格ゆえに女性との関係は皆無でまだよく分からない。

ちよつとセンスがズレていて迷彩服に儀礼刀（サーベル）と拳銃を装備するなどかなりイカれた格好をしたりする。

・カナ

今作のヒロインで勇輝が異世界にくる数ヶ月前からの記憶しかない。年は16ということにはわかっている。獣人で狼系の耳と尻尾があり嗅覚や聴覚が人より優れている。かなり控えめな性格で人見知りもあり、心を開いている勇輝以外の人間となかなか話せない。獣人での女性の特徴として好きになった人物にずっとそばにいたいようにする本能のような性質があつて文字通り勇輝にくつついていて。戦闘の際は氷魔法によつて攻撃を行い、治療魔法も使える。就寝の時さえ勇輝にくつつこうとするため毎日勇輝の精神的耐久値を削りにかかっている。

・エリナ

勇輝たちがコヨースカで利用した宿「猫の月」の娘で勇輝の見立てでは18くらい。とても明るい性格で宿の看板娘でもある。しかし時折出されるエリナの料理は壊滅的で勇輝の鑑定で危険物と称されるほどだが、本人は全く気付いていない。料理に関しては客の方も諦めているため、エリナの料理が出た時は客の間で助け合いが行われて

いる。

・ヘトス

コヨースカで鍛冶師をしている老人でかなりの腕前を持つが、非常に頑固な性格で販売等は行っていない。勇輝が見せた亜鉛合金製のサーベルを見て職人のスイッチが入り、譲ってくれる代わりに勇輝の銃剣の刃付けと実戦用のサーベルを鍛えた。現在は亜鉛合金の研究に没頭している。

・フアイ

武器屋を営んでいてヘトスが作った武器を売っているためそれなりに繁盛している。エリナとは幼馴染で小さい頃から料理の被害を受けているためトラウマになっている。勇輝とはヘトスの仲介を通じて話す仲になった。

・ガーク

コヨースカのギルドに通っている中堅冒険者で装備は軽量の鎧と両手剣である。実戦慣れしていない勇輝を見抜き、特訓を行なった。かなりスパルタで厳しい特訓の成果で勇輝の剣さばきは大幅に上達し、おまけに勇輝を治療していたカナの治療魔法も上達した。覇気のある立ち居振る舞いなので話しかけてなくいながらも面倒見の良い性格でそれを知っている者たちは彼が新人を鍛えるのを恒例行事と捉えている。コヨースカのギルドでかなりの実力者で経験もあるが受付の姉さんには敵わない。

第2章

獣人の国

銃声

一週間あまりで多くの思い出を残した「コヨースカ」の門をカナとくぐり、獣人の国があると言う東へと足を向ける。

しばらくは小さな林がところどころ点在する平野の道を進むことになるようだ。

・・・やっぱり馬車とかを用意した方が良かったかな？ギルドのお姉さんにもらった地図だと結構遠いな・・・

勇輝は1学年の秋に経験した25km行軍のことを思い出した。

富士山が間近に見える雄大な景色の中で途中雨に降られながらも64式小銃と重い背囊を担いで歩き続けたのは今ではいい思い出だ。

ただ、もう一度やれと言われたら断りたい。

・・・まあ今回はもつと長いけど自由なペースで行けるし、なんといつても荷物も少なく、カナさんもいる。気楽にいこう・・・

「カナさんは何かその国について知ってますか？」

馬車道に沿って気楽に歩きながら尋ねる。

「確か、「ノシヨ」って名前で、住人はほとんど獣人ですけど、少数の人間ともうまく共存しているらしいですよ。あとは王族や貴族などの階級がいます。」

・・・ふうーん、王族や貴族ねー、それにしても共存ができてるのか・・・

「そういえば人間と獣人の仲が悪くなってる原因って何なんですか？街の中では戦争しているような雰囲気を感じられないのですが。」

勇輝は以前に獣人が隠れて生活している理由を戦争かと思っていたが、街の空気は全く違ったので、別の理由があると考えていた。

「…それが…、王族同士の対立なんです。それで、貿易とかに影響が出ていたり王族中心の宣伝のせいでお互いの仲が悪くなってるんです。」

「ちなみにその対立の理由はわかりますか？」

「えーと、人間の王族が獣人の王女を嫁に欲しがったんですが、獣人の王族が拒否したっていう話らしいですよ。」

「……えっ？それだけ!?人間の王小物すぎない?……」

「そういうことなので獣人側ではたいして気にしていないみたいで、人間の街だけが獣人を嫌ってるんです。」

「そんな理由だったんですか。同族として恥ずかしいですね。」

勇輝は呆れながらも納得した。

「……人間の王族に会ったらちよつとシバこうかな。会うことないと思うけど。……」

そんなことを考えながら歩き続ける。

「勇輝さん、あそこの林で休憩しましょう。」

「そうですね。結構歩きましたから。」

小さな林が勇輝達の前に茂っていた。

林といっても十数本の木が生えているだけだが、木陰で休憩するくらいなら充分過ぎる。

手頃な木のそばに座ると、収納していた食べ物を取り出してカナにも分ける。

今回はイノシシの串焼きだ。

そのまま焼いてあるようで結構クセがあつたが、できたてをキープしていたので美味しく食べられた。

カナは鋭い嗅覚のおかげで少し苦戦していた。

食べ終わった後にリンゴを1つ取り出してナイフで切り分けた。

「……すごい切れ味だな。片手で持ちながら難なく切れた。……」

ヘトスの自信作というだけあって大きなリンゴも豆腐のように切れた。

「カナさんも口直しにどうぞ。」

切り分けた半分をカナにも分けるが、あまりに楽に切れたので調子に乗ってウサギ風にしてみた。

「ありがとうございます……カワイイ。」

見た目とそのさっぱりとした甘さにカナもご満悦のようだった。

「勇輝さん……。」

リンゴを食べ終えたカナが呼びかけた。

「どうしましたか?」

勇輝がカナの方を向くところわばった顔をしていた。

「あの、えと…私にジユウを撃たせてくれませんか……?」

「えっ…!?!」

勇輝は驚いてリンゴの最後の一切れを落とす。

「カナさん!?!どうしたんですか?いきなり。」

あまりに意外だったので落ちたリンゴも気にならなかった。

「だって…ジユウが勇輝さんの武器なんですよね。でも、私に気を遣って剣を使っている…。私さえ慣れれば!」

うつむきがちに話していたが、最後の言葉は覚悟が感じられた。

「カナさん…。」

勇輝がカナの頭に手を置く。

「そう言ってもらえて嬉しいです。…けど、私が撃ちます。撃つには大きな音以外に覚悟が要ります。カナさんが背負う必要はありませんよ。」

カナは黙ってうつむいていた。

そして勇輝が手を下ろして低い声で話す。

「銃は剣や弓と同じように人を殺すための武器です。しかし、引き金を引くという動作であつという間にその命を奪うことができるのです。実感のない殺しをし続けていくと命を奪うことに何も感じなくなってしまう。カナさんにはそうなって欲しくない。」

そう言っ立ち上がるとM1を取り出して負い紐を緩めて腕を通した。

「しばらくはこの銃で戦います。カナさんは慣れるまで離れていてください。…それでは出発しましょうか。」

「……………はい。」

カナはゆっくりと立ち上がって付いてきた。

林を出て馬車道に戻ると再び道に沿って歩き始めた。

途中で人を乗せた馬車に追い抜かれたこと以外は何もなく3時間経とうとしていた。

足に乳酸が溜まって力が入れにくくなる。

カナを見るとまだまだ大丈夫そうだ。

・・・結構カナさん強いんだな。・・・負けられないな。・・・ちよつとシヨツクを受けたが負けじとペースを維持した。すると、止まっている馬車を見つけた。

「あれってさつき私たちを追い越した馬車じゃないですか？」

「確かにそのようですね。休憩ですかね？」

馬車に近づくとカナが異変に気付いた。

「ーッ！勇輝さん！血の匂いがします！」

「本当ですか!?急ぎましょう！」

2人は走って馬車に駆け寄った。

止まっている馬車の横には肩を押さえて座り込んでいる男性がいた。

「大丈夫ですか!?いったい何があったんですか？」

勇輝が御者と思われる男性に声をかける。

「ゴ…ゴブリンの群れに襲われて…中に乗っていたお嬢様が連れ去られた。2人いた騎士のうち1人は重症で馬車の中にいるが、もう片方は1人で追いかけて行っちゃった…。」

男性自身も肩に矢を射られていたようだ。

止血はされていた。

・・・重傷者を助けないと、治療できたらいいんだけど…。・・・勇輝が馬車に入ると上半身だけ鎧を脱いで寝かせられている騎士がいた。

呻き声を上げている彼の横っ腹には大きな傷ができていて、巻かれている包帯が血に染まっている。

「カナさん！いけますか？」

「やってみますっ！」

カナが傍に座って回復魔法をかける。

「私は外の人を見てきます。任せました!」

勇輝は再び外にいる男性のもとへ向かう。

「……騎士さんは大丈夫そうかい?」

御者の男性が痛みを耐えながら尋ねる。

「私の連れが治療しています。私もできることをやります。」

勇輝はそう言うのと片膝をついて御者の肩に両手をかざして強く念じた。

「……治れ…治れ……。」

すると、かすかに暖かい光が発生した。

御者の顔色が少しだけ良くなったが、傷はほとんど治せなかった。

「……クソツ…慣れていないからか、才能が無いのか知らないけど状況は変わらないか……。」

「すみません…。私の力不足で治せきれませんでした。」

「いや、俺は大丈夫だから気にしないでくれ。それよりもお嬢様と追いかけて行った騎士さんが心配だ。」

御者は不安そうな顔でうつむいた。

「私たちも加勢します!どの方向に向かって行きましたか?」

「本当か!?助かる。……やつらはあの森から出てきて戻る時もそっちに行ったから騎士さんも追っかけてった。」

「わかりました。それでは安静にしてください。」

勇輝は立ち上がってカナを呼ぶと準備をして森へと向かった。

「重傷者はどうなりましたか?」

森の近くまでできた時に勇輝がカナに尋ねた。

「ある程度治療できたのでしばらくは持ちますが、早めに街に連れて行った方がいいです。」

「短い時間でそこまでできれば上出来です。それでは森に入ります。周囲の警戒を。」

褒められてカナは少し嬉しそうにしていた。

森は意外と深く、太陽の光が遮られて薄暗くなっている。

2人で周囲を警戒しながら進む。

「ーッ！勇輝さん、向こうから血の匂いがします。」

カナが声を抑えて勇輝に知らせる。

カナが示した方向に向かうとゴブリンが数体血を流して倒れている。

「これは……。」

カナと手分けして周囲を調べて手掛かりを探す。

……コイツら：剣でやられているな。騎士がやったのか？……推測をしているとカナが何かを発見したらしく勇輝を呼んだ。

カナのところに向かうと騎士が血だらけで木にもたれかかっていた。

意識はないが、カナが治療していることからまだ生きています。

「うう……。」

騎士が意識を取り戻したようで呻き声を上げた。

「もう大丈夫ですよ。動かないでください。」

治療しているカナの後ろから騎士に話す。

「頼む……お嬢様を……。」

消えそうな声で騎士が言葉を発した。

「わかりました。必ず助けますので待っていて下さい。」

カナの応急処置が終わるのを待つ森の奥へと向かった。

カナの回復魔法は特訓で傷だらけになった勇輝を何度も治したからか、かなり上達していた。

以前なら治しきれなかった傷も治せるようになっていた。

……魔法も結構成長するんだな。覚えておこう……

勇輝は感心しながらも警戒は怠らない。

しばらく進むとカナが立ち止まり、帽子を取って耳をピンと立てた。

「……音が聞こえます。多分群れが近くにいます。移動はしてないようです。」

「よし…追いついたな。」

無意識に小声になる。

慎重に進むと若干開けた場所が広がっていて中央付近にゴブリンの群れと手足を縛られている女性がいた。

茂みの中から双眼鏡を手に持って様子を伺う。

数は6体のようだ。

…何体か怪我をしているな。騎士がやったんだな。…森の中の死体も含めると10体以上はいたことになる。

「カナさん、私は反対側から攻撃します。私が最初に撃つたら次に氷魔法で牽制して下さい。…ああ、別に倒してしまっても構いませんよ。」

カナがああの死亡フラグを言うことは絶対ないと思うが一応潰しておく。

「わかりました。気をつけて下さいね。」

勇輝はM1を手に慎重に茂みの中を回り込む。

…陸自迷彩舐めんよ。日本の森だつたらもつとわからなくなるぞ。…

位置についたらM1に銃剣をつけてゆっくりと構えて狙いをつける。

「作戦開始…!」

1人小さく呟いて引き金を引いた。

発射炎が茂みの葉っぱを吹き飛ばして弾丸は勇輝に2番目に近いゴブリンの頭に命中して脳漿を散らした。

「ウラァァー!」

直後に茂みから飛び出してM1を突き出しながら突撃をする。

後方のゴブリンが慌てて弓を引こうとすると別方向から飛んできた氷の刃が背中に突き刺さってどさりと倒れた。

2方向からの攻撃で動揺していた1番近い位置にいたゴブリンに銃剣を突き立てる。

銃剣はあっさりと刺さって引き抜くと簡単に抜けた。

「次っ!」

即座にM1を近くのゴブリンに向けて射撃して仕留める。
槍を持ったゴブリンが迫ってきた。

・・・槍か、今までと勝手が違うな。・・・
初めての相手を冷静に観察する。

「ーッ！」

槍を突き出してきたのを横にかわすが、穂先の刃が頬を掠める。

「ヤアッ！」

すぐさま懐に飛び込んでM1を振り下ろして槍を持っていた手を斬りつける。

しつかり刃がつけられた銃剣は遠心力も加わってゴブリンの右手首から先を切り落とした。

「グギャー！？」

ゴブリンが痛みに耐えかねて叫ぶがすぐさま振り上げるように突き上げられた銃剣が首に突き刺さり、引き抜かれると前に倒れた。

・・・やっぱり銃剣に刃がつくと攻撃の幅が広がるな。・・・
ホッと一息をついた。

「勇輝さんっ！」

茂みから出て来ていたカナが指を指す。

その先には女性を抱えて逃げる最後のゴブリンがいた。

・・・クソツ、面倒なことをするな。・・・

舌打ちをしたくなるが別のことが気になってやめた。

「カナさん、近くで撃ちますが我慢して下さい！あとで謝りますから！」

勇輝が叫ぶとカナは慌てて耳を塞ぐ。

M1を構えて狙いをつける。

・・・女性に当てるわけにはいかないな。足に当てるしかない！・・・
狙いを下方に修正して引き金を引く。

「ううっ……い！」

銃声の後にカナの声が耳に入った。

・・・カナさん…ごめん！・・・

弾丸はゴブリンの左膝にあたって突き抜けた。

ゴブリンはつまづくように転んで、抱えられていた女性は前に放り出された。

勇輝がかさず走り出す。

ゴブリンが這いつくばって逃げようとしていたが勇輝が追いついた。

「ここでおしまいだ。」

背中から銃剣で心臓を突き刺されてゴブリンは息絶えた。

「作戦終了…。」

気を失っている女性のところに歩きながら呟いた。

寄り道

勇輝は手足を縛られて意識を失っている女性……お嬢様のところへ向かいながらM1の銃剣を取り外した。

お嬢様は高価そうな服を着ているが、体はカナよりも小さく年も若いだろう。

お嬢様のそばに着くと銃剣で手足を縛っていた縄を切り、仰向けに寝かせた。

カナが遅れてやって来た。

まだこわばった表情で、耳はパタンと倒れている。

「ごめんなさい……カナさん。いきなり近くで撃つことになってしまつて……。」

正面に向かって勇輝は頭を下げる。

「いいんです。びっくりしましたけど、この人を助けるためで、正しかったです。」

頭をあげるとカナは微笑んでいた。

「……本当はまだ怖いはずなのに……どうしてそこまで明るく振る舞うんだ……。」

勇輝は自分のことは棚に上げて、何も言わず許されることをどこかもどかしく思っていた。

「カナさん……無理はしなくてもいいですよ。辛い時は言ってください……。……それではこの人の治療をお願いします。」

勇輝がお嬢様から離れて入れ替わるようにカナが両膝をついて回復魔法をかけた。

「この人は大した怪我をしていないみたいです。早く馬車に連れて行ってあげましょう。」

カナがそう提案して勇輝も賛成した。

勇輝がお嬢様をおぶって森を進む。

「お嬢様！」

2人の前に騎士が立っていた。

力を振り絞って来たらしく、足がふらついている。

「ああ…、ありがとうございます！お嬢様はご無事ですか？」

騎士が感嘆の声を上げて尋ねてきた。

「ええ、大した怪我をしていないので大丈夫です。あなたこそ大丈夫ですか？」

「良かった…。私はなんとか歩けます。早く馬車に戻りたいところです。」

「そうですね。カナさん、肩を貸してあげてください。」

カナは少し躊躇う素振りを見せたが、騎士に肩を貸して歩き出した。

「…人見知りのカナさんにはちよつと辛いかもしれないけど、我慢してくれ。…」

カナの頭は微動だにせずただ正面のみを見ていた。

他者に触れているのはかなりの勇気があるだろう。

しばらく歩き続けて森を抜けることができた。

馬車が見えてくる。

よく見ると御者の男性が怪我をしていない手を振っている。

一行はなんとか馬車までたどり着いた。

「皆さんご無事で良かったです！早く出発しましょう。お二人も是非乗ってください。」

御者が手綱を取って催促する。

「それでは世話になります。」

2人は馬車に乗り込んだ。

馬車の中ではお嬢様と重症の騎士が寝かされていて他の3人がうまく空いたスペースに座っていた。

カナは重症の騎士の治療を続けている。

「先程のことは改めてお礼申し上げます。お嬢様が無事で本当に良かったです。お二人はどこに向かっているのですか？」

騎士が深々と頭を下げた後に尋ねた。

「私たちは「ノシヨ」への旅をしていました。」

「そうだったのですか。我々はその道中にある町「マーハリク」に向かっていたんです。お嬢様はその町の町長の令嬢なのです。」

・・・そうだったのか。そういえば地図に載ってたな。ちよつと寄り道になるけど寄っても悪いことはないだろう。・・・

「私たちも「マーハリク」で休もうと思っていたのでちよつどいいですね。」

・・・よしっ！これで今日はもう歩かないで済むぞ。・・・

しばらく馬車に揺られていたが、カナが勇輝の隣に座った。

「カナさん、あの騎士の治療は大丈夫ですか？」

「はい、もう大丈夫です。傷を塞ぐところまでできたので、あとは安静にしておけばいいです。」

「そうですか。エライですね。」

勇輝はカナの頭を撫でるとカナは恥ずかしそうにしていたが、嬉しそうだった。

「勇輝さん、彼女は…？」

騎士が尋ねるとカナが警戒するように睨んで勇輝の腕を掴む。

「この子はカナです。獣人ですが、私と一緒に旅をしています。ちよつと人見知りです。」

「ほう、そうですか。大丈夫ですよ、そんなに警戒しなくても。「マーハリク」では町長の政策で獣人も普通に生活しています。」

騎士はカナを見て安心させた。

・・・カナの場合はそれだけじゃ安心しないんだよなあ。……獣人も普通に暮らしてるのか。人間の為政者でもまともな人っているもんだな。・・・

さつきより警戒が薄まっているが、カナはまだ勇輝にくっついていく。

ちよつと気まぎれなくなったので勇輝と騎士は馬車の外を見ていた。

しばらくすると森が点在する平野の景色の奥に「コヨースカ」ほどではないが立派な町の城壁が見えてきた。

馬車が町の門に近づくと衛兵が近寄ってきたが、御者が話をすると大慌てで戻っていった。

今度は馬車の中の騎士と同じ鎧を着た騎士たちがやってきた。勇輝の肩をかりて騎士が馬車を降りるとすぐに囲まれた。

「隊長！ご無事で何よりです！お嬢様は!?!」

「大丈夫だ。怪我はないが眠っておられるので静かにして欲しい。あとは御者と部下を運んでやってくれ。応急処置はしてある。」

・・・この人騎士団の隊長だったの!?!あつ、でも考えてみれば偉い人の護衛にはそれなりの人も着くよな。・・・

隣にいる勇輝は騎士団の勢いに圧倒されていたが、隊長の言葉を聞いて静まり返って負傷者を連れて行った。

「お前は馬車で俺とお嬢様、あと恩人2人を屋敷まで運んでくれ。」

「はっ！了解です！」

隊長が手近な部下を捕まえて御者台に乗せる。

馬車は門を通って町の中心部にある町長の屋敷へと向かった。

外を見ると「コヨースカ」とはまた違う活気にあふれていて、中には獣人の姿も見ることができた。

「隊長！到着しました！」

馬車が町中でもひととき大きくて立派な建物の前で止まった。

鉄柵の門が開かれるとメイドの女性達が出てきてお嬢様を運んで行った。

・・・おつ、メイドさんだ。本物始めて見た。秋葉原にはよく行ったけど、メイド喫茶には行ったことなかったからなあ。・・・

勇輝がメイドを見てみるとカナが袖を引っ張った。

「勇輝さん、呼んでますよ。」

隊長が門の前で2人を呼んでいた。

門を通ると多種多様な花で彩られた庭園が広がっていた。

「うわあ…きれいな花だ。」

カナの耳がぴよぴよこ動いていた。

・・・めつちや可愛い…。…うん！きれいな花だな！・・・

頭の中までお花畑になりそうだったのをなんとか切り替えて隊長についていく。

「ようこそおいでなさいました。私めが町長のもとへと案内します。」
屋敷の扉を開けると執事が出迎えた。

片眼鏡をかけてバランスよく白髪が入っている。

執事について行くが、勇輝は道中の調度品を観察していた。

・・・どれも高そうだな。さすがはお屋敷だ。・・・

部屋の前には到着すると執事がノックをする。

「町長、お連れしました。」

そう言うと、扉を開けて勇輝達を招き入れた。

正面には年季を感じさせる机があり、その向こうには初老の男性が座っていた。

「町長、お久しぶりです。騎士団第一部隊隊長、ただ今帰還しました。」

隊長がひざまづいて報告した。

「隊長、ご苦勞だったね。負傷したと聞いたが大丈夫かね。」

「もったいなきお言葉です。お嬢様と我々はこの方達のお陰で帰って来ることができました。」

「ほう……君たちが娘の恩人か。」

町長が勇輝とカナを見て頷いた。

カナは恥ずかしさと人見知りでそわそわしている。

「私は永遠勇輝と申します。こちらはカナといいます。旅の途中で偶然お助けしました。」

カナは話せそうになかったので勇輝がまとめて言った。

すると町長がにっこりと笑って執事と呼んでなにかを話すと執事は部屋を出た。

「この度は娘の命を救ってくれてありがとう。一個人として感謝するよ。」

「いえ、当たり前前のことをしたまです。それよりもたった一人で魔物の群れに立ち向かった隊長さんの方が立派です。隊長さんのお陰で魔物の数が少なくなっていましたから。」

勇輝は隊長の方を向いてフォローした。すると扉が開いて執事が手押し車を押して入ってきた。

その上のは袋が3つ乗せられている。

手押し車が町長の前に着いたところで町長が口を開いた。

「皆の功績を称えて褒美を与えようと思う。金貨20枚だ。是非受け取ってくれ。負傷したともう1人の騎士にも後日与える。」

執事が袋を一人一人に手渡す。

その袋はずっしり重く、受け取った瞬間に落としそうになった。

カナも重さに驚いている。

・・・金貨20枚つてすごいな！町長太っ腹だな。人助けっていいな。・・・

あまりの大金に少しにやける。

「皆ここで昼食を食べるといい。本当にご苦労だったね。」

「光栄ですっ！失礼しました！」

隊長に続いて部屋を出た。

執事が食堂へと案内する。

その空間はきらびやかなものは控えめであるが、長いテーブルや椅子はどれも素晴らしい出来だった。

テーブルの端に座るとカナが隣に座り、隊長は反対側に着いた。

長テーブルの反対側の端に町長とその夫人が座って食事が始まった。

どの料理も美味しかったが夫人の長話で長時間拘束された。

「本日はご苦労様でした。」

「こちらこそご馳走様でした。」

執事が見送りの挨拶をして3人は屋敷を出た。

「俺は騎士団の詰所に行くが、勇輝はどうする？」

屋敷の門を出て隊長が尋ねる。

「私たちは適当な宿を探します。それからギルドの方も見てきます。」

「そうか、じゃあ元気でな。」

隊長が2人に別れを告げて歩いて行った。

．．．いくらカナに治療してもらったからって：元気だなあの隊長．．．

隊長の活気に感心しながら手を振った。

「大金をもらったことだし、町をじっくり見て回りましょうか。」

「はい！」

やっと2人きりになれてカナが嬉しそうに応えた。

(外伝) 士官候補生の追憶

勇輝が異世界に漂流する一年前の春……

寮の全体に放送が流れた。

「伝達つ、銃貸与式があるので1学年は作業着で各中隊武器庫前に集合せよ。」

……ついに銃を受け取るのか……楽しみだ。……

士官学校の生活に慣れきつておらず、時間に追われる毎日だった勇輝はギリギリで集合に間に合った。

すでに同期が並んでいて正面の武器庫の前に長机が置かれていて、側に陸自の制服を着た教官が立っていた。

長机には緑色の毛布が敷かれてその上に64式が並べられている。

同期の先任者が指揮をとる。

「1学年気をつけっ！短間隔、右へー習えっ！」

すぐさま号令に反応して左腕を腰に当てて顔を右に向けて列を整頓する。

「直れっ！」

指揮者の「な」の音に反応して一斉に手を下ろして正面を向く。

指揮者は軽く見回して回れ右をして教官に敬礼した。

「1学年総員35名、事故なし！現在員35名、集合終わりっ！」

「了解。列中につけ。」

もう一度敬礼すると指揮者が回れ右をして列の右端に移動した。

教官が前に出てくる。

「お疲れさん。」

「二「お疲れ様ですっ！」」

「本日はこれより銃貸与式を行う。えー、名前を呼ばれたものから前に出て銃を受け取って負い紐に付いている名札の番号を大きな声で言え。銃を受け取る時は「銃っ！」と言いながら奪い取れ！」

「二「ハイッ！」」

「休め、それでは〇〇学生！」

1人ずつ呼ばれて前が出る。

見ていると、教官が「銃！」と行って突き出してきたのを受け取るようだが、強く掴み取らないといけないようで苦戦していた。

勇輝は後半だった。

「永遠学生！」

「ハイ！」

前に出ると教官が銃を持っている。

「銃！」

「銃っ！ーっ！」

力強く銃を掴んで引つ張ったが教官も強く持つていて離れない。

「ーっ！」

もう一度思いつきり引つ張るとやっと取れた。」

すぐさま番号を確認して大声で言う。

勇輝は回れ右をして列に戻った。

そして数名が銃を受け取って全員が列に並んだ。

「ご苦労さん。諸君らが受け取った銃は武器である。有事の際はこれ
で人を殺すこともあるかもしれない。その覚悟を持つて扱うように
！」

「「ハイッ！」」

時は少し流れて夏……

勇輝たちは銃を支えながらトラックの荷台の中で簡素な台に座つていた。

ガタガタと揺れるが、ただの板の上に座っているだけなので尻が痛くなる。

ホロに覆われて薄暗いカーゴの中で同期たちは雑談をしていた。

20分ほどで目的地の射場に到着した。

「準備ができるまではしばらくここで待機しろ。」

教官がそう言つて射場の扉の中に入つていった。

「おい、勇輝、あそこ見てみるよ。アイツ携帯持つてきてる。」

同期に声をかけられ、指差す先を見た。

「本当だ。うちの班は禁止されてたのに。」

そいつはしやがみこんで携帯をいじっていた。

・・・みんな禁止されて持ってきてないのに……。どうなっても知らないぞ。・・・

しばらくするとその班の教官と思われる人が現れてそいつの頭を思いつきり叩いた。

そいつは気づいていなかったので突然のことに茫然としている。

教官がその手から携帯を奪い取って歩いていった。

・・・やっぱりな。自分勝手なことするからこうなる。・・・

そう思っているのと勇輝達の教官も来た。

射場に入ると硝煙の臭いが充満していた。

「この射場は200mある。はじめに5発撃って照準を調整してから10発を2回撃って、その点数を訓練の成績とする。」

教官が説明している間にも他の班の人が射撃をしていて、密閉空間に響く音に気が散っていた。

「今回はこの曳光弾を使うので、それで弾道を確認しろ。」

教官が銃弾を手にとってみせるが、その弾頭の先端はオレンジに塗られている。

・・・曳光弾かあ、楽しみだな。・・・

「今回は実弾の射撃となる。空砲でも十分危険だが、今回はそれ以上だ。」

腕とかなら簡単に千切れるからな。弾が入ってなくても絶対に同期に銃口を向けるな！人殺しの武器だと言うことを自覚して扱え。」

その後射撃に移った。

弾薬を受領して弾倉に弾薬を装填する。

弾倉は缶ペンケースみたいな音とともに弾薬を納めていく。

そして寝撃ちで射撃した。

曳光弾がオレンジの閃光を引いてレーザーのように見えた。

・・・すげえ、きれいだな。・・・

自分で双眼鏡で着弾点から照準を調整する。

しかし、その結果はイマイチだった。

外でしよげていると全員が揃って教官が話を始めた。

「諸君らは的がどうして人のシルエットなのかわかるか？…それは人の形をしたものを撃つことに抵抗をなくすためだ。訓練は慣れるために行うものだ。人を撃つことに何も感じないように近づける。まあ、海や空に進む者は今後銃を撃つ機会はほとんどないが、それだけは覚えておけ。何であろうと実感のない殺しは直ぐに慣れる。」
その言葉が印象的だった。

さらに時は流れて秋……

視界の奥には富士の嶺がはつきりと見えている。

勇輝達は背囊と64式を背負って地図を広げてひたすら山道を歩いていた。

時折休止点で弾帯に付けた水筒を取って水を飲む。

誰も休憩中にまともに動かない：いや、動けない。

肩が痛みだして、足も悲鳴を上げ始めたがそれでも進み続ける。

「永遠学生、今はどこを歩いている？」

後ろから教官が質問してきた。

「先程の休止点がここで、今は緩やかな曲がり道なのでここです。」

防水処置された地図を指差して答える。

「うん、良好だ。」

そう言つて前に進んでいく。

……教官さすがだな。僕らよりも重い荷物を持つてるのに全く辛さを感じさせていない。……

教官は64式は持っていないが背囊に加えて大型の通信機を背負っていた。

長く伸びたアンテナがたまに木の枝に引っかかる。

「○○学生、今どこだ？」

「えと、……………ここです。」

「はっ？違うだろ。お前ちゃんと見て歩いてたか？」

「前の人に付いていけばいいと思って地図は見ませんでした。」

「ふざけるなよ。お前はただ付いていくだけの羊かつ！」

勇輝の少し前を歩いていた同期がシバかれていた。

・・・ちゃんと地図を見ててよかったー。・・・
そんなこんなでついに25kmを踏破したがそのまま10分間のハイポートをやらされたのは辛かった。

そして現在……………

・・・なんか懐かしいことを思い出したな。ちよつとは役に立ってるかな。・・・

「勇輝さん、どうしたんですか？早く行きましょう！」

カナが勇輝の手を軽く掴んで上目遣いで見てくる。

・・・なっ?!どこでこんな事を?!いや、ただちよつと身長差でそうなってるだけだよな。そうだよな?・・・

「そうですね。あの店から見てもみましょうか。」

「はい！」

その返事は士官学校で聞き慣れたものと違って生き生きとしていた。

襲撃

勇輝とカナは町長の屋敷から出てギルドへと向かっていた。

・・・本当に獣人が普通にいるな。・・・

少し歩いただけでも店や通行人の中に耳や尻尾がある人がたくさんいた。

「いいですね、この町……。」

カナが呟いている。

カナは帽子を被っていないので尖ったフサフサの耳がよく見えた。道中でいくつか食べ物を買って収納した。

・・・そうだ、あれも用意しよう。・・・

ふとある事を思い出した勇輝は家具を売っている店に入った。

「いらつしやいませ。何をお求めですか？」

店員の男性が出てくる。

「手頃な大きさのテーブルとかを見たいのですが。」

「それでしたらこちらに置いてあります。ごゆっくり選んでください。」

案内されて付いていくと色々な家具が置いてある。

「カナさんは何か気に入った椅子があったら買っておいってください。」

「あ…はい！わかりました。」

そう言つて椅子が置いてあるスペースへと歩いて行った。

・・・さてと、どれがいいかな。…こいつはちよつと重いな。これは…小さすぎる。・・・

旅の途中で休憩や食事をするのにぴったりのテーブルはなかなか見つからない。

・・・どれも作りがしつかりし過ぎて外で使いにくそうなんだよな。もつと気軽に使えるそうなのはないかな。・・・

時折唸りながら商品を物色する。

「おっ、これは。」

勇輝はとあるテーブルに目をつけた。

大きさも2人で使うのに十分で持ち運びもしやすい。

・・・これなら旅先で使える。こいつにしよう。：あとは椅子かな。・・・

椅子のエリアにいくとカナがいた。

「勇輝さん：テーブル決まりましたか？私はまだ決められないところですよ。」

「そうでしたか、一緒に探しましょう。」

カナと2人でいろいろな椅子を見た。

「できたら座り心地の良いものがいいですよ。疲れている時に硬いと嫌になっちゃいますから。」

「そうですね。勇輝さん、これとかどうですか？」

カナがとある椅子のところに駆け寄り手をのせる。

手頃な大ききで、座るところには革が張られていて触ってみるとかすかな反発がある。

・・・綿か何かを詰めていてクッション性があるみたいだな。・・・

「いいですね。これにしましょう。カナさんは？」

「私も同じものにします！」

カナが笑顔で小さく跳ねた。

「すいません、これを2つください。」

近くにいた店員に頼み、テーブルも合わせて購入した。

そんなに安くはなかったが町長からの謝礼でびくともしない。

さっそく椅子とテーブルを収納して店を出た。

てつきりどこかの家に運ぶつもりと思っていた店員が驚いていた。

「ここがこの町のギルドか。」

「「コヨースカ」のギルドよりは小さいが石造りで年代を感じさせる。

これまた古そうな木の扉を開けると中は大体同じ作りをしていた。

2人は受付に行った。

「あの、「コヨースカ」から来たんですけど、依頼って受けられますか？」

勇輝が受付の若い男性に話しかける。

頭には犬つぽい垂れ耳があった。

「もちろんできますよ。まずはギルドカードを出してください。」
2人がカードを渡す。

「確認しました。これからはこの町でも活動できます。」
「ありがとうございます。」

カードを受け取つてすぐに掲示板のところに向かう。
・・・どれにしようかな。・・・結構ランク高いのが多いな。・・・
ちようどいいのはないかと探していたらカナに袖を引っ張られた。

「勇輝さん…先に宿を確保した方がいいと思います。」
ちよつと控えめに言った。

「すみません、ちよつとはしゃいでましたね。そうしましょう。」
まだ掲示板が名残惜しいがカナに続いてギルドを出た。

町の人に聞いた手頃な宿を見つけて入る。

「いらつしやいませ、お泊まりですか?」

「はい、3日で部屋はふた……………」

2つと言おうとしたらカナが袖を引っ張りジト目で見ていた。
「……………1つでお願いします。」

部屋に入ると椅子に座って休んだ。

勇輝が取った部屋は広めでベッドが2つ置いてある。

これは別の部屋を取れなかった勇輝のせめてもの策であった。

・・・流石にずっと同じベッドじゃマズイからな。・・・

「勇輝さん……………」

ベッドに腰掛けていたカナが恥ずかしそうに声をかけた。

「着替えさせてもらってもいいですか?」

カナの顔は赤くなっている。

以前買ったカナの服は異次元空間に入っている。

「あ…ええ、いいですよ。」

勇輝は一瞬動揺したが、異次元空間の入り口を開く。

以前試したが、この空間はカナだけを入れることもできることがわ
かっている。

カナが入ると勇輝は椅子に座ってしばらく待っていた。

・・・覗かないぞ。たとえ可愛い子が着替えていても気にしない。・・・

雑念を押さえつけているとカナが出て来た。

店で買った服を着ているが、ひとつだけ違う点がある。

それはカナの尻尾が出ているということだ。

「どうですか：？？」

まだカナの顔は赤かった。

・・・初めて尻尾の全体を見たな。耳といい尻尾といい、美しいものだな。・・・

「綺麗な尻尾ですね。」

「ーッ!？」

カナは動揺して真っ赤になっている。

しかし尻尾は左右にせわしなく振られていた。

・・・やっぱ尻尾はわかりやすいな。・・・

これが萌えというのだろうか：そんな考えを一瞬して目を離した。

休憩を終えると再びギルドに行って依頼を探した。

内容は馬車を襲撃しているリτζウルフの群れの討伐だった。

名前の通り、崖を主な住処とする狼のようでランクはCだった。

「今回は相手が手強いので銃を主に使わせていただきます。大丈夫ですか？」

「私も頑張りますから、心配しないでください。」

カナが勇輝を見つめて言った。

・・・機動力のある相手ならアレを使うか。・・・

「今回はたくさん撃つので離れたところから援護してください。」

「はい。」

目的地に馬車で向かっていたが御者の悲鳴が聞こえた。

「助けてくれー!リτζウルフだっ!」

「なんだって!？」

その声を聞いて馬車から飛び出る。

・・・住処に行く前に襲撃されるとはな。行く手間が省けた。・・・

馬車が止まってカナが遅れて出てきた。

馬車の周囲を赤茶色の毛に覆われた大型犬サイズの狼が囲んでいる。勇輝達を睨んで唸っている。

「カナさん！御者を守ってください！」

「はい！」

カナを離れさせた。

「さーて、コイツの実力を見せてもらおうかっ！」

勇輝は異次元から黒い塊を取り出した。

・・・9mm機関けん銃：取り回しの良さから選んだけど、精度があまり良くないらしいからうまく当てないとな。・・・

勇輝は弾を装填して構えた。

にらみ合いの中ついにリτζウルフの1体が飛び出してきた。

「喰らえッ！」

勇輝がバーストで撃つと弾は目標の上をいき、掠りもしなかった。

・・・クソッ！銃が暴れる！・・・

狼は銃声に怯んだが、またすぐに襲いかかる。

「当たれー！」

もう一度狙いを修正してバーストする。

今度は数発が命中して、狼は転ぶように倒れて死んだ。

「よしっ！いけるぞー！」

心の中でガッツポーズをして次を狙った。

指切りのバーストを2回したところで弾がきれた。

その射撃でまた1体倒したが、弾切れの際に2体同時に迫ってきた。

・・・弾切れが早いっ！・・・

機関けん銃を左手で持ち、右手で9mmけん銃を抜き取り素早く4発撃った。

距離が近かったため全て命中して助かった。

「…………危なかった。」

機関けん銃のマガジンを交換してけん銃はホルスターにしまう。

リτζウルフは勇輝に敵わないと判断したのか別の方向へと向

かった。

・・・クソツ！あつちにはカナさんと御者の人が！・・・
けん銃のリロードをしながら御者台の方へ急いだ。

「あつち行つて！」

カナは怪我をしている御者をかばって杖を構えている。

「カナさん！」

勇輝が牽制にバースト射撃をしながら包囲網を破ってカナの前に
出た。

カナを背にして立ち、リロードをしながら周りを見渡すとリツジウ
ルフが3体倒れている。

・・・カナさんがやったんだな。・・・

「よく持ちこたえました！カナさんは治療を！」

「はい！」

カナが振り向いて御者に回復魔法をかける。

「よくもやってくれたな……！ツッ！」

許さないという言葉は銃声が変わって飛び出した。

トリガーを引ききり左から右に薙ぎ払った。

何体か後ずさって避けたが2体を仕留めて、もう2体が傷を負っ
た。

・・・やっぱりばら撒きの方がいいな。けどその度に弾切れになる
のは辛いな。・・・

傷負ったものを除けば残り4体になっていた。

「勇輝さん！援護します！」

治療が終わったカナが隣に立った。

「大丈夫ですか……？こんな近くにきて……。」

心配した声でカナの方を向いて聞くが、カナはにっこりと笑った。
「大丈夫です。」

・・・どうして笑えるんだ……。とにかくケリをつけないと！……
勇輝は機関けん銃を収納してホルスターからけん銃を抜いた。

そしてナイフを取り出して左手に持ち、某ビツ○ボスの構えを取っ

た。

「ここからはCCCで勝負だ！」

怪我負った狼が後退して残りの4体が前に出て2体は突っ込んで来た。

・・・同時か！片方を確実に止める！・・・

けん銃を連射して狼が倒れる。

もう片方は怯まず進み飛び掛かって来た。

「ッ！ハアッ！」

左のナイフで空中の狼の頭に向けて振り下ろした。

ナイフは狼の頭頂に深く突き刺さり、狼は即死した。

しかし勢いは止められず勇輝を押し倒した。

「危なかったなあ」

勇輝に覆い被さっている死体を退けて立ち上がる。

リロードをして再び構えを取ると、後ろから氷の礫が飛翔し、無事

な2体を襲った。

カナの放った魔法の威力は小さいが、狼は動きを止めた。

「いい的だっ！」

じつくりと頭を狙って両方とも1発で仕留めた。

怪我をしていた2体は逃げて行った。

・・・けん銃の射程じゃ無駄だな。・・・

勇輝はけん銃をホルスターにしまい、カナの正面に立った。

「ありがとうございます。いいサポートでしたよ。」

笑顔で言えたつもりだ。

「助けてくれたのは勇輝さんも同じです。」

カナが笑って答えた。

（外伝） 着校日

勇輝が異世界に漂流する前の年……

4月1日の朝

……ここが士官学校の門……ここをくぐれば新たな人生の始まりとなるのか……

故郷の九州からやってきた勇輝は近くの宿に泊まっていたが、学校の門までバスを出してくれるということだったので問題なく到着した。

8時前に着いたが、開門は0830と書かれていて、他にも十数人が列を作っている。

……緊張するなあ、忘れ物ないよな？……
ついに門が開いて中に入った。

門の正面の本館と呼ばれる立派な建物への道はきれいな桜が咲き乱れていた。

その横道を進むと道の端に戦車が3両と戦闘機が展示されていた。
……すごいなあ、あれはGAOEでも出てきた74式戦車であったちは61式か……もう一両はなんだ？だいぶ古いようだ。戦闘機はF-11かけっこうでかいな……

早速桜よりも兵器に夢中になって歩くとその先に体育館があり、そこで新入生の受付をしていた。

「お名前と合格通知書を出してください。」

紺色の制服を着た学生の人々が名簿を見ながら聞いてきたので書類を出す。

「永遠勇輝です。お願いします。」

「えーと……あった。君は233小隊だね。この名札を持って2番目の寮に入っってね。」

……第2学隊かあ、アタリだといいなあ……
「ありがとうございます。」

名札を受け取り寮に向かう。

寮の前では人だかりができていた。

「君、2学隊？こつちにおいで。」

赤地に白い線が入った腕章をつけた学生に呼ばれた。

「こつちにきて写真を撮るから上着は脱いでね。」

言われるがままに従って写真を撮る。

「どうも。担当の人が来るからそれまで待つててね。」

そして3分ほど待った。

「永遠君…永遠君いる？」

引き締まった体格で坊主頭の背が少し高い学生が名前を呼んでいた。

「はい…ここにいます。」

「そうか、君だね。俺の名は**。君の上対番だから君の面倒をみることになる。よろしく。」

「こちらこそよろしくお願いします。」

・・・へえー、この人が対番なんだ。いい人なのかな？・・・

「いきなりだけど着いてきて。」

手招きされて小走りで追いかける。

寮の玄関でいくつかのものを受け取った。

・・・手提げ鞆にヘルメット？あとはシートと枕カバーか。・・・

そして対番を追いかけて3階に上がると、ある部屋に入った。

「ここが君の部屋の寝室だよ。このベッドの下にいろいろなものを用意してあるから使ってね。」

そう言つてベッドの下からキャスター付きの衣装ケースを引っ張り出して開けるとタオルやハンガー、下着からお風呂の道具までいろいろ揃っていた。

「それじゃ、隣の居室に挨拶しに行くよ。君の部屋の上級生になるからね。」

寝室を出て隣の扉の前に立つ。

対番が3回ノックを2回してから扉を開いて中に踏み込んだ。

「入りまあアースッ！」

短節だがすごい大声で叫ぶと勇輝を招き入れた。

勇輝は対番の左隣に立たされ、対番が右奥に座っていた人に体を向けて浅いお辞儀をした。

「233小隊2学年**学生は対番挨拶に参りましたっ！」

・・・何かの呪文か？すごい大声でスラスラと何か言っただけで聞き取れなかった。・・・

勇輝は隣でその迫力に圧倒されていた。

奥の人が気だるそうな返事をする。対番が靴を並べて部屋に上がったので見よう見まね出て着いて行く。

先ほどの人の前に並んで立つと、対番がお辞儀をした。

「着校した下対番を連れて参りましたっ！」

・・・毎回こんな大声なのか：ちよつと慣れない。・・・

「お前の自己紹介をしてみろ。」

「永遠勇輝です。九州出身で中学ではソフトテニスをしていました。高校では生徒会活動に取り組んでいました。」

緊張もあつて小さい声で話した。

隣の対番はちよつとそわそわしている。

「そうか、九州か。声が小さいが、今はまだ何も言わん。きつかったら対番でも俺たちでもいいから言えよ。」

「はい！」

そして2人は部屋を出る。

「おい、**」

「はいっ！」

対番が部屋の人に呼び止められた。

「お前は先に出とけ。」

勇輝はそそくさと部屋を出る。

「――！」

「はいっ！」

「――！！？」

「いいえっ！」

・・・なんか扉の向こうから怒号が聞こえる。対番が怒られてるの

かな?・・・

上級生は何を言っているかドアの外で聞き取れないが何やらシバいているというのには理解できた。

「帰りますっ!」

しばらくして対番が部屋から出てきた。

「よし、次に行こうか。着いてきて。」

そういう対番の顔は無理して大丈夫と言っているようだった。

もう一度隣の寝室に入った。

「これから身体検査があるから短パン着替えて身体歴の書類を持ってきて。」

そう言われた勇輝だが、問題があった。

「あの、短パン持ってきてないです…。」

「そうかつ、ちよつと待ってて。すぐ持ってくる!その間に携帯と書類を出して!」

対番が部屋を飛び出た。

用意を終えて携帯を見ようとした時に対番が戻ってきた。

「これ、俺のやつだけ使って!着替えたらすぐに行くよ。」
言われるがままに着替えて外に出た。

「この建物が医務室っていうところで何か病気や怪我があったらここに行く。検査は俺たちは付き合えないから、連絡先を渡して終わったらすぐ連絡して。」

そう言ってラ○ンの登録をして建物に入った。

中には勇輝と同じ新生が受付に並んでいた。

「そこの体温計を使って待ってて。」

迷彩服を着た女の人が体温計を渡してきた。

体温計を脇に挟んでしばらく待つと測り終わったが平熱だった。

平熱を示している体温計を係の人に渡すと紙コップを渡された。

「次は検尿だから向こうのトイレに行ってね。」

・・・まじか、でもちよつと出そうだったからなんとかかなりそう

だ。・・・

トイレを済ませるついでに尿を取って外の係の人に渡した。

「次は階段を登って奥の部屋で上の服を脱いで下さい。」

勇輝は階段を登って服を脱ぎ、次の検査の列に並んだ。

その後は肺活量の検査や採血などいろいろな検査をした。

全ての検査が終わって服を着た後に対番にメッセージを送った。

「検査終わりました。」

「すぐ行くから玄関で待つといて」

速攻で既読がついて返事が返ってきた。

「検査お疲れ様。」

玄関で3分も待たないうちに対番が迎えにきた。

「次はもうお昼だから食堂でご飯を食べるよ。」

対番について行く。

途中ですれ違うほかの学生に時折立ち止まって敬礼をしていたが、勇輝はどうすればいいのか分からずとりあえず挨拶だけした。

食堂の前の階段にすでに何人か並んでいた。

「ちようどいいな。もうすぐ開くし、並んでる人も少ない。」

対番がホツとしていた。

少し待って列が動き始めて食堂に入った。

・・・すごく広い：みんなここで食べるのか。・・・

食堂の広さに見とれているとすぐに呼ばれてついに行った。

「おっ、今日はカレーか。よかったな。マシな方だぞ。」

対番が微笑みかける。

・・・マシってどういうこと？普段マズイの!?!・・・

若干の不安を抱きながら対番のがよそつてくれたカレーを食べる。

結構いい味だった。

対番は勇輝が半分くらいしか食べていないのに、既に食べ終わりそうだった。対番はそれに気付いたらしく少しペースが落ちた。

「無理して早く食べなくてもいいよ。ゆっくりでいいからね。」

そう言ってくれたが、勇輝は遠慮してしまう性格なので逆効果だっ

た。

さつさとカレーをかきこんで席を立ち、食堂を出た。

一度部屋に戻ると今度は対番がOD色のくたびれた大きなバッグを2つ持ってきた。

「これから君の制服や靴をもらいに行くよ。ついてきてね。」

ゆっくり休むことなく出発した。

今度は寮からかなり離れた建物で移動だけでも少し疲れた。

すると、建物の前に長い列ができていた。

「けっこうかかりそうだな。ごめんね、ちよつと待たせることになりそう。」

対番が申し訳なさそうに言うがこれはどうしようもないと思った。

やつとのことで入り口に到着すると受付の人が小隊を聞いて、対番が答えながら書類を見せていた。

それが終わると階段を登って試着場と書かれている場所へ向かった。

「今のうちに服を脱いどいて！色々な服を持ってくるから！あつ、そうだ！身長何センチ？」

混み合ってる試着場で対番が畳み掛ける。

「162cmです！」

それを聞くと対番は人ごみの奥に消えていったので服を脱いでおく。

しばらくして対番が2着の紺色の制服を持ってきた。

「まずはこつちから着てみて、緩かったらこつちにして。」

制服を受け取って早速着てみる。

・・・こんな感じなんだな。やっぱりコスプレみたい。・・・

「もう片方を着てみます。」

もう1着をもらって着替える。

その間に対番はまた奥に行つて今度は制帽を持って着た。

「今のうちにこいつも調べるよ。」

帽子を被れてくれたあいだに制服も着終わった。

・・・うん、これで良さそう。帽子はまだ感覚が慣れないな。・・・
「これでいいです。帽子も。」

「りよーかいつと、次持つてくるから脱いでハンガーに掛けといて。」
脱いだ制服をハンガーにかけ終える少し前に次の服を持つてきた。

その後も何度か試着をして次々とサイズを確かめた。

全てのサイズを調べ終わると、それを記入した用紙を係に提出して
倉庫から引っぱり出してOD色のバッグに詰め込んだ。

靴の箱もあったので2つの大きなバッグでもパンパンになってか
なりの重さになった。

それでも対番は書類を挟んだバインダー以外を一人で持つて運ん
だ。

勇輝はバインダーだけを持つて一緒に部屋に向かった。

そして現在へ……………

勇輝は目を覚ますと馬車の中にいた。

その肩に寄りかかってカナが寝ていた。

目の前に美しい栗色の髪と狼系の耳があった。

・・・寝ていたのか。また、懐かしい夢を見たな。本当なら僕も新
入生を世話するはずだったのに異世界で生活してるんだよな。対番
元気にしてるかなあ。あ……………時間止まってるのか。・・・

カナの頭を優しく撫でながら、もう一眠りすることにした。

兄と妹

「勇輝さん…、勇輝さん、起きて下さい。」

カナの声が聞こえて目が覚めた。

…そうか、依頼のリτζジウルフを撃退して帰りの馬車に乗って寝たんだっけ。…

目を擦り頭の中で情報を整理しながら外の様子を伺う。

するとマーハリクの街並みが遠目に見えていた。

「どうしたんですか？カナさん。」

町までまだもう少しかかるはずなのに起こしたということに疑問を持ち尋ねた。

「御者の人にも伝えたんですけど、少し前から何かがこの馬車をつけているみたいなんです。しかも血の匂いも混じってます。」

カナの目は真剣そのもので、耳はピンと立っている。

「どうやらかなり警戒しているようでどこか落ち着きがなかった。」

「わかりました。私が双眼鏡で見えます。」

勇輝は双眼鏡を取り出してカナが示した方角を見回す。

「特に何も…：…ん？」

狭まった視界の端に一瞬動くものを見て、あわてて視界の中心に合わせる。

そこには赤茶色の狼の姿があった。

だが、血を流していて動きも鈍くなっている。

「カナさん、いましたよ。さつき私たちが逃した2匹の手負いのリτζジウルフです。」

双眼鏡を覗きながらそう言うとなカナがため息をついた。

「やつぱり…、リτζジウルフは執念深くてなかなか諦めないんです。群れを壊滅させられて傷を負っても追いかけてくるとは…。」

双眼鏡を下ろしてカナの方を見ると少し悲しそうな顔をしていた。

「そうですね、それなら彼らの執念に報いるためにも確実に仕留めてあげましょうか。」

勇輝は双眼鏡を収納し、対人狙撃銃を取り出した。

「ここから2匹を仕留めます。カナさんは耳を塞いでいて下さい。すぐに済ませます。」

カナはもちろん御者にも注意を促し、銃を構える。

・・・距離はおよそ600だったな。馬車が少し揺れるけどじっくり狙えば大丈夫だ。・・・

スコープの調整をしてレティクルの中央にリッジウルフの1体を捉える。

「ッー！」

引き金を引き、シアが落ちた瞬間に銃声が響く。

1秒も経たないうちにスコープ越しにリッジウルフが血を吹き出して転ぶのを確認した。

「あと1体！」

すぐさま次弾を装填してスコープを覗くと最後の1体は仲間が突然倒れたことに驚き、立ち止まっていた。

・・・足を止めたのは間違いだったな。・・・

動かない標的に狙いを定めてもう一度引き金を引いた。

放たれた弾丸はリッジウルフの頭に直撃し、赤い花を咲かせるように血やらを散らした。

「あつけないな……、カナさん終わりましたよ。」

対人狙撃銃を収納してカナに声をかける。

カナは以前より慣れたのか震えたりはしていなかったが、まだ目をつむっていて耳も銃声で麻痺しているようで勇輝の声に気づいていない。

「カナさん。」

申し訳ないなと思いつつながらカナの肩を優しく叩く。

「ひやつ!?…勇輝さん?！」

カナはビクツとした後目を開けてゆっくりと振り向く。

「終わったんです…か?！」

カナが恐る恐る聞いてくるが、その耳はまだ伏せられていて少し涙目だった。

・・・かわいい・・・

不謹慎にもそう思ってしまったが気持ちを切り替えて質問に答える。

「ちちゃんと仕留めましたよ。まだ銃の音はきついみたいです。ごめんなさい……。」

カナに頭を下げて謝った。

「ー!!頭を上げてください!勇輝さんは悪くないです!」

語気を強めてカナがあわてて勇輝の謝罪を否定する。

・・・どうして…カナさんはそんなに許してくれるんだ……。……未だに勇輝は許されるということに慣れず戸惑っていた。

「と…とにかくもうすぐ町に着くのでゆっくり休みましょう。」

この話はもう終わりというようにカナが提案してきたので勇輝もそれを了承して再び仮眠をとることにした。

15分ほど仮眠をとった後に馬車がマーハリクの門をくぐって止まったので2人はギルドに向かった。

ギルドに到着し、犬耳の受付に報告をする。

「こちらが報酬です。ご苦労様でした。」

「どうも、それではまた。」

さつさと報酬を受け取って宿へと急いだ。

日が落ちかけて空がオレンジ色に染まり始めた。

「ちようどいい時間ですね。リτζヰウルフが向こうから出向いて来なかったらもつと遅かったでしょうから。」

「結果的にはそうなりますね。」

・・・カナに治療してもらったとはいえ、怪我をした御者はたまつたもんじやないだろうけど……。……

そんなツツコミを自分にいれているうちに宿に到着した。

「おかえりなさいませ。これから夕食が出るので食堂へどうぞ。」

宿の従業員が2人に声をかける。

「それでは夕食と行きましようか。」

「はいー!」

やっと食事ができるということで少しテンションの上がつっていた
2人は食堂に早足で向かい、美味しい料理を堪能した。

「いやあ、ここのご飯は美味しかったですね。」

「そうですね。エリナさんのお母さんの料理にも負けなくらい美味
しかったです。」

食事を済ませた2人は部屋に入ってくつろいでいた。

勇輝がどうしてもと2つ用意したベッドにそれぞれ腰掛けて話
にふける。

「……いやあ、弟は私よりも運動ができて頭の回転も良かったも
んですから喧嘩も勝てなかったんですよ。」

「苦労してたんですね。」

勇輝は自分の世界に残してきた1つ下の弟の話をしていた。

勇輝は3人兄弟の長男で年子と中学3年生になる弟がいた。

「それで5、6年前に弟と暗黙の了解で手を出す喧嘩をしないよう
にしていたからこちらとしては助かってたんだけど、口喧嘩もかなりの
ものでろくに勝てなかったんですよ。本当に兄として情けないで
すね。」

勇輝は弟との喧嘩とその敗北を思い出しながら語る。

「……本当に一度も勝ってないんだよなあ。屁理屈やいろいろな使
いこなしてるし、何よりこっちの頭が硬すぎるんだよなあ。……」

「そうですか？勇輝さんみたいな優しいお兄さんがいて弟さんは甘え
ているんじゃないですか？」

カナのさりげないフォローから優しさを感じて少し嬉しく感じる。

「私は……勇輝さんみたいなお兄さんがいて欲しかったな……。」

「えっ!？」

カナがポツリと言った言葉を聞いて勇輝は思わず驚きの声を上げ
たが、カナも自分の発言の意味に気がついて顔が真っ赤になった。

「いっ……今のは……その……。」

カナはうつむきがちに何かを言おうとしてはモジモジしているが
勇輝も恥ずかしくて真っ直ぐに見れなかった。

あまりにも気まずいので勇輝は意を決してカナをまつすぐ見て笑顔(?)を作って冗談を言ってみることにした。

「それじゃあ私はカナさんの4つ上のお兄さんということですかねっ？お兄さんって呼んでもいいですよ？」

緊張が隠しきれず語尾がおかしくなっていたりしたが、なんとか言いきれた。

「ふえ!?…うう…お、お兄…さん？」

「グハッ!？」

予想外の反撃に撃沈されてしまう勇輝だった。

…ダメだ…僕には眩しすぎる。こんな可愛い妹がいたら幸せだろうけど、お兄さんと呼ばれるのは心臓が持たない。…

上目遣いで顔を赤くしながら勇輝を見つめるカナの尊さに耐えきれなくなった勇輝は強引に毛布を被った。

「も…もう疲れているようなので寝ることにします。……おやすみなさい。」

「おやすみ…なさい。勇輝さん……。」

疲れていたのは事実で勇輝はすぐに眠りについた。

朝日が昇り窓から光が差し込んできた。

「ううーん、朝か…。」

体を伸ばそうとして腕を上げようとする。

…ん？…まさか…またか。…

違和感を感じてゆっくりと毛布の中を覗いて見ると栗色の耳と髪をもつ頭が見えた。

…やっぱり、また入り込んできたのか。これじゃベッドを2つ用意した意味がないな。…

ため息をついた勇輝はもう少し起きないことにした。

…状況的にちよつと犯罪臭がするけどこれくらいならいかな?…

カナを起こさないように気をつけて頭の上に手を乗せる。

毛布の中にいたこともあって暖かく、その髪はさらさらとした感触

だった。

・・・本当に妹みたいだな。・・・

自然と笑みがこぼれる。

決してにやけてなどはいない。

・・・とりあえずどうしたものかな。このまま獣人の国に向かうのはともかくそこからどうしようか。カナのことが分かるとは限らないし。ほんとにカナはいつたい何者なんだ？・・・

色々と思案していたが特になにも変わらなかつたので大人しく寝ることにした。

非常呼集

軽い二度寝から勇輝は目を覚ましてもう一度毛布の中を確認する。そこには二度寝する前と変わらない姿のカナが眠っていた。

・・・もしかして僕がこのままだとしばらく起きない感じ?・・・左手を上げて腕時計を見ると8時前だった。

「カナさん、カナさん、起きて下さい。」

とりあえず声だけかけてみる。

耳がいいから起きてくれると思っていたが、全く反応が無い。

・・・どうしたものかなあ：もうしばらく寝かせてあげるか。・・・

カナを起こさないようにゆっくり体をよじりながらベッドを抜け出ようとする。

終始やましいことをしているような緊張感を感じながらなんとかベッドから抜け出した。

後ろを振り返るとカナの背中と尻尾が毛布からはみ出していた。

・・・なんか：無防備だな。ちよつと心配になってきたな。・・・

冷えてしまったては可哀想なのでゆっくりと毛布をかけて音を立てないようにして朝食を食べに行った。

食堂で軽い朝食を済ませてカナの分を持って部屋に戻った。

扉を開けるとカナは頭を毛布から出していた。

そして、勇輝が入ってきた音に反応したのか耳がピクリと動いた。

「うーん、あれっ：勇輝さん?おはようございます。」

「おはようございます。朝食を持って来たので食べて下さい。」

「あっ：……ごめんなさい!手間をかけさせてしまつて。」

寝起きからの慌て具合が可愛らしいと感じながら椅子に座つて、残り物のパンを取り出した。

カナも向かい側に座つて朝食を食べ始める。

申し訳ないと思つているようで耳がしゅんと倒れていた。

・・・やっぱり分かりやすいな。素直なところがまた可愛い……。

おっと、いかんいかん、また気を抜くところだった。・・・

雑念を振り払うようにパンを大きめにちぎって頬張る。
喉に詰まらせそうになったがなんとか呑み込んだ。

「今日はあまり戦ったりしない平和な依頼でもやりましょうか。」
「そうですね。私たちずっと戦ってばかりでしたからね。」

2人の食事が終わって今日の予定を決めた。

早速支度をしてギルドに向かった。

……流石にランクは低いものが多いな……おっ？こいつはいいね……

勇輝が掲示板に張り出されていた依頼の中でとあるものに目をつけた。

「大岩の破壊：町の外れにある食料庫として利用されている洞窟の入り口が落盤で大きな岩に塞がれてしまった。町の人々のために破壊せよ。」

「カナさん、これとかどうですか？ランクはDでそこそこのものです。」

勇輝は依頼書をカナに見せる。

「これ……できますか？私の魔法じゃ効果は薄いと思いますけど。」

カナは心配そうに言う。

「大丈夫ですよ。それに試したいこともあるので。」

そう言って勇輝は依頼書を受付に持っていった。

「それでは行きましょう！」

「は……はい。」

少しテンションの高い勇輝に付いていけないカナだった。

2人は町外れの洞窟の近くまでやって来た。

入り口らしきところの近くに人が何人か立っていた。

「すみません、依頼を受けて来たんですが。」

「おおー貴方達がそうですか。この岩のせいで冬を乗り切れるか町の人たちが心配になってるんですよ。お願いします。」

どうやらこの町の人で今回の依頼の見届け人のようだ。

「任せて下さい！粉々にしてみせます！」

勇輝は自身満々に答えた。

今の勇輝は迷彩ではなくOD一色の士官学校の作業服に半長靴を履いている。

・・・よし、やるか。・・・

「訓練非常呼集ウー！」

1人大声を出すといくつかの装備を取り出して慌ただしく動き始めた。

取り出したのは鉄帽とその中帽、弾帯、携帯円匙（折りたたみのスコップ）、サスペンダー、水筒である。

鉄帽に中帽をセットして頭に被り、他の装具を弾帯に取り付けてサスペンダーに腕を通して腰につける。

もちろん水筒の中身は満水でキャップを外すと水が表面張力で張るくらいまで入れてある。

・・・よし！3分以内に完了したぞ。訓練で教官に何度も非常呼集をかけられた成果だ。・・・

1人で満足げな雰囲気を漂わせる中カナを含め他の人たちは訳が分からず引いていた。

「何…ですか？今の…。」

カナが不思議そうに聞いてくると勇輝は得意げに答える。

「今のは非常呼集といって突然号令がかけられてそこから素早く装備を装着して事に備える修行のようなものです。」

「……へえ…そうなんですか。」

まだ理解しきれていないようでカナは頭に？が浮かんだように首を傾げていた。

「それでは始めますか！」

2人と町の人数人は洞窟の入り口へと向かった。

「結構大きいですね。こんなに大きな洞窟だとは思いませんでしたよ。」

勇輝は洞窟の入り口とそそのど真ん中に転がる大岩を見てそう言っ

た。

「元々はもう少し小さかったんですけど、少し周りを掘って広げたいんです。多分その影響で落盤したんだと思います。」

勇輝の言葉に町の人が解説する。

「……なんだ、どつちかというと自業自得じゃないか？まあ、仕方ないか。……」

心の中でつつこむと勇輝は腰の弾帯に取り付けてある携帯円匙を取り出して展開した。

円匙は真っ直ぐではなく90度の角度に設定して鍬のような形にした。

勇輝は大岩に振り上げた円匙を振り下ろした。

ザクツという音を立てて岩の表面が少し削れた。

「……完全に刃が立たないわけじゃないみたいだけどちよつと骨が折れるな。まあいいや、時間はたつぷりあるし。……」

「えいつー……ハッ……ハッ……」

何度か削って岩に小さな窪みを作った。

「……もう少し穴みたいにしないとな。……」

さらに円匙で深く削ると拳大の穴を作った。

「これで良し！C4爆弾！」

そう言つてC4爆弾を取り出して信管をセットした。

少し形を変えて穴の中に上手く詰めて導線を伸ばす。

「皆さん！離れて下さい！この岩を吹っ飛ばしますよ！」

周りの人を離れさせてスイッチを用意する。

「5……4……3……2……1……今っ!!」

スイッチで起爆した習慣に銃とは比べ物にならない爆音が周囲の空気を震わせて大岩は土煙に包まれた。

カナや町の人はもちろん勇輝も衝撃に固まっていた。

「……すげえ、どうかな？破壊できたか？……」

土煙が晴れていき、洞窟の入り口が見え始めてきた。

そこには大小の岩のカケラとぽっかりと空いた洞窟の入り口が広がっていた。

「おおー！すごい！本当に粉々になった！ありがとうございますっ！」

岩が砕かれた事実には我を取り戻した見届け人が勇輝に向いてお礼を言った。

「どういたしまして。それより中身は大丈夫そうですか？結構な衝撃があつたので影響があるかもしれないです。」

勇輝が洞窟の奥を覗き込みながら尋ねる。

「そうですね。確認してみます。でも洞窟が使えるようになっただけでも十分ですよ。あとは……こちらは私達からの些細なお礼です。どうぞ。」

見届け人が瓶詰めにした何かを取り出して勇輝に渡した。

「これはこの町の特産品である果物の砂糖漬けです。庶民にはそこそこの高級品ですよ。ぜひ召し上がってください。」

「えっ!?そんなものを頂いてもいいんですか?」

カナが突然驚きの声を上げた。

その目は輝いているように見えた。

・・・なんかすごい食いつきだな。甘い物好きなのか?・・・

カナの新たな一面にほっこりしながら勇輝は瓶を手にとって鑑定をしてみる。

「果物の砂糖漬け：内容物はリンゴと桃／熟成度良好」

・・・ふうん、いいもん貰ったな。あとでデザートにでも食べよう。・・・

瓶を収納して町へ帰ることにした。

「おっと、装備はもう要らないですね。」

装着していた装備類を慌てて収納する。

・・・こんなにぐちゃぐちゃ着けてたら変に見られるからな。・・・

しかし、装備の有無にかかわらず変な格好に見られていることには気づいていない勇輝だった。

鉄帽を作業帽に変えてカナと町へ帰った。

「カナさんは甘い物が好きなんですか?」

町に入り、ギルドへと向かいながら振り返ってカナに話しかける。「はい！大好きです！以前からスイーツに憧れてて、この前の町長の屋敷で食べた物がすごく気に入ったんです。」

元気に話すカナの姿はとても新鮮で見ている側も温かい気持ちになる。

「そうだったんですか。私も甘い物好きなんですよ。気が合いますね。」

勇輝もかなりの甘党で休日は外出先でよくクレープを食べたりしていた。

士官学校の付近の街では制服を着た学生が沢山いるが、軍服みたいな制服でクレープを食べている姿はギャップを感じるだろう。

「さっきの砂糖漬けは今日の夕食後の楽しみに取っておきましょう。」

「はい！楽しみですね！」

尻尾が大きく振られていて年相応にはしゃいでいるカナに癒される勇輝だった。

・・・いいねー。夕食後が楽しみだな。・・・

そうこうしているうちにギルドが見えてきた。

2人はギルドに入って受付に向かった。

「この依頼の達成報告に来ました。お願いします。」

「はい、…………えーと、確認しました。ご苦労様です。こちらが報酬になります。お受け取りください。」

カウンターのの上にいつものように銀貨などが入った袋が置かれた。

「ありがとうございます。」

勇輝が袋を取ってすぐに事態は急変した。

「大変だー!!町に魔物の群れが来るぞー！」

扉を開けて息を荒くしながら飛び込んで来た冒険者らしき男が叫んだ。

「なんだとっ!?こんな時期に?！」

「急げ！戦える人員を集めて緊急クエストを出せっ！」

ギルドの職員が慌ただしく動き出した。

「勇輝さん……。」

カナが周囲の空気に押されて心配そうに勇輝の腕を掴む。

「私たちも行きましょう。少しでもこの町の力になると思います。」

「……はい、戦いましょう！」

カナも杖を握りしめて決意を固める。

「よし……非常呼集ウウー！これは訓練にあらずっ！」

自分に向けて声を上げて装備を整える。

今度は2分と経たずに準備をおえた。

「行きましょう！」

2人は他の冒険者が続いて町の門へと急行した。

マーハリク防衛戦

勇輝とカナは町を襲撃して来た魔物を撃退するために町の門へと向かっていた。

周りには他の冒険者も走っている。

「みなさんーこちらですー!」

ギルドの職員の女性が案内をしていた。

・・・クソー! 身体能力は強化されているけどフル装備でここまで移動するのはキツイな。・・・

戦場に到着してから装備を出した方が良かったと後悔したが既に遅かった。

勇輝は作業着に作業帽、半長靴を身に付けて弾帯にマガジンポーチ3つと9mmけん銃のホルスター、そしてダンプポーチを後ろに付けている。

メイン武装は銃剣付きの89式小銃である。

カナは身軽なこともあり、まだ大丈夫そうだった。

・・・あと少しで門に着くな。戦う前から疲れちゃったな。・・・

門の外には既に十数人の冒険者と衛兵がその倍くらいいた。

それぞれ剣や槍、斧を構えている。

上を見ると城壁の上には弓や魔法の杖を持った遠距離系の人たちがいる。

「カナさん、私たちはあっちに行きましょう。」

「えっ、あっはい!」

カナも戦闘スタイルごとの配置に気がついたようですぐについて来た。

城壁の上に到着し、双眼鏡を取り出して町の外を見る。

・・・うわあ…いっぱいいるな。100体は超えているんじゃないか? ちらほらデカイやつもいるし。・・・

見慣れたゴブリンやコボルトのグループのほかにもっと大きな魔物もいた。

「カナさん、あの大きな魔物はなんですか?」

双眼鏡をカナに手渡しして見てもらう。

「あれは……トロールですね。力が強くて頑丈ですけどあまり頭は良くないです。」

・・・ほう、あれがトロールか、ハオー・ポオターに出て来たのに近いな。いくら頑丈でも頭を狙えば仕留められるでしょ。……

カナの説明を聞いて対策を練る。

「よし、決めた！一足先に狙撃で厄介そうなトロールを出来るだけ仕留めます。今回は本気で行くのでカナさんも気をつけてくださいね。」

一旦89式を収納して対人狙撃銃を取り出して二脚を城壁の端につけた。

「はい！勇輝さんも無理しないでください！」

カナは気丈に振る舞うと杖を両手で握りしめて遠目に見えてきた魔物の群れを真っ直ぐに見つめていた。

・・・もう一度双眼鏡で確認したところトロールは21体いた。とりあえずこいつを最優先で仕留めよう。他はゴブリンやコボルトが大半だから他の冒険者や兵士に任せればいいだろう。……スコープを覗いて調整を始めながら最初のターゲットを選んだ。

大抵の弓や魔法の射程ではまだまだ届かないが、狙撃銃なら余裕だ。

・・・よし、コイツに決めた！一撃で仕留めるっ！……

ドオオオン！！

銃声と共に放たれた弾丸はおよそ1km先のターゲットに真っ直ぐに向かつて飛翔した。

1秒と少し経ったかというタイミングで銃弾はトロールの左肩にめいちゆうした。

トロールは大した反応をせず、命中した箇所をボリボリ搔いている。

・・・クソツ！予想以上にタフだな。弾は通っているみたいだから今度こそ頭に当てる。……

薬莢を排出して着弾修正を済ませてもう1発撃った。銃声のあと一瞬の静寂をおいてトロールの額に直撃した。先ほどと同じように大した出血もなかったが、トロールは力が抜けたようにダランと膝について倒れた。突然のことで周りにいたゴブリン数体が巻き込まれて押し潰された。

「よしっ！仕留めた！」

ボルトを引いて薬莢を排出して思わず声をあげる。

宙を舞った空薬莢が足元に落ちて高い金属音を響かせる。

その一部始終を見ていた他の冒険者や兵士達は唾然としていた。

「おい、なんだよ今の……」

「すごい音がしてびっくりしたぞ！」

カナ以外はいったい何が起こったのかわかっておらずざわついていた。

「すごい……みんな！トロールが1体倒れたぞ！」

カリブの海賊が使ったような望遠鏡を持って覗いていた冒険者が感嘆の声をあげる。

・・・驚くのはこれからだぞ。次はあいつか。……

次の獲物に照準を合わせて引き金を引く。

風に流されたのかど真ん中ではなかったが右目の上に命中してトロールは真後ろに倒れた。

すぐさま次弾を装填する。

「スゲー！あいつがやってるのか！また1体倒れたぞ！」

望遠鏡を覗きながら歓声をあげる。

・・・ちよつと目立ち過ぎかな？まあ、町を守るためだからいいよね？……

慣れない声援に嬉しく思いながらもどう反応したら良いかわからなかったので無言で再びスコープを覗いた。

勇輝の狙撃によって残りのトロールも全て仕留められた。

ほとんどは一撃で仕留めたが、風などの影響で、2〜3発使うこと

もあった。

距離はおよそ700あたりだったが、トロールの動きがゆつくり過ぎたので問題なく頭を狙えた。

倒れたトロールに周囲の魔物が何体か巻き込まれたり、最後のマガジンの残弾処理で狙撃されたりしてトロール以外にもそれなりの戦果をあげていた。

・・・もうこんくらいでいいか。他の人の分まで取るつもりはないし。・・・

対人狙撃銃を収納して89式を取り出した。

「勇輝さん、すごいですね。こんなに遠くからトロールを全て倒しちゃうなんて・・・」

カナも勇輝の戦果に流石に驚いていた。

「たいしたことじゃないですよ。それよりもカナさんは音に慣れましたか?」

「まだちよつとびっくりしちやいますけど、これだけ聞いたら慣れました。」

まだ少し体が硬直しているように見えたがしつかり話せるくらいには慣れたようだ。

・・・よかった。カナも成長してるんだな。逆にカナにそうさせた僕にも責任があるよなあ。・・・

勇輝はカナの忍耐に関心しながらも、そこまで銃に頼っている自分が情けなく感じた。

・・・フン……嘆いても仕方ないよな。僕には僕の戦い方がある!・・・

89式のセレクターを「3」にして他の冒険者や兵士と一緒に魔物の群れを迎え撃つ準備を整えた。

「俺たちはここから魔物の数を減らして下のやつらを援護するっ!この町に1匹も通すな!」

「オオー!!」

何やら暑そうな性格の冒険者が周囲に呼びかけると周りの者が雄

叫びをあげた。

「構えー！……今だーッ！！」

合図と同時に無数の矢と魔法が飛び出す。

カナも氷の刃を放っていた。

タタタンッ！……タタタンッ！

勇輝も89式の3点バースト射撃で確実に獲物を仕留めていく。

しばらくして放たれた矢と魔法が群れに降り注ぎ、魔物が次々と倒れる。

「突撃イイー！！」

「ウオオー！！」

遠距離攻撃で攪乱された群れに冒険者と兵士の一団が突撃していく。

完全な乱戦状態で辺りは血と汗にまみれている。

……入り乱れてるな。単発でサポートに徹しよう。変に撃ちまくって誤射したらいけない。……

セレクターを「タ」に設定してセミオートで誤射しないように確実に狙って援護射撃をする。

勇輝は群れの中に弓を持ったゴブリンがいるのを見つけた。

勇輝が気づいた時には既にこちらに向けて矢を放っていた。

その矢はまっすぐ飛んできて勇輝の左側にいた兵士の肩に刺さった。

「ガアッ!?クソッ！やられたー！」

兵士は手に持っていた弓を落として肩を押さえて叫んだ。

「クッ…もう少し早ければ……カナさん！」

「分かりました！」

カナがすぐに兵士の元へと駆け寄って治療を始める。

「助かったよ、嬢ちゃん。」

兵士は大丈夫そうだ。

……これ以上はやらせんど。他にはいないか？……

矢を放ったゴブリンは既に下の兵士に倒されていたので他に遠距離の攻撃手段を持っている敵を探して、見つけ次第最優先で始末し

た。

弓持ちをあらかた仕留めた頃には魔物はほとんど掃討されていた。怪我人はいるものの幸い死者はいないようでお互いのカバーができています。

・・・勝敗は決したな。アイツらに撤退するという判断はできるのか？しないのなら全滅させるしかないな。・・・

何体かさらに仕留めたところで最後の1体となった大きめのコボルトが槍を持った冒険者と一騎打ちをしていた。

周囲は他の冒険者や兵士に囲まれている。

・・・手出し無用っていうことか。あのコボルト少しデカイな。・・・しばらく見ていると冒険者が押され始めていた。

周りから声援が上がる。

しかし、その声も虚しく冒険者の槍はコボルトに踏みつけられ、手に持った剣で柄の半ばから折られてしまった。

「ヤバイっ！」

勇輝はとっさに89式を構えて武器を失った冒険者に剣を振り下ろそうとしているコボルトにダブルタップで銃弾を叩き込んだ。

コボルトが胸から血を流して後ろに倒れて冒険者は力が抜けたように尻餅をついた。

・・・ふう、間に合った。・・・

「勝ったぞー!!」

「俺たちの勝利だー！」

あらゆるところから歓声や雄叫びが聞こえる。

「カナさん、お疲れ様でした。」

矢を受けた兵士の治療を終えた後も他の怪我人の治療をしていたカナに労いの言葉をかける。

「勇輝さんこそたくさん倒したみたいですね。カツコ良かったです。」

カナは初めは疲れた表情をしていたが勇輝の言葉を聞いて笑顔を見せた。

・・・頑張ったんだな。見たところあまり治療ができる人がいなかった

たみたいだし今日のMVPはカナさんで決まりだと思う。・・・

目立つ戦果では勇輝はかなりのものだったが、戦う事は他の冒険者や兵士だけでもなんとかなっていただろう。

目立たない真の功労者は貴重な回復魔法持ちでずっと走り回っていたカナだ。

「そんな事ないですよ。本当に頑張っていたのはカナさんだと思います。知らない人に駆け寄って治療するのもかなりの勇気が必要だったでしょう。」

「そ…それは…そうですね。」

カナは照れているのか顔を下に向けている。

「さあ、宿に帰ってゆっくり休みましょう！夕食後にはデザートも待ってます。」

「……はいっ！」

2人は意気揚々と宿へと戻っていった。

戦いの後

勇輝とカナはマーハリクの門から宿へと向かっていた。しかし、とある忘れ物に気づいた。

「……しまった…昼飯食べてない…。カナさんはお腹空いてるかな？空いてるよなあ…昼前にあんだけ働いたら。…」

防衛戦が始まったのは昼になる少し前で今は既に4時になろうとしている。

「そういえば、今日のおひ…」

グウウー…

勇輝が振り向きざまにカナに声をかけ始めた時にその音は聞こえてきた。

出どころは…すぐにわかった。

「ーッ!!」

カナの顔が真っ赤に染まり、耳は倒れている。

顔を下に向けて必死に恥ずかしさを堪えているようだ。

「…そりや仕方ないよな。実際食べてないんだし。それで恥ずかしい思いをするのは僕にも責任がある。…」

「いやあ、ごめんなさい。お昼を食べ損ねて私のお腹が催促しているようですね。途中で何か買って食べましょう。」

かなりわざとらしく思ったと思うが、何もしないよりはマシだろう。近くに果物屋があったのでリンゴを2つ買って分けた。

「はい、カナさん、食べてください。」

「あ…ありがとうございます。」

顔をまだうつすらと赤くしながらおずおずとリンゴを受け取る。

しかし、尻尾を振っているところから嬉しいという事は見てとれた。

それからリンゴをかじりながら再び宿へと歩を進めた。

「お帰りなさいませ。防衛戦に参加されたのですか？ご苦労様です。」宿の扉を開けると宿の従業員が2人に気づいて声をかけた。

「いえいえ、私達は城壁の上から援護していただけたのでそれ程でもないですよ。まあ、カナさんはかなり働いてましたけど。」

勇輝が謙遜の次にカナの方を見ながら言うと、カナは恥ずかしそうに勇輝の後ろに隠れた。

「そうですか。夕食はもう少し後になるので部屋でお休み下さい。今回は防衛戦の労いという事で豪勢になってますよ。」

カナの仕草を見て従業員はニッコリと笑い、2人を見送った。

「はあ、疲れましたね。本当なら依頼の後は町の観光でもしようと思つてたんですが…。」

「魔物が突然来てしまったので仕方ないですね。今日はもうゆっくり休みましょう。」

部屋に戻つて勇輝は椅子にドサリと座り込んでボヤくとカナが隣にちよこんと座った。

「私、勇輝さんのことをもっと知りたいです。勇輝さんの故郷ってどんなところなんですか？」

カナがこちらを向いて期待の目を向けている。

・・・おっと、結構積極的だな。こういうのも悪くないかな。・・・

夕食までの時間潰しがてら勇輝の故郷のことを話すことにした。

「私の出身は基本的に暖かいところで海や山などの自然が豊かでしたね。町はあまり大きくはなかったですけど、不便はありませんでした。」

流石に違う世界から来たとは言えないので国をすっ飛ばして出身県の話をすることにした。

カナは顔だけでなく耳まで勇輝に向けている。

・・・ヤバイ、可愛い。……………続けるか。・・・

「自然が豊かなものですから食べ物もいろいろあって、どれも美味しい物ばかりでした。私の記憶だとなぜか甘いものが多かったですね。特産のかんきつ類はとて小ぶりですがその中にとてつもない甘さを秘めていました。他にも甘い芋も有名でそれを使ったお菓子がたくさんありましたね。」

勇輝はの故郷である鹿児島島の小みかんとさつまいもを思い出し、少

し寂しさを募らせた。

「……これだけじゃない……やけに甘い卵焼き、しろくま、数え出したらキリがない。思い出したら食べたくなってきたなあ……。……へえー、甘いもの……。……いいなあ。」

望郷の念に駆られている勇輝をよそにカナは鹿児島島の甘いものを想像して微かににやけている。

「……やっぱりの年頃の女の子は甘いものが大好きだよ。食べさせてあげたいなあ。この世界にないのかな？ さつまいもとか……。カナの愛くるしさに寂しさが薄まり、もつと喜ばしたいという気持ちになる。」

勇輝はこの世界に故郷の食べ物に近いものがないか探そうと決心した。

とりとめのない故郷の話をしていると部屋の扉がノックされた。

「はい。」

返事をすると思扉を開けて宿の従業員が半身を出して入ってきた。

「失礼します。夕食の準備が整いましたのでお知らせに参りました。」

「待ってましたよ。わざわざご苦労様です。」

勇輝は勢いよく立ちあがり、礼を言った。

カナは慌てて立ち上がって勇輝に続いて小さく会釈した。

「それでは行きましょうか！」

「は……はい！」

早足で食堂に向かう勇輝にカナが後ろをついていった。

「おおー、すごい量だな。カナさん、見てください！」

食堂来た勇輝は並べられた料理の量に驚いていた。

カナも勇輝の後ろからその様子を見て同じように驚いている。

「……デザートの方も考えて食べないとな。バイキングとかだとすぐに腹一杯になっちゃうんだよね。……」

勇輝は本来少食だが、容量自体はそれなりにあった。

それが士官学校生活でさらに鍛えられているのでそこそこ食べられるのだが、勇輝としては別に好き好んでたくさん食べることはしな

い。

4月の初めての外出で引率の4年生にしゃぶしゃぶの食べ放題でめちやくちや食べさせられた記憶が蘇る。

・・・あの時はキツかったなあ。今となつてはいい思い出だ。けど、やっぱり食いシバきはもう勘弁願いたいね。・・・

「カナさん、私達は少し早めに切り上げて部屋でデザートをいただきますしよう。」

「はっ！……そうですね。」

小さな声でカナに話しかけると思い出したように頷いた。

「それじゃあ、いただきます！」

「いただきます。」

食べ過ぎに注意しつつ晚餐を楽しんだ。

勇輝は肉料理ばかりを食べていた。

元の世界でもバイキングや食べ放題では肉や揚げ物ばかりを食べていたが、それで胃がもたれてすぐにキツくなつてしまっていた。

……ここまで肉を食べると米が食べたくなるなあ。なんか異世界で大抵お米がないんだよね。・・・

ふと焼肉屋で食べる白米を思い出し、懐かしく感じた。

一方でカナはバランスよく食べていた。

・・・うん、カナさんは健康的でよろしい！僕はそんなこと言える立場じゃないな。いや、一応スープとかで補っている……か？・・・

カナより年上で日本でも成人の年齢でもある自分が子どものような偏食をしているのがみつともなく思えたので、適当に野菜も取った。

「そろそろ部屋に戻りますか？」

最後に野菜を片付けた勇輝がカナに呼びかける。

「私はもういいですよ。」

「それじゃあ、帰りますか。」

2人は騒ぐ他の客を尻目に部屋へと戻っていったがその足取りは軽かった。

「勇輝さん、早く食べましょう!」

「まあそんなに焦らなくても逃げませんよ。」

部屋に入るなり年相応にデザートが待ちきれないカナを微笑ましく感じながら果物の砂糖漬けが入った瓶を取り出した。

部屋の小さなテーブルの上にあらかじめ持ってきておいた手頃な皿を置く。

「んっ……結構硬いな。……よしっ開いた。」

硬く閉まっていた瓶を開けて中身を皿に広がる。

甘ったるい果物の香りが部屋内に漂っていく。

……美味そうだ。本当にいいものをいただいちやったな。……

そう思っていると嗅覚に優れたカナは瓶が開いた瞬間から幸せそうな顔をしていた。

「よし……それでは改めて、今日はお疲れ様でした!このデザートは今日一番の働きを見せたカナさんが最初に食べるべきです!どうぞ!」
「えっ!いいんですか!?!やったー!」

カナは小さく飛び跳ねて尻尾を激しく振りながら皿の上を目を輝かせながら見ている。

……なんだろうな、見ているこっちも癒されるんだよなあ。控えめなところもいいけど、やっぱり元気な姿も可愛いもんだ。……
「それじゃあお先に……いただきますっ!」

真っ先に一切れの桃にフォークを突き刺して口に頬張った。

「んんー!!美味しいですっ!……こっちは……これもいいです!」

桃の甘さの余韻に浸る間も無くリンゴも口に入れる。

そして夢見心地な顔を見せるカナはとても幸せそうだった。

「よかったですね。私もいただきます!……おおっ!甘い!」

勇輝も我慢できなくなり、好物だった桃を食べるとあまりの甘さに頬が緩んだ。

「勇輝さん、ありがとうございます!私はとっても幸せです!」

突然カナが勇輝に向かってとびっきりの笑顔を見せた。

「あ……ああ、どういたしまして……。」

・・・こんな笑顔を見せられて動揺しないわけないだろう！・・・
「こちらこそ・・・幸せです。」

2人はデザート作り出す至福の時をかみしめていた。

感謝状

開かれた窓からは月夜が覗き、そよ風が入ってくる。

部屋の中に置かれた小さなテーブルの上には空になった瓶と皿が一枚乗せられている。

「とても美味しかったですね。疲れた時は甘いものが一番です。」

勇輝がベッドに腰掛けてくつろいでいる。

「そうですねー。甘いものは最高です。」

カナはさりげなく勇輝の隣に座っている。

今も果物の砂糖漬けの余韻に浸っているようでどこか夢見心地だった。

「そういえばカナさん。」

ふと気になったことがあり、カナの方を向いて呼びかける。

「……はい!? どうしましたか?」

急に現実に戻されたかのようにビクツツとしてこちらを見る。

「魔法をたくさん使うとやっぱり疲れるんですか? 私は普段魔法を使っていないので細かいことがわからないのでいろいろ知りたいです。」

「ああ、それなら多少の疲労は溜まりますよ。実際に走ったりするのは異なりますけど使い過ぎるとなんとなく力が入りづらくなりますね。」

カナは冷静さを取り戻すと自分の感覚を思い出すように話し出した。

「……多分魔力かMPのようなものが存在するのかな。」

「勇輝さんはどんな魔法が使えるんですか?」

カナが興味のコモった視線を向けてくる。

「……困ったなあ……あんまり出来るとカナさんが落ち込んじゃうかもしれないし、何しろ僕もどこまで出来るのかわからない。」

「うーん……回復魔法はほとんど効果がありませんでしたが、今のところ雷撃を飛ばしたり火属性のものは使ったことがあります。それから無属性もある程度はできますね。」

とりあえず使ったことがあるものは言ってみた。

「雷撃…ですか…：多分光属性ですかね？結構珍しいですよ。火は一般的ですね。複数使えるなら組み合わせでもっといろいろ出来ると思えます。」

カナが難しそうに考えて分析した。

「…やっぱり光属性か…：僕の性格なら闇だと思っただが…：それは厨二病が過ぎるか。複数属性はあまりないみたいだけど特典とかで出来たりするかな？明日にでも試してみよう。…」

「そうなんですか。あとは街でガラの悪い人に絡まれた時に使った小さな衝撃を飛ばすものだったり、壊れたものを修理するものができましたね。」

「ええっ!?!修理ですか!?!かなり難しいんですよ！すごいじゃないですか！」

カナが予想外の驚きを見せたことに勇輝も驚いた。

「…イメージが大半らしいけどそれでも難しいのか。やっぱりハ○ー・ポ○ーの世界の魔法はすごいな。…」

自分の知識がかなりのサポートをしていたから実現できたのであろう魔法のありがたさを再認識した。

「珍しいといってもまだまだ使ったことが少ないので明日いろいろ試してみます。カナさんには魔法のことを教えていただきたいです。」

「そんな！私こそすごい魔法を見せて貰えるだけでも嬉しいのに、私が教えるんですか!?!」

「今のうちに勉強して銃がない時でも戦えたりすれば便利ですからね。とりあえず今日はもう休みましょうか。」

「えっ?ああ、そうですね。おやすみなさい。」

寝ると言ってベッドに寝そべったが、カナの様子が気になって寝返りを打って見てみた。

「ーッ!!」

「あっ…：寝ないんですか?」

隣のベッドに座っているカナと目が合った。

突然目が合ったからかカナはバツが悪そうに目を逸らした。

「だ…大丈夫…です。」

もごもごと絞り出したような返事をしてこちらを見ずにいる。

…絶対僕が寝るのを待つてるよな。毎回起きた時にびっくりするから…今回はちよつと揺さぶりをかけるか。…

「こつちに入ってきていいですよ。もう気にしませんから。」

「ーッ!!」

…気にするわっ!…こんなの元の世界だったら事案ものだぞ!学校に広まつたらすれ違いざまに「警務隊さん、コイツですww。」つていわれるから!…

勇輝は恥ずかしさを必死に堪えてカナを見続け、カナの耳がピンと立ったのを見逃さなかった。

「い…いんですか…?」

ゆっくり、赤らめた顔を向けながらカナが呟くように尋ねた。

「大丈夫ですよ。なんだかんだで毎日入ってるじゃないですか。私が寝るまでずっと起きているんですよ。そんな気を遣わないでいいですよ。遅くなったら健康にも悪いですから。」

「うう……。」

カナは耳を垂れて縮こまって葛藤しているようだ。

…耳が垂れているのはなかなか可愛い…っ!イカン、これでは寝るまで持たん!…

心の中でいろいろと格闘しているうちに覚悟を決めたらしく、カナが勇輝のベッドに移ってきた。

「嫌じゃ…ないですか?」

…うっ…上目遣いっ!…ここまでの可愛さだとは……士官学校で鍛えられた精神が無ければ即死だった…

勇輝の精神に大打撃を与えたカナはいつものように毛布に潜り込んで勇輝にくっついて目を閉じた。

「おやすみなさい…。」

ゆっくりと手を伸ばしてカナの頭を撫でながら呟くと尻尾で返事をした。

・・・さて：頑張れ僕の理性！これ以上は手を出すなよ。・・・
自分に強く言い聞かせるように念じて勇輝も目を閉じた。

「うーん………！ツッ！」

勇輝が目を覚ますと朝陽が微かに窓から差し込んでいる。
とりあえず体を動かそうとしたが、何やら体が重い。

・・・あれっ？動かない………なんで？・・・

思考を巡らせているうちに寝ぼけも無くなった感覚からある答え
に辿り着き、毛布を左手で少し持ち上げて中を見る。

・・・だ：だだ：抱きつかれとるーツッ!!・・・

驚愕の光景に勇輝は2分くらい思考が停止して唾然としていた。

・・・ハッ!?昨日は何もしてないよなっ?大丈夫だよな?・・・

あたふたしている勇輝のことはつゆも知らずカナは無垢な寝顔を
見せて両腕で勇輝に抱きついている。

そんな体勢なのでもちろんいろいろと接触している。

・・・これは………む………

勇輝がそれに気付いて頭の中にある単語を浮かべようとした時に
カナが動くのを感じた。

・・・！ツッ！起きるかっ!?!とりあえず狸寝入りだ!・・・

何事もなかったかのように目を閉じて寝たふりをする。

カナの息遣いが変わったのを感じたので起きたので間違いはない
ようだ。

しばらくそのまま何も変化がなかったので勇気を出して目を開け
た。

「ふえっ?」

「あっ………」

まだ寝ぼけた様子のカナとバッチリ目が合ってしまった。

「ゆ…勇輝さんっ!」

「お…おはようございます、カナさん………」

カナは一気に目が覚めて毛布から出ようとする。

しかし勇輝が右手で頭の上に手を乗せた。

「ッ!!」

「気にしないと言ったじゃないですか。慌てなくてもいいですよ。」

「…はい……………」

カナは一瞬迷ったように動いていたが、すぐに動きを止めた。

「毛布の中では息苦しいでしょう。上がってください。」

「…ちよっ!!?何言ってるんだ僕は!今でもやばいのにもっと顔を近くにしたら……………」

「えっ!?あ……………大丈夫ですっ!」

カナは恥ずかしさの限界だったようで横から飛び出してしまった。

「…ふう、こっちも助かった。僕もここでの生活でおかしくなってきたているな。……………でも、悪くは感じないのがまた……………」

「よいしよっ。」

勇輝もベッドから起き上がって大きく伸びをした。

「まあ……………朝食でも食べましょうか。」

「そ……………そうですねー?」

恥ずかしさ故にお互いぎこちない会話となったが、ひとまず食堂に向かった。

食堂では特に何事もなく、朝食を済ませて部屋で身支度を整えた。

「この宿も今日で最後ですからね。さて、行きましょうか。」

「はい。」

勇輝は久しぶりに旅人の服を着てサーベルと9mmけん銃を装備してまずはギルドに向かった。

「カナさんは昨日みたいな緊急の依頼って受けたことありますか?」

ギルドへの道すがら振り返ってカナに聞いてみる。

「コヨースカは近くの森で大量発生した魔物の討伐がありましたね。私は単独だったので参加はしてませんでした。」

「…ああ、そういうえばそうだな。あんな森が近くにあるんだからそういうこともあるよな……………」

「とにかく、報酬が楽しみですね。カナさんにはたっぷりと弾んでもらわないと。」

「そ…そんなことないですよっ！勇輝さんだってトロールを全部やつつけちゃったじゃないですか！」

「ま…まあ、そうですね。カナさんも頑張っていましたよ…。とりあえず善は急げです。行きましよう。」

お互いがお互いを褒めるつもりがちよつとした言い合いに発展しそだったのでこの話は切り上げることにした。

ギルドに到着して扉を開けると、普段はそこそこ人が入っている酒場みたいな雰囲気だったのが一転してどんちゃん騒ぎとなっていた。

「おっと…賑やかですね…。」

「ですね…。」

巻き込まれないように壁沿いに受付を目指した。

「あのー、昨日の緊急依頼の件で来たのですが…。」

「ああ、そうでしたか、お疲れ様でした。ではギルドカードを出してください。」

犬耳の男性に言われるがままカードを手渡す。

「…どうやって確認とかするんだ？昨日の倒した数とかあんまり覚えてないぞ。…」

そんな心配はすぐになくなった。

「勇輝さんですね。すごいじゃないですか！トロール21体にその他40体以上です。前衛でも後衛でも他にこんなに倒した人はいないですよ！」

「へえー、そんなに多かったですね。どうやって調べたんですか？」

「あの戦場にギルド所属の探知系の魔法が得意な職員が感知して記録しているんですよ。実際に目で観察する人もいますよ。ああいった乱戦では虚偽の報告も多いですからね。」

「…ふうーん、管制官？いや、観測員でいいか。そういうのもいるんだな。これをもっと発展させられたらAWACSみたいに使えるんだな。…」

「カナさんもカードを出してください。」

「はい。…お願いします。」

「えーと、カナさん：ですね。討伐数は6体ですが、多数の参加者から治療処置に対する感謝の言葉をいただいていますよ。この町には現在応急処置ができる人が少なかったので助かりました。」

「おー、カナさん、よかったですね！みんな見てくれてるんですよ。」
「そんな：私なんか？」

カナの反応で自分を卑下しているかもと心配したが、見たところ照れているだけだったので勇輝はホッとした。

「勇輝さんは今回の功績を称えて通常の報酬とは別に記念品が贈呈されます。カナさんにもギルドから感謝状をお送りします。」

受付の人が一旦奥に入っていくとしばらくして3人の職員を引き連れて出てきた。

それぞれ手は報酬が入っていると思われる袋と記念品らしきものがあつた。

「受付の人ともう1人の職員が勇輝の前に立つ。」

「こちらが報酬です。お受け取りください。」

まずは受付の人から袋を受け取ったが、大きさに比べてずつしりと重かった。

・・・うわっ、重たっ！金貨がたくさん入ってるのか？・・・

袋の重さに驚いているともう1人の職員が前に出た。

「記念品のバッヂです。これには加護の力が込められていてあなたを守ってくれると思います。」

受け取った小さなケースを開けると青い宝石のような綺麗な石に盾の紋章が細かく刻まれたバッヂが入っていた。

・・・おおー、いい感じだね。加護付きか。付けてて損はないだろう。・・・

カナも報酬と感謝状を受け取っていた。

いつのまにか騒いでいた他の冒険者達も勇輝達に気付いてギャラリーとなっていたのでカナは顔を赤くしながら受け取っていた。

そのまま勇輝の後ろに隠れて、ギャラリーがヒューヒューともてはやす。

・・・ああ：目立ち過ぎだな：カナさんにはちよつとキツイな。・・・

「それでは帰ります。カナさん、行きましようか。………すいません、通りまーす。」

歓声に送られながら2人は足早にギルドを出て行った。

「おっ、こんなに入ってる、そりや重いよな。」

勇輝は報酬を確認していた。

内容は金貨7枚に銀貨16枚だった。

ちなみにカナに聞いたりして知ったが、金貨は銀貨20枚の価値で銅貨にすると300枚にもなる。

カナの報酬は銀貨10枚と銅貨が8枚だった。

報酬を確認し終えたらすぐに収納した。

「そういえば、カナさんも感知とかの魔法は使えますか？あれがあつたら便利ですよね。」

「うーん……それなりの経験を積んだ人なら自然とある程度使えるみたいですよ。私は今のところ使えないですね。……けど、才能がある人はすぐかなりの範囲で使えるそうです。」

「……えーと……見聞色の覇気かな？魔法というよりはスキルっぽい感じだな。イメージもしにくいし、地道にやるしかないな。……」

「そうでしたか、修行次第ってことですかね。」

そう言つて歩き始めると昨日の依頼で行つた洞窟付近へと向かい始めた。

「あの辺りなら人もあまりいなかったですよ。魔法の練習にもつてこいだと思います。」

「確かに……あそこならできそうですね。」

2人は町並みをゆっくりと観ながら目的地へと歩いて行った。

魔導士官候補生

「よし、ここまで来れば十分試せますね。」

勇輝とカナは町の外れにある食料庫の近くの平原に来ていた。

「何かのようなのがあればいいんですけど…。」

辺りを見回しても平原が広がるだけで使えそうなものはなかった。

「勇輝さん、私が用意します！………ハアア……。」

カナが杖を構えて魔法を発動させると自販機くらいの氷の塊が現れた。

「これなら…どうですか？」

「上出来です！ありがとうございます。」

「…さて、何からやろうかな？まずは使ったことのあるものからやるか。…」

「破動の四…白雷！」

某死神が使うものとは違ってピストルに見立てた構えで雷撃を放った。

狙いやすくなっていたので思った通りに氷塊の中心に雷撃の一閃が命中した。

貫通はしなかったがそこそこ穿つことができた。

「おおー！これは以前ゴボルトと戦った時の…。しかもこんなに集中させることができるなんて。」

「まだまだ行きますよ。」

見とれているカナに構わず次の魔法を使うため構えを変える。

今度は手のひらを広げて氷塊に向ける。

「メラツ！」

ソフトボールより少し大きいくらいの火球が飛んでいった。

白雷が当たった場所から少し左にズレた。

「…手のひらだと狙いにくいな。これくらいなら誤差の範囲だけど。…」

「これは…初歩の火属性の魔法ですね。もっと強力なものができますか？」

「うーん…ちよつとやってみます。」

どうやらメラではシヨボかったようなのでアレを使ってみる。
両手を広げて氷塊に向ける。

「ハアアアア…メラゾーマツ!!」

勇輝の手の先から巨大な火球が生まれ、勢いよく飛んでいき、氷塊に当たると炎が一面を取り巻き、蒸気が上がり始めた。

炎が落ち着いた頃には氷塊はふた回りくらい小さくなっていった。

「…これは…純粹に強化しただけなのに高等魔法並みの威力…すごいじゃないですかっ!」

…よしっ! 上手くいったな、さすがメラゾーマだ。…

「次は何にしよう…あれっ…? 力が…」

「ーッ!! 勇輝さんッ!」

勇輝は暗くなる視界の中で青空とカナの姿がかろうじて見えたところで意識を失った。

「うっ…こは…。」

勇輝が目を覚ますと自分が仰向けに寝ていることが分かった。

そしてボヤけていた視界が少しずつクリアになって目の前にいるものに気がついた。

「勇輝さん…目が覚めましたか。無茶しすぎたみたいですね。…心配しました…。」

「ごめんなさい…自分の器には過ぎていたようですね。次からは気をつけます。」

勇輝が謝るが、ふと自分の体勢の違和感と柔らかい感触に気がついた。

よく見るとカナの顔は勇輝の真上にあり、少し胸の膨らみで隠れている。

「あ…。」

勇輝はカナに膝枕をされていた。

恥ずかしくなって動こうとしたが体が言うことを聞かず、動けなかった。

・・・クウー…魔力切れ…恐るべし……。・・・
勇輝は羞恥心と幾分かの邪念と戦うことを余儀なくされた。

それから5分程休んである程度動けるようになったのですぐにこの恥ずかしい状況から脱する。

「カナさん、もう大丈夫です。ありがとうございます。」

そう言いながら素早く起き上がり背中の汚れをはらった。

「もういいんですか？とりあえず何か食べた方がいいですよ。」

カナは少し残念そうな顔をしていたがすぐに切り替えてポーチから干し肉を取り出した。

「ありがとうございます。カナさんも休んでください。」

硬めの干し肉に顎の筋肉をフル活用して食べ進める。

・・・魔力の容量はたいした量ではないみたいだな。ある程度修行すれば増えるものなのか？メラゾーマの消費が多かったただけかもしれないが毎回倒れていたら使えない。・・・

「カナさん、今回みたいなこと対策って魔法の使用を控える以外に何かありますか？」

干し肉をなんとか飲み込んで質問する。

「えーと、体力と同じように鍛えているとたくさん使えるようになりますよ。ギリギリまで魔法を使うことを繰り返すと効率がいいみたいですけど危険なので程々にくださいね。」

・・・そうか、まるつきり持久力と似ているな。あまり好きじゃないんだよな…長距離とか。魔法で疲れるのは少し違うけど。・・・

「あつ、そうだ！魔法を使うときは杖などの媒介を用意した方がいいですよ。何も持たないでやると魔力の効率が悪くなって無駄に消費しちゃいます。」

カナが思い出したように魔力切れの原因の1つと思われる事を話した。

・・・ああ、そういう事だったのか、じゃあさっきのも魔力がダダ漏れで効率が悪かったって事なのか。・・・

「そうだったんですか、杖の代わりにこれでどうですか？」

勇輝はサーベルを抜いてカナに見せた。

「うーん、金属は基本的に魔力の伝導性が低いので向いてないですよ。木とかなら少しはマシですよ。」

「……やっぱり剣を杖代わりにするのはキツイか……でも木だったら……」

勇輝はM1を取り出した。

「これならいけますかね。ほとんど木で出来ているので。」

「それなら……使えると思います。」

「……杖にするにはちよつと重いけど無いよりはマシか……」

「とりあえず軽めのものをいくつか試します。今度は無茶しないですよ。」

M1を小さくなってしまった氷塊に向けると引き金に指をかけながらある呪文を唱えた。

「ヒャドー！」

引き金を引くと氷の礫が銃口の先から飛び出して氷塊に当たると、命中した箇所が凍り付いた。

「え……水属性の魔法……しかも氷……初歩的ですけどまだほかの属性が使えるんですね。」

カナは勇輝の3つ目の属性の魔法に驚いていた。

「……次は土属性だ。何にしようかな？ そうだっ！ 防御系にしよう……」

勇輝はM1を肩に担うと「マリソ立銃」の動作をして床尾を地面に着かせると同時に呪文を唱えた。

「サンドウォール！」

目の前に土の壁がせり上がって勇輝の前方を遮断した。

「……おー、想像通りだ。適当に考えたけど普通にできた……」

「……土属性まで……」

「まだまだいきますよ！ 次は……ハードプラントッ！」
もう一度「マリソ立銃」をして唱えると地面から大きな根が突き出てきた。

・・・ポケ○ンの技まで再現しちゃったな。結構使えそうだ。……でもまた魔力がヤバそうだ。せめて最後に風属性も……。……勇輝はM1を収納してサーベルを抜くと刀身に風を纏わせた。……模造刀でもある程度切れ味が出たんだから業物ならっ！……風を纏ったサーベルで目の前の土の壁を真横に切る。

・・・どうだ？……

サーベルを見ると折れてはいないようだ。

少し後に土の壁が切られたところから真つ二つになり、崩れていった。

「すごい……基本属性全てを使うなんて……」

カナは茫然と勇輝の魔法を見ていた。

・・・やつぱり、神さまの特典なんだろうな。いくらアニメとかの知識でイメージがしやすいとはいっても普通はできないんだろうな。……

「いやあ、さつきと違って魔力がなくなりそうな時の感覚が分かったので最後は剣に纏わせるだけにしました。しばらくはまた休憩ですね。」

「え……ええ、休憩ですわね。」

カナはまだ驚くから立ち直っていないようだ。

・・・マズイな……やりすぎたよなこれ。落ち込んじゃったかな？……勇輝は調子に乗っていろいろな属性の魔法を使った事を後悔した。「……いんです。すごいですよ！勇輝さん！大魔術師でもこんなに多くの属性を使えるのは少ないんですよ。修行すれば魔法だけでも十分すぎるくらいに戦えますよ！」

カナが目を輝かせながら勇輝を絶賛した。

「そ……そうですか……。嬉しいですね。」

予想外の反応に勇輝も少したじろいでした。

・・・ここまで言われると照れるな。自分自身の本当の力じゃない貫い物の力なのに……。……

カナの手放しの絶賛に後ろ向きな感情を持ってしまい、複雑な気持ちになった。

勇輝は休憩で使えそうだと思います、以前購入したテーブルと椅子を取り出した。

ある程度平なら野外でも問題なく使える。

「カナさん、少し早いんですけどお昼にしましょう。」

「あつ、この椅子！あの時の…。」

勇輝は椅子に深く腰掛けると一息ついて、昼食になりそうなものをいくつか取り出してテーブルに並べた。

カナとテーブルに向かい合って着くと食事を始めた。

「うーん、屋台で買った状態をキープできるってのは本当に便利だね。次はこの串焼きにしよう。…」

勇輝が串焼きに手を伸ばそうとした時に視界の上から黒っぽい影が現れて串焼きを搔つ攫っていった。

「なっ!?!串焼きを返せー!」

串焼き泥棒の犯人はトンビに似た大きめの鳥だった。

「クソツ、撃ち落としてやる。…」

手でピストルを形作ると上空のトンビもどきに狙いを定めた。

「食い物の怨みは怖いぞー!破動の四…!白雷!」

青白い雷撃が一直線に向かって悠々と飛んでいたトンビもどきを貫いた。

トンビもどきは煙を出しながら真つ逆さまに落ちて地面に激突した。

近くに来て見てみると胴体に穴が開いて血が流れている。

「…狙いは完璧だったみたいだな。串焼きが一本無駄になったけどいい練習になった。…」

勇輝はテーブルに戻ると上に気をつけながら食事を再開した。

「これって食べられるんですかね?流石に仕留めたまんまというのも可哀想ですし。」

食事を終えた勇輝がトンビもどきを指しながら聞いた。

「うーん…どうですかねー。よく見ますけど仕留めることもあまり

ないので特に必要ないんじゃないですか。」

カナはそれはちよつとというように控えめに答えた。

・・・たしかにトンビを食べたって話は聞かないもんな。肉が硬いのかな？勿体無いけど埋めてあげるか。・・・

携帯円匙を取り出して5分程地面を掘って丁度いいくらいの穴を作り、トンビもどきの死体を埋葬した。

「ゴイツも食べ物欲しかったただけですからね。」

そう言いながら手を合わせる。

カナは勇輝の行動を不思議そうに見ていた。

「それって何ですか？」

「ああ、これは私達の故郷の風習で死者を弔う時に冥福を祈るために行うものです。」

・・・まあいろいろと違いもあつたりするけど大抵は手を合わせるので十分だからな。・・・

「へえー、そうなんですね。」

カナも見よう見まねで手を合わせる。

・・・おお、ケモ耳美少女がぎこちなく手を合わせるところがまた可愛らしい。・・・

勇輝が感慨深くなっているとカナが立ち上がってテーブルに向かって歩き始めた。

慌てて勇輝も付いていく。

「今日はこれくらいにしてゆっくり町の観光でもしますか。」

「いいですねっ！早く行きましょう！」

いそいそとテーブルと椅子を収納すると、町へと歩き出した。

乗り物

町の観光も粗方終わらせた勇輝とカナはノシヨへの出発に向けて準備をすることにした。

宿は今日まで泊まることになっているが、出発は朝にする予定なので今のうちだ。

・・・何かいい移動手段ないかな？　そういえばアレって個人装備になるのかな？　・・・

「カナさんちよつと異次元に入ります。付いてきてください。」

人気のない横道に入って異次元空間への入り口を開くとカナにそう言っただけで消えた。

「勇輝さん!?!待ってください!」

カナも慌てて入り口に入ってしまった。

・・・うわあ、本当にあった……。あとはうまく扱えるかな？　・・・

勇輝の目の前には一台のバイクが置かれていた。

細身だが、ODカラーで無骨なデザインが力強さを感じさせ、前輪の泥除けには白い桜の花が描かれている。

・・・あんまり戦闘車両以外は詳しくないんだよな。確か川崎が作ったんだっけ？　・・・

とりあえず勇輝は偵察バイクにまたがってみた。

・・・結構デカイな。ちよつと窮屈だけど、頑張れば2人乗れそう？　・・・

身軽なカナならいけると思ったがもつと大事なことがある。

「バイクの免許持っていない……。」

勇輝は車の免許は取っていたので原付は問題なかったが、本格的なバイクとなると話は別だ。

「ばいくのめんきよってなんですか?」

いつの間にか追いついて後ろにいたカナが尋ねる。

勇輝の前にある謎の物体が気になっている。

「これはバイクという乗り物です。とても速いですよ。まあ、免許

は特になんでもありません。とにかくこれを使えばノシヨへもすぐに行けます！」

「へえー…こんなものもあるんですね！乗ってみたいです！」

カナが意外な食いつきを見せてバイクに近づいてきた。

「ああ…まだ私も始めて使うのでちよつと練習してからにしましょう。」

「うーん…それまで待ちます。」

ちよつと残念といった感じでカナの耳が垂れた。

…まずは燃料を入れて…操作をひと通り確認しないと。それから広いところで練習だな。本来想定してないだろう2人乗りでの運用になるからな。こいつが多少の悪路でも使えるのが救いだな。この世界に舗装された道路があるわけないからな。…

勇輝は近くにあつたガソリンを満タンに入れて準備だけは整えた。

異次元空間を出た2人は再び町外れの洞窟近くの平原に来ていた。

ここが一番ちよつといい広さで人もいないので都合が良かったのだ。

「よーし、始めますか。」

勇輝はガソリン満タンの偵察バイクを呼び出した。

さつそくエンジンをかけて動かしてみる。

勇輝より1年早くからずっとバイクに乗っていた弟の動作を見よう見まねで実践して少しよろめきながらも乗ることができた。

「おおー…すごい！」

自転車と同じである程度速度を出した方が安定するのでスピードを上げてみる。

尻から伝わるエンジンの振動が小気味よくテンションが上がる。

…さすが偵察オートだぜ、平原もなんともない。…

風を肌を感じながら大きくUターンしてカナの前まで来て停車した。

弟のバイクより軽く細めだったのになんとか扱えたようだ。

「早くてカッコいいですね。…ちよつとこの匂いは特徴的ですけ

ど。」

駆け寄ったカナが鼻をつまんでいる。

「乗っている間は風で気になりませんよ。今度は一緒に乗ってみましょう！」

「いいんですか？……どう乗るんですか？」

「そのまま私の後ろに同じように乗ってください。それからしっかりと掴んで落ちないようにした方が安全です。」

かつて自分が弟のバイクに乗せてもらった時に受けた説明を真似てやる。

「……できればヘルメットを着用させたいけど耳が窮屈だろうしな。というか、ノーヘルで2人乗りとかヤバくない？……」

道交法のことを思い出し、ゾツとしたが、幸いこの世界にはそんなものはない。

しかし、事故を起こしたらただではすまない。

「ごうですか？」

勇輝の後ろにカナが乗り込んで勇輝に両手でつかまった。

「ッ……大丈夫です。それでは動きますよ。」

慎重にアクセルをかけて前進し、徐々にスピードを上げる。

それなりのスピードに達すると勇輝を掴むカナの力が一層強くなった、というか体がさらに密着した。

「……多少は予想ついたけど……恥ずかしいな。……ただ、まんざらでもなかった。」

それから大きくカーブしたり蛇行したりして停車した。

「ふう、どうでしたか？」

「……すごかったです！とても爽快で風が気持ちよかったです。」

カナは目を輝かせていた。

「……カナさん結構肝が座ってきたのか？なんか絶叫マシンもいけそうな感じだな。……」

ちなみに勇輝は中学の時にいった遊園地のジェットコースターでそれなりのトラウマを持っている。

「明日はこれで一気にノシヨまで行きましょう。これなら半日で行け

ます。」

「楽しみですね。」

勇輝がエンジンを切ったバイクを収納して振り返りながら言うとかナが笑顔で答えた。

・・・あんなに密着されるのを半日か……柔らかい……イヤツ!? 違う違う!! ……

別の意味で勇輝も楽しみだった。

・・・移動手段は良いとして、他はもう特にないかな? ひと通り終わったらなんか暇になっちゃったな。どうしよう。……

とりあえず日が暮れかけて来たので町の方へと歩き出したが、何かいい暇つぶしがないか考えることに没頭していた。

今までは異世界の生活にいつぱいいつぱいだったが、ある程度余裕が出てくるとどうすればいいのかわからなくなる。

・・・とりあえず暇な時はギルドに行ってみよう。今日はもう宿に帰って休むけど。……

結局依頼に打ち込むのが一番だという結論に至った。

勇輝は心の中でこれだから軍人みたいな堅物なんだよなと思いながらも、どうしようもないのでなかった事にしてカナと並んで歩いた。

カナも後ろにくつつくのではなく隣を歩くようになっていたのでよく見えるようになった。

勇輝の方が少しだけ背が高い(といっても162cm)ので若干見下ろす形になり、カナの耳が間近に見える。

時折ピクピクと動いたりして本物だということを実感させられる。

・・・多分僕はもともとケモノナーの素質はあったらしい。確かに今までも推しキャラにケモ耳娘がそこそこいたな。……ていうかカナって誰かに似てたんだよなー。誰だっけ? 確か狼っ娘で耳や尻尾がそっくりなんだよな。……

カナの耳を眺めるなりまた考え込んでしまったが結局思い出せなかった。

宿に帰って夕食を食べたらすぐに明日の準備を始めた。

異次元から銃の弾とマガジンを取り出してはひたすら装填して収納する。

「勇輝さん、私にも手伝わせてください。」

カナが居ても立つても居られなくなり、作業を手伝い出した。

「ありがとうございます。……ってその弾は違いますよ！こっちの箱に入れてください。」

カナは大きさや長さが少し違うくらいにしか見えない弾薬をよく間違えたていたので9mmけん銃専門にもらった。

全ての銃の予備弾倉を15個ずつ装填し終わったところで休む事にした。

「たくさんやって指がいたいです…。」

「私もですね。そこまで無理して手伝わなくてもよかったですよ。」

「いえ、私だけ何もしないわけにはいきませんから。」

「そうですか…、本当にありがとうございます。」

勇輝はカナの献身的な精神に癒され、浄化されるような気持ちになった。

……これが尊いということなのか。……

夜に内職じみた作業をしていたため変なテンションになりかけていたみたいなので寝る事にした。

「カナさんも明日は早いのでしっかり休んでください。おやすみなさい。」

勇輝が最後まで言い切らないうちに毛布を被ると目を閉じたが、直後に毛布が優しく持ち上げられるのを感じるとその後カナが入り込んで来た。

……来るの早いなっ！この前でもう吹っ切れたのか!?!……

「おやすみなさい、勇輝さん。」

間近に来てからおやすみを言って来たので勇輝はドキッとさせられてしまった。

……ああーっ、もう全く……カナさんには敵わないな。……

勇輝はなんとか冷静さを取り戻して眠りについた。

対空戦闘

朝日が部屋を明るく照らして心地よい暖かさにする。

起きるのに丁度いい時間であったが、勇輝はその2時間は前から既に目が覚めていた。

・・・マズイ、これはマズイぞ……。

勇輝はバイクに乗っている夢を見ていた。

そこにはカナもいて勇輝に両手でつかまっている。

だが、ふと目が覚めてしまったので一旦寝返りでもうとうと思つたが、体が重い。

夢は覚めているのにまだ掴まれているような感覚がする。

・・・あつ：そういうことか……。

カナがバイクに乗っていた時のように勇輝に抱きついて寝ていた。

以前より密着度が上がっていて当たっているモノもよりはつきりとわかる。

・・・うーん……動けない。めっちゃ嬉し……イヤ、恥ずかしい。ていうかカナさんはこれをどう思うのか？……

そんなこんなで結局2時間ほどそのままになってしまった。

勇輝はほとんど姿勢を変えていないので固まった体を動かしたい。

・・・流石にそろそろ限界だな。何かいい方法はないか？……

うだ、せっかくだから尻尾をモフろう。今ならちようどいい……

動かせる左手を伸ばして勇輝の体の上まで伸びていた尻尾に触れてみる。

「おおっ。」

癒される触り心地に思わず声が出てしまった。

カナはまだ起きていないのでもうすこし堪能しておく事にした。

・・・髪の毛とはまた違うけどサラサラだな。だけど、その中にも

柔らかさも兼ね備えている。何よりあったかい……

右手が動かせないのが残念だが、その分たっぷりとモフった。

「勇輝さん……？私の尻尾……。」

「ッ!?」

突然の声に驚いて左手を戻す。

顔を向けるとカナが顔を赤くしながら勇輝を見ていた。既に体を離しているので自由に動けるようになった。

「ご…ごめんなさい! ちょうどいいところにあつたものでつい…。」
自分の恥ずかしさを隠すためにも頭を下げ顔を見せないようにした。

「わわ…私こそくつつき過ぎました…迷惑でしたよね…?」

「いえっ! そんなことありませんっ!!」

勢いよく頭を上げて若干大声で言ったのでカナがびっくりして後ろに後ずさった。

「どうしてもという時は起こすかもしれないですが、とてもあつたか
くて柔らかか…気持ち良く寝られるので全然迷惑ではないです。」

「ッ! ……それなら良かったです…。」

カナが顔をうつすらと赤くしてもじもじとしていた。

「オホン、朝食にしますか。済ませたら出発します。」

「……はい。」

今日がこの宿最期の食事ということで少し多めに食べる事にした。

「ここのパンはなかなか美味しいのでたくさん食べれますね。」

「このジャムが甘くて最高です。」

朝食はパンにイチゴみたいな味のジャムが付いていて、簡素な野菜のスープと牛乳があつた。

「ふう、ごちそうさまでした。カナさん、行きましようか。」

「はい、ごちそうさまでした!」

2人は揃って食堂を後にして一度部屋に戻った。

…まあ、大した荷物は置いてないけど少し休んでから行くか。…
ベッドに腰掛けて10分ほど休憩して、その後は異次元空間で着替えて装備を整えた。

「おやつ、出発ですか? お早いですね。」

「はい、3日間お世話になりました。」

声をかけてきた宿の主人に挨拶をして宿を出た。

・・・やっぱりの視線はまだ慣れないなあ。・・・

勇輝は町中で通行人に二度見を何度もされたり、睨まれたりしていた。

ちなみに今の勇輝の装備はサーベルと9mmけん銃にポーチ系、そして……迷彩服である。

カナも勇輝の浴びる視線の巻き添えを食らって落ち着きがない。

「カナさんもう少して門に着きますからそれまでの辛抱です。」

「ううー…はい。」

・・・何が辛抱だよ！町中歩くのに何で我慢せにやならん！異世界ならもつと変わった格好のやつの人や2人はいるだろう！・・・
心の中で文句をいっても変わらないことは分かっているが言わずにはいられなかった。

しばらく歩いて町の門を出ようとするとき見たことのある鎧の団がいた。

「おおー、隊長さん、元気ですか？ちょうどこれから町を出るところだったんですよ。」

「ほうー！勇輝殿か。聞いたぞ！魔物をたくさん倒したそうだな！カナ殿もたくさんの人を助けてくれたようだな。これからノシヨへ行くんだな？」

騎士団の隊長が2人の前に出てくると熱く語り出した。

「ええ、行ったことはありませんか？知っていることはなんでも構いません。」

「あー、そうだな。名前はなんだったか…：なんちやら聖堂っていうところはすごかったぞ！あとはここよりもっと獣人が多いな。まあ、そんな所だ。2人なら大丈夫だろう。達者でな。」

「はい！隊長さんも体には気をつけてくださいね。」

「おう、余計なお世話だ！」

騎士の団に見送られて2人は門を抜けた。

門を抜けて町を出て10分ほど歩いた。

「ここら辺でいいですかね。カナさん、ここからはこれで行きましよう。」

町からある程度離れて平原と馬車の道のみが続いているところまで来たので人の目の心配は無い。

勇輝は偵察バイクを取り出した。

・・・燃料は満タン、後ろのラックにもしもの時用に9mm機関けん銃と適当なサイズで使い勝手が良さそうな雑囊もある。・・・

一応帽子を収納して88式鉄帽に変えておいた。

エンジンをかけてバイクにまたがって周囲を見回す。

「よし、カナさん、乗ってください。」

「はいー!」

カナが後ろに座って勇輝にしつかりと抱きつく。

杖は邪魔になるので簡易的なスリングを通して背負わせている。

「それでは行きますよー!」

一気にアクセルを全開にして平原を駆け抜ける。

エンジンの音が響き、振動が伝わって来る。

「風が気持ちいいですね。」

「分かりますか?これがこの乗り物の魅力の1つなんです。」

カナはすつかりバイクが気に入ったようだ。

・・・おっと、アレは馬車…か?追い越すか。本当にバイクって速くて便利だなあ。・・・

遙かに前にいたはずの馬車にグングンと追いついてしまいいには追い越してしまった。

「あつという間に追い抜いちゃいましたね。」

「これがバイクの実力です。」

その後20分ほど移動を続けてちょうど良さそうところで休憩を挟んだ。

・・・えーと30分くらいを60kmで移動してたから…この辺りかな?この調子なら夕方には着きそうだ。あつさりすぎるけど早い

に越したことはないからな。・・・

勇輝が取り出した屋台の軽食を食べながら地図を見て現在地を確認していた。

「・・・こういう地図を見ていると1年の時の地図判読を思い出すな。コンパスとかを使って自分の位置や目的地の方位を調べたりしてひたすら歩いていたなあ。・・・」

久しぶりに士官学校時代の訓練が役に立ちそうだ。

「カナさん、そろそろ行きましょう。」

「はい。勇輝さんは大丈夫ですか？もう少し休んでもいいんじゃないですか？」

カナは心配そうに見つめてくる。

「大丈夫ですよ。ただ運転するだけなのでそんなに疲れないですよ。」

軽めに受け流してバイクの元へ向かい、エンジンをかける。

「無理しないでくださいね。」

カナが優しく抱きついてきたので一瞬動揺してアクセルを掛けられなかった。

「……行きますよ。」

照れを隠しながら再び移動を開始した。

「・・・暇だな。ずっと平原をドライブしていても飽きてくる。何も無いのが一番なのはわかっていているけど暇なものもキツイな。・・・」

少しぼーっとしながら運転を続けていると勇輝をつかんでいるカナの力が強くなったのを感じた。

「ーッ！勇輝さん！何かに向かって来てます！……上ですっ！」

「えっ!?……なっ、アレは!?」

見上げた勇輝の視界を覆う黒い影は大きく翼を広げながらこちらに向かって来ていた。

「カナさん！アレはっ?」

「たぶんワイバーンです！火を吐いて攻撃してきます！注意してください！私も迎撃してみます。」

カナが片手を離して背中の杖を取った。

「厄介ですね……振り落とされないように気をつけてください！」

勇輝はスピードを上げて振り切ろうとするがワイバーンは完全に目をつけたようで逃してはくれないらしい。

・・・クソツツ！しつこいな。ミラーが付いていたらもう少し見えやすいんだけど。・・・

運転に支障が出ない程度に振り返って見上げてワイバーンを観察していた。

「勇輝さん！ブレスがきます！」

ワイバーンは口の隙間から炎を吹き出して今にもブレスを放とうとしていた。

「撃ってきた瞬間に右に避けます！掴まっててください！」

「はっ…はい！」

「……………今だっ！」

ハンドルを大きく切って右に動いた。

直後に火球が勇輝達の左側に着弾して小さな爆発とともに炎で包んだ。

…なかなかの威力、精度だな。当たったらひとたまりもない。…

冷や汗をかきながら再びワイバーンを見上げると、既にブレスの発射体制になっていた。

・・・連射もきくのか!?回避しないと!・・・

「次は左に避けます！」

「きやあつ……………大丈夫です。」

カナが体勢を少し崩したがなんとか持ち堪えたようだ。

火球がさつきまで2人のいた場所に着弾する。

「カナさん！反撃を！」

「はい……………当たって！」

カナが杖を向けてさらにもう1発ブレスを放とうとしているワイバーンに氷の塊を放つ。

しかし、狙いが定まっておらず横に逸れてしまった。

「そんな……………」

反撃を受けたワイバーンはブレスを中断してさらに上空へと距離

を置いて様子を伺っている。

勇輝達の真上に陣取っているので形勢は依然不利だ。

・・・何か手はないか？対空手段……………。

「あるじゃないか。」

勇輝はある兵器を思い出してニヤリと笑った。

右手を離して斜め上に掲げるとボソリとつぶやいた。

「91式携帯地对空誘導弾！」

その瞬間黒く細長い塊が現れてどっしりとした感触でバランスを少し崩した。

・・・お、重い…………。M1を4挺片手で持ってるみたいだ。これは両手じゃないと使えないな…………という事はアレをやらないとダメか？…………

「カナさん！弾幕を張って出来るだけ近づけないでください！威力は必要ありません。」

「分かりました！」

再び接近してきたワイバーンにカナの氷魔法の弾幕が襲いかかり、ブレスの妨害をする。

・・・よし、やるなら今だ。出来るかな…いや、やるしかない！…

勇輝はゆつくりとハンドルを切ってワイバーンを正面に捉えた。

「ッー！」

勇輝は両手をハンドルをから離して膝を伸ばした。

体は真っ直ぐ伸びて両手で地对空誘導弾を照準している。

・・・これは初めて扱うけど、使い方はある程度知っている！あとはバランスを保っている間に……………。

ワイバーンは火を吐くということはおそらく赤外線でも誘導できるかもしれないが、念のため可視光イメージ誘導方式で狙う。

「……………急げ、急げ……………よし！喰らえーッー！」

長い筒からミサイルが飛び出してある程度離れると2段目のロケットによってさらにグングンとワイバーンに向かって飛翔していく。

「おおっ、危なかったー。」

慌てて片手でハンドルを掴んで体勢を整える。

ワイバーンは向かってくる異様な物体に危険を感じて高度を上げて回避しようとするが、ミサイルは振り切れない。

「無駄だー落ちろーッ！」

そしてミサイルはワイバーンの胴体に直撃してありつただけの運動エネルギーで表面を貫き、爆発して翼や首が胴体から離れた。

発射してすぐに本体を収納して両手でハンドルを握っていた勇輝は右手でガッツポーズをした。

カナは杖を片手に唾然としていた。

勇輝はスピードを緩めて墜落したワイバーンの近くに向かった。

「うわっ、結構エグいな。流石にミサイル食らったらこうもなるか。」

爆発で一部がバラバラになったワイバーンの死体を検分していた。

とりあえず記念とか何かに使えそうな首は収納してある。

バイクに積んであった9mm機関けん銃を構えてマガジンの全弾を胴体や翼に叩き込む。

・・・9mmじゃあほとんど効果がないな。翼膜でさえこの距離でやっとか。・・・

胴体はほとんどの銃弾を弾き、翼も翼膜でやっとならうくらいだった。

ため息をつきながら9mm機関けん銃のリロードをしてバイクに戻すと89式を取り出して同じように30発撃った。

「マジか……。硬すぎない？」

結果は翼や関節などの可動部のほんの一部を除いて殻に傷がついただけだった。

・・・貫通力のある5.56mmでこれか……。7.62mmも微妙かな。・・・

「じゃあこれならどうだ？」

勇輝はサーベルを抜いて風を纏わせた。

「ハアッ！」

胴体に真つ直ぐ振り下ろした一撃はかなり重かったが切ることができた。

しかし、力が足りず、途中で刃が止まってしまった。

「うーん、いけなくはないみたいだけどこれもキツイな。次は魔法か。」

サーベルを引き抜いて鞘に納めると右手をピストルの形にして死体に向ける。

「破動の四…白雷！」

雷撃が狙ったところに真つ直ぐ伸びて表面の鱗を焦がしながら小さな穴を穿った。

近くで確認すると周囲は黒く焦がっていて、穴はそこまで深くない。

「…表面を少し貫通したくらいか。まだ威力不足だな。最後はC4を試すか。…」

やれやれといった感じでC4爆弾を取り出してワイバーンの胴体にセットすると急いで離れて起爆した。

「……………どうかな？……………ああ、まあ悪くないか。」

C4爆弾をセットした箇所は見事に吹き飛んでいた。

「…今のところは爆発物が有効か…手間がかかるな。こんなのにたくさん来られたらたまったもんじゃない。…」

「カナさん！お待たせしました。…………あれっ？それどうかしたんですか？」

ずっと放りっぱなしだったカナの元に駆け寄ると、カナは杖を何やらいじっていた。

「あつ、勇輝さん、終わりましたか？今この鱗を少し加工してこの杖に組み込もうとしてるんですよ。ワイバーンの鱗は魔力の伝導効率が結構いいんですよ。」

「へえ、そうなんですね。それじゃ私もいくつか鱗を取っておきましようかね。」

ナイフで状態が良さそうな鱗を10枚ほど取ってバイクに積んである雑嚢に入れた。

「そろそろ出発しましょう！少し予定が遅くなりそうなので急ぎま

す。」

「はい！今行きます！」

2人はワイバーンを後にしてノシヨへの道に戻った。

ノシヨの夜

勇輝とカナはバイクで獣人の国ノシヨへと向かっていた。

ワイバーンの襲撃のあとは特に何事も起こらず（ガス欠があった）夕方にはそれらしい街並みが遠目に見えてきた。

「あれがノシヨですか……今までの街と少し違う街並みですね。」

「私も初めて見ます。もしかしたら失った記憶の中にあっただかもしれないですけど……。」

勇輝はカナが勇輝を掴む力が強くなったのを感じた。

「大丈夫です！あの街でカナさんの手掛かりを探しましょう！きつと何かあるはずですよ。」

真つ直ぐ前を向いて勇輝は声を上げた。

……昔の僕だったらこんな根拠のないことは言えない……けど今はこう言ってあげたいんだ。カナさんの力になりたい。絶対に手掛かりを見つけてやる。……

勇輝はアクセルを回してスピードを上げた。

「ここからは歩きで行きましょう。ここまで来れば十分でしょう。」

バイクから降りて収納し、雑囊だけは肩にかける。

日が暮れかけて空が薄いオレンジ色に染まっている。

……ちよつと急いだ方がいいな。日が暮れる前には門を通りたい。……

「ちよつとペースをあげましょう。日が暮れる前には到着したいですからね。」

「そうですね。」

2人は足早に馬車道に沿って歩いて行った。

なんとか日暮れ前に門の前に到着した2人は斧を持った熊みみたいなゴツイ獣人の衛兵に声をかけた。

「すいません、街に入りたいのですが。私とこの子の2名です。」

カナを指差して衛兵に尋ねる。

「おう、日暮れ前に着いて良かったな。あんたらどこからきたんだ？

目的は？」

怖そうな見た目に反して人当たりの良さそうな印象に一瞬驚いたがすぐに切り替えて質問に答える。

「私たちはコヨースカを出て途中でマーハリクを経由してきました。冒険者をやっつけて色々な街を転々と旅をしています。」

「ほおー、そうかい。そんなカワイイ娘と2人で旅とは羨ましいねえ。いいぞ、通行料は1人銀貨一枚だ。」

「はうー……。」

カナが勇輝の後ろに隠れて服を掴んでいる。

・・・照れてるのかな？ 恥ずかしいけど確かにカナとの旅は楽しいからな。・・・

「えつと……はい、2人分です。どうぞ。」

若干もたつきながらも銀貨を支払って門を通過した。

・・・もう暗くなってるからあんまり街の様子が見えない。けど、今までの街より騒がしいな。・・・

通りには酒場らしい店が沢山あって中から光が漏れて賑やかな騒ぎ声が聞こえてくる。

「賑やかですね。……ちよつとお酒臭いです……。」

「まあ、ひとまずギルドでも探しますか。あとは……明かりですね。」

勇輝は道端で拾った手頃な木の枝を構えて上に向けた。

「ルーモスー！」

枝の先端に白い光の球が発生して周囲を照らした。

「あー、まだちよつと暗いな。……ルーモス……マキシマー！」

先程より大きい球が発生して2人の周りを照らし出した。

「すごく明るいですね。るーもすつてなんですか？」

カナがぼんやり照らされた光の中で勇輝に尋ねた。

「ええと確か……「光よ」っていう意味だったと思います。「マキシマ」はその強化版みたい感じですよ。」

「やっぱりハオー・ポーターの魔法は便利だと思いつつながら照らされて安全になった道を進む。」

先程より明るくなったので分かるようになったが、今まで街と大きく違うのは建物の多くが木造であるというところだ。

ところどころ石造りの建物もちらほらとあったが数は少なかった。「ただ歩いていてもわからないですね。ちよつとこの酒場で聞いてきます。カナさんはどうしますか？」

あてもなく歩くのに業を煮やし、振り返ってカナに提案した。

「私は…着いていきます。」

少し躊躇いがあったがどうやら決心は固いようだ。

…改めて考えれば外で待つてもらうのも心配だしな。何かあっても近くにいれば守ってあげられる。…

2人は近くにあった酒場の扉を開けた。

開けた途端に食べ物や酒の匂いが混じった独特の匂いと喧騒が2人を包んだ。

カナの顔が引きつっている。

…未成年にはキツイよね。僕も新成人みたいなもんだから分かるなあ。…

気を取り直してマスターらしき狐耳の獣人に話しかける。

「あの、初めてこの街に来たのですが、ギルドはどこにありますか？」

「ふむ、初めてですか…ようこそノシヨへ。一杯どうですか？」

「うーん…酒は遠慮します。連れもいて宿も確保しないといけないので。」

考えてみれば異世界の酒をまだろくに飲んだことがなかったので飲みたいと思つたが、急ぎなので断つた。

「残念ですね。それじゃあ落ち着いたときにでもまたいらしてください。ギルドはこの店の通りをまっすぐ行つて2つ目の石造りの建物です。あとはその少し前にちよつと良さそうな宿もありますよ。」

「宿まで…ありがとうございます！明日にでもまたお邪魔させて貰います。」

親切なマスターのお陰で宿も確保できそうだ。

「おーい、嬢ちゃんーオレらと遊ぼうや。こつちこいよー」

「い…イヤつ、離して…！」

「カナさん！」

酔っ払いの声に振り向くとカナが腕を掴まれていた。

勇輝がすぐにその手を払いのけるとカナは勇輝の後ろに隠れた。

カナはひどく怯えているようで勇輝を掴む手は震えていた。

「あ？何すんだよー。いいじゃねーか！」

・・・クソっ、この酔っ払い、たち悪いな。吹っ飛ばすか？・・・

嫌がつてるじゃないですか！大人しく向こうで飲んでてください。」

若干キレ気味に答えたが、これはあまり良い行動では無かった。

「んだとてめー！ガキのくせに調子こいてんじゃねーぞっ！」

酔っ払いが千鳥足で殴りかかろうとして向かって来た。

「あーもう！破動のー！：しよ・・・」

バシヤ！！

勇輝が指を酔っ払いに向けて吹っ飛ばそうした時に酔っ払いの顔に突然水が浴びせられた。

「他のお客様の迷惑です。大人しくするか店を出てください。」

勇輝が振り返るとマスターが空になったグラスを持っている。

初老らしい感じだが、その中に凍りつくような威圧感があった。

「チッ！わかったよ。マスターには敵わねーや。」

水をかぶって少し冷静さを取り戻した酔っ払いは踵を返した。

「マスター・・・ありがとうございます！」

勇輝が頭を下げるとカナも一緒に頭を下げた。

「お客さんを守るのが店の主の務めですから。」

マスターはニッコリと微笑んだ。

・・・カツコいいな、カツコいいおじさんってこういうのを言うんだな。・・・

2人は足早に酒場の出入り口に向かい、店を出る前にもう一度マスターにお辞儀をした。

「大丈夫でしたか？カナさん。」

「は・・・はい。ありがとうございます・・・。」

「ごめんなさい・・・怖い思いをさせてしまつて。」

勇輝は頭を掻きながら下を向く。

「いえっ！……勇輝さんが助けてくれて……嬉しかったです。」

カナが少しうつむきがちに勇輝に顔を向けて眩くように言った。

……か、可愛い……勇気出して良かった……。……

勇輝は暖かい気持ちに包まれて嬉しくなった。

「さて、ギルドに行つてさっさと済ませますか！」

「そうですね！」

再びルーモスで明かりを灯して道を進んだ。

「これ……ですよね。相変わらずこのデザインは変わらないんですね……。」

大きさに多少の違いがあるもののギルドの建物は今までの街で見
たものとほとんど同じだった。

「同じ見た目の方がすぐ見つけれられるからいいじゃないですか？」

「まあ、そうですね。多分そんな理由ですよ。」

ギルドの扉を開けるとまたもや騒ぎ声が聞こえてくる。

カナはあからさまにイヤな顔をしている。

……あんなことがあったらイヤになるよなあ。よし！……

「えっ!?!勇輝さん!?!」

勇輝はカナの手を取つて引つ張つて受付まで早足で進んだ。

カナは顔を真っ赤にして下を向いている。

受付まで辿り着くとやっと手を離れた。

カナは勇輝が触れていた手を握りしめてどこか上の空だった。

「すいません、マーハリクから来ました。登録お願いします。」

「それはいいけど……あの子は……。」

猫っぽい耳の若い女の獣人はカナを指して尋ねた。

「ああ……カナさん？ギルドカード出してください。……カナさん？」

「ひゃい!?!」

やっと我に返つたカナも一緒にギルドカードを提出して登録を済
ませる。

「はいどうぞ、今日は遅いから明日から頑張ってくださいね！」

「ありがとうございます。カナさん、行きましょう。」

「はい…。」

下を向いて顔が赤いカナがとぼとぼとついてくる。

ギルドを出て近くにある宿に入ってとりあえず一泊することにした。

マスターがオススメしただけあつて悪くなさそうだ。

疲れていたので手っ取り早く手続きを済ませると部屋へと直行してベッドに倒れこんだ。

「はあー、疲れた。もう今日はすぐに寝ます。カナさんも早めに休んでくださいね。」

装備を外して適当に収納すると毛布を被った。

少し間を置いてカナも入って来た。

ただ、今回は最初からくっついて来た。

「なっ!?!カナさん?」

「今日はこうさせてください…。」

顔は見れなかったがひどくしおらしく感じたので黙って自由にさせた。

・・・明日からはこの街でカナさんの記憶の手掛かりを探すんだ…。

長時間のバイクの運転で慣れない疲れが溜まっていたのですぐに眠りについた。

仲違い

「ふぁー…よく寝たな。やっぱりカナさんはくっ付いてるな。」

寝起きで勇輝は独り言を呟きカナを起こさないように優しく起きて立ち上がると大きな伸びをした。

「よし、今日は観光を兼ねて街の探索だ。カナさんの手掛かりが見つかるといいんだけど…。…」

朝早くの寝起き早々から黄昏る。

とりあえず朝食を取るために部屋を出て食堂へ向かった。

食堂で出された朝食はありふれたパンと牛乳だけだった。

たいして美味しくなかったパンに文句を言いたくなりながらカナの分も持って帰る。

部屋の中の小さなテーブルに持ってきた朝食を置いて勇輝は異次元空間に入った。

異次元空間の中は全く変化せずに収納されているものが並んでいる。…あつたあつた、カールグスタフ君だ。あとはパンツァーファウストもあるな。91式があるんならこれもあるよな。…

勇輝は改めて自分の取り出せる物の確認をしていた。

91式携帯地对空誘導はぶつつけ本番でなんとか使えたものの、普段からの訓練が必要なので今のうちに把握しておく。

「よし、マニュアルはこれか…：使い方自体は簡単だな。カール君はリロードが複雑だけど…。」

今後の強敵に備えて対戦車兵器の使い方や実際の重さの把握をした。

「…やっぱりミサイルやロケット兵器は重いな。それでもよくここまで小型化できもんだよな。現代の歩兵は万能すぎてキツイ。…一人でごちりながら一通りの武器の確認を済ませた。」

勇輝が異次元空間を出るといつの間にか起きていたカナと目が合った。

「あつ、おはようございます…。」

「お…おはようございます…。」

ぎごちない挨拶を終えたらカナに持ってきてあげた朝食をすすめて、勇輝は収納していた適当な軽食を取り出して食べた。

「今日は騎士団の隊長さんが言っていた聖堂をはじめとしてこの街の散策をします。何か手掛かりがあるといいですね。」

「…そうですね。ただ、何も手掛かりがなくても私は勇輝さんといられるだけで幸せです。」

「じよ…冗談はよして下さい。私なんかで…。」

「冗談なんかじゃありません!」

カナが怒って椅子から立ち上がって声を上げた。

怒りで目が見開かれているが次第にウルウルとして涙が溢れてきた。

「私は勇輝さんのことが…勇輝さんが…。」

カナの肩が震えて顔は下を向いている。

「カナさん…。」

「どうして勇輝さんはそんなことばかり…言うんですか？」

「それは…。」

「もういいですっ!」

勇輝はどうすればいいか分からず立ち尽くしていた。

カナは涙をこぼしながら部屋を飛び出して行った。

勇輝はしばらく茫然として何も出来なかった。

カナが部屋を出てしばらくしてからふらふらと立ち上がって部屋を出る。

「…クソツ…どうしたらいいんだ!カナさんにどう応えたら?あくまでも高校生の年だぞ!僕なんかを決めるには早すぎる。どうしたら…。」

悩みながら歩いていると昨日の酒場が目の前に出てきた。

「…ここは…、この時間でもマスターやってるかな?…」

酒場の扉を開けるとがらんとした酒場にたった一人カウンターで

グラスを拭いているマスターがいた。

：：すげえ、つくづく絵になる人だな。雰囲気がいケメン……。：：
勇輝は典型的なイケメンはあまり好きではない。

アニメや漫画で好きなキャラは渋いおっさんキャラだったり性格がカッコいい主人公の友達のデブオタが多かったりする。

この酒場のマスターは勇輝の好みにどストライクだった。(ホモではない)

「おや？どうされたんですか？こんな早くにまたいらしてくれたのは嬉しいですが、飲む時間ではないですよ。」

マスターがグラスを拭き終わって棚に戻すと勇輝に向かって微笑んだ。

「あの、ミルクティーありますか？あつたら一杯お願いします。」

「ええ、ありますよ。少々お待ちを。」

勇輝がカウンターに座りこみ大きなため息を漏らす。

「お連れの方はどうされたんですか？」

「あつ：ああ、今：：ちよつと仲違いがあつたもので：：。」

勇輝は痛いところを突かれて暗い顔になって小さな声で話した。

「そうでしたか。是非お話して下さい。この老いぼれでも役に立てると思いますよ。：：：はいどうぞ。」

カップに入れられたミルクティーを手にとるとほのかな温かさを感ずる。

・・・お：：美味しい：：。この世界の茶葉もなかなかいいな。アツサムっぽいけど少し違う。あまり詳しいわけじゃないけど香りが違うな。・・・

ミルクティーを少し口に含んで香りや味を確かめると気持ちが落ち着いた。

「私：：カナさんにとっても懐かれています：：私がそれに応えられるのか不安なんです。自分に自信が持てなくて：：。」

カップをカウンターのテーブルにコトリと置き、ゆっくりと語る。

「ふむ、確かに昨日の彼女はそうように見受けられました。あなたの

暮らしてきた街には獣人があまりいなかっただようですね。それならどう接すればいいか分からないのも理解できます。彼女はあなたに絶対の信頼を置いてます。彼女にとってあなたは英雄にも劣らない存在、だから自分を卑下したりすることはその想いを否定することにもなります。彼女にはそれが耐えられなかつたのでしよう。だから彼女の前だけでもそれに相応しい振る舞いを心掛けるのです。」

マスターは迷う事なく適確にアドバイスをした。

「それは…カナさんの行動からもよく分かっています。ただ、彼女にとっての英雄らしい振る舞い…それができるのか不安なんです。」

今までの不安を吐露する勇輝は自分が情けなく感じて誤魔化すかのようにミルクティーをグイッと飲んだ。

「その不安はごもつともです。そしてそれは彼女の為を思う故のものです。きつとその想いは彼女にも伝わっているはずです。あなたは無理にどうにかしようと思わないでもいいんです。ただ自分を卑下しない、それだけでもいいんです。」

マスターはニツコリ微笑んで勇輝を真っ直ぐに見ていた。

「そういうもの…なんですか?」

「ええ、そういうものです。彼女も、そしてあなたも互いに思い合うことができるのはとても幸せなことです。その想いを大事にしてあげてくださいね。」

マスターはどこか遠くを見るような表情で語った。

その表情は年を重ね、重厚な憂いを感じさせるものだった。

「マスター、ありがとうございます。心が少しスッキリしたと思います。……お代は?」

「いえ、結構ですよ。代わりに…ちゃんと彼女と仲直りして下さいね。さあ、行って下さい。」

マスターはカップを下げながら優しく語りかけた。

「…ありがとうございます!!絶対にカナさんを大事にします!」

勇輝は勢いよくカウンターの椅子から立ち上がって外へと飛び出して行った。

「行きましたか…。私のような失敗はして欲しくはないですからね。」

勇輝が飛び出してがらんとした酒場でマスターは独り言を呟く。
「なあ、そうだろうか？君と私に似ていたんだから世話も焼きたくなるさ。」

カウンターの端にさりげなく飾られている指輪とブローチを手に取って眺めていた。

その手にも全く同じ指輪がはめられていた。

酒場を飛び出した勇輝はカナを探すために街の中を走り回っていた。
しかし、全く土地勘がないため迷わないようにするのが精一杯だった。

・・・これじゃあ埒が明かない！とにかくカナさんの居場所を特定しないと。カナさんも土地勘はないはずだ。・・・

勇輝は人目を避けて路地裏に入るとしやがみ込んで詠唱を始めた。

「南の心臓…北の瞳…西の指先…東の踵…風持ちて集い…雨払いて散れっ！縛道の五十八…かくしついでやく掴趾追雀ツ!!」

カナを強く思い浮かべながら術を発動するとカナの気配を僅かに感じた。

・・・成功…かな？実際は霊圧を感知する物だけどそれを魔力で代用した。どこまでの範囲をカバーできるか分からないけど使えるな。・・・

カナの魔力を感じた方角に向かって勇輝は走り出した。

・・・さつきよりもはつきりと分かる…：近づいてる！…

近くにいるという確信を胸に走り続け、辿り着いたのは一際大きな石造りの建物だった。

・・・これは…隊長さんが言っていた聖堂か？デカイな。・・・

トロールでも入れそうな大きな扉を開けると大広間に教会でよく見る長い椅子が整然と並べられていた。

中央にはコヨースカの教会で見たものと同じような女神っぽい像がおかれている。

天井や壁にはステンドグラスがあつて差し込む光が幻想的な空間

を作り出していた。

・・・綺麗だ……あれはっ!・・・

神秘的な光景に一瞬見惚れていたが、石像の正面に跪いている人影を見た。

それは見慣れたローブにサラサラの長い栗色の髪と形の整った耳という出で立ちだった。

「カナさんっ!!」

勇輝が大声で名を呼ぶとその人物はビクツとしてゆっくりと振り向いた。

「勇輝さん、どうして……。」

驚きを混じらせた声でカナは呟いた。

勇輝は驚きで立ち上がられていないカナの元へと駆け寄る。

「カナさん! 捜しましたよ。とても心配しました。」

「ごめんなさい……私……勇輝さんに迷惑を……。」

床に座り込んで下を向くカナの肩は震えていた。

勇輝はその姿を見ているのが耐えられなかった。

そして勇輝はそれを感じたのと同時にカナを抱きしめていた。

「えっ!? 勇輝さん!?!」

「謝るのは私の方です。私がカナさんの想いを否定するような事を言ったのがいけなかったんです。本当に……ごめんなさい!」

無意識に抱きしめる力が強くなる。

「ずるいですよ……これじゃあ許すしかないじゃないですか。」

カナも手を伸ばして勇輝を抱きしめた。

勇輝がそれに驚いて力が弱まるとカナと顔が正面どうしになって間近で目が合った。

「あつ……えと……。」

「勇輝さん、私は……あなたのことが……大好きです。」

カナは泣きそうだったが、今までで1番の笑顔で想いを伝えた。

……なっ……こんなタイミングで……。……

「わ……私にとってもカナさんはかけがえのない存在です。私はカナさ

んだけの英雄になります！なつてみせます！」

人生で初めて告白をされた嬉しさと恥ずかしさと闘いながら絞り出した精一杯の答えだった。

それを聞いたカナは笑顔のまま涙を流した。

「やつと言えました。そして…受け入れて貰えました。それだけで十分です。」

「こんなにも可愛い子から人生で初めてされた告白を断る人なんていませんよ。そんな人は私が許しません！」

再びカナを強く抱きしめた。

するとカナも勇輝を抱きしめて声を上げて泣き出した。

声が聖堂に響く中勇輝はカナが泣き止むまでずっと抱きしめていた。

迫り来る真実 転生

カナは泣き疲れて勇輝の腕の中で寝息を立てている。

土地勘もない中一人で彷徨っていた後の安心感もあるのだろう。

勇輝はカナを優しくおぶって近くの長椅子に寝かせる。

そして勇輝は後ろの椅子に座ってしばらくカナの寝顔を眺めていた。

すると、カナにつられたのか眠たくなってきた。

・・・おかしいな・・・まだ朝方には変わらないのに：眠たい。・・・

抗いようもなく、無理して起きている理由もなかったのものでそのまま眠ることにした。

勇輝が気がつくところこそは聖堂の中ではなかった。

真っ白なただっ広い空間だけが広がっていた。

・・・ここは：確か：アレか？・・・

「どうですか？異世界での生活は楽しいですか？」

忘れもしない、直接頭に響いてくる優しい声が流れる。

「そうですね、それなりに充実してますよ。この世界の人たちはみんな優しくていい人達ばかりです。ここでの生活で性格が明るくなつたと思います。」

勇輝は清々しい気分で答えた。

「それは良かったです。・・・どうしてまたこんなことになったのかって考えていますね？ごめんなさい、心を読まれるのは慣れないですよ。何故か、それは貴方に確認したいことがあったからです。」

心を読まれて若干の不愉快さを感じたが、すぐに弁明を受けて仕方ないと切り替えた。

「確認したいこと：ですか？」

「ええ、まずは貴方に伝えることがあります。一つ目は作業はおよそ1年で終わるということ。二つ目は元の世界に戻った時に今の力は

失われて事故の時のままになってしまうこと。三つ目は元の世界に帰った時、異世界の人々から貴方に関する記憶は全て消される……以上です。」

「えっ!?それは……つまり……私が異世界にいた証拠が自分の記憶だけになるってことですか?力は惜しいですが、所詮は借り物ですから構いません。ただ、カナさんの記憶からも私が消えてしまうのは……。」

少し前までだったらもっと喜んでいたかもしれない……しかし、今の勇輝は自分のいた証が無くなってしまふことが認められなかった。

「そうでしたか……こればかりはどうしようもないんです。……ただ一つを除いては……。」

神さまの声が憐れみを含んだものになった。

「方法があるんですか!?それは一体なんですか?」

「それは……元の世界へと帰らずに完全に異世界に転生することです。」「完全な転生……それで元の世界の私はどうなるのですか?」

一瞬の安堵の後にとある危惧を感じて質問した。

「とても言いづらいのですが……あの事故でそのまま死ぬことになります。それなら作業も必要がなくなり、それを決断した時点で元の世界の時間は進み始めます。そして貴方は完全に異世界の人間として生まれ変わります。安心してください、生まれ変わるといっても形だけで赤ん坊からやり直しというわけではありません。」

「あの事故で死んだことに……家族には申し訳ないなあ。」

勇輝は自分が死ぬということを受け入れるべきか迷っていた。

しかし、それは自分がというよりは残された家族のことが心配だという面が強かった。

「ご家族に関しては……本当は死ぬべきではなかった貴方の死に直面するということになります。とても心苦しいですが……。」

「大丈夫かなあ……大丈夫なわけないよな。お金がかからないどころかむしろ給料を貰って勉強できる士官学校に入って親孝行ができるというところだったのに、弟もフリーターだし、親の定年も確か近かった……葬式も負担になる。」

勇輝が考え込むと次々と心配事が湧き出してきた。

「やっぱり貴方は優しいんですね。……とても言い出しにくいのですが……元の世界での貴方の人生はそれなりの地位に辿り着きますが、それまでに耐え難い苦難を経験し、それを分かち合う伴侶もいない孤独なものです。とても幸せと言えないものでした。そのほとんどは貴方の優しさ故に引き起こされたものばかりです。」

神さまの衝撃の発言に勇輝は落胆とやっぱりという諦念が沸き起こった。

「いつかは……きつといつかはと思っただけでしたが、結局報われないのですね……。どうして……」

勇輝は涙を流し、膝をついた。

「神である私がいうのもなんですが、こんな運命は悲しすぎます！きつと先輩の誰かのせいで……こんなこと許せません！」

「生まれ変わったら……運命は変わりますか?」

涙声で一縷の望みをかけて尋ねる。

「貴方の事故に関する作業がなくなることで私の割けるリソースもできます。それで貴方の新たな人生を変えます。絶対に幸せにするとは言えませんが悲劇は極力抑えます。そしてささやかながらご家族へも加護を授けます。」

勇輝は顔を上げる。

「そこまで……していただけるのなら……迷いはありません。私は転生を選びます！」

決意のこもった口調で言い放った。

勇輝の心の中には家族だけでなくカナの姿もあった。

「貴方の決意をしかと受け取りました。これにて作業を中断して時が動き出します。貴方は転生に伴って若干の変化を生じます。大きくは変わらないので気にする必要はありません。」

次の瞬間、白い空間が眩い光に包まれ、天から羽衣を羽織った美しい女の人が舞い降りてきた。

……あつ、似ている。あの像に……

その姿は教会や聖堂で見た女神像に良く似ていた。

「驚きましたか？あの世界に現れる時はこの姿を見せているんです。確か1000年以上前だったはずなんですがね。」

「綺麗だ……でもこの感じ……どこかで……。」

女神の雰囲気初めてではない感覚を感じた。

「貴方は死んで転生したということになったので以前の補填の制約も解除されます。分かりやすく言えばさらに強化されたということです。」

「うーん、それなら魔法関連をさらに強化して魔力量も増やしても良かったらそれで構いません。」

「他はいいのですか？もう制限はないんですよ？」

女神は不思議そうに聞いてくるが勇輝は本当に十分だった。

「本当にこれで結構です。もう十分すぎるくらい神さまにはお世話になってます。忙しい中私なんかここまでしていただけるのはとても幸せです。これで少しは仕事も楽になりますかね？」

「一人の人間に気を遣われるとは……私からは社畜オーラが出ているようですね。」

女神が微笑んで冗談を言ったので少し驚いた。

「そろそろ時間みたいです。異世界での新しい人生を楽しんでください。それから……カナさんをお願いします。」

「えっ!?それはどういう……。」

女神は笑いかけるだけで何も答えなかった。

勇輝の体を光が包んで何も見えなくなった。

次に勇輝が目を開けるとそこは聖堂の中だった。

カナは前の長椅子で眠っている。

……女神さまが最後に言ったこと……まあ、言われずともカナさんは守る……

決意を新たにしてカナの頭を優しく撫でる。

ここにいるという実感を噛み締めていた。

……全く死んだ感じはないな。嘘だと言われたら信じてしまうくらいだ。そういえば若干の変化ってどうということなんだ？……

「う、うーん…。」

カナが目を覚ましたようだ。

「勇輝さん…。」

カナは勇輝の顔を見るとぽかんとした表情をした後に慌てて目を擦った。

「勇輝さん、その目…どうしたんですか？」

「えっ？私の目がどうかしましたか？」

「その…赤くなってます。」

「…どういうことだ？何か鏡は…ここにはないな。…」

「ちよつと待っててください！」

勇輝は異次元空間を開いて中へと消えた。

「…確かロッカーの扉の内側に鏡があつたはず。…」

さまざまな制服などがかけられていてぎゅうぎゅうなロッカーを開き、中の服に目もくれず扉の内側を見た。

「…あつたあつた、ちよつと高いな…。」

かなり上に鏡が付いていてそのままでは頭の端も映っていない。

「…もつと身長があつたらなあ…。」

無いものを嘆いても仕方ないので背伸びをする。

「とど…け…うわっ!？」

ギリギリ自分の顔が映り、それを見てバランスを崩した。

「えっ？何今の？」

もう一度背伸びをして確認して見る。

「な…なんじゃこりゃーっ!？」

某ソレスタルなんちゃらのメカニックばりの驚愕の声を上げて尻餅をついた。

「…目が…僕の右目が…赤い…。」

勇輝は軽度の目のアレルギーがあり、時折目が充血したりすることはあったが、今回は白眼の部分ではなく、茶色のはずの瞳が…しかも右眼だけ赤というより紅色になっている。

「オッドアイ…こんな感じなのか…。特になんとも無いけど変な感じだな。」

日本人特有の茶色と紅の組み合わせはアニメやゲームで親しんだものとは違いコレジヤナイ感が半端なかった。

「まさか、これが変化つてやつか？右眼が赤くなっただけ？……そう思つて鏡を引き続き眺めていると些細な違いを見つけた。

「……あつ、髭が綺麗さっぱり無くなつてる。……」

毎日朝剃つても夕方くらいにはそこそこ伸びて勇輝を悩ませてきた顎まわりと鼻下の無精髭が消え去っていた。

剃った後も青くなつていたりした顎は肌色になつて触つても全く摩擦はない。

「……これは地味に嬉しいな。結構苦勞させられたからな。……一通り確認を済ませるとロッカーを閉じて外に出た。

「勇輝さん、どうでしたか？」

異次元空間を出るとカナが心配そうに駆け寄つて来た。

「確かに赤くなつてましたね。特に問題もなさそうなので気にしないですよ。」

「でも……何か病気だったら……」

「大丈夫ですよ。カナさんは何もありませんか？」

「たいして気にしてないし、病気などではないのを知っているので話を切り替える。」

「私ですか？何も……ないですよ。」

カナは急に目を逸らしてボソボソと答えた。

「……何かあつたのかな？怪しい。……」

「もしかして変わった夢を見たりしましたか？」

「えっ!?どうしてわかつたんですか？」

「どうやらあの女神さまはカナにも何か接触したようだ。」

「いえ、そんな気がしただけです。どんな感じでしたか？」

「えと、確か……声が聞こえて……支えてあげて……言っていました。詳しく聞こうと思つたらいつのまにか目が覚めました。」

「……お節介だなあ、あの女神さまは。……」

「そうでしたか、何か記憶の手掛かりだつたらと思つたのですが……気

を取り直して街を探索しますか？」

「そう…ですね。行きましよう！」

二人は聖堂を後にして街中を散策した。

「結局何も分からなかったですね。」

「そうですね。歩いていても何もピンとこなかったです。」

昼前になって二人は宿に戻って部屋で休んでいた。

ただ街を歩いていても観光と変わらないのではと思ってしまい、あまり身が入らなかった。

・・・結局散歩みたいになっちゃったな。それにしても本当に人間はほとんどいなかったな。獣人ばかりだった。ケモナーが来たら狂喜乱舞するだろうな。・・・

かくいう勇輝もその端くれなのは気にしないでおいた。

・・・本当にカナさんは何者なんだろうなあ。・・・

ただその疑問が頭の中を埋め尽くしていた。

「とりあえず、お昼にしますか？ずっと動きっぱなしでお腹が減ったでしょう。」

「そうします。」

二人は食堂に向かい、これまた微妙な味の料理を食べた。

「味はまあ、気にしないようにしましょうか…。」

「はい…食べられなくはないので…。」

エリナの料理ほどではなかったので顔色ひとつ変えずに食べ進め、さつさと完食した。

「ごちそうさまでした。」

食堂にいた宿の人に挨拶をする。

「どうも、そういえばお客さん、これから獣人の王様のお触れがあるけど見に行きますか？」

「えっ？そうなんですか？これまたどうして？」

思いがけない情報を知り、従業員に詰め寄る。

「えーと、確か人間の国との関係についてのお話があるそうですよ。」

・・・あー、そういえば人間の王族と仲が険悪だったんだよな。何

か進展でもあったのか?・・・

「いいことを聞きました。ありがとうございます。是非見に行きます。」

宿の人にお礼を言うと一旦部屋に戻って迷彩服から旅人の服に着替えた。

「獣人の王様かー、どんな人なんですかね?やっぱりお強いんですね?」

「おそらくそれなりには武芸も秀でていると思いますけど、国をまとめることには必要ないので案外そうでもないんじゃないですか?世襲制でしたし。」

支度を整えて王宮がある場所へと向かいながら話をしていった。

・・・なんだ世襲制か、それなら王族に生まれただけで力は必要ないな、どちらかという勉強か。・・・

異世界モノでテンプレの最も強い者が王であるという予想を裏切られて少しガツカリしたが、流石に筋違いなので気を取り直して王宮前の広場へと辿り着いた。

・・・おおー、結構立派なお城だなあ。あそこから王様が出てくるのか?・・・

それらしいテラスを眺めているとメイドや執事っぽい人が数人出てきた。

そしてその後から鎧を着た騎士二人に護衛されて王冠を頭に乘せている身体の大きな獣人が出てきた。

「うおおー!!国王さまー!!」

その姿を見て周囲の人々が歓声をあげる。

・・・あれが王様か、いい体格だな。別に太っているわけでもなさそう。民からも慕われてそうだし、いい王様のような。・・・

双眼鏡で観察していた勇輝はそう思った。

「ノシヨの民よ、よくぞ集まってくれた。国王のゾディアス・エルンだ。此度皆に集まってもらった理由は人間の王族との関係についてである。」

拡声の効果の魔法か何かで広場の全員が聞こえるように演説が始まった。

「人間の王族サビーナ家は我が一族の次女であるケーネ第二王女をグレアム第一王子の嫁に希望した。しかし、ケーネは病弱で現在も国外はおろか城からも出られないのだ。それでもサビーナ家は聞き分けず一方的に態度を悪化させた。それは皆もよく知っているだろう。だが、先週の親書で新たな要求が出された。それはケーネを連れて来なければ関税を引き上げるという内容だった。あまりにも身勝手である！我々は決して屈しない！どうか人間の国の非道に負けず今は耐えてほしい。戦争という悲劇だけは必ず回避する！以上で終わる。」

王は演説を終え広場の人々を見回していたが、こちら側に顔を向けた時に動きが止まった。

そして後ろの執事みたいな人に何かを話すと護衛の騎士とともにテラスを出た。

王の演説が終わり、二人はひとまず宿へと帰ることにした。

「とても立派な人でしたね。この国はしばらくは安泰でしょうね。」

「そうですね。なんかとても頼もしく見えました。」

：：それに比べてサビーナ家といったか、ほんとにクズだな。：：

勇輝とカナは王の印象を話し合っていた。

しばらく色々な話をしながら歩いていると正面からテラスにいた騎士と同じ鎧を着た兵士が5〜6人ほど向かってきた。

明らかにこちら側を睨んでいる。

一団が二人の前に立ち止まると周囲に張り詰めた空気が満たされた。

「私たちに何か用ですか？これから宿に行くところなんです。」

静寂を破り、勇輝が指揮官らしき先頭の兵士に尋ねる。

「貴様に用はない！隣のお方をお迎えに参ったのだ。」

兵士は勇輝を軽く睨むとカナの方を指した。

「えっ!?!私ですか!?!」

カナは予想だにしない指名に驚きを隠せない。

勇輝は後ろを見ると後方にも何人か回り込んでいたのを確認した。

・・・クソツ、囲まれてる。なんなんだ、コイツらは。・・・

「ご同行願います。・・・第二王女。」

「なん…だつて…?」

勇輝は慌ててカナを見た。

「え…私が…?」

カナも狼狽えて勇輝の方を見つめていた。

勇輝は荒事を避けるために大人しく連行されることにした。

・・・どういうことだ?カナさんが王女だつて?カナさんの正体は

……。

勇輝とカナは兵士に囲まれて王宮へと連れていかれた。

謁見

「カナさん、どういうことですか？」

勇輝は兵士に聞こえないように小声でカナに問い掛ける。

「わ…私も分かりません…。なんで第二王女が私なのか…。」

「おいお前、離れろ。」

近くにいた兵士が勇輝を小突いてカナから離れた。

そして王宮の門の前までやってきた。

すると大きな門が開いて中からメイドの集団が現れた。

「さあ、ケーネ王女こちらです。」

「えっ…ちがっ…勇輝さん！」

カナはメイド軍団に引つ張られて行ってしまった。

「カナさんっ！どうするつもりだっ！グッ……」

「大人しくしろ。お前も一応連れてきたが本来は用はないんだからな。」

勇輝は兵士2人がかりで押さえつけられて小さめの応接間のような部屋に連行された。

「ここで大人しくしている。……お前たちは引き続き監視だ。」

「ハイっ！」

勇輝を押さえつけていた2人の兵士も一緒に残った。

「あの、いったい何がどうなっているんですか？どうしてカナさんが第二王女なんですか？」

勇輝は2人の兵士に尋ねた。

「カナ？何を言ってるんだ。あのお方はケーネ第二王女だ！お前こそなぜ王女と一緒にいたんだ？」

片方の兵士が逆に尋問口調で聞いてきた。

「ケーネ第二王女は病弱で城から出られないって……。」

「あれは国民向けの嘘だよ。本当は行方不明になっていたのさ。そしてついさっき見つかった。お前と一緒にいたところをなっ！」

もう片方が畳み掛けるように話す。

「なっ……」

・・・そういうことだったのか。ケーネ王女は城から出られないのではなく、行方不明だったから嫁に出せなかったのか？でもカナさんが？・・・

ある程度全体像が見えてきたが結局はカナが本当に行方不明の第二王女かどうかはわからない。

・・・クソツ、今は大人しくするしかないのか？・・・

勇輝はホコリをかぶった古い椅子に座り込んで時を待つしかなかった。

勇輝がふと腕時計を見ると30分くらいが経過していた。

「おいっ、コイツも連れて来いってさ。あまり乱暴にするなってことだから丁重にな。」

部屋の扉が少し開いて別の兵士が監視している2人に話をしている。

「そういうことだとき、暴れるなよ。」

「判りました。」

勇輝は特に抵抗することなく黙って2人に付いていった。

無駄に広く装飾の凝った廊下や階段を通り、一際立派な扉の前に到着した。

兵士の1人が扉を叩いて少しした後に仰々しい音を立てて扉が開かれた。

その向こうには玉座が置かれ、双眼鏡で見た国王が両端に護衛の騎士を並べて座っていた。

「ほら、さっさと入れ。」

兵士に従った3人で玉座の間の中央へと進んだ。

王の御前に立ち止まると2人の兵士が跪いた。

即座に2人と騎士たちの鋭い視線を感じたので勇輝も慌てて跪く。

「2人の兵は下がって良い。」

「ハッ！」

王の近くにいた大臣らしき人が勇輝の隣にいた兵士2人を下げさせた。

「よし、面をあげよ。」

王が勇輝に声を掛けた。

勇輝が頭を上げて見上げた王の姿は威厳溢れるもので圧倒された。

「名を名乗れ。」

「はい、私は永遠勇輝と申します。冒険者として様々な街を旅しております。」

「ふん、冒険者か…卑しいヤツめ。」

周囲の大臣や騎士たちがボソボソと陰口を叩いている。

「ほお、今のランクはなんだ？」

王はそれを気にすることなく質問を続ける。

「現在はCです。それから以前マーハリクで緊急クエストに参加し、その功績で表彰もされました。」

「ふむ、この前にマーハリクに魔物の大群が押し寄せたことは聞いておる。そなたも戦ったのか。」

王は勇輝を見下すことなく真剣に話を聞いていた。

「さて、そなたのことは十分理解した。本題に入ろう。なぜケーネと一緒にいたのだ。」

王の表情が険しくなり張り詰めた空気が流れた。

「正直に申しますと、あの方とは約二週間前にコヨースカで会いました。それから行動を共にしてマーハリクを経由してノシヨまで来ました。彼女は自分をカナと名乗っております。」

勇輝は自分とカナの経緯を正直に述べた。

「コヨースカだと？なぜそのようなところに……ん？なんだ？」

王が何かを聞こうとした時に騎士の1人が駆け寄って王に耳打ちをした。

「分かった、入らせろ。」

王がそう言うのと扉が開かれてメイド数人に囲まれたカナが出て来た。

カナは薄紫色の胸元が開いた豪華なドレスを纏っている。

「カナさん……？」

「勇輝さん！」

カナは勇輝を見るとメイドを振り払って駆け寄って来た。

「カナさん、大丈夫でしたか？その格好は……。」

「これは……無理矢理着せられて……勇輝さんこそ何もなかったですか？」

とりあえずお互いの無事が確認できたのでホツとした。

「おお、ケーネよ。よくぞ戻った！顔を近くで見せてくれ。」

王は玉座を立ち上がると早足でカナに近寄った。

そしてあと一メートルもない距離に近づいた時に王が立ち止まった。

「違う……ケーネではない……お前は何者だ……？」

王が違和感に気づき、声を荒げる。

「私は……ケーネ第二王女ではありません！カナですっ！」

カナが声を張り上げて名乗ると玉座の間は騒然とした。

「違う？」

「なんだと……あれはどう見ても……。」

「どうということだ？」

大臣や騎士は口々に狼狽えている。

「鎮まれっ！」

王が一喝すると一瞬で静かになった。

「この人物はケーネではない。眼の色、そして耳が少し違う。我が娘を間近で見るまで気づかないとは……父親失格だな。」

王が玉座に座りながら力なく呟くように言った。

「……なんだ……他人の空似だったのか。誤解は解けたのか……」

勇輝はホツとため息をついた。

「カナさんが第二王女ではなかったのなら私たちはこれで用はないですよね。」

「そ……それは……」

大臣が冷や汗を滲ませながら王を見る。

「いや、まだまだ……待って欲しい。」

王が顔を上げて語りかけた。

「そなたらは冒険者なのであろう？それなら依頼を受けてほしい。」

「国王っ!？」

王の意外な言葉に大臣だけでなく勇輝とカナも驚いている。

「カナといったな。そなたにはケーネの影武者としてグレアム第一王子の元へ行つてほしい。」

「なっ、なんだって…?」

「私が……。」

「何も結婚しろとは言わない、ただ会つてそこで結婚を断つてくれればよい。この国の王としての頼みだ。」

王は淡々と依頼の内容を説明した。

「……替え玉つてことか。カナさんを人間の王族の所へ?……」

「そんなこと…カナさんが受けるわけ…」

「わかりました。やります!」

「カナさん!？」

勇輝が断ろうとする前にカナはハッキリとした口調で引き受けた。

ドレスを着ていていつもとは違う雰囲気醸し出しているが、その目には決意が感じられた。

「カナさん、どうして……?」

「なんか…放つておけないじゃないですか。それにこの国の人たちの役に立てるのならそれだけでも十分です。」

カナは迷いなくそれを言い切った。

「……そうか…間違っているのは僕の方かも……。平和を愛し、人々を守る自衛隊の幹部候補生ともあろう者が何を怖気付いているのか。……」

「そうですか…いいんですね?それなら私も最大限支援します。」

「依頼を引き受けてくれるのか?」

「はい、やらせていただきます。この国を救うことができるのならやれることをさせてもらいます。」

「そうか、ありがとう。そなたらには感謝しきれない。」

王は姿勢を正して2人に向き合った。

「そうとなつたら……この者たちを最大限にもてなせ！無礼は許さん！」

「ハッ！」

王の言葉に玉座の間の家来全員が反応して勇輝とカナを外へと案内した。

「頼んだぞ…旅の者よ。」

一気に人数が減った玉座の間で王は呟いた。

あれから急に忙しくなった。

玉座の間から出されたと思いきやそれぞれ立派な個室を用意されて、豪華な夕食まで出された。

上級家臣しか使えない浴場まで使わせてもらい、至れりつくせりだった。

…逆に疲れた。夕食の時以外カナさんとも別行動だし、まあ、悪いようにはされていないだろうけどちよつと心配だな。…

ふと夕食の時にカナが大量のデザートに目を輝かせていたの思い出して笑みがこぼれた。

「ヨイシヨー！ちよつくら行きますか。」

豪華な椅子から立ち上がると部屋の扉を開けた。

「勇輝様、どこへ行かれるので？」

部屋の外にいた執事が尋ねてきた。

「カナさんのところですか。案内していただけますか？」

「かしこまりました。こちらです。」

…あれっ？結構すんなりいけた。…
てつきりダメだと言われるかと思っていた勇輝は拍子抜けした。

案内された部屋の前にはメイドがいた。

「あのー、カナさんいますか？」

「ええ、ただ今部屋にいらっしやいます。……カナ様、勇輝様がお見えになりました。」

メイドがノックをした後扉を少し開けて内容を伝えると、しばらくしてから扉を大きく開いた。

「どうぞ、お入りください。」

「どうも。」

勇輝はメイドと案内してくれた執事に礼を言うのと部屋の中に入った。

「カナさん、調子はいかがですか？」

「はい、とても快適です。ただ、このドレスはちよつとキツイですね。」

カナがそう言うのと顔を赤らめた。

改めて見てみると確かにキツそうだ……どこがとは言わないが。

……さつきはあまり気にならなかつたけど今見ると結構キワドイ……。それでいいのか、カナさん……。

極力服を見ないようにしながら予定を話すことにした。

「どういう風にやりますか？グレアム第一王子がどういった人物なのかもわからないのでは何が起こるかわからないですからね。」

「大丈夫です。私は何があっても勇輝さん以外を相手にしません！」

「そ……そうですか……。」

カナがきつぱりと言い切つたので勇輝は照れながら返事をした。

「私も色々サポートするのでうまくやりとげましょうね。」

「はい……」

そして勇輝は部屋を後にした。

外が暗くなり寝ることにしたが、大きすぎるベッドにたった1人で寝るのは変な感じがした。

……そういえば、いつもカナが隣に居るのに慣れてしまったんだな。こんなにも物足りないとは……。

いつもより快適なはずなのにうまく寝付けなかった。

庭園

勇輝は結局あまり眠れず、自然と5時前に目が覚めた。

「知らない天井だ……無駄に装飾凝ってる……」

テンプレのセリフを小声で呟いて伸びをした。

……さて、どうしたものか……まだ外も暗いけどちよつと歩くか。……

のそのそとベッドから這い出て身だしなみを最低限整えると部屋の扉を開けた。

そして外に出た瞬間に目の前に人影が現れた。

「うわっ!?!」

「おや、どうされましたか?随分とお早いですね。」

人影の正体は執事だった。

ローテーションで待機しているのか以前とは別の人物だった。

「いえ……あまり寝付けなかったもので、少し歩こうかなと。」

「そうでしたか、それではもうしばらくで朝日が昇りますので庭園をご覧になってはいかがですか?朝方の庭園は一味違う雰囲気をお楽しみいただけますよ。」

「へえ、それは良いですね。ぜひ拝見させてもらいましょう。」

「それでは、お気をつけて。」

勇輝は小枝を取り出してルームスで足元とその周辺のみを照らしながら廊下を歩いて行った。

無駄に広い廊下や階段を下り、中庭に面した廊下の扉を開ける。

左側は壁だが、右側はいくつか柱がある以外は中庭に繋がっている。

まだ暗いのでほとんど見えないが、ベンチを見つけたので座って待つことにした。

「ーッ!?!」

ベンチに腰掛けると冷たさと嫌な感触がした。

……朝露で濡れてる……見事に尻がびっしよりだ。ツイてない……

若干萎えたがそのまま座って朝日を待った。

・・・あとどれくらい待てばいいんだろ。暇だなあ。・・・
しばらく待つて濡れた服も乾いたところで退屈になっていた。

・・・ん？何か足音…が聞こえたような…いや、やっぱり足音だ。・・・

勇輝は微かに廊下を歩く足音を聞き取り、その方向を見る。

次第にはつきりと聞こえるようになってきたので近づいてきているようだ。

勇輝の位置からは何者かがやって来ると思われる扉は柱に隠れて見えない。

そして扉が開く音がした。

「ノックスー！」

勇輝は慌てて明かりを消してベンチの影に隠れて息を潜めた。

なおも足音は接近してきた。

・・・結構軽い足音だな。女の人か？・・・

分析をしている間に間近まで迫ってきた足音がついに止まった。

「そこにいるのは誰？」

おしとやかそうな若い女性の声が聞こえた。

明らかに勇輝に向いていたので大人しく姿を見せる。

「失礼致しました。昨日から客としてお世話になっております永遠勇輝というものです。」

勇輝は名乗って相手の姿を見る。

暗くて顔ははつきりと見えないがスレンダーで青っぽいドレスを着た獣人の女性だった。

・・・カナと同じようなドレス？もしかして高貴なお方？・・・

「ああ、あなたが例の…どうしてここに？」

「慣れない環境で早起きをしてしまったもので、夜明けの庭園を眺めようかと思っていたところです。」

勇輝が少しおどけて答えると相手も笑みを浮かべた。

「そうですね。私と似たような事を考える方がいたなんて、奇遇ね。・・・あら、そういう私はまだ名乗っていませんでしたね。私はこの国

の第一王女のリーンよ。…ああ、変に畏まらなくてもいいわよ。あなたはこの国の恩人になるのだから。」

そう言つて王女は微笑みながら歩み寄つてきてベンチの前に来た。

「あつ…そのベンチは濡れていますよー！」

勇輝が慌てて座るのを止めようとする。

「あら、優しいのね。大丈夫よ、いつものことだから。」

リーンは右手をサツと振ると風が吹いてベンチの朝露を吹き流した。

「おお…見事ですね。私は先程座つてしまつたんですよね。はは……。」

勇輝が自嘲混じりに褒めるとリーンはベンチに座りながら勇輝を見た。

「あなたも座つて待ちましょう。別に気にしないから。」

リーンが手招きをして自分の横をポンポンと叩いて勇輝を誘つた。

「わ…私は結構です…。」

勇輝がさりげなく断るとリーンは頬を軽く膨らませた。

「良いつて言つてるんだから座りなさい。」

…ええー、なんで？よりにもよつて王女様…従うしかないか。…

「それじゃあ、失礼します。」

渋々リーンの隣に腰掛けるとリーンは満足そうな顔をした。

ここまで間近に来ると顔もだいたい見えるようになる。

リーンは狐っぽい耳にティアラを乗せた長い金髪、切れ長の目をした大人な美しさを感じさせる姿だった。

「もうすぐ朝日が昇るわよ。しっかり見なさい、私のお気に入りの光景だから。」

リーンは真つ直ぐに庭園を眺めながら微笑んでいた。

「あつ、朝日が……。」

庭園の向こうから明るい光が城の合間を縫つて差し込み薄暗い空間に色をつけた。

「ふふつ、これからよ。」

光に彩られていく庭園を見つめる勇輝にリーンは笑いかけた。

「これは……きれいだ。」

今まで暗闇で全く何も見えなかった庭園が朝日に照らされ、色とりどりの花々についていた朝露が光り輝いていた。

朝露の輝きと朝もやの織りなす幻想的な空間の演出に勇輝は息を呑んでいた。

「どう？きれいでしょ。よくこれを見に早起きして部屋を抜け出しているの。」

大人びた顔を崩して子供っぽい笑みを浮かべながらリーンは庭園を眺めて言った。

「立派な庭園が朝露と朝日の演出で更に美しくなるのですね。感動しました。」

「ここに私がいたことは内緒ね。といっても執事やメイドの何人かは既に知っているけどね…。」

リーンが立ち上がって、いたずらっぽく人差し指を口の前に当てるた。

「はい、秘密にします。私もこれでおいとまします。」

勇輝もベンチから立ち上がってリーンに向き合った。

朝日に照らされたリーンの姿はとても美しかった。

勇輝はうつすらと明るくなった廊下を歩いて自分の部屋に戻った。

部屋の前で執事がにこやかに微笑んでいる。

「いかがでしたか？この城の庭園は。」

「とても素晴らしかったです。とても良く手入れされていて見事でした。」

「それなら庭師も喜ぶことでしょう。朝食の準備が整ったらお呼びしますので部屋でお休みください。」

勇輝は執事が開けた扉から部屋に入り、椅子に座った。

…庭園もすごかったけど、あの王女様がカナにそっくりのケーネ王女のお姉さんか…カナと違って大人びていたなあ…

暇だったのでさつき見た庭園とリーンの事を振り返っていた。

…あの景色と、リーン王女の楽しみを戦争で奪われるようなこ

とは絶対に阻止しないと！カナさんと必ず依頼をやり遂げるぞ！…

勇輝は改めて決意を固めた。

少しして扉がノックされた。

「勇輝様、朝食の準備ができました。」

「はいっ、分かりました。」

鏡で変なところはないか確認して部屋を出た。

食堂に行くとき既に長テーブルにカナが座っていた。

「カナさん、おはようございます。よく眠れましたか？私は早く目が覚めてしまいました。」

「おはようございます。勇輝さん、私も一人だったのはちよつと寂しかったです。」

勇輝と挨拶を交わしたカナの表情は一気に明るくなった。

・・・やっぱりカナさんは笑顔が一番だな。でも最近恥ずかしがる顔はあまり見れなくなってきたな。・・・

カナも慣れてきたのだろうか、おどおどすることも減って凜としてきた。

顔を赤らめたカナの顔を見る機会が減ったことを勇輝は少し残念に思った。

勇輝はカナと向かい合わせにテーブルについた。

それからテーブルに食事が運ばれてきた。

サラダやパン、スープに至るまでどれも絶品だった。

カナは最後に何かデザートが来ることを期待していたようだが、予想が外れて何も来なかったので残念そうに耳を垂れた。

・・・分かりやすいところもまた可愛いな。あとで適当に果物でも貰ってくるか。・・・

「ごちそうさまでした。」

朝食を済ませたら側にいた執事を呼んだ。

「この後の予定はどうなってますか？」

「この後は王と大臣との打ち合わせを行い、昼前に人間の王都へと出発します。」

「そうですね、ありがとうございます。」

勇輝は席を立つとカナを呼んで玉座の間へと向かった。

玉座の間の門の前にいた兵士が勇輝とカナを見ると急いで中に伝えて門を開いた。

中に入ると護衛の騎士の数が少なくなっているが、逆に大臣と同じような格好の家臣が増えていた。

「よく来たな、何か不自由はなかったか？」

玉座に座っている王が2人に話しかけた。

「とんでもありません。ここまでもてなしていただいて身に余る光栄です。」

勇輝がお辞儀をしながら得意な社交辞令を述べる。

「そうかそうか、それならいい。では本題だが、事態は急を要するため昼前には人間の国の王都アトライアへと出発してもらおう。馬車で2日ほどかかる予定だ。念のため護衛も用意する。」

王がこれからの予定を話し始めた。

「向こうに到着した後はどうするのですか？グレアム王子にお会いするだけならともかく他のことは分かりませんよ。」

勇輝が疑問に思った内容を尋ねる。

「それなら問題ない。」

「王都へは外交官として私が同行します。依頼以外のことはお任せください。」

家臣の一団の中でも若手の青年のような獣人が前に出て来た。

「・・・若いな…期待の新人つてところかな？・・・」

「それなら安心しました。気兼ねなく依頼に取り組めます。」

「では、他に質問は無いな？出発までしばし、英気を養ってくれ。」

「かしこまりました。」

勇輝とカナはお辞儀をすると玉座の間を出た。

「勇輝さん、どうしますか？」

カナが勇輝の方を向いて尋ねる。

「うーん、そんなに時間が無いですけど…そうだ！ついて来てくださ

い。」

勇輝はあることを思い出し、カナを連れて廊下を歩く。

階段を降りてしばらく進み、扉を開けると庭園に面した道に出た。

「うわあ、きれいですね。」

「ここでゆつくりしましょう。」

カナは庭園の花々に見惚れていた。

勇輝はベンチに座って庭園を歩き回るカナを眺めていた。

カナは色々な花壇の前に立ち止まって匂いを嗅いだり、花をじっくり見ている。

勇輝はそれを見て心を和ませている。

「うそ……ケーネ?」

勇輝が振り向くとリーンが立ち尽くしてカナを見ていた。

少しして勇輝を見るとため息をしてベンチの側に来た。

「本当によく似てるわね。別人だなんて信じられないわ。」

「そんなにそっくりなんですか? 王様は眼と耳が少し違うと言ってきましたが…。」

再びカナを眺めているリーンに勇輝が尋ねた。

「そうね、ケーネは緑じゃなくて青い瞳だったわ。耳は…もう少し小さかったかしら。」

リーンが思い出すように呟いた。

「そういえば、ケーネ王女はどうして行方不明に?」

勇輝は地雷を踏んでしまうかもしれないが疑問に思い聞いてみた。

「去年、ケーネは外遊で他の街へと向かっていたの。その途中で魔物が盗賊に襲われたみたいで、護衛の人やメイドたちは死んでしまったのだけど、ケーネは見つからなかったのよ。それで今もまだ生きてるかもって信じてる。」

リーンは淡々と事件の詳細を語った。

その目は悲しみを写している。

「そうだったんですか……見つかるといいですね。」

「ありがとう、妹がいない今、私がつっかりしないとね。あの子を見て

いるとケーネのことを思い出すわ。」

わずかに微笑んでカナを見た。

その視線に気づいたのかカナもこちらを見て、側にやって来た。

「勇輝さん、この人は？」

「リーン第一王女です。ケーネ王女の姉ですよ。」

「えっ!? ケーネ王女のお姉さんですか!？」

カナがビツクリして数歩後ずさった。

「そんなに驚かないで。変に気を遣わないでいいから。……あなたがカナさんね。本当にケーネにそっくりだわ。」

「私……そんなに似てますか?」

カナは恐る恐るリーンに聞く。

「ええ、似てるわ。顔も仕草も……ああ、胸は少し小さかったかしら。」

リーンが呟くように言うとカナは顔を赤らめた。

「ふふっ、もうすぐ出発なんですよ。あなたなら大丈夫よ。家族でもない限り絶対にバレないわ。グレアムとかいうやつをこっ酷くフツてきなさい!」

「ハイっ!」

明るく振舞って激励したリーンにカナが応えた。

「……グレアム王子……いいヤツだったらちよつと可哀想だな。盛大にフラれるとかトラウマもんだからな。……」

もし自分がそうだったらと想像して寒気がしたのでグレアムを哀れに思った。

そして時間が迫ってきたのでリーンに別れを告げて城の中央のホールへと向かった。

ホールには王だけでなく多数の家臣や兵士が見送りに来ていた。

しばらくするとリーンも合流するのが見えた。

2人の前に王が歩み寄る。

「そなたらの働きに期待する。……頼んだぞ。」

「ご安心を、必ず任務を遂行します。」

「頼もしいな。……カナよ、そなたには本当に感謝している。」

「はい…頑張ります！」

王の激励を受けて門を出ると4台の馬車が並んでいた。前から2番目の馬車が勇輝たちの乗るものらしく、立派な作りだった。

残りは護衛や食料などを積んでいるみたいだ。

馬車に乗り込んで窓から外を見ると街の住民たちも集まって手を振っていた。

…：：： 壮大な見送りだな。流石に替え玉のことは知らないよな？…：：
目立ち過ぎていることに少し不安を覚えたが、カナは恥ずかしがりながらも窓から手を振っていた。

…：： おお、なんか本当に姫っぽいな。可愛らしい。…：：

そして、城の人々や街の住民に見送られてアトライアへと出発した。

縛道は鬼畜

勇輝とカナは王都アトライアへの馬車の中にいる。

「今回の依頼に同行させていただきませう。外交関連を担当しているノースです。よろしくお願ひします。」

「こちらこそよろしくお願ひします。政治的な話は全くわからないので。」

馬車には勇輝とカナ、そしてノシヨ代表のノースが乗っている。

残りの護衛やメイドやは他の馬車で移動している。

・・・そうだ、ちよつと実験したいこと思いついた。・・・

勇輝は自分の魔力を微量に全方位に放出した。

・・・実際にちゃんと広がってるのかはわからないけど、成功したら使える。・・・

期待と不安を胸に放出する量を上げる。

「ッ！・・・来た！・・・」

勇輝は確かな反応を感じて思わず口に出した。

「どうしたんですか？」

隣に座っているカナが覗き込むように聞いてくる。

相変わらず着ているドレスは目のやり場に困る。

「ああ……今ちよつと周囲に自分の魔力を放出して実験をしていたんですよ。」

「実験……ですか？」

「それで前と後ろの馬車に乗っている人を感知できたんですよ！……ノースさん、前の馬車には御者を含めて9人で合ってますか？」

少し興奮気味にノースに聞く。

「はい!? えーと確かそのはずですよ。」

「よし、成功だ！」

勇輝は小さなガッツポーズをした。

勇輝が試したのは電波の代わりに魔力を使用した擬似レーダーだった。

・・・とりあえず感知には成功したけど、人数と大まかな距離くら

いしかわからなかった…まあ、これだけできたら十分かな。精度を高めるために魔力をの量を増やしたり長時間使っていると、いくら転生の強化でも魔力切れの不安が残るな。次は…フェーズドアレイレーダーをやってみるか。・・・

勇輝は目を閉じて意識を集中し、馬車の後方に限定して魔力を放出した。

確認する方法がないのでちゃんと指向性を持っているのかはわからない。

とりあえず、向きに注意しつつ出力を上げる。

・・・どうだ？……………一つ後ろはさつきと同じように反応してるな。もっと出力を……………

前方の馬車の反応はなかったのである程度後方に指向性を持たせられたようだ。

さらに出力を上げて確認してみる。

・・・ん？…新しい反応だ…。1、2……………10か…ビンゴかな？…最後尾の馬車に乗っている人員と思われる反応が確認できた。

・・・この感覚的に、指向性を持たせた方が同じ距離を少ない魔力で探知できるようだな。流星に全方位となると効率がよくないか……………

「勇輝さん、感知ができるんですか？」

ノースが勇輝に尋ねてきた。

「この馬車の列の周りの人数くらいはできそうです。」

「へえー、でも大丈夫ですよ。私達には護衛の兵士が付いてますから。」

ノースは自信たっぷり胸を張った。

・・・確かにこれだけ居たら何もなさそうだけど…フラグ臭がするから不安だな。……………魔力使用の限界の調査も兼ねて周囲だけでもレーダー張つとくかな。……………

「そうですね。もしもの時は頼りにさせていただきます。」

そうは言ったものの不安が捨てきれないので全方位にそこそこの範囲のレーダーを展開して休むことにした。

・・・む……いつのまにか寝ていたのか……。レーダーは……多分きれ
てる。……

腕時計を見ると1時間ほど眠っていたようだ。

隣のカナは壁に寄り添って寝ている。

反対側に寄りかかって来なかったことに少し、残念な気持ちとホッ
とした気持ちが入り混じっている。

ノースは腕を組んでウトウトしている。

・・・レーダー展開！・・・

目を閉じて少し広めに魔力を放出した。

・・・随行の馬車は……異常ないな………ん？側面に反応？……

別の反応らしきものを感じて右側面に集中してレーダーを使う。

すると、反応がよりはつきりと感知できた。

・・・随行とは別の反応が2つ………人型か？ある程度の距離を保つ
ているな。……

「ノースさん、起きてください。なんか見張られています。」

「えっ？私達を……ですか？」

とりあえずノースを起こして状況を説明する。

「まだこちらの様子を伺っているみたいなので護衛の兵士に伝えて警
戒するようにしてください。私の方でも調べてみます。」

「分かりました！」

覇気のある返事をしたノースは持ってきていた鞆から羽根ペンと
インク、手頃な紙切れを取り出してつらつらと何かを書いた。

そしてその紙切れを丸めて握ると、握りこぶしの隙間から青い光が
見えた。

ノースが手を開くと真っ白いツバメみたいな鳥が手の平に乗って
いた。

「よし、行ってこい！」

ノースが窓から鳥を放った。

白い鳥は前方の馬車へと飛んで行き、器用に窓の隙間から中へと
入って行った。

・・・えっ、何今の…カッコいいな。・・・
勇輝はノースの行動を目を輝かせて見ていた。

「ノースさん、今のはなんですか？」

勇輝がノースに詰め寄る。

「えーと、私の得意魔法で小さなものをある程度変化させられるんですよ。専ら今みたいに紙切れを動物に変えて伝令に使っています。…魔法はこれくらいしかできないんですけどね。」

少し照れくさそうにノースが説明してくれた。

「便利ですね。これで兵士も警戒を強めてくれるでしょうね。」

・・・それじゃあ、こっちも行動に移らせてもらおうか。・・・

勇輝はリーダーはそのままに双眼鏡を取り出して窓から反応のあった方向を観察した。

しかし、反応がある方向は森が広がっていてそれらしいものは見えない。

・・・クソツ、森に隠れながらつけて来ているな、これじゃ確認することはできなさそうだ。・・・

勇輝はため息をついて双眼鏡を下ろした。

ノースは勇輝の一連の動作を興味深そうに見ている。

「ああ、これ…気になりますか？」

勇輝が双眼鏡をノースに差し出す。

「いいんですか？ちよつと失礼します。」

ノースが双眼鏡を受け取って窓の外をじっくりと眺める。

「すごい…こんなに綺麗に、しかも既存のものより遠くまで見える…。一体これをどこで？」

ノースが双眼鏡を勇輝に返して興奮しながら尋ねてきた。

・・・あちゃー、マズいな。なんて答えようか。・・・

自分の行動が迂闊だったことを少し後悔して、返答を考えた。

「これは…私の知り合いの特注品なんですよねー。とても便利なので気に入ってるんですよ。」

勇輝はそれらしい理由を捻り出して自然を装って答える。

「ふーん、そんなんですか。私もこれ欲しいですね。その知り合いとは？」

ノースはまだ諦めきれずに食いついてくる。

しかし、この双眼鏡はこの世界の技術ではそうそう作れるものではないだろう。

「それが、各地で放浪の旅に出ているために手紙が来るくらいで会うことはなかなか無いので難しいですね。今もどこにいるのか知るところとはできそうにないです。」

「うーん…残念です。諦めるとしましょう。」

ここでやっとノースが折れてくれたように肩を落として言った。

・・・ふう、やっと諦めてくれたか。ごめん、これは譲れないからね。・・・

勇輝は心の中でホッと一息ついた。

その後はリーダーで謎の反応を監視するために眠ることが出来ず、2時間くらいを退屈に過ごした。

途中で寝ているカナが勇輝に寄りかかって来て集中が乱れかけたが、なんとか持ち直している。

「ふふっ、まるで兄妹のようですね。」

ノースがそれを見ながら微笑んでいた。

「ご冗談を、あくまでも今は“姫さま”ですよ。」

勇輝は照れくさそうにそっぽを向く。

「へえーえ、今は…ですか。」

ノースがニヤついて呟いた。

若手とはいえ流石は外交官、双眼鏡の時とは違って勇輝の反応がわからなかつたので何か勘付いたようだ。

ノースは特に何も言わずただニヤニヤしている。

・・・むう…：…これじゃ立場が…コイツ絶対年下なのに…：…

勇輝は何か弱みを握られたような気がして不愉快だった。

しかし、勇輝も紳士？であるので黙って2時間程耐えていた…いや、嫌ではない、むしろ嬉しいので語弊がある。

そこまで経ったらノースも飽きたのか窓の外を眺めていたが、時折勇輝の方を見てはニヤつくことの繰り返しだった。

いつしか窓の外が暗くなり始め、日が暮れかけていた。

それからしばらくすると馬車が停止して外が騒がしくなってきた。

「おやつ、野営の準備を始めたようですね。今日はここまでということですね。」

ノースが窓から少し身を乗り出して教えてくれた。

「そうですね、私も手伝うとしましょう。…………カナさん、起きてください。」

勇輝に寄りかかっているカナを優しく揺すって起こす。

「ううん?…勇輝さん、おはようございます。」

目をこすりながらカナが口を開く。

「今は夕暮れですよ。私は野営の準備を手伝うので待っていてください。」

「ふえ? 本当だ…………えっ?! 勇輝さん!？」

やっと寝ぼけが覚めたのかカナが外に出ようとしていた勇輝を呼び止めた。

「大丈夫ですよ、ここで待っていてください」お姫様。これは私達の仕事です。」

勇輝がわざと執事っぽく振舞ってお辞儀をする。

「え…………えっ?!？」

カナが口を開けて固まってしまった。

…………そんなに意外だったかな? 少しフォローしておくか。…………

勇輝がもう一度カナに近づいて向き合った。

「冗談ですよ。カナさんは今はお姫様という事になっているので外に出ない方がいいですよ。早めに済ませるので少し待っていてください。」

「はい…………。」

カナがしぶしぶ頷いた。

そのカナの姿を見ていると少しいたたまれなくなるので踵を返し

て馬車から出た。

馬車から出た勇輝は野営の準備を手伝ってはいなかった。

今は数人の兵士を連れて森へと向かっている。

「慎重に進んでください。迂回しているとはいえ、相手に察知されるかもしれないので。」

勇輝が兵士達に小声で注意喚起する。

兵士は皆無言で頷いた。

勇輝達は野営地から遠回りで謎の追っ手の元へと向かっている。

・・・反応は馬車が止まった時からずっと同じだ。ヤツらも野営の準備でもしているのだろうか。それなら好都合なだけど……。森の入口へと差し掛かり、勇輝はレーダーを指向性から全周型に切り替えた。

魔力の消費は距離的にも十分近づいているので問題ないし、森のはどこに危険が潜んでいるか分からない。

事実、追っ手の反応以外にも森の中にはウヨウヨと多数の反応があった。

・・・おそらくは魔物だろうな。出来るだけ避けたいな。・・・相手に気づかれないように細心の注意を払って森の中を進む。

「ここで待機してください。何かあったら笛を鳴らして合図します。」

勇輝は兵士達を魔物の反応が少ないエリアに待機させた。

：：よし、これ使ってみたかったんだよね。どんな感じかな？：：

勇輝は88式鉄帽とある機器を取り出した。

それを鉄帽に取り付けると頭に被った。

そして機器を目の前に移動させる。

・・・おお！見える見える、すごいな暗視装置は。・・・

勇輝は暗視装置を装備して追っ手に接近していく。

兵士たちは松明の灯りを頼りに進んでいるため目立ってしまうので勇輝が先行する事にしたのだ。

・・・反応はすぐ近くだ。このまま魔物も来ないでくれよ。・・・心の中でそう祈りながら森を進む。

緑色に包まれた視界の中魔力のレーダーも駆使して目標へと近づく。

そして大きな木を過ぎた時、急に視界が明るくなって真っ白になった。

しかし、暗視装置がすぐに光量を調節して視界がクリアになる。

：：おう、ビックリした：：篝火か：：ここで間違いなさそうだな。：：

暗視装置を跳ねあげて双眼鏡で野営地と思われる若干開けたエリアを見る。

篝火の影が揺らめく中ついに人影を発見する。

．．．いた！どうやら人間のようなだな。．．．

目標はフードを被っているので種族はわからないがおそらく男の2人組と思われる。

．．．なんの目的か知らないけど：：：捕まえる！．．．

慎重に接近して隙をうかがう。

そして、右手の人差し指を目標の1人に向ける。

「縛道の四：：這縄：：。」

光の縄が素早く伸びてターゲットの胴体に腕ごと巻きついた。

「ぐっ!?なんだよこれっ!!」

「大丈夫かっ!?!」

縛られたターゲットがバランスを崩して転び、もう1人が慌てふためく。

勇輝は冷静にもう1人に狙いをつける。

「もう一丁！縛道の四：：這縄！」

もう一本の光の縄が男に巻きついた。

「クソウ：：こんな縄ごとときで！」

もがいている2人を確保するために勇輝が茂みから出て駆け寄る。

「ガアアッ!!」

はじめに拘束した男が唸り声を上げて縄を千切ろうとする：：：というか千切れそうだ。

「オラアッ！」

「おわっ！」

勇輝の目の前でついに縄が千切られて男が立ち上がる。

「こんのーっ！」

男が短剣を抜いて構え、突進してくる。

「ッ!!ぐっ…」

とつさに腕を掴んで突き刺さるのは防いだが、勢いは殺しきれず押し倒された。

「しいーねえー！」

男が体重と力に任せて勇輝の首に短剣を刺そうと押し込む。

身体能力が強化されていても状況が悪く、徐々に押されている。

「ううー…男に…押し倒される趣味は無いぞっ！」

「うっ?!」

勇輝は右足で思いっきり男のアレを蹴り上げた。

男は裏返った声を上げて飛び退いた。

「大人しく捕まれっ！縛道の三十…しとつさんせん嘴突三閃！」

右手で空中に素早く三角形をなぞると各頂点に光の杭のようなものが生成され、男に向かって飛んでいく。

そして3つの杭が男に直撃すると、一緒になって吹き飛び、そのまま木に貼り付けられた。

「ぐう…動けない。」

両手と腰を光の杭で木に打ちつけられて流石に動けないようだ。

…危なかつたな。やっぱり鬼道は使えるな…

勇輝はブーチを読んでいて本当に良かったと安堵してOD色の笛を取り出して音を鳴らした。

災いの影

勇輝は不審な2人組を捕縛して笛で待機させている兵士達を呼んだ。

しばらくすると茂みからぞろぞろと飛び出してきた。

「2人とも捕まえましたがので連行しましょう。帰り道で魔物に気をつけながらも逃がさないようにしてください。」

「了解です！」

剣や槍を突きつけられているため不審者は大きな抵抗なくロープで縛られて連行された。

それまで2人を拘束していた光の縄や杭を兵士達は不思議そうに見ていた。

・・・うーん、もう集団で行くから松明の灯りで進むけど目立つな
：レীদেরの反应的に魔物を回避するのも難しそうだ。・・・

勇輝は銃剣を取り付けた89式小銃を取り出して先頭を進む。

「そろそろ魔物と出くわします！気を付けてください。」

振り返らず手を上げて注意喚起する。

グルルル：

茂みの奥から唸り声が聞こえて、光る目がこちらを睨んでいる。

「狼です。数は少ないので先手を打ちます！」

相手が威嚇しているうちに光る目の中心に狙いを定めて単発でダブルタップを決める。

キヤインツ！

茂みの中から甲高い鳴き声が聞こえてドサリという音が後から聞こえた。

そしてこちらを睨んでいた目はなくなり動物が逃げて行く足音が複数聞こえた。

・・・反応が離れていく…逃げてくれたようだな。……いや、1つ接近してくる？・・・

レীদেরの反応から危険を察知して大声で叫ぶ。

「構えて！何か来ます！」

勇輝の慌てように兵士たちも武器を構えて不審者を連れてくる者を中心陣を組む。

「なんだ？一体何が来るんだ…。」

反応が接近してくる方向に89式を構えて緊張感を漂わせる。

およそ50〜60mくらいの距離に反応が近づいた時だった。

ドシン…ドシン…

一定の間隔の小さな地響きが足音とともに勇輝達に届いた。

…で…デカイやつか？木が邪魔で確認できない。…

そしてついにソレは姿を現した。

グウオオオー!!

木々の間から現れたのは黄土色の巨体に大きな棍棒を持った醜い顔の巨人だった。

「と…トロールだあー!!」

兵士の1人が叫ぶと他の兵士たちも狼狽える。

「なっ…デカイ…。」

勇輝も間近で圧倒的な大きさに動揺している。

…マールハリクではスコープ越しに遠くから見だが、こんなにも大きかったのか…。…

トロールが一步を踏み出すと勇輝が冷静さを取り戻して振り向いた。

「急いで迂回しろっ！私が食い止めます！皆さんは不審者を連れて野営地へ！」

「あ…ああ、分かった…。」

兵士たちはか細い声で了承すると側面へと走っていった。

それをトロールが目で追って向きを変えようとする。

「相手はこっちだ！デカブツ！」

大声の挑発と左足への3発の射撃で注意を逸らす。

ダメージは小さかったようだが、トロールは勇輝の方を睨みつけて向かってくる。

…ヘイトは向けさせたけど、どう仕留めたものか…ひとまず

89式で粘ってみるか。・・・

勇輝は改めて89式を構え直してトロールに正面から相對する。

トロールは間抜けそうな顔で勇輝を見下ろして棍棒を振り上げた。

「遅いし見え見えだー!」

トロールのモーションを見て勇輝は後ろへ下がった。

勇輝が攻撃範囲の外に出たにも関わらず、トロールは棍棒を地面に叩きつける。

直後に小さな揺れが発生して勇輝も少しフラついた。

「おっと・・・本当に間抜けだな。」

呆れながらセレクターを「3」にした89式の3点バースト2回を素早く浴びせる。

弾丸は肩や胸に集中して命中したが、やはり効果は薄い。

・・・タフだね、全く・・・

棍棒を持ち上げて再び勇輝に接近しようとするトロールの左足に残りの全弾を叩き込んだ。

グウオ!?

トロールがバランスを崩して横生えていた木を巻き込んで派手に転倒した。

・・・流石にこれだけ撃てば効果あるみたいだな。・・・

89式のリロードをしながらトロールを見る。

額から脂汗を流してトロールは棍棒を地面について立ち上がったが、歩くこともままならないようだ。

「確実に決めてやる。」

勇輝は89式を収納してサーベルを抜いた。

そしてトロールに向かって走り出した。

「ハアアアアッ!」

すれ違うようにトロールの右足の横をすり抜けながら右足を横に大きく切り込む。

「まだまだっ!」

切り込んだ直後に体を捻って振り返り、縦に斬りおろして十字に斬った。

グウオオー！

真つ赤でドロつとした血が流れ出てトロールがやつと痛みの声を上げて倒れた。

両足ともダメになってしまったので立つことはできないだろう。

勇輝は歩いてトロールの前に立つ。

トロールも危機的な状況を感じたのだろうか間抜けそうな顔から焦りのある表情を見せている。

・・・トドメを刺すか・・・

勇輝は左手でホルスターの9mm拳銃を抜き取りトロールの目の前に立ち頭に全弾を撃ち込んだ。

グオオ：

勇輝が弾切れになった拳銃を下ろしてもトロールはしぶとく生きていた。

顔の至る所から血を流し、銃弾の跡で見るに堪えないことになっている。

「うわあ…………拳銃じゃ威力不足だったか。」

若干グロテスクな光景に萎えた勇輝はスライドストップを解除して拳銃をホルスターに戻すとサーベルを握り、トロールの肩間に渾身の突きを放った。

おろそしい切れ味でグサリと突き刺さったサーベルはおそらく頭蓋骨も貫いただろう。

トロールは生き絶え、勇輝はサーベルを抜くと横に振って血を払った。

・・・さてと、帰りますか・・・

高揚感の冷めないうちに森を駆け抜けて兵士たちの反応を追って行った。

先に逃がした兵士たちは足早に野営地へと帰還していた。

勇輝もレーダーの反応からそれを悟ったので森を抜けてからは歩いて暗視装置の視界を堪能しながらゆっくり帰った。

「あつ…ヤバイ…。」

ふと腕時計を見て出発してからそれなりに時間が経過していることを知ってあることを思い出したが、その時には野営地の目の前に迫っていた。

勇輝は暗視装置と88式鉄帽を収納してバツが悪そうに歩いて野営地に入る。

「勇輝さーん！」

突然カナが走ってきて勇輝に飛びつく。

勇輝はなんとか受け止めて優しく抱く。

「どうしてこんなに遅くまで…しかも準備を手伝うって嘘じゃないですか！」

「いやあ…本当にごめんなさい……。」

勇輝の顔を見上げてカナが涙まじりに怒りの声をぶつける。

完全に勇輝に落ち度があるので素直に謝る。

「心配したんですから……。勝手にどこかへ行かないでください……。不謹慎ながらうつむいて弱々しく呟いたカナの頭はいい香りでした。」

「そうですね。私が悪かったです。ただ…私も何者かが襲ってこないか心配だったんですよ。何も言わずに行っただのは謝ります。」

そう言いながらカナの頭を撫でると尻尾は左右に揺れていた。

「……まあ久しぶりだったからね。仕方ないか……。」

それを見て微笑む勇輝だった。

勇輝は夕食を済ませて捕らえた不審者の元へと向かった。

馬車の近くに縛られている2人は兵士に監視されていた。

フードは取られていてその頭には……獣人の証である耳があった。

「獣人…だったんですか。にしても一体どうして。」

監視の兵士に話しかけると兵士がオドオドと答えた。

「私たちも驚きましたよ。でも…この人たち何も話さないんです。だから困ってるんですよ。」

「……ふーん、面倒なことだな。何か聞き出せないものか……。」

勇輝は2人の獣人の側に膝をついて顔を合わせる。

1人は細身だが、もう1人：勇輝に襲いかかってきた方はガツシリしている。

「お前たちは何者なんだ？」

「話すことなんてない。殺せ。」

「俺たちは死を恐れない。」

強気な返答に勇輝はため息をつく。

・・・そういう系か：厄介極まりない。目的を知らないことにはな。・・・

「そう身構えることないじゃないか。君たちが怪しかったから捕まえただけでどうしようというわけでもない。」

とりあえずは敵意を下げなければ交渉以前の問題なので害するつもりはないことを伝える。

・・・よし、騙すようで悪いけどちよつと揺さぶってみよう。それで完全にではなくてもある程度目的を絞れる。・・・

勇輝はあることを考えて続けて口を開いた。

「ここだけの話だけど僕らはある大臣の娘さんの外遊の護衛をしていたのさ。君らはそれを知ってたのかい？」

まずは第1段階として思いつきりでつち上げの話を出した。

「なつ：話が違う・・・。」

「嘘だ！あんなに堂々と出発したのに：おうじy」

「おいっ！」

ヒョロイ方が激昂して何かを言おうとしたのをガツシリした方が割って入って止めた。

・・・明らかに「王女」って言おうとしてたな。まあ、そうだろうな。よし、次だ。・・・

勇輝は何も聞いていないといった風に話を続ける。

「どうしたんですか？・・・まあ、いいです。ご令嬢は寛大なので君らが何もしないのならばこの件は水に流すと仰られている。約束さえしてくればそのまま解放する。どうですか？」

これもまた勝手な作り話である。

しかし、解放というワードを聞いた途端に2人の目の色が変わっ

た。

「本当…なのか？」

「騙すんじゃないだろうな？」

「ええ、私は殺されかけましたけど何事もなかったので気にしませんし、何よりご令嬢が早く行きたいから面倒ごとは済ませろというように仰っているんですよ。約束してくれますか？」

「ニヤけそんな顔を微笑みでごまかしながら迫る。

「約束する。」

「俺もだ。」

2人は頷いて了承した。

「わかりました。今日はもう暗いので明日の朝に解放します。諸事情があつて捕まったフリで縛られた状態で過ごしてもらいますが、それまで我慢してくださいね。それまでお話でもしましょうか。」

勇輝はあぐらをかいて2人の気をさらに緩ませる。

「そういえばご病気だったケーネ第二王女、やつと回復なされたみたいです。私達が出発するときにご一緒したんですよ。途中で別れましたがね。」

世間話を装った作り話を始めたが、王女の話題を出すと2人の耳がピクリと反応した。

…あつ、わかりやすつ。…

勇輝は思わずニヤけそうになるのを堪える。

「そ…そうだったんだな。王女様がやつとね…」

「それは良かったですね。王女様は王都へ向かったのですか？」

2人も話を合わせてきたようだ。

「私達よりも先に行つてしまつたんですよ。やはり国としても一刻も早くグレアム王子の元へ行きたいのでしょう。これで冷めていた関係が改善されたら良いのですが。」

「でも、向こうの王家はクズだつて有名だろ。あんなところに王女様を…。」

「そうです。結婚なんてするべきではない！」

2人は興奮気味に語り出した。

・・・やけに熱が入ってるな。おおよそ目的はわかったぞ。・・・
勇輝は深呼吸をした。

「だから……結婚をやめさせようということだな？」

勇輝が語気を強めて放った言葉で場が凍りついた。

勇輝はさらに続ける。

「どういうわけか知らないが、力づくでやめさせるなんてどうかしてる！……ここで邪魔が入ったら本当に獣人の国が危機に陥るんだぞ。」

「なっ……何を言ってる……」

「だからどうした！あんな奴らは戦争で滅ぼしてしまえばいいんだ！」

「ほー、それが目的だったのか。」

勇輝がわざとらしく呟くと2人はギクツという音が聞こえそうなくらいに固まった。

「悪いが、戦争は絶対に防ぐ！戦争では誰も幸せにならない！」

勇輝は胸を張って断言した。

「どうしてだ！現にあんな理不尽な仕打ちを人間の王族はしているんだぞー！」

「そうだ！向こうが悪いんだ！」

2人はいきり立ってわめき立てた。

「見つともないですよ。何が国の為になるのか……それを理解してればこんなことはしないでしよう！……いいでしょう、教えてあげます。王女様は今回の訪問でグレアムをこっ酷くフリます。」

「えっ!？」

2人は勇輝の明かした秘密に間拔けた声を上げた。

「結婚はしませんよ。ただ会いに行くだけです。」

「それじゃあ……俺たちは……」

「早とちりだったっていうのか……」

2人はガツクリとうなだれて下を向いた。

「これで君らの目的は無くなった。けど、これは君たちだけの行いではないだろう？話してくれるのなら話は通してあげるよ。」

勇輝は一か八かの勝負に出て自白を迫る。

・・・おそらくこの2人は純粹に結婚を阻止したかったんだろう。それがはなつから存在しないって分かったら、後は自分の身の安全だろうな。・・・

「ああ…話すよ。」

「いいの？」

「もう目的は最初から達成していたようなもんだ。今更隠すこともないだろ。」

「そうだな。」

2人は話すことに決めたようだ。

勇輝は一旦2人の元から離れてノースを連れてきた。

そして2人の供述を聞く。

「俺たちはある人物に今回の情報を教えてもらったんだ。」

『『王女の結婚を阻止したいか？なら協力してやろう。』って言うってな。」

「その人物とは誰ですか？」

ノースが2人に詰め寄る。

「それが、顔を隠してたからわかんねーんだ。人間なのか獣人なのかもわかんない。」

「ただ不気味なヤツだったな。」

・・・うわあ、これまたヤバそうなやつだな。あんまり関わりたくない。・・・

黒幕っぽい存在に嫌な感情を抱く。

「ノースさん、私はもう結構です。後はお任せします。」

それだけ言っただけで勇輝はその場を後にしてカナがいる馬車へと向かった。

・・・なーんか嫌な感じだな。単純に結婚の阻止が目的だったらいんだけど…多分あの2人は捨て駒みたいなもんだらうし。・・・

色々と思案してみたが答えは出ないまま馬車の前に着いた。

第一王子

不審者の尋問をノースに任せて勇輝は自分の馬車に戻った。

「あつ、勇輝さん、どうでしたか？」

馬車から勇輝を見つけたカナが声をかける。

「やっぱグレアム王子との面会を妨害しようとしていたみたいですね。ただ、結婚ではなく断る為だということを教えたら驚いてましたね。未然に防いで反省もしているみたいなのでもう大丈夫そうです。」

「へえ、狙われてたなんて…ちよつと怖いですね。」

「…まあ、たった2人でどうするつもりだったのか知らないけどね。それよりもその2人をそそのかしたやつの方が怪しいな。…」

勇輝は内心でそう呟いて考え込んでいた。

「……さん、勇輝さん？どうしたんですか？」

「おおつ、ちよつとぼーつとしてました。」

カナに呼びかけられて慌てて馬車に乗り込む。

「今夜はもう休みましようか。私は外で寝ますね。」

「えっ、それなら私も……。」

カナが少し寂しそうに勇輝を見るが、堪える。

「今は王女の立場を装っているんですから、中で休んでください。私も辛いですけど、今は我慢してください。」

「はい……。」

カナの耳が弱々しく垂れて、表情は暗くなっている。

「……城に入ってからあんまり一緒にいれてないからなあ…この依頼が終わったらいつもよりちよつと甘えさせてあげようかな？…」

カナの顔を見て罪悪感に駆られたのでそう決心する。

「それじゃあ……おやすみなさい、勇輝さん。」

「おやすみなさい。」

それだけ交わして勇輝は馬車を降りた。

勇輝は馬車の近くで他の兵士らと共に外で眠った。

この時町で購入して収納していた適当な毛布を使っていたのでそこまで苦痛でも無かった。

ちなみに毛布を使う時に周りの兵士から羨ましそうな視線を感じた。

朝になると出発の準備で周囲が慌ただしくなった。

勇輝も朝食を軽く済ませて作業を手伝った。

20分程で出発の準備が整い、勇輝はカナのいる馬車に乗り込んだ。

「カナさん、おはようございます。よく眠れましたか?」

「おはようございます、ちよつと寂しかったですけど…大丈夫です。」

カナは少し不貞腐れたように答えてそっぽを向いた。

…うーん…ご機嫌斜めかあ、無理もないか。…

心の中でため息をつく。

「お二方、おはようございます!失礼しますね。」

微妙な空気の中、何も知らないノースが爽やかに乗ってきた。

「おつ…おはようございます。」

勇輝は返事を返したが、カナはそっぽを向いたままだった。

「おや?何かあつ…」

「そういえばあとどれくらいでアトライアに到着するんですか?」

雰囲気を感じ取ったノースの言葉を遮って強引に話題を変えさせる。

ノースはそれに一瞬固まったが、少しニヤついて口を開いた。

「もうすぐ出発して、今日の昼過ぎといったところですね。」

「そうですか、馬車での移動は少し慣れないもので、それを聞いて安心しました。」

分かった上でわざと話に合わせてくるノースに若干イラつきながら説明を聞いていた。

そうこうしているうちに馬車が動き始めてしばらくはただ馬車に揺られる気まずい時間が続いた。

…レーダーの使用もそこそこ慣れてきたみたいだな…けど、継

続時間の限界はまだわからない。それはそれでいいことだけど
……。

全周型の魔力レーダーを出発してから3時間程張り続けているが、
反応もなく、魔力切れの予兆すら全く無い。

そこまで魔力の消費が大きくないのか、魔力量が底なしになったの
かはわからないが別に悪いことでも無いので特に気にしないことに
した。

「そういえば、ノースさん？」

「はい、どうかしましたか？」

「昨日の不審者の2人組は結局どうするんですか？」

勇輝は昨夜の尋問の途中で抜け出したので結末がふと気になった
のでノースに尋ねた。

「まあ、あれから特に何も情報は出てこず、反省もしているようなので
アトライアに到着した時に解放する予定です。」

「そうですね、念のため解放した後も彼らを探ってみたほうがいいと
思いますよ。もしかしたら黒幕がまた接触するかもしれないです
し。」

勇輝はノースに思いついたことを提案する。

「ふむ、その可能性もありますからね……2人ほどこっそり兵士をつ
けましょう。」

ノースは少し考え込んだ後勇輝の提案に賛成した。

……でも、もう一度接触するかなー？口封じとして始末されるほ
どの情報も持ってなかったみたいだし……あるとしたら任務失敗の
方か？……

「あつ、勇輝さん！あれがアトライアの街ですよ！」

突然ノースがはしゃぐような声を出して窓から指をさす。

「こういうことはもうすぐですね。」

勇輝も双眼鏡を取り出して覗いてみる。

……おぉー、さすがは王都なだけはあるな。建築物はコヨースカ
のものに近いな。でも規模が全く違う。……

カナも気になったようで別の窓から外を覗いていた。

馬車の列が王都の門に差し掛かると衛兵が出てきたが、ノースと数名の兵士が出て話をするとすぐに通してくれた。

窓の外から見える街並みは賑わっているが獣人の姿は一つも見えない。

・・・ノシヨではどっちも普通に生活してたのになあ：王都では宣伝のせいで獣人が肩身の狭い生活を強いられているんだろうな。・・・

一瞬「強いられてるんだ!」という幻聴がした気がするが無視する。勇輝は複雑な感情を抱いて街の喧騒を眺めていた。

カナも似たようなことを考えているのだろうか、ずっと街の様子を眺めている。

「ここも・・・コヨースカと同じ・・・。」

ノースには聞こえていなかったようだが勇輝にはギリギリ聞こえるような眩きだった。

「こんなことはやめにしたいですね。そのためにも…………。」

・・・どの世界でも差別はあるよな。けど、許されるわけではない!何よりケモナーの端くれとして断じて許さんっ!…………

そのうち街の中央にそびえる巨大な城が窓から見えるようになった。

「あそこにグレアム王子：サビーナ家が：カナさん、大丈夫ですか?」

「はい、覚悟はできてます。」

カナは服装も相まって毅然とした雰囲気を出していた。

その姿は王女としても差し支えないものだと感じられる。

「勇輝さん、カナさん、到着しました!」

ノースが興奮気味によびかける。

「それじゃあ、獣人の国のため、人間の国で暮らす獣人のため、行きましょう!」

「はい!」

3人は決意を胸に馬車を降りた。

馬車から城門までの道は真っ赤な絨毯が敷かれている。

その両端には儀仗兵と思われる派手な格好の兵士が並んでいた。その道をカナもといケーネ第二王女、外交官ノース、護衛役の勇輝が歩いて行く。

勇輝は白い飾緒（モール）が付いた士官学校の紺色の冬制服に銀顎紐を取り付けた制帽、ズボンには冬制服の夏バージョンである純白の第一種夏制服を組み合わせた格好をしていた。

そして式典用の肩つり白弾帯にはサーベルを提げている。

これは儀仗隊で「ドリル服装」と呼ばれる格好で指揮官はサーベルを装備し、通常の列員はM1ガーランドを持つ。

このごちゃ混ぜな格好は経緯は不明だが、かつての東京オリンピックで各国のプラカードを持って歩いた士官学校の学生が着ていたのが有名だ。

・・・本当は指揮官の制帽はツバに飾付きだけど、省略で……というか、異世界でドリル服装を着るとは思わなかったな。けど、こういう機会にピッタリだ。・・・

儀仗隊の演技本番しか着れないドリル服装、しかも指揮官仕様を着た事に勇輝は心の中で舞い上がっていた。

それでも練習で叩き込まれた美しい歩きは忘れない。

ぎこちないながらも上品に歩いているカナと並んで若干モデル歩きっぽいと言われる儀仗隊の歩幅の乱れぬ歩きが独特の空間を作っている。

ノースは気が引けているのか少し後ろをちよこちよこ歩いてきている。

3人は赤い絨毯の道を歩ききり、城門の目の前に立った。すると大きな門がゴウゴウと音を立てながら開いた。

・・・ついに、城の中へ……本題はここからだ。・・・ゴクリと唾をのみ、城の中へと入った。

門を通り、城内へと入るとただっ広いホールの中に出た。

目の前には端正な格好の家来らしい人たちが待ち構えていた。

「はるばるご足労でした。王の御前に案内します。」

先頭の初老の男が前に進み出て挨拶をするとエスコートをしてくれた。

3人は彼について行き王の待つ玉座の間へと向かった。

途中で目に入る装飾や調度品はいかにも高価そうなものだが、あからさま過ぎて趣味が悪い。

・・・何だろうな。町長の屋敷やノシヨの城の方がいい感じにまとまっていたぞ。ここのは何でもかんでも無理矢理豪華に仕上げた感が拭えない。・・・

ジロジロと内装を見ながら進んでいるとどうやら到着したようだ。

「ここが玉座の間でございます。どうか、ご無礼はなさらぬように。」

・・・えっ?!一国の代表相手にそれは失礼じゃない?王様が偉いのはわかるけどこちら側にも礼儀は尽くしてほしいものだな。・・・

最後に一行の評価がガタ落ちになった案内役の男がお辞儀をして立ち去ると扉が開いた。

「あれっ?いないじゃん。」

玉座の間に入つての第一声は勇輝のそれだった。

大臣クラスの家臣が何人かいるけど当の王はおろかその家族さえいない。

・・・なんだよ、随分とナメた事してくれるじゃないか。どこまで愚かなんだ。・・・

あまりに失礼な相手方の仕打ちにノースは唇を噛み締めていた。外交官として恥をかかされた彼はとてつもなく屈辱なのだろう。

カナは表情を崩していない。

「陛下の御入りです!」

大臣の1人が叫ぶと一斉に跪いた。

仕方ないので流れに合わせて3人も同じように跪く。

そして部屋の奥から1人の若い男が歩いてきた。

そして玉座に深く座り込む。

「面をあげろ。私がグレアム第一王子だ。父に代わって会ってやる。」

一行が顔を上げると玉座にはまだ青年とも呼ばない若さのふてぶてしい態度のグレアム王子だった。

・・・こいつがグレアムか、とりあえずいいやつではなさそうなの
で安心したよ。カナに思いつきりフラれるといい！・・・

突然のグレアムの登場にカナとノースはあたふたしていたが、勇輝
は冷たい目で睨んでいた。

再会

顔を上げた3人は玉座に肘をついて座っているグレாம்王子を見上げている。

「おおっ！お前がケーネ第二王女か。獣人でありながらなかなかのものであるな。」

じつくりと舐めるようにカナを眺めるとグレாம்はニヤリと笑った。

その顔は下心満載である。

・・・なんだよコイツ、顔にモロ出てるじゃないか。こんなのが次期国王とはこの国も災難だな。・・・

勇輝は心の中でそう思いながらため息をつきたくなかったが、一応は玉座の前なので我慢しておく。

カナもグレآمの視線を嫌そうにしているみたいで耳を垂れて若干下を向いている。

ノースは表情に何も出していないが、今後の動きを見ているのだろう。

「グレாம்王子、私は王子にお会いするためここまでやって参りました。それは関税の引き上げを止めさせるためです。その事はお約束いただけますか？」

カナがグレآمをしつかり見て力強く告げる。

そこにはおどおどした様子は微塵もない。

・・・強いな…カナさん。芯が通っていてちよつとやそつとじゃ引かなさそうだ。こんな一面もあるんだな。・・・

勇輝は普段と違うカナに感心していた。

「ほおー、言うではないか、まあ良いだろう。関税の引き上げは中止にする約束しよう。病氣見舞いだとも思うといい。」

相変わらず姿勢を変えないグレآمは面倒くさそうに言った。

・・・おっ、案外簡単に取り付けられたな。裏でもあるのか？・・・
勇輝はグレآمの以外な返答に警戒している。

ノースもまだ様子を伺っているが、目的の一つである関税の引き上

げ阻止が達成できたので少し明るい表情をしている。

「お心遣い感謝します。実はもう一つお伝えしたいことがござい
ます。よろしいでしょうか?」

カナが厳かな雰囲気の中、口を開く。

・・・ついに切り出すか。少し展開が早すぎるんじゃないかな
・・・

「ほお、なんだ?申してみろ。」

「それでは言わせていただきます。…………グレアム王子、私は貴方と
結婚出来ません!」

息を大きく吸った後に大きすぎず、しかし覇気のある声で宣言をし
た。

「なっ!」

グレアムが膝を肘掛けから落としてバランスを崩した。

・・・おー、言っちゃったね。一応インパクトはあったみたい。さ
て…こつからどう出るかな?・・・

カナはしてやったりというように胸を張っていた。

「何故だ…?お前は私と結婚すると発表しているのだぞ!…………理由を
言ってみろ!」

急に狼狽えだしたグレアムが半ギレ状態でカナに言葉をぶつける。

その様子を見てノースは一瞬ニヤリと笑った。

「理由ですか?それはこの王都に来た時に獣人の姿が見えなかったか
らです。貴方達の宣伝によって獣人は肩身の狭い思いをしています。
そんなことをする人と結婚なんか出来るわけありません!」

カナは畳み掛けるように理由を説明する。

これはカナ自身も経験していることなので力がこもっている。

「そ…それは…………ああもうっ!そんな理由で…」

「そんな理由ですかっ!」

「うっ……………」

圧倒するカナにグレアムは涙目になっていた。

・・・メンタル弱いなあ…こんくらいで涙目とか脆すぎだろ。・・・

勇輝は呆れて我慢出来ずため息を漏らした。

「よろしいでしょうか？ 私からも話させていただきます。私は外交官のノースと申します。今回の会談で正式に結婚のお話を白紙にさせていただきます。旨をお伝えに参りました。」

ノースが前に進みでると自己紹介の後に追い打ちをかける。

「え…そんな…嘘だ嘘だ嘘だー！」

グレアムは駄々をこねる子供のように喚き立てて足をジタバタさせる。

もうそこには王子としての風格は存在していなかった。

「陛下っ！お氣を確かに！どうかお鎮まりを…。」

側近が慌てて王子に近寄ってフォローしようとするが収まる気配は無い。

側近の何人かがこちらを睨んだが、こちらも睨み返してやった。

「それでは王子、これで帰らせていただきます。」

カナがそう言うと共に3人は立ち上がって返事をする余裕もない王子達を尻目に玉座の間を出て行った。

勇輝達が出て行った後玉座の間は何とも言えない雰囲気にも包まれていた。

「王子…どうされますか？」

側近がオドオドしながら尋ねるとグレアムは立ち上がって拳を握りしめた。

「許さない…。国民にはもう結婚式の発表までしてたのに…俺にこんな恥をかかせたあいつらをこのまま返すもんか…。あんなことをしたあいつらを後悔させてやる！」

グレアムの目には怒りと憎しみがこもっていた。

「戦争だ！あんなやつら滅ぼしてやる！細かいことはお前らに任せろ。」

「王子!? 国王陛下が…お父上が病に倒れている今、そのようなことを…。」

「ええい！構うもんか！やれと言ったらやれっ！」

「は…はいっ！」

側近達は王子の命令に従わざるを得なかった。
そして慌ただしく動き始めた。

「いやあ、大したことなかったですね。」

「はい！あんな方が王子だなんて全くです！」

勇輝とカナは城を出て馬車に乗っていた。

ノースは外交官として何やら会談を行っているみたいなので終わるのを待っている。

「まさかフラれたとはいえ涙目になるなんて…。」

「自業自得です！」

カナはなんだか機嫌が少し悪い。

どうやらグレアムが本気で気に入らなかったようだ。

涙目になるくらいフツた後でもまだ物足りないみたいである。

「勇輝さん！カナさん！大変です！」

そこへノースが顔を真っ青にして飛び込んで来た。

「ノースさん、どうされたんですか？」

「会談中に突然…：宣戦布告の通告をされました…。二週間後に軍を派遣すると…。」

宣戦布告が含まれていると思われる丸めた紙を持ったままノースは暗い表情をしていた。

「戦争…：最悪の事態になってしまいましたね。」

「そんな…：私のせいで…。」

カナは俯いて弱々しく呟いた。

「いいえ、カナさんは悪くありません！まだ猶予はあります。その間に交渉で戦争を回避します。ここからは私たちの仕事です！」

ノースが力強く告げるとカナの肩に優しくてを置いた。

「そうですね。カナさん、ノースさんを信じましょう！」

「はい…。」

勇輝とノースの励ましになんとか顔を上げてカナは頷いた。

「どうやって戦争を回避するんですか？二週間後には戦いが始まるんですよ。」

勇輝はノースに尋ねる。

「まずは、国王にこの件を報告します。私の伝令なら1日で往復できます。それで出来る限りの譲歩をするつもりです…。戦いを避けるためなら多少の痛手は覚悟しなければなりませんね。」

ノースは魔法で鳥にした伝令の紙をノシヨに向けて飛ばしながら焦り気味に答えた。

「でも…今回はどう考えてもあつちのワガママじゃないですか？それでこちらばかりこんな苦勞するなんておかしいですよ！」

カナが穏やかながらも怒りを露わにして訴える。

「ええ…確かにそうでもありませんけど、今回はあちらの面子の問題もあります。まさか国民に既に結婚するつもりで発表していたとは…これは国として一大行事を台無しにされたも等しいことです。政治は個人レベルとはまた違うのです。」

ノースは仕方がなさそうに肩を落としながらカナに言った。

「…面子かあ、どつかの国によく似てるな。国益とはまた別で厄介な事になりやすいんだよなあ。交渉で退いてくれるのか？…」

勇輝は元の世界のご近所の国を思い浮かべながらため息をついた。「とにかく伝令が戻ってきて譲歩できそうな事項の許可が取れたらすぐにでも交渉するつもりです。それまではアトライアに滞在します。」

「私達は構いませんけど…兵士達などはどうするんですか？」

勇輝が途中で別れた他の馬車を思い出して質問する。

「そうですね…本当は王都の駐屯地にでも行かせたかったです。が…戦う事になったことで双方を余計に刺激してしまうでしょうね。人数もいますから、申し訳ないですが彼らには外で待機してもらいましょう。」

ノースはやれやれといった感じでそう答えた。

「…まあ戦う予定の相手の兵士が近くに居るのは問題だからな。でも流石に可哀想だよな。何か毛布とか差し入れでもしてあげよう。」

これでも少しは野営のキツさは知ってるつもりだ。．．．
自分が毛布を使っていた時の彼らの視線を思い出し、そう決意した。

「私達は安全そうな宿を確保しましょう。それから身分を隠していた方が都合がいいでしょう。あなた達は普段どうりの振る舞いをしていてください。」

「了解です。」

勇輝はそう答えてカナは頷いた。

カナはやつと王女を演じることから解放されてホツとしているようだった。

．．．よく頑張ったな。少しはわがままも聞いて上げないとな。．．．

「それでは私とカナはギルドに向かいます。ノースさんは？」

「私は宿を探しておきます。何かあったら伝令を飛ばします。なので．．．これを。」

ノースは紙の端を小さくちぎって勇輝に手渡す。

「これを持っていれば私の伝令はあなたを見つけられるので大丈夫です。」

．．．へえ、ビブルカードみたい。ますます使えそうだな。．．．

「それでは解散しましょうか。この馬車は兵士たちのところに持って行かせます。ご無事を。」

「ノースさんもお気をつけて。」

ノースは帽子を被り耳を隠すと馬車から出た。

カナはそれを見て慌てて何かないかと探し始めた。

「カナさん、服も着替えないとバレちゃいますからどうぞ。」

勇輝は異次元空間の入り口を開いた。

「分かりました。ちよつと待ってて下さいね。」

少し頬を染めてカナが入口へと消えていった。

しばらくしてカナがいつものローブと帽子を被り出てきた。

もちろん尻尾も隠している。

勇輝はその後に異次元空間に入って旅人の服に着替えた。

「さてと、ギルドに行きましようか。」

「はい。」

2人は馬車を降りた。

外は昼下がりで人が沢山いた。

獣人の姿は見えないが、もしかしたら偽装しているだけでいるかもしれない。

・・・本当になんなんだろうな、全く。・・・

隣のカナをチラリと見てため息をつく。

通りすがりに出店の主人に道を聞いて歩くと案外近くにギルドはあった。

相変わらずのわかりやすい外観ですぐに見つかった。

初めて開けるはずなのに開け慣れた扉を開くと昼間だというのにテールで騒いでいる一団がいた。

しかもその中には獣人も何人かいる。

・・・結構大きいパーティーだな。祝勝会でもやってるのか？獣人も混じってるしなかなか愉快そうだ。・・・

そんな彼らの横を通って手続きをするために受付に向かう。

その時会話の一部が嫌でも耳に入ってきた。

「……だからよー、おしまいだぜ。この国はよう。」

「あんなボンクラじゃあなあ。ガハハハハッ！」

どうやらこの国のことのようなのだ。

流れ者の冒険者にとってはこの国の後継者がどんなに問題児でもただの会話のネタに過ぎない。

「すみません、この街に初めてきたのですが、手続きをお願いします。」

「はい、それではギルドカードをご提出して下さい。」

慣れた手つきで2人はギルドカードを取り出して受付に渡す。

「あそこの一団はなんですか？」

「受付の人に勇輝が尋ねる。」

「ああ、あの方たちは一昨日Bランクの魔物の巣の殲滅の依頼を達成した打ち上げをしているんですよ。」

「へえ、そうだったんですか。Bランク…すごいですね。獣人もいま

すね。」

「冒険者はもちろん、ギルドも世界中にありますから、たとえ街中で差別されていてもギルドの中では関係ありませんからね。」

「…ふーん、やっぱりそこら中に支部があるギルドは一味違うな。あの獣人たちもここなら人目をはばかる必要もないんだろうな。…」

「手続きが完了しましたよ。ギルドカードをお返しします。」

「ありがとうございます。」

受付からギルドカードを受け取ると2人は出入り口へと向かった。

受付を離れて騒いでいるパーティーの近くを通った時だった。

「おい、その二人組、あんたら新顔だな？ランクは？」

ほろ酔い気味のオジさん冒険者が絡んできた。

「わ…私たちはCランクです。それではこれで…」

「待てよ。その嬢ちゃん…獣人だろ？ちよつと話さねーか？」

勇輝が足早に帰ろうとしたら、若い獣人の剣士に呼び止められた。

「はい…そうですけど…」

カナはもじもじしながらもゆっくりと帽子を取る。

「なっ…ケーネ王女…？どうしてここに!？」

帽子を取り、露わになったカナの顔を見て剣士はひどく驚いている。

「生きておられたのですか! いったいどうやって!？」

「ちっ…違います! 人違いです! 私は王女ではありません。」

獣人の剣士はカナの肩を掴んで問い詰めるが、カナも振り払って事実を述べる。

「おいおい、どうしたんだよ、レイル。お前らしくもない。」

なおも落ち着かない彼をオジさん冒険者が諫めた。

「彼女は…人違いなわけ…」

獣人の剣士もといレイルはまだ驚きを感じている。

「勇輝さん! 探しましたよ。いい宿が見つかって…:…レイル!? お前レイルか?？」

ノースが帽子を取りながら勇輝の肩を叩くが勇輝の視線の先を見

て驚きの声を上げた。

「ノース!?! どうしてここに?」

レイルはノースの姿を見て再び衝撃を受けた。

嵐の前

「レイル…お前…生きてたのか？」

ノースは獣人の剣士レイルに向かってゆつくりと自分を落ち着かせるとともに尋ねる。

「俺は…あの後、ケーネ王女の行方の手掛かりをつかもうとして冒険者になったんだ。依頼をこなしながら情報を集めているうちに仲間も増えたんだ。」

レイルはそう言いって周りのパーティーメンバーを見る。

「なんだ、お前そんな事情があったのかよ。それなら俺たちにも言ってくれたらよかったのに。」

オジさん冒険者がレイルの肩を叩きながらつぶやいた。

「生きてたんならどうして知らせてくれなかったんだよ！お前が死んだと思つてとても落ち込んだんだぞ！」

ノースは涙目になりながらレイルに詰め寄った。

「すまん…いつかは連絡しようと思つていたんだがきつかけがなくてな…。それよりも…：ノース、お前は どうしてここにいるんだ？」

レイルが肩を竦めて申し訳なさそうに謝った後に質問をする。

「いやあ…今は外交官としてサビーナ家と交渉をしに来ていたんだ。」

ノースが若干照れ臭そうに答える。

「おおっ！やつとなれたのか！よかったじゃないか。」

レイルがノースを激励した。

「あのお…。」

勇輝とカナは話についていけない。

「…詳しくはわからないけど死んだと思われてたんだな。後は王女がどうか言つてたな…。」

「ああ、すみません。予想外の再会について嬉しくなつてしまつて。コイツはレイル、私の小さい頃からの親友です。」

勇輝たちのことを思い出したノースが気を取り直してレイルのことを紹介する。

「へえー、親友ですか！よかったですね。私は勇輝といいます。コッ

チはカナさんです。……でも死んだと思われてたって?」

「私は二年前にケーネ王女が行方不明になった事件の時護衛をしていました。」

「なんですって!? 護衛の人たちはみんな死んでしまったって…。」

「私もレイルに会うまでそう思っていました。…けど、コイツは生きてます。」

……あの事件の生存者か……一体何があったんだ?….

新たな事実にも勇輝とカナは驚いた。

「うーん……もう今日は飲み会の雰囲気ではないな。俺たちは帰つくから気にせず話したいことを話せよ。」

空気を読んだオジさん冒険者が他のメンバーに呼びかけて各々が自分の宿へと帰って行った。

「ありがとう。……それじゃあちよつと汚れてるけど座つてくれ。」

勇輝、カナ、ノースはレイルの前の席に座った。

「レイル、あの時何があったんだ?」

テーブルに着くなりノースがさつそく全員が気になっている質問を切り出した。

「そうだなあ……二年前、あそこで俺は死んだはずだった。けど今も俺は生きている。それはケーネ王女のお陰なんだ。」

「どういうことなんだ?」

「俺たちとケーネ王女は馬車で移動中に謎の人物に襲撃を受けたんだ。馬車の道を塞ぐようにたった1人で居て、道を開けさせようとして近づいた仲間をいきなり殺した。それから全員でかかったけど……次から次へとやられていった……バケモノだったよ。俺はそいつに斬られたけど、運良く傷が浅かった。そして、護衛が王女の近くにいる2人だけになった時、なんとか護衛の兵士用の馬車の下まで隠れたんだ。そのすぐ後に王女の護衛の悲鳴が聞こえた。けど王女をなんとか馬車の下に隠れさせたんだ。しばらくヤツはまだ息があるやつを一人一人殺しながら王女を探していた。ヤツが俺の隠れ場所の目の前まで来て遂に見つかりそうになった時……隠れていた王女が自分

から出ていったんだ。そしてヤツに連れていかれる前に俺の方を向いて笑っていたんだ……。」

レイルは当時の事をゆつくりと話す。

最後の方は後悔や自責の念が感じられる話し方だった。

「そんな事が……。」

「ソイツは一体どんなヤツだったんだ？」

「とにかくバケモノじみてた。真っ黒いローブにフードも被っていたから性別も分からない。短剣で鎧の隙間を正確に狙って：最後は急所を突いてきた。俺たちは翻弄されるばかりで全く歯が立たなかった。一撃も与えられず20人くらいの護衛が全滅したんだ。王女の近くにいたのは精鋭だったのに。」

襲撃犯の話をしているレイルはその事を思い出したようで震えていた。

「俺は王女様に助けられたんだよ。俺のことを庇って飛び出したんだ。あれから偶然近くを通っていた馬車に拾ってもらってこの街にたどり着いて冒険者になったんだ。」

「レイル……お前は……。」

「分かっているさ、けどな……やっとヤツの手掛かりを少しだけ掴んだんだ。」

「本当か!？」

ノースはレイルに詰め寄る。膝に溢れていた酒がついても気にもとめなかった。

「この街の裏の事情に詳しい奴がそれっぽいヤツを最近見たといつてたんだよ。」

「……えっ……この街にいるの？ヤバイじゃん。しかもめちやくちや強いみたいだし、危険な香りしかない……。」

2人の会話を聞いて勇輝は思い詰めていた。

「そういえば……カナさん？だったか、さつきはすまなかった。本当にケーネ王女にそっくりだったんでな。今でも信じられないくらいだ。」

「そ、そんな……仕方ないですよ。びっくりはしましたけど……。」

突然話を振られてカナはビクツとしたがなんとか返答できた。

「……あつー！」

勇輝はとあることを思い出して大声をあげた。

「勇輝さん？どうしたんです？」

「ノースさん！あの不審者2人が言ってた黒幕ってソイツの事じゃないですか!?彼らは今どこに？」

勇輝は立て続けにノースに話すとソワソワする。

……特徴が似ている……もし同一人物だったらマズイことになるっ
！……

「まだ、兵士たちと共に街の外にいるはずです。……ツ!?もしかして！」

「そうです！皆さん、すぐに行きましょう！」

勇輝達とレイルはギルドを飛び出した。

カナとノースは慌てて帽子を被り、レイルはそのままできてきた。

勇輝は大丈夫なのか心配したがすぐにその必要は無くなった。

「おや、レイルの兄ちゃん！どうしたんだ、そんなに急いで？」

「忙しそうだね。頑張んなよ！」

どうやらレイルはアトライアでそこそこ有名人らしく、獣人でありながら街の人たちから好かれているようだ。

「ノース！兵士達はどの門にいる？」

「えと……東門だ。」

「なら、こつちだ！近道するぞ！」

先頭を走っていたレイルが急に脇道に入り、他の3人も付いていく。

大通りと違う入り組んだ道をレイルは迷い無く走り抜ける。

……なかなか速い……すごいな、街の事を知り尽くしているのか。……

勇輝とカナはともかくノースは付いていくのがやっとだった。

もう何度目か数えるのをやめた細い路地を抜けると馬車の中から見た覚えのある大通りに出てきた。

「ああ………門を抜けた近くの……。」

ノースが息を切らしながら呟く。

「すごい、こんななにすぐに着くなんて…。」

「言ったら、近道だって。」

感心しているカナにレイルが得意げに答える。

「あと少しだな。もう一走りするぞ！」

「ええ…ちよつと休憩。」

「そんな暇ないぞ！ノース。」

くたびれているノースに喝を入れてまた一行は走り出した。

ギルドを飛び出してから20分もかからないうちに門の外から少し離れた兵士たちの野営地にたどり着いた。

見たところ異常はなさそうだ。

「私は指揮官に説明してきます。皆さんは2人の様子を見てきてください。」

ノースは一行から別行動となり、勇輝、カナ、レイルは不審者2人の元へと向かった。

「ん？あんた…また俺たちに何か用か？…ケーン女王!!」

「何でここに!？」

縛られている2人は勇輝達を見て驚愕している。

「はあ、何度目かなあ…この人は王女ではありません。そっくりなだけです。…今回はあなた達をそそのかした人物に関して聞いたことがあって来ました。」

「別人？また俺たちを騙しているのか？」

「あなた達を騙す必要ありませんよ。騙したのはサビーナ家です。グレム王子を見事に振りましたよ。…やりすぎて宣戦布告されちゃいましたけどね。」

「えっ…?？」

2人は口をあぐり開けて固まってしまった。

「それは置いといて…レイルさん。」

「おう、あんたらが会ったっていうヤツは真っ黒いローブにフード姿だったんだな？声はどうだった？」

レイルが2人の前に進み出て尋ねる。

「そんな格好だった……。声は若かったな、男とも女とも取れる感じだったから微妙だ。」

2人は真剣な表情で質問に答える。

「ソイツの背丈はこんくらいだったか?」

レイルは近くの木に剣で傷を付けて尋ねた。

「確か…:そんなくらいだった…:と思う。」

「そうか…:他に何かなかったか?なんでもいいんだ。」

2人にすぎるようにレイルは聞く。

「すまねーがもう何も無い…:…いや、まてよ!アイツからは少しだが、血の匂いがした。きつと近距離戦が得意なんだ!接近戦で染み付いたものにちがいない。この鼻に誓って間違いない。」

ヒョロイ方の不審者が新たな情報を提供してくれた。

「ーッ!!ありがとう。参考になった。」

レイルの目は確信に満ち溢れていた。

「レイルさん、やつぱり…:。」

「ああ、アイツに違いない!ヤツが現れたんだ。」

情報を掴んだ3人は不審者の元を後にしてノースに合流するため簡易の指揮所に向かった。

「そうですね、つまりは同一人物の可能性が高いと…:。」

「ああ、遂に尻尾を掴んだんだ。絶対に捕まえる!」

「しかし、相手はかなりの使い手なんですよね。一体どうやって?」

勇輝がもつともな質問をする。

「俺だつて二年間ただ調べ物をしてきただけじゃない。沢山の依頼をこなして力もつけた。昔のようにはいかないさ。」

レイルは自身たつぷりに剣の鞘に手を置いた。

「私もお手伝いします。色々と助けになると思いますよ。」

勇輝は決心をして支持を表明する。

「勇輝さん…:私も…:。」

「カナさん…:相手はかなり手強いんですよ。止めはしませんが無理は

しないでくださいね。」

「はい！」

カナは明るい顔で元気に答えた。

・・・断られると思ってたんだろうけど・・・止めたって聞かなさそうだからね。それなら初めから参加させた方がいい。治療ができるものカナさんだけだからな。・・・

勇輝はその機会が訪れないことを祈るばかりだった。

「どうします？探すか、待ち受けるか・・・。」

「相手は強い・・・万全の状態でなければ厳しいだろう。こちらに有利な状態でやって来るのに賭けよう。」

レイルは自身だけでなく冷静な分析もできるだけの頭脳も兼ね備えているようだ。

勇輝もこの意見に賛成する。

「それなら・・・とことん準備しましょうか。ノースさん、兵士たちも総動員しますので集めてください。」

勇輝がニヤリと笑ってノースに呼び掛けた。

襲撃者

勇輝はノースに頼んで手空きの兵士達を集めてもらっていた。

兵士達が集合している目の前には勇輝が立っているが、周囲には大量のOD色の物体などがゴロゴロしている。

「なんだよあれ…。」

「あれも武器なのか？」

兵士達は興味深そうにそれらを見ている。

「皆さん、よく集まってくれました。これから皆さんには敵の襲撃に備えた準備をしてもらいます。……これは設置型の爆弾です。これを私が教えるように設置してください。」

勇輝が足元の対人障害システム（クレイモア）を拾い上げて兵士達に見せる。

兵士達は見たことのない形の爆弾に注目している。

「これから一つ試しに使ってみるからその威力をしっかりと確認するよ。うに。」

勇輝は離れた場所にあらかじめセットしていたクレイモアと目標を模した木の板を指差した。

周囲を見回して安全を確認すると遠隔操作のスイッチを押した。

その直後に軽い爆発が起こり、目標周辺が白い煙に包まれた。

煙が流れて消えると目標の木の板はズタボロになっていた。

「おぉー！すげー！」

「爆弾と聞いたからもつと派手かと思ったら結構地味だな。」

兵士達が口々に感想を言っている。

「これは爆発自体は大したものではありません、けど小さな鉄球が無数に飛ばされて来るんです。……それがどういうことかはわかりますよね？」

勇輝は何人か大して驚いていなかったようなのでちよつとばかり脅してみた。

爆発の威力をショボいと言っていた兵士は顔が若干青くなっている。

「見てもらったように危険なものには変わらないので慎重に扱ってくださいね。…まずはここに2つほど持ってきてください。」

クレイモアの近くにいた兵士がハツとしたように動き出してクレイモアを恐る恐る大事そうに抱えて持ってきた。

「……ちよつと脅かしすぎたかな？遠隔操作でしか爆発しないはずだからそこまで怖がらなくてもいいんだけど……」

その後も慎重すぎるくらいの設置作業で少し時間がかかったが、それなりにトラップの設置は完了した。

「……とりあえずセットはできたけど、問題は遠隔操作のタイミングだな。今回は数が多いからどれがどこか確実に把握して起爆させないと……。そうだ、レーダーを使えばいいじゃん……」

街中では人が多すぎてパンクしそうだったのでオフにしていた魔力レーダーの存在を思い出す。

「……よし、これで反応が設置エリアに近づいたら起爆すればいいな。どれくらい通用するかわからないけど至近距離からショットガン食うようなもんだからただではすまんだろう。とりあえず夕食にしよう……」

レーダーを発動させて現在の状況を把握しながらカナ達が待つ場所へ向かった。

「あつ、勇輝さん！終わっただんですか？そろそろ夕食ですよ。」

椅子に座っていたカナが勇輝を見て立ち上がり手を振る。

「あらかた終わりました。あとはセットしたところに敵が来た時に爆発させれば大丈夫です。」

カナやノース、レイルがついているテーブルに向かったが、椅子がなかったので自分の分は異次元空間から取り出して置いた。

「へえ……便利なもんだなそれ。」

レイルが羨ましそうに一連の動作を見ていた。

「そうですね。食料や武器などなんでも入れたり取り出したりできますからね。……そうだ！せっかくなので夕食にこれも一緒にどうですか？」

勇輝が異次元空間に備蓄で収納していた食べ物を取り出して並べる。

全て屋台で買ったできたてなのでおかずにはもってこいだ。

「スゲーな…あつつ!?なんだこれ、できたてか?」

早速食べようとしたレイルがその温度に驚いていた。

「できたての状態を維持できるんですよ。私は兵士達にも配って来ます。」

勇輝は周囲に座ったりして簡易的な食事をしていた兵士達に屋台の串焼きをあげるととても喜ばれた。

ついでに毛布もあげたかったが、数がないので仕方なく諦めた。

兵士達に一通り配り終えてテーブルに戻ると本来の食事も置かれていたので夕食にした。

「それにしても、来ますかね…:ヤツは…。」

ノースが不安げに語りかける。

「そうだな、もし来なかったら俺が自分から探してでも見つけ出す。だが、今は来ることに賭ける。」

レイルが静かながらも力強く答えた。

「私たちもお手伝いしますよ。」

勇輝もさりげなく話に加わる。

「そういえばノースさん、ノシヨからの返事は来ましたか?」

「まだですね。明日の朝には届くと思います。」

ノースは首を横に振る。

「まあ、二週間ありますからそれまで頑張りますよ。」

「ノースも苦労してるな。俺がいなくなってから頑張ったんだな。」

レイルが感慨深そうにノースを見る。

「そういえば、カナとはどう知り合ったんだ?こんなに王女にそっくりなやつなんてそういないぞ。」

レイルがカナを見ながら尋ねる。

「…いや、なんだかんだで世の中には5人くらいそっくりさんがいるらしいぞ。どれくらい似てるかは別として…。」

心の中でツツコミを入れながら会話を見守る。

「勇輝さんとカナさんは偶然旅でノシヨに訪れていたところを陛下が、演説の群衆の中に見つけて城に呼び寄せたのがキツカケです。」

「正しくは連行ですけどね。」

「う……、本当に申し訳ないです……。」

勇輝が訂正するとノースが申し訳なきように頭を下げる。

「なんか……訳ありみたいだな。」

「まあ、それからケーネ女王の影武者としてグレアム王子をフツてきたというところですよ。」

しばらく話し込んでいると夕食も済んだのでノースとレイルは一緒に席を立ってどこかへ行った。

「行っちゃいましたね。」

「そうですね。私たちもゆっくり休みましようか。敵がいつ来るかわかりませんからね。」

勇輝とカナの2人もテーブルを立った。

勇輝は異次元空間に入って装備の確認をしていた。

服装は迷彩服4型で、弾帯を付けている。

……相手はすばしっこいタイプだからなあ……銃が当たるかどうかは怪しいな。サーベルも……取り回しは短剣に敵わない……となると……これか？……

勇輝は9mm拳銃とヘトスの鍛えたナイフを装備した。

他には9mm拳銃の予備マガジン2つだけという軽装だ。

……鉄帽はいらぬ……でも暗視装置があるかな？……迷う……いいや、いらぬ……

結局勇輝の装備は迷彩服に迷彩帽、弾帯に9mm拳銃とそのマガジン、ナイフ、手には革手袋、靴は半長靴となった。

それからマーハリクで報酬としてもらった青い宝石の加護が込められたバッチを胸に付けた。

その位置は本来なら徽章などが付いているところだが、勇輝は学生でまだ何も貰っていないためから空きだった。

……おつ、なんか勲章っぽくなった。それにしても小さいけどまあ

いつか。加護の力もどれほどか知らないけど頼りにさせてもらおう。……

鏡で自分の姿を確認した勇輝はそんな感想を抱きながら外に出た。

「流石に暇ですね。」

「そうですね。」

すでに三回くらいはこのやり取りをカナと行った。

準備を整えて野営地で警戒態勢を取っているが、何も異常なくすでに2時間ほど経っている。

「レイルさんたちは？」

「そろそろ……交代で来るはずですよ。」

勇輝とカナはレイルと数人の兵士とローテーションで警戒していてもうすぐ交代の時間だった。

カナは既に眠たそうにしている。

「ーッ！何か来た……。」

勇輝はそう呟くとクレイモアのスイッチを取り出して手に取った。

「勇輝さん！もしかして……。」

カナも目を擦って眠気を振り払うと不安そうに勇輝を見つめる。

「反応がありました。カナさんはレイルさんたちを呼びに行ってください。私はトラップでなんとかしてみます。」

「はい！分かりました！」

カナが杖を握って走り去る。

……くそう、もうすぐ休憩だったのに……こんなタイミングで来るなんて。……真っ直ぐ近づいて来るな。このルートのトラップは……。

レーダーの反応の方角からメモをしておいたトラップの情報と照らし合わせて起爆する順番を確認する。

……3、2、1……今だ！……

勇輝がスイッチを押した直後に遠くで爆発音が響いた。

この爆発音に野営地も騒がしくなる。

「嘘だろ……。」

勇輝はレーダーの反応を確認して呟いた。

「…クソツ！あの距離で方角も間違っていないなかったはず…どうやって防いだんだ？今度こそは仕留める。…」

勇輝は爪を噛み、次のトラップの起爆のタイミングを待った。

相手はいまだに真っ直ぐ、ゆっくりと接近している。

「勇輝さん！連れて来ました！」

「悪い、遅くなった。」

カナがレイルと兵士たちを連れて来た。

「待機してください！もうすぐ起爆します。」

勇輝が目を閉じて集中し、カナたちを手で静止させた。

「…あと少し…：…食らえ！…」

スイッチを押して新たに爆発が起こった。

「あの向こうにヤツが…：…」

「勇輝さん、どうですか？」

レイルとカナは爆発が起こった方向を見ている。

「どうして…：…、ダメです、仕留めきれない！」

勇輝はスイッチを地面にたたきつけようとしたが、途中でやめて収納した。

代わりにホルスターから9mm拳銃を抜いてカナ達に向かって振り向いた。

「危険ですが、直接戦うしかないようです。行きましょう！」

「よしっ！それでこそだ、ここで二年前の借りを返してやる！」

勇輝とカナ、レイルと兵士たちは森の中へ松明の灯りを頼りに進んでいく。

「もうすぐ、出くわします。構えてください。」

勇輝は立ち止まると松明を近くの木に燃え移らせないように置かせた。

「ルーモス…マキシマ！」

足元の手頃な枝を拾って周囲を魔法で照らした。

・・・これで暗闇という厄介な要素は無くなった。もうすぐ接敵するな。・・・

杖を捨てると9mm拳銃を前方に構える。

静まり返る中ゆっくり足音が聞こえてきた。

「ーッ！お前は…二年前のっ！」

レイルが足音の主を見ると声を荒げて剣を抜いた。

ヤツは情報どりのローブとフードで姿を晒さない格好をしていた。

顔は見えないがその手には短剣が握られている。

「テメエ！ケーネ王女はどこだ！嫌でも喋ってもらおうぞ！」

「……」

ヤツは黙ったまま立っている。

「ーッ！」

突然何の前触れも無くヤツは低い姿勢で短剣を構えてレイルに向かって行く。

「来たな！二年前のようにはいかんぞ！」

レイルが剣を構えた。

ヤツがレイルの直前で斜め横にステップをして意表を突いた切り上げをしてきたが、レイルは冷静に見切って剣で防ぐ。

「オラアッ！」

レイルが両手の力で振り払うとヤツがバックステップで距離を取り、レイルが攻勢に出た。

「すごい、トリッキーな動きを全て見切ってる…。」

「あの中には入れないな。」

瞬きも許されない攻防を他の人間はただ見るだけしかできなかつた。

・・・あの乱戦じゃ銃による援護はできない。魔法も微妙だ…。これほどまでレベルの高い戦いだとは…。

流星は凄腕冒険者といったところだろうか、これでBランクというのも驚きだ。

「これでっ！」

「ーッ!？」

レイルの横一閃で相手は体勢を大きく崩されて隙を見せた。

「ハアアアッ!!」

その一瞬を逃すまいと立て続けに斜め上から剣を振り下ろす。

「チッ…。」

ヤツが微かに舌打ちをしてレイルに切り捨てられた……はずだった。

敵を斬って下にあるはずの剣は相手の直前で薄い青色の光の障壁に弾かれていた。

「なっ!？」

「ーッ!」

思わぬ防御に剣を弾かれて出来た隙を突いてヤツが反撃に出た。

「グッ……。」

ヤツの短剣は剣を握っていたレイルの右手首を捉えて斬り裂いた。

レイルはたまらず剣を落として右手を押さえる。

ヤツは更に急所を狙って飛び込む。

「やらせるかよっ!」

レイルは左手で懐から相手の物より一回り小さい短剣を抜いて投げた。

「ーッ!？」

短剣はすんでのところでまたもや光の障壁に弾かれたが、ヤツはバックステップで距離を離れた。

「レイルさん!大丈夫ですか!」

勇輝が間に入りながら右手を押さえているレイルに声を掛ける。

すかさずカナが駆け寄って治療を始める。

「すまない…。」

「いえ、今は大人しく回復に専念してください。」

2人は少しずつ後退する。

「さて、私が相手になりますよ。」

勇輝が9mm拳銃とナイフを抜き、CQCスタイルで構える。

・・・そう言ったものの、どうやって戦うか……良くて時間稼ぎかな？とりあえずあの障壁が厄介だな。多分あれでクレイモアも防いだんだな。ということはおそらく発動はオートってところか。・・・

「ッ！」

「クッ！」

勇輝めがけて向かって来たヤツに9mm拳銃を3発発砲する。

「ッ!？」

最初の2発が命中したがまた障壁に防がれた。

拳銃に驚いてボックスステップを取ったため3発目は回避された。

・・・クッ、今でもう簡単には当てられなくなったな……あの障壁の弱点はないのか？・・・

「ッ！」

「ああ、しつこい！」

再び突撃してくる相手に拳銃を向けるがすぐに回避行動を取られて狙いが定まらない。

素早い動きに翻弄されてあつという間に距離を詰められてしまった。

「クッ……」

いきなり首を狙って来た斬撃をかろうじてナイフで受け流して拳銃を2発撃った。

障壁に弾丸は弾かれてヤツは距離を取る。

「いちいち下がってんじゃないぞーそれならこっちから行くぞー！」

残弾が少ない拳銃をリロードして勇輝は呐喊する。

ナイフのリーチに入る直前に牽制射撃で2発撃つ。

「チッ……」

1発が障壁に弾かれたがそのまま勇輝はナイフを構えて斬り込んだ。

「ッ!!」

ナイフは短剣に受け止められたがまたすぐにゼロ距離で3発連射した。

「ウッ……」

2発は外れたが1発だけは左足の太ももを掠った。
ヤツは微かに呻き声を上げ、慌てて距離を取った。

・・・やった！攻撃が通じたぞ。やっぱり…距離を取っていたのは
…。

「その障壁…発動した直後は別の場所を守れないんだろ？」

「ーッ!!」

僅かであったが確かにヤツは動揺を見せた。

「タネはもうバレてしまったな！覚悟しろよ！」

勇輝は拳銃をホルスターにしまうと異次元から9mm機関拳銃を
取り出して構えた。

ツンデレ剣士

勇輝はヤツがフードの下から僅かに覗かせている顔に汗が滲んでいるのを見逃さなかった。

・・・おおかた詳細は掴んだぞ。インターバルは不明だけど、少なくとも障壁が発生している間にカバーしてない所を狙えば攻撃が通る。ヤツの様子を見ると動揺しているみたいだな。ここは畳み掛けるか！・・・

勇輝が9mm機関拳銃を腰だめで構えるとヤツが咄嗟に回避行動をとりながら接近してきた。

左足のダメージは大したことはなかったようでスピードは衰えていない。

・・・やっぱりすばしっこいな・・・でも、短剣のリーチで攻撃するにはかなり近づかないといけない・・・それなら！・・・

勇輝は無理に動きを追うのをやめて相手の攻撃を待った。

すぐにヤツが自分の間合いに入って短剣を振り抜いてくる。

「ッーいまっー！」

短剣が勇輝を捉える前にバックステップをしながらバースト射撃をした。

短剣の先端が左肩の上を掠ったがギリギリの距離で放たれた数発の弾丸は足に命中し、障壁が発生して防がれた。

「ッ！！」

ヤツは慌てて距離を取ろうとするが、障壁から覗いている上半身を捉えている

銃口から更に弾丸が放たれる。

「ウツ・・・」

3発が右肩周辺に命中して血が吹き出し、ヤツがぐぐもった声を出す。

右手に握られていた短剣が飛んでいき、身体は弾丸の衝撃で大きくよろけた。

「ハアアアッーッー！」

勇輝は9mm機関拳銃を放り投げて素手で突っ込み、ローブを掴むと体を入れ込んで体落としをかました。

「カハッ!」

受け身をせずにモロに地面に叩きつけられたヤツは大ダメージを受けた。

「縛道の四、這縄!」

すかさず拘束して取り押さえる。

そのまま右手でフードを思いつきり掴んで引っ張り上げた、

「女の人…?」

フードに隠されていた髪は綺麗な銀髪でそんなに長くはないがサラサラしている。

「とりあえず…あなたは何者なんですか?」

「……………」

襲撃者の女は口を開かず沈黙したままだった。

勇輝は治療を終えたレイルと兵士に女を任せると放り投げた9mm機関拳銃を拾って収納して全員で野営地に帰投した。

「まさか、俺の仇がこんな美人だったとはな……………」

野営地に到着してレイルが開口一番に言った。

その言葉は冗談めいてはならず、複雑な心境の中で出たようだった。

「いったい何の為に来たんでしようか?」

カナが手を後ろで組んで勇輝に尋ねた。

「話してくれますかねー? ああいった感じのものは難しいかもしれないです。」

勇輝は適当に受け答えて女が拘束されている場所へと向かった。

……どう見ても凄腕の暗殺者とかそういうやつだもんなあ、拷問でも通用しないんじゃないかな? てか、ちよつと可愛かった…………って何考えてんだ! ……

いつの間にか思考が変な方向に向いてしまい慌てて心を落ち着かせる。

そして目的地に到着した。

彼女にそのかさされた獣人2人組は別の場所にいるようで女1人を数人の兵士とレイルが見張っていた。

彼女は木に縛られているが無表情で俯いている。

腕の傷は最低限の治療を施され、包帯が巻かれている。

美しい銀髪が顔の前にかかろうとも気にしていない。

……くっ殺系ではないみたいだな。どっちかというところと感情が希薄なタイプか。どこことなく綾波レイっぽい雰囲気だな。……

尋問が困難なものになるであろうことにため息をついた。

尋問に際してレイルとカナ、ノースと共に話を聞くことにした。

「まずは私から……なぜここを襲撃したのですか？」

ノースが前に進み出て尋ねる。

「……知る必要は無い……」

彼女は小さく口を開いて抑揚のない声で答えた。

「そうですか……。では貴女は何者なんですか？」

ノースは右手を額に当ててやれやれといった感じで次の質問をする。

「サラ……でも名乗っておく、本当の名前は自分も知らない。」

サラはそう言う顔を下に向けた。

「孤児……ですかね？見たところまだ15〜6といったところみたいですし、彼女が黒幕でも無いかもしれないですね。」

ノースが下がって推測を述べた。

……うーん……となると、この子は利用されている線が強いな。依頼されているのかそれとも何者かに従っているのか……。……
勇輝が考え込んでいるとレイルが次に前に出た。

「お前は二年前も襲って来たな。俺はあの時ケーネ王女のお陰で生き延びてずっとこの時を待っていた……。王女はどこだ！生きていますか！」

レイルはサラに掴みかからんと詰め寄る。

サラはケーネ王女という言葉聞いて顔を上げた。

「……あの人は……生きてる……でも……」

サラはまた口を閉ざし、レイルは更に食いよる。

「でも何だ!? いったいどこにいるんだ! 答えろ!」

「レイルさん! 落ち着いてください。」

「そうですよ。何か理由があるのかもしれないです。」

ヒートアップしたレイルを勇輝とカナが抑える。

「俺は二年間ずっと…探し続けたんだ。教えてくれ…。」

少し落ち着いたレイルはサラに頼むように言った。

「言えない…マスターに逆らったら…。」

サラは涙をこぼしながらそう呟いた。

泣き出したサラを前にレイルだけでなく他の者も尋問どころではなくなってしまうた。

「クソッ!」

レイルは無言で下がり、近くの木に拳をぶつけた。

その後どこかへと早足で行ってしまった。

「レイル…少し時間をおきましょうか。」

「そうですね。」

ノースが提案して勇輝も了承した。

ただ、勇輝とカナは近くに留まった。

尋問が終わってからしばらく経ったが、勇輝はひとつ考え事があった。

・・・サラが最後に言ったマスターってのが気になる…身寄りがなく生きてするために従わざるを得ない状態ってのがテンプレな流れだろうな。何か逆らえない理由が他にもあると考えていいだろう。それさえ分かれば…。

「カナさんはサラのこと…どう思いますか?」

勇輝の近くの木の根元で体育座りをしているカナに尋ねる。

「私も生活には困っていましたがけど彼女はまた違った雰囲気がありました。普通だったなら冒険者になればなんとか暮らしてはいけるはず…しかも彼女ほどの実力ならなおさらです。なのにこんな事をするのは…何か大切なもの…例えば家族…とか…」

「それだっ！」

「ふえ？」

勇輝が突然声を出したのでカナはびっくりして間抜けた顔をした。「生活はなんとかなるはずだ。けど…家族は違う…そういうことか。」勇輝はサラの元へと歩き出し、カナが慌てて立ち上がって付いてきた。

「また来たの…何も言えないのに…。」

サラは勇輝とカナをチラリと見ると顔を背けた。

泣き止んだようだが、うつすらと涙の跡が残っている。

「貴女には兄弟や姉妹がいますか？」

「ッ!!」

勇輝の問いかけにサラは戦闘の時のような素早さで真っ直ぐ勇輝を見つめた。

「やっぱりですか。もしかして…人質に取られているとか？貴女が言えないのなら私が言う」独り言に勝手に反応してくれればいいです。」

「…どういうつもり？…なんで…。」

「もう一度…貴女には弟とか妹がいますか？」

あくまでも独り言という体なので無視して話を進める。

しばしの静寂の後にサラがはつきりと頷いた。

「次です。マスター…とやらにその人を人質に取られている？」

勇輝がマスターと言った時にサラが少しビクついたが控えめに頷いた。

「ッ！勇輝さん！」

「ええ、カナさんの言った通りですね。」

カナと顔を見合わせて再びサラを見る。

「もしもですけど、その人が安全になったら貴女は自由になれますか？」

「ッ！」

サラは勇輝の問いかけに大きく驚き、その目には涙を浮かべ始め

た。

そして静かに頷くと涙が流れ落ち、顔を上げると微かに笑っていた。

・・・なんだ…笑えるじゃないか。感情が希薄なんじゃなくてただ表に出にくいだけだったんだな。・・・

「お願い…私の家族を…弟を助けて！」

サラは振り絞るように声を上げた。

「勇輝さん、私…。」

カナが勇輝の方を向いてすがるように見つめる。

「分かっています。私も同じ気持ちです。……………助けましょう！」

勇輝がそう決意するとカナの顔もいつそう明るくなった。

「ありがとう…。」

サラはそれだけ告げると泣きながら笑顔を見せた。

勇輝はサラの相手をカナに任せて馬車に戻った。

勇輝が馬車に戻るとノースとレイルが待っていた。

「勇輝さん、また勝手に話を進めていましたね？今度は何をききだしたんですか？」

ノースがいたずらっ子を追い詰めるように話しながら寄ってきた。

「ああ…バレちゃいました？まあ、ちよつと思いだたる節があつて…揺さぶりというか、アプローチを変えてみました。そしたら彼女の置かれていた状況が分かりましたよ。」

やれやれと肩をすくめて勇輝が2人に白状する。

「アイツにどんな理由があろうと許されるわけじゃない。」

レイルが馬車の側に座り込んで呟いた。

「……………彼女は…サラは弟を人質にされ、マスターとやらに従わざるを得ないようです。彼女の行動原理は弟の身の安全…そしてマスターが今回の黒幕であると考えられます。つまり…私たちがサラの弟を助け出せばサラは従う必要がなくなります。」

「ほう…家族を人質に……そんな理由があつたとは…。」

ノースは唸っていたが、レイルは特に反応しない。

「黒幕のマスターならケーネ王女に関しても知っているでしょうし。」

勇輝がわざとらしく言うのとレイルの耳がピクツと動いた。

「今はカナが相手をしています。詳しくはまた夜が明けてから聞く予定です。ノースさんは戦争回避の交渉に集中してください。レイルさんは…できれば協力して欲しいですけど…無理強いはしません。」

「そうですね。ノシヨに送った伝令の返事も帰ってきたので私は交渉内容をまとめさせていただきます。」

ノースはそう言って馬車に入ってしまった。

勇輝とレイルの2人きりになった時、レイルが立ち上がった。

「俺は…アイツを許してない。だが、ケーネ王女の行方を掴むためにもそのマスターってヤツをとっちめなけりやならないようだし、協力する。弟には罪は無いしな。」

「レイルさん…ありがとうございます!」

勇輝が礼を言うとレイルは背を向けて兵士達のいる詰所へと歩いていった。

…ツンデレだな、なんにせよ心強い味方ができた。…

レイルを見送ってホツと一息つくつと馬車に入って何やらブツブツ言いながら考えているノースを尻目に眠りについた。

救いの誓い

朝になったようで小鳥のさえずりが微かに聴こえて朝日が差し込んでいる。

勇輝が目を覚まして馬車の中を見渡すと、ノースがノシヨからの返事の紙を広げた簡易的な台の上に突っ伏して眠っていた。

確か勇輝が眠る前からずっと思索していた様子を見たことを思い出した。

・・・お仕事ご苦勞様。戦争を防げるかどうかはこの人にかかってくるからな。かなりのプレッシャーだろうな。・・・

ノースを起こさないように音を極力立てずに外に出ると大きく伸びをした。

「や」と。

勇輝はまだ眠たい目を擦ると気を引き締めるために一言口を開き、カナがいる馬車へと向かった。

「おはようございます。」

「あつ、おはようございます。」

途中で巡回中だった兵士に挨拶をする。

突然声をかけられた兵士は以外そうな顔をして慌てて挨拶を返す。

・・・そういえば少し見た目が若返ったような感じだったけど、他の人からはどれくらいに見られてるんだ？一応20歳いつてるからな、これでも……。・・・

勇輝は自分の低い身長を意識して少しへこんだ。

・・・全く、最近の同世代はみんな背が高くていいよな。170台もゴロゴロいたし、てか異世界はその辺りが更に拍車がかかって他のルックスの平均も高いときた…なんか泣きたい。・・・

この世界での生活で若干明るくなった勇輝だが、一度落ち込むと悪い考えが巡ってさらに気分が落ち込む癖はなかなか治らない。

・・・ダメだな……ほんとこんなんじや、切り替えないと……。これからカナさんのところに行くのにつまらないことで暗くなるわけにはいかないな。・・・

気を取り直して小さくなった歩幅を戻して歩みを進める。

勇輝がカナの馬車の前に着くと椅子に座り小さなテーブルに頬杖をついてどこか上の空になっているカナがいた。

「カナさん。」

勇輝が声をかけるとカナの耳がピンと立って素早く振り向いた。

「勇輝さんーおはようございませすー！」

カナが立ち上がって挨拶をする。

先程までの表情が嘘のように明るく微笑んでいた。

「おはようございませす。何か考え事でもしてたんですか？」

勇輝も挨拶を返すとさっきのカナの様子が気になって尋ねる。

「ああ、サラさんのことを考えてて…どうしたらいいのかなんて。」

「そうでしたか。それならちようど良かったです。何か朝食をもらってサラさんのところに行きましょう。もちろん3人分です。」

勇輝がそういうとその意味を理解したカナはニツコリと笑って勇輝の側に近寄った。

「優しいんですね。」

「え、ええ…まあ。」

カナが側に寄って発した言葉に適当な返答が見つけれられず少し間の抜けた返事をした。

「それなら…ちよつと誰かいませんかー？」

カナが周囲に向けて呼びかけると近くにいた兵士が出てきた。

「王女様、どうされましたか？」

「何か軽い朝食を3人分用意してくれませんか？」

「わかりました！すぐにご用意いたします！」

兵士が走って指揮所の方へ駆けて行った。

「もう充分王女様つぽく振る舞えてますね。」

冗談つぽくカナに話しかける。

「ええ…そんなことないですよー。でも…それなら勇輝さんが私の王子様ですね。」

カナが無邪気な笑みを見せて行った言葉に勇輝は固まった。

・・・グツ・・・こんな不意打ちは心臓に悪い。並みの奴なら尊死して
いたかもしれない……。・・・

「…さん、勇輝さん？」

「ああ、ごめんなさい。ちよつとぼーつとしてました。」

そんなやり取りの少し後に先程の兵士がパンと乾燥させた果物を
持ってきたのでそれを受け取りサラの元へ向かった。

「ーッ！王女様！おはようございます！」

サラの見張りをしている兵士がカナを見て驚きながらも挨拶をす
る。

「おはようございます。彼女の様子はどうですか？」

「はあ…特に変わったことはなく、大人しくしています。」

「そうですか。少し彼女と話をしたいのでその間休んでください。」

「えっ？それでは……。」

兵士がキョトンとした顔をして何かを言おうとした。

「大丈夫です。何かあつたら私が対処しますから。」

「そ、それなら休憩させていただきます。」

勇輝がフォローして見張りの兵士を離れさせた。

「どうですか？眠れましたか？」

カナがサラの前に出て話しかける。

「こんな状態じゃ眠れるわけない。…でも、少しは気が楽になった。」

まだ少しムスツとしているが仕方ないこととして片付けた。

「流石に拘束を解くのは皆から止められてしまいましたからね。それ
は申し訳ないと思つてます。よかつたらこれ…持ってきたので食べ
てください。」

カナが貰つてきたパンを差し出すとサラは眉をしかめた。

「これ…さつき食べた。」

「えっ？」「ー!？」

サラの予想外の反応にカナだけでなく勇輝も驚いた。

「なんか…目が覚めたら置いてあつた。けどこれも食べる。」

そう言つて固まっているカナからパンを取つて一口かじる。

「誰か私達より前に来たんですかね？ 一体だれが？」

「とにかく悪いことではないんですから食べましょう。」

「そうしますか。」

カナと勇輝も朝食を食べ始める。

サラはパンをさつさとたいらげると乾燥させた果物をずつと見ていたので勇輝が自分の分をあげた。

勇輝から貰った果物を食べたサラは目に少し光が灯ったようだった。

分かりにくいがどうやら気に入ったようである。

3人が食事を終わると向き合った。

「それでは本題に入ります。私たちはあなたに協力します。話せることはありませんか？ 念のため周りの人は離れさせてますから聞かれることはありません。」

勇輝が魔力レーダーで周囲を改めて確認して話を切り出す。

「本当に…助けてくれるの？」

そう尋ねるサラは以前より軟化しているようだがまだ完全に信用できていないようだ。

「はい！ 信じてもらえるか分かりませんが、力になりたいんです！」

カナがサラに正面から向き合って力強く言う。

「……まずは私の名前…といっても普段使っているだけで本当の名前は知らないけどサラじゃなくてシャリアと呼ばれてる。弟はアル、年は多分9歳くらい。3年前まではその日暮らしでなんとか生活してた。……でもアイツが…マスターが現れてアルを……。」

サラ…シャリアはそこまで言う…と俯いた。

「それで今まで言いなりになっていたと。」

勇輝が確認するように言う…とシャリアがゆっくり頷いた。

「ひどい…どうしてこんな目に合わなければいけないんですか。」

カナは静かにシャリアの境遇に憤っていた。

「でも…生活が苦しかったのも事実で、どちらか…または両方とも病気になるかして死んでいたかもしれない。命令通りに仕事を

して成功すればアルにも会わせてくれた。でも何か失敗したらしばらく食事を与えられなかったみたいでたまにひどく痩せてた。だから……ずっと頑張ってきた。」

シャリアの声が涙ぐんできたがそれでも話し続けた。

「マスターはアトライアにいる。公にもそれなりの権力があるといってたからもしかしたら貴族かサビーナ家と繋がってるかもしれない。」

シャリアは涙をこらえながらも最後まで言い切つて少し呼吸が荒れていた。

「いかにも黒幕つていうところですかね。しかもアトライアにいるとは。」

「……しかしサビーナ家はそんなに関係してないかもな。じゃないとあの間抜け王子とはいえもう少ししっかりした外交をするだろうからな。良くても家臣クラスの貴族だろう。……あつ！そういうえば！……」

「シャリアさん！」

勇輝がとあることを思い出してシャリアに声をかける。

「どうしたんですか？急に大きな声をだして。」

シャリアをなだめているカナが勇輝に尋ねる。

「シャリアさん、ケーネ王女はいつたいていどうなっていますか？」

「ーッ!!」

カナはその名前を聞いてハッとした。

「その人も……確かマスターの近くにいた。アルほどじゃなさそうだったけどそんなに良い扱いじゃなかった。」

シャリアは暗い顔でボソボソと話した。

「これは……もう決まりですね。あなたの弟だけでなくケーネ王女までいるとは、一刻も早く助けに行かなければいけませんね。……そうでしょう？レイルさん。」

「えっ?」

勇輝がにやりと笑つて後ろに向かって呼びかけると木の陰からレイルが出てきた。

「なんでだ？いつから気づいてた？」

「そりゃあなたが近づいてくる時から分かってましたよ。…カナさんも気づいてましたよね？」

「ふえっ？」

「あつ…。気づいていませんでしたか？」

「うう…。」

カナが少し自信なさげに耳を垂らしてしゅんとした。

その姿を可愛いと思ったが、落ち込ませてしまったことで若干後悔した。

「まあ、通りすがりの兵士にあんたらが3人分の食事をもらって行つたと聞いてまさかと思つて来てみたんだよ。そしたら…お前、随分とおしゃべりになったな？」

「……。」

レイルはシャリアを一時睨みつけて勇輝たちに顔を向けた。

シャリアは暗い顔のまま下を向いた。

「王女様がいる場所がわかったんだろ？なら今すぐにでもマスターつてヤツのところの殴り込みにいかないとな。…弟とやらは好きにしろよ。」

「えっ…それは…。」

「おい、さっさと準備しろよ。こっちはいつでもいける状態で待つてるんだ。」

シャリアが顔を上げて驚きの表情を見せたが、レイルはそれに目もくれず勇輝とカナを急かした。

「……はい！40秒で支度します！」

「40秒ですか!？」

勇輝は少しにやけながら異次元空間から装備を取り出して準備をする。

カナはまず40秒の意味が分からずあたふたしている。

…異世界の人がこのネタ知ってるわけないもんな…カナさんはとりあえずこれだけあればいいよな？…

「アクシオ！カナさんの杖よ、来い！」

足元の木の枝を拾ってカナの馬車の方向に向けて唱えるとカナの杖が文字通り飛んできた。

「カナさん、うまく捕まえてください。」

「きやあ!？」

そこそこのスピードで飛んできた杖をカナがなんとかキャッチする。

「……なんだその魔法……便利だな……。」

レイルがその一部始終を見て呟いた。

「カナさん、とりあえず杖だけあればいいですよね?」

「は、はい。」

杖を両手で抱き抱えるように持ってカナが頷いて応える。

「これで準備は完了です。あとは……レイルさん、道案内が必要ですよね?」

勇輝がいたずらっぽくレイルに尋ねる。

「……ああ!それはこつちでうまくやるから先に街の門に向かっとけ!」

レイルがしよがなさそうに言うと言指所の方に走って行った。

「……どういうことですか?勇輝さん。」

走り去るレイルを見たカナは勇輝に尋ねる。

「この中でマスターの居場所まで案内出来る人は誰ですか?」

勇輝がもったいぶりながらカナに言う。

「あつ!そういうことだったんですね!」

カナも気づいたようで笑顔ではしゃいだ。

「それじゃあシャリアさん、先に行きます。アル君も……あなたも助けます。……カナさん!」

「はい!」

2人はシャリアを残して走り去った。

「本当に……ありがとう。」

誰もいないなかシャリアは天を仰ぎ呟いた。

救出作戦

ある程度の準備を整えた勇輝とカナはもうすぐアトライアの門に到着しようとしていた。

「はあ……カナさん、ちよつとペースを落としましょう。シャリアさんが来ないことには行き先がわかりませんから。」
「そうですね。」

カナは何事もないかのように応えるが実は勇輝は少しばかりへばっていた。

朝っぱらから門の近くまで3〜4 kmは移動している。

流石に運動能力が高くて常人の域を出ない勇輝にはかなりこたえる。

……ふう、助かった。本当にカナさんの体力はいったいどうなってるんだ？交通手段の発達した世界の現代っ子にはキツイぞ……。装備だつてそんなに軽くはないんだから。……

今回の勇輝の装備は迷彩服4型に迷彩帽、弾帯、9 mm拳銃とサーベル、そして予備マガジン2つである。

比較的軽装の部類だが、サーベルを装備して走るのなかなか難儀だった。

それに対してカナは急ぎだったのもあるが、いつものローブと杖だけしか持っていない。

「勇輝さん、大丈夫ですか？」

「え、ええ……大丈夫ですよ。とりあえず門をくぐったらそこでシャリアさんたちを待ちましょう。」

多分へばっているのがバレってしまったが、とにかく今は休憩を入れたかったのでそう提案すると難なく受け入れられた。

その後少しして門に到着したので案内してくれる予定のシャリアを待つ。

アトライアの門は人でごった返しており普通なら待ち合わせには適しておらず、勇輝はしまったと思った。

・・・失敗だったなあ、これじゃ合流どころかお互い見つけれられるかもわからないぞ。・・・

「どうしましょうか？一旦外に出て人が少ないところまで戻りますか？」

「うーん、確かにここだと・・・」

「おー！っ！勇輝！」

「ん!？」

カナの言葉を遮って聞こえてきた自分の名を呼ぶ声に驚いて振り向くとレイルと…シヤリアがいた。

シヤリアはフード付きのローブではなく露出は少ないが動きやすそうな青基調のデザインの服を着ていた。

「レイルさん！それにシヤリアさんも…その格好はどうしたんですか？というかどうして見つけられたんですか？」

「おいおい一つずつ質問しろ。まずは二つ目の方からだ、自分の格好を見てみる。そんな変わった服を着てたらずぐに見つかるだろ。」

レイルが少し呆れるように言った言葉に勇輝はハツとした。

・・・これ（迷彩服）か……そんなに目立ってたとは、やっぱり街で着るのはやめようかな？目立ったら迷彩の意味無いし。・・・

「あとは…コイツの格好だが、たまたまちょうど良さそうなのがあったからあげただけだ。それ以上でもそれ以下でも無い。」

迷彩服の指摘を受けて改めて周囲を見回す勇輝に構わずレイルが話を続けたが、適当にはぐらかされてしまった。

・・・たまたまってなんだよ…なんでそんなもんあるんだよ。見た感じぴったりじゃん。・・・

「シヤリアさん、可愛いですね！」

「あ、ありがとう。これ、とても良い。」

カナがシヤリアの服を褒めるとシヤリアは少し頬を赤らめた。彼女もカナと同じか少し下の年の女の子なのだ。

お互いそれなりに仲良くできそうでもある。

「そういえばレイルさん、どうやって連れて来たんですか？」

カナとシヤリアのやり取りを見てなぜかバツが悪そうにそっぽを

向いているレイルに声をかける。

「ああ、脱走したから俺が一人で追っかけるから他は警戒を怠るなっ
て感じにした。」

「へえー、大丈夫なんですか?」

「大丈夫だ。問題ない。」

勇輝の何気ない心配に少しめんどくさそうにレイルがきっぱり
言った。

・・・おい!そのセリフはヤバイ!大丈夫じゃないヤツだから!・・・
大した理由もなく聞いただけだったのにレイルの言葉で本当に心
配になってきたが、もう一度戻るなんてことはしたくないので聞かな
かったことにした。

「勇輝、どうした?」

「えっ?何もないですよ。」

「いや、なんかヤバイみたいな雰囲気が出たからよ。」

レイルがそう言ってきたが、勇輝は理解できなかった。

・・・あれー?表情は表情筋が死んでるからあまり出ないし・・・な
んでわかった?まあ、それだけあのセリフのフラグ臭があるってこと
だなー!うん、そうだ。・・・

「とりあえず、出発しましょう。シャリアさん、お願いします。」

「うん、こっちの方。」

一行は街の中を進んで行く。

……………時を少し遡り勇輝とカナが出て行った少し後のこと

……………しまったなー、いろいろ考えてたら寝落ちしてしまった。……

ノースは大きなあくびをしながら馬車から出てきた。

そして目を擦っているとレイルが走っているのを見かけた。

「レイル!どうしたんだ?そんなに急いで。」

「あ?ノースか、あーあれだ、あの女が脱走しやがったから追っかける
とこだ。」

「なんだって!?勇輝さんたちは?」

「今別の用事で街へ向かった。」

「それじゃ兵士を何人が同行させて…」

「いや！俺一人で行く！兵士たちにはここの警備を任せる。あと、お前も交渉の仕事があるだろ？そっちの護衛を優先させろ。」

レイルはやけに早口で兵士の同行を断った。

「…あれ？確かコイツ…こういつたとき…もしかして…いや、よそう。…」

「そうか、無茶するなよ。交渉はオレに任せてくれ。」

「助かる！それじゃあな！」

レイルはぎこちない笑顔で感謝すると再び走り去っていった。

ノースはとりあえず朝食をとるために指揮所へ向かった。

指揮所はそれほどでもないが、脱走者が出たということもあり、少し物々しい雰囲気だった。

「隊長、詳細はどうなっている？」

ノースが現場の指揮を執っている兵士に尋ねる。

「えーっと、現在分かっているのは脱走が判明したのはつい先ほどで、ケーネ王女が話をしたいとおっしゃって兵士を下げさせ、その後兵士が戻ってくる間に脱走したものとおもわれます。最初に気づいたのは監視の任に戻ろうとしていた兵士とレイルさんで、レイルさんはその後単独で追跡に出ました。」

兵士が説明しているのをノースは静かに聞いていた。

「そうか、レイルとはちようどさつき出発するところをすれ違った。ちなみに脱走の原因はわからないのか？」

「それが…ケーネ王女が話を終えて街へ向かわれた後、兵士が戻るまで誰もいなかったため分かっておりません。痕跡なども特に残さずおらず手段も不明です。」

兵士は申し訳なさそうに話す。

「今後は監視体制を見直さないといけないみたいだな。レイルの方は彼を信じよう。お前たちは引き続きこの野営地の警備にあたれ。それから、昼前に城へ交渉に行くから何名か選出しておいてくれ。」

「はっ！了解です！」

兵士が勢い良く返事をしたのにノースも応えると指揮所を後にし

てすぐ近くでもらった朝食を食べた。

・・・レイル：無茶してないだろうな。しかし、レイルのあの振る舞いは：何か隠してる時のものだった。流石に親友は騙せないぞ：いったい何の目的が？・・・でも今は交渉に集中しないと・・・。・・・ノースは明らかに引つかかるレイルの行動に疑念を抱いたが自身の任務があるために一旦後回しにすることにした。

……………時系列は元に戻って街の中

勇輝たちはシャリアを先頭にして彼女の案内に従って路地の中を進んでいた。

「おいおい、この先は貴族の屋敷が多い地区だぞ。本当にこつちにあってるのか？」

「こつちでいい。この先に入り口がある。」

レイルの言葉に淡々とシャリアは答えてどんどん進んで行く。

「マジかよ：今までスラム地区とかを重点的に調査してたのに：全く見当違いだったのかよ。」

「そうでもない：そつちには仮の拠点もあったから間違いはない。でも、そう簡単には見つからない。」

「そうかよ。」

落胆するレイルをフォローしてるのかどうなのはつきりしないがそんなやり取りをしているうちに周囲の建物がやたら豪華になってきた。

「さすが貴族なだけあってわかりやすいですね。」

「なんかお城と同じようにあまりいい気はしないですね。」

「まあ、貴族のほとんどは城で役職を持ってたりしますからね。環境は似たものになりますよね。」

勇輝とカナの感想はそんなものだった。

「こつち、この建物の横の細い路地：。」

「なっ……こいつは……。」

シャリアがとある建物の方を指差すとレイルが突然立ち止まった。

「この屋敷はカイゼル公の屋敷じゃねーか！」

「レイルさん、なんなんですか？カイゼル公って。」

「貴族の中でも結構上のやつでサビーナ家とはあまり仲が良くなくて王の座を狙ってるとも噂されてる切れ者だ。まさか…そいつが…。」

レイルが屋敷の門の紋章らしき物を見ながら説明した。

「…これまた大物が出てきたな。しかもサビーナ家の政敵か…。まあ、そんなことはどうだっていい。救出が最優先だ！…。」

「相手が誰であろうと助け出しましょう！」

「そうだな。よし、行くぞ！」

一行は路地に入る。

「待って、ここに入り口が隠されてる。」

細い路地の奥に差し掛かり、シャリアが皆を停止させる。

そしてカイゼル邸側の壁に手を触れるとほのかに青白い光が魔法陣らしき物を描いた。

魔法陣が完成するとさらに強く光って平坦だった石の壁にいくつも切れ込みが出来てスライドしたりしながら人が一人通れる大きさの入り口が出来た。

「…おおー！ハ○ポタみたいでカッコいいな。…。」

「こんなところに入り口が隠されてるなんてな。」

「さっきのはどんな魔法なんですか？」

カナとレイルも思わず口を開く。

「私もあまり詳しくはわからないけど偽装を解く魔法って言われて教えられた。…それより、ここからは覚悟をした方がいい。私以外にも従わされている人たちがいるから戦いになるかもしれない。」

シャリアがそう言うと言と真剣な雰囲気にも包まれ、全員がそれぞれの武器を握りしめた。

勇輝も9mm拳銃のスライドを少し引いて弾薬の装填を確認して、セーフティを解除した。

「…シャリア以外にも同じように言いなりになっている人たちがいるのか、極力戦いたくはないな。…。」

決意の中に若干の迷いを抱えて入り口に入って行く。

入り口を抜けるとすぐに下へ降りる階段になったのであまり足音を立てないようにゆっくりと降りて行く。

勇輝は個人的に足音を立てるのが好きではないので普段から足音は小さくする癖があり、普段とあまり変わらないペースで降りるが、カナとレイルは少し苦手なようでゆっくりになっている。

シャリアは慣れているのか勇輝と同じか少し速い。

階段を下り終えると短い真っ直ぐの道をランプのようなものに光の球が入れられた灯りが薄暗く照らしていた。

道の先は3つに分かれている。

「シャリアさん、どうしますか？」

「多分マスターたちは真ん中…そしてこっちは倉庫と私達の居住スペース、そして最後が…地下牢で警備もそれなりにいた。」

シャリアがそれぞれの道を指差して説明する。

説明が終わった後も地下牢へ続く道を見つめていた。

「どうでしょうか…：…そういえば普段はシャリアさんたちはこの先にいるんですか？」

勇輝は倉庫と居住区の道を指して聞く。

「そうだけど…。」

「今は特に行く用も無いですか？」

「えっ…？たぶん…大丈夫。」

勇輝質問に一瞬驚いたがすぐに答えた。

「勇輝、何するつもりだ？」

レイルが後ろから声をかける。

「いや、なるべく戦いは避けたいのでこの道を封鎖しちゃおうかと考えたんですよ。」

「そんなことできるのか？」

「ええ、問題無いです。あと、残りの2つの道を二手に分かれていこうと思います。」

勇輝が全員に目を配って説明を始める。

「私が道を封鎖したあとレイルさんとシャリアさんと地下牢の方へ行って王女とアル君を救出して下さい。私とカナさんとマスターを

押さえます。」

「そうか、あんたの実力は見せてもらったから信用するが、無茶するなよ。あくまでも救出が目的だから深追いはするな。」

レイルが進み出て勇輝の肩を叩く。

「大丈夫です。そちらこそ救出頑張ってください。」

レイルとシヤリアに呼びかけると倉庫へと続く道に向いた。

「カナさん、手伝って下さい。」

「私ですか？」

カナが勇輝の隣にやってくる。

「一緒にでかい氷を出して塞いじゃいましょう。」

「えっ!?……分かりました!」

カナが杖を握りしめて前へと構える。

・・・氷の魔法で何かちよいどいいのは……あれでいいや。・・・

「ハァー……」

カナが目目を閉じて魔力を集中させると杖の先端が光り始めた。

「えいつ!」

以前魔法の練習で出してもらったものより少し大きな氷の塊が道の真ん中に発生した。

「よし。」

勇輝は魔力効率の良いM1ガーランドを取り出して肩に担った。

そして次の瞬間肩から瞬時に外して手で保持して「マリリン立て銃」をやった。

「ヒヤダルコ!!」

技の最後に床尾を地面に着地させる瞬間に唱えると氷の塊の周囲を更に氷が覆うように凍りついて隙間が埋まっていった。

「ふう、これで人は通れないでしょう。それでは作戦開始です!行きましょう!」

「はい!」

「よっしゃー!やってやる。」

「アル!もうすぐ助ける。」

一行は二人ずつに別れてそれぞれの道を走った。

覚悟

勇輝とカナ、レイルとシャリアの2組はそれぞれの道へと向かう。一足先にレイルたちが地下牢へと続く道を作り出した。

勇輝はカナとそれを見届けると居住区への道を塞いでいた氷の塊の奥でガンガンと音と軽い衝撃が伝わってきた。

「どうやら異変に気付いたようですね。氷が砕かれる前に私達も向かいますよう！」

「はい！」

二人はマスターがいると思われる道を走る。

道の先には木造の重々しい両開きの扉が見えてきた。

「勇輝さんっ！」

「このまま突撃します！少し前に出ます！」

「えっ!?ちよつと…」

カナの制止の言葉を言い切ると同じくらいタイミングでサーベルを抜きながらカナの前に出て左手を扉に向ける。

・・・扉が少しゴツいから強化版でいくか。・・・

「メラミー！」

左手からメラより一回り大きな火球が発射されて真っ直ぐに飛翔する。

「行けーっ！」

走りながらで少し掠れた声とともに火球が扉に直撃して扉の周囲を炎に包む。

しかし、扉は燃えながらもまだ形を保っている。

・・・クソツ！足りなかった！けど……

扉を視界の中央に捉えて意識を集中させて鑑定してみる。

「木の扉／耐久度：脆弱」

視界にうつすらとそんな解説が表示された。

・・・少し離れていたけどなんとかできた…脆くはなってるんなら目的は達成した！……

「とおーつげえーきーっ！」

「勇輝さーん！まだ扉が残ってるじゃないですかー！」

後ろからカナが叫んでいるが奇襲はスピードが命だ。

「ダイナミック…エントリイーツ！」

燃え盛る扉が目前に迫り勇輝は勢いそのままにライダーキックの要領で跳び蹴りをお見舞いした。

脆くなっていた扉が勇気の蹴りで崩れて勇輝は扉の先へと入っていった。

「ブウアツ!？」

扉を突き破っても威力の衰えなかった勇輝の蹴りは扉の先にいた誰かも巻き込んだようで確かな手応えとともに短い声が聞こえた。

扉の先は今までのいかにも地下といったような殺風景ではなく、執務室のような空間が広がっていた。

足元を見ると小太りの手下っぽいおっさんが仰向けに伸びていた。
…ちよつとおまけが…ついでにきた…。 やっぱりこんな身体能力があるっていいなあ。 うまく使いこなせればもつと強くなれるはず。…。

「さてと、お邪魔します。 早速ですけど…：…問おう、貴方がマスターか？」

正面の立派な机の向こうに腰掛けている、黒基調の貴族らしい服を着た男にサーヴァントっぽく尋ねてみる。

「だったら…：どうしたのだ？…どうしてここまで来たか知らんが邪魔者ならご退場いただくか。」

たった一人で座りながら堂々と勇輝に相對するマスターはかなりの迫力を見せている。

「それはできません、貴方を捕まえま…」

「勇輝さんっ！危ない！」

勇輝が後ろから聞こえた叫び声にハツとすると、直後に氷の礫が勇輝の目の前を斜め後ろから過ぎていった。

それはカナの氷魔法だということは理解できた…だが、それは勇輝

の目前にいつのまにか迫っていた短剣を弾いていた。

「ッ!!」

氷の礫が部屋の壁に突き刺さった後に短剣が宙を回転しながら落下して床に刺さった。

「チツ…」

マスターが腕組みで口元を隠していたが確かに舌打ちをした。

「勇輝さん、危なかったですよ。あと少し遅かったら……とにかく一人で突出しないでください!」

「ああ……ごめんなさい、助かりました。」

勇輝は少しはつちやけていたことを反省してカナに軽く頭を下げる。

……今まで大して失敗も無かったからって調子に乗りすぎてたな……例え転生して魔法とかを使えるようになっても本質は変わらない……ましてやこの世界は元の世界よりもっと危険なんだ。油断は死に直結する……。

冷静さがある程度取り戻して短剣が飛んで来た方向に目を凝らすと暗がりにも人影が見えた。

……アイツか、マスターに気をとられすぎて存在に気が付かなかった……、やっぱりこれは実戦なんだ……命がかかっている本物の……

「危なかったぞ、出てこい!」

そう呼びかけるがその影は動かない。

「良い、行け、奴らを排除しろ。」

「御意……お前らには怨みはない……だが死んでもらう。」

マスターが命じると前に進み出てその姿を現した。

暗がりから姿を現した敵はすらっとした長身に青い髪の若い男だった。

……ふん、なかなかのルックスじゃないか……強敵オーラが漂っている。けど……コイツを倒してマスターをとっ捕まえる!……

勇輝はサーベルを握り直すと構えた。

「カナさん、コイツは私が押さええます!カナさんはマスターを!」

「はいー」

カナが杖をマスターに向ける。

マスターは依然座っている。

男も剣を抜いた。

その剣はサーベルに近い曲剣で勇輝のものより少し刀身が広い。

「いくぞ……っ！」

男が走って距離を詰めてきた。

「このっ！」

スピードの乗った斬り上げを右に小さくステップを取って躲す。

ステップと同時にサーベルを握っている右手を残して左肩の前まで剣を持つてくる。

ステップが終わり、足が地に着いた瞬間にサーベルを横に振る。

「やるなっ……」

カキインという金属音を響かせて男が素早く体の前に戻した剣に勇輝のサーベルの刃がぶつかり、そのまま滑って空振りに近い形でいなされた。

「……クソッ！強い……」

サーベルを振り終わり、背中を向けるのは不利な状況になるのでそのまま体を回転させて振り返るように再びサーベルを横に振る。

しかし、これも受け止められる。

今度はガツチリとかち合って切り結んでいる点からガチガチという音が小さく聞こえる。

「く……ま……ずい……」

鏢迫り合いに振り向きざまという不安定な体勢で挑んでいるために力量が足りず、徐々に押される。

「ーフッ！」

「うわあっ！」

男が一気に剣を振り払って勇輝の身体ごと吹っ飛ばした。

「ガッ……い……痛い……。ーっ！」

勇輝は壁に背中から叩きつけられその痛みに悶絶するが、追撃を掛けようと迫ってくる男を見て慌てて左手で9mm拳銃をホルスター

から抜き、照準が完全でないままに3発撃った。

「なっ、飛び道具か…。」

構えが甘かったのと下から構えて撃ったために弾丸は男の頭上を通過して天井に着弾した。

しかし、男の身長が高かったこともあつて結構すれすれにいったらしく男はバックステップを取って距離を置いて立ち止まった。

短い時間だが、座り込んで銃を向ける勇輝と剣を構える男が睨み合う奇妙な状態が続いた。

「そうです…弓矢よりも速く、強力な武器…これが私の本当の武器です！卑怯なのは重々承知です。ですが、剣の腕は貴方に敵わないみたいなので今度はこれで戦わさせていただきます！」

勇輝は銃を向けたまま立ち上がってサーベルを納めて正対する。

「クツ…厄介な！」

男が剣を握りしめて構えるが、両手で確実に照準している9mm拳銃が火を噴く。

「ーッ！」

その銃弾は男を貫くことは無かった。

男の後ろの壁には少し後ろの左右に小さな弾痕がついている。

…マジか…弾丸を見切つて斬つたのか！…

一瞬驚いて止まったが、もう1発撃つ。

これもまた斬り落とされた。

「確かに…速い…だが、見切れる！」

男が走り出した。

「クソッ、クソッ！」

勇輝は苦し紛れに2発発砲するが走りながらも防がれてしまった。

更に距離が詰まっていく。

「残念だったな…悪く思うな。」

男のリーチ内に勇輝が入りそうになつたところで男が呟いた。

勇輝は力が抜けたように拳銃を持った手を降ろした。

「お見事です。でも……ごめんなさい！」

勇輝は拳銃を持った右手をぶら下げたまま左手を前に伸ばした。そして次の瞬間に黒い塊を掴んでいた。

「ッー！」

「喰らえーッー！」

左手に異次元空間から取り出した9mm機関拳銃を掴んで男にフルオートで弾丸の嵐を叩き込んだ。

銃口の跳ね上がりの抑制があまり意識されていない設計と毎分1200発という制御不能な連写性能の合わせ技によつてすさまじいマズルジャンプが発生する。

男は再度斬り落とそうとしたが、高速で次々と迫る弾丸に対応できるはずもなく、胸から肩にかけて7〜9発の弾丸を受けた。

「ぐっ……がはっ……」

男は大きくよろけて剣を手から落とした後、血を吐き出した。そして、がっくりと力無く膝をついた。

勇輝が銃を下ろすと男が唸り声を上げた。

「はあ……うう、まだまだ……まだ……たたかえ……る……」

男は利き腕ではない左腕で剣を拾って床に突き刺し立ち上がろうとする。

「どうしてそこまで……もう勝敗は決したんですよ。」

弾切れになった9mm機関拳銃を収納して男に近づく。

右手は肩から流れた血が滴り落ちてだらりとぶら下がっている。

荒い呼吸の乱れ方から直撃ではないにしろ肺にもダメージが及んでいるようだ。

「貴方ほどの実力者は死なせるには惜しいです。もう大人しくしてください。私もほんの少しだけは治療もできるつもりです。」

……以前は雀の涙程しか効果がなかったけど……やってやる！この人だってマスターに何かしらの訳があつて従わされているはずなんだ……助けたい！……

勇輝は男から剣を軽く奪い取って放り投げると両手をかざして意

識を集中させる。

「そんなことは無意味だ。ゴホッ…あつちを見てみる。」

「何?…カナさん…あれは…」

男の目線が示した先ではカナが氷の礫や塊をマスターに大量に射出していた。

しかし、マスターは未だに涼しい顔をして座っている。

カナの攻撃は薄い光の膜のようなドーム状の障壁に防がれている。

「結界…か。」

「そうだ、あれは…俺が生きている間半永久的に解除されない…」

「何だって…!他に何か方法が…」

男が勇輝の肩を掴んで弱々しく引き寄せると小さな声で話し始めた。

「無いさ…ゲホッ…まあ、ほつといても俺は死ぬだろうが、マスターが何かをする時間稼ぎにはなるだろう。だがなあ…俺もそれは気に食わない…!だから…俺にトドメを…刺せ!」

「…っ!そんな!」

勇輝は目を見開いて男の顔を凝視する。

男の顔は血の気が引いて白くなっているが僅かに微笑んでいる。

「お前達が…ここにいて…みんなを…助けてくれるのなら…本望だ。」

男は真っ直ぐに勇輝を見つめている。

「どうして…貴方が死ななくてもいい方法が絶対に…」

そう言いかけた勇輝は男の表情を見てそれ以上何も言えなかった。

…そんな…人を殺すなんて…しかも戦いでもなく、助けられるかもしれない人を切り捨てるなんて…嫌だ!けど…!けど…!

勇輝の手はいつしか9m拳銃のホルスターにかかっていた。

その手は尋常じゃないくらいに震えている。

勇輝が立ち上がって後ずさり距離を開き、銃を構えるが震えは止まらないどころか更にひどくなった。

「それでいい…、迷うな…これは…正しいのだから…!…みんなを…助けてやってくれ。…!覚悟を…決めろ…!」

男は弱々しい言葉を連ねたが、最後は覇気がこもっていた。

「うわあああーっ！」

声を上げて震えを無理矢理押さえつけて引き金を思いつきり引いた。

乾いた銃声が耳にいつもよりはっきりと響いて、不安定な握り方だったために反動が大きく伝わった。

勇輝が閉じていた目を開くと男は仰向けに倒れて呼吸ひとつもしていなかった。

「僕は…助けられなかった…それどころか…この手で……。」

勇輝は膝をついて呆然と男の骸を眺めていた。

鎮魂の轟き

「本当に…これで…良かったのか…？」

膝について呆然としている勇輝が視線を下に向けると若干くすんだ金色の空薬莖が散らばっていた。

「拾わなきゃ…」と一瞬思ったが、この世界で薬莖を回収する必要は無いのでその考えはすぐに振り払った。

「……ツ！そうだ！カナさんの方は…」

片膝を立ててカナとマスターのいる方向を向いた。

カナが小さな氷の礫を弾幕のように絶え間無く射出し続けているが、その全てが結界に阻まれていた。

「ブン、無駄な事をいつまで続けるつもりだ？」

「うう……いったいどうしたら…」

マスターは机に両肘をつけて手を組み涼しい顔で弾ける氷をまるで余興のように眺めていた。

「…この人の話だと自分が死なない限りは解除できないと言っていた…。つまりは…あの結界はもう無敵では無いということになる。マスターからはこつちが死角で決着に気付いていないみたいだ。カナさんも弾幕で精一杯みたいだな。ここで強力な一撃を加えれば破壊できるかもしれない…」

勇輝は9mm拳銃をリロードしてホルスターに入れた。

そして異次元空間から巨大な筒状の鉄の塊を取り出して結界に向けた。

「110mm個人携帯対戦車弾…魔法はどうか知らないけど今ある中で一番の火力だ。喰らえ…」

照準具を覗いて中心にマスターを結界越しに据えると引き金をゆっくりと絞る。

「後方の…安全確認…よし…」。カナさんっ!!下がって！」

「えっ!？」

意味があるのか不明な確認を呟いた後、カナに警告をして最後まで

引き金を引くと軽い推進音が室内に響き弾頭が高速で飛翔する。

「なんだ!？」

マスターが素早く顔を向けた瞬間に弾頭が結界に直撃して爆炎に包まれた。

用済みになった発射装置を収納すると勇輝はカナの元に駆け寄った。

「カナさん、大丈夫でしたか？」

「はい、少しびっくりしましたが…、勇輝さんは？」

そう答えたカナは特に何事もなかったようだ。

「大した怪我は無いです。結界の方は……。」

そう言つて2人が爆炎が晴れ始めた結界の方を見ると、うつすらと光の障壁が視界に入り込んできた。

「ーッ!ダメだったか?」

「待つてください!あれっ!」

焦りを含んだ声を上げた勇輝にカナが指をさして叫ぶ。

「……………あれは!」

結界は無事なように思えたが、上の方にヒビが入っていた。

まだ致命的ではなさそうだが、決して小さくもない。

「ハッ!…驚いたぞ。…だが、残念だったな。それでもこの結界は崩せなかったようだな。」

煙の奥に見えたマスターは椅子から立ち上がった。

「それはどうか、マスターさん。」

勇輝が進み出るとマスターと目が合い、マスターの表情が固くなった。

「貴様…勝負はついたのか?」

「ええ、もうあなたの結界は無敵ではありませんよ。」

「……チツ、役立たずが……。」

マスターの表情が険しくなり、振る舞いも粗暴になってきた。

……結局は小物か…結界のヒビにも気が付いていないようだな。……

「あの人の事を侮辱するのはやめろ…。」

「勇輝さん!？」

勇輝は両手に個人携帯対戦車弾を取り出して腰だめで構えた。

「なっ…通じないと言っているのに悪あがきを…。」

突然武器を取り出した勇輝にマスターは一瞬狼狽えたがすぐに余裕を取り戻した。

「耐えてから言うんだな。…カナさん…下がってください…。」

「はい…。」

抑揚のない声を発するとその気迫にカナが圧倒されてすごすごと後ろに下がった。

「あの、後ろも危ないですよ。少し横に…。」

「うう…ごめんなさい…。」

カナがしゅんとして斜め横に離れた。

…しまったな…カナさんを威圧してどうする。自分も人に言えたもんじゃないな…。…。

「いいや…吹き飛ば…!」

八つ当たりのように両手で引き金を同時に引いて2発の対戦車弾を発射した。

後方に反動を相殺して軽減するカウンターマスが吹き出されて大した反動は無かった。

2発とも結界の中心に命中して大きな爆発と煙に包まれたが、今度は少し違った。

バリンというガラスが割れるような音を重々しくしたような音が部屋にこだまして煙が流れ込んだ。

「ゲホッゲホッ…馬鹿な…結界が破られるなんて…。」

煙の中からマスターが煙にむせている様子が容易に想像できた。

煙が晴れてくるとマスターの姿がはつきりと見えてきた。

「もうあなたを守るものはありません。どうしますか?」

「ヒイツ…き…貴様!何が目的だ!俺に何の恨みがある!」

9mm拳銃を構えた勇輝に狼狽えて喚き立てる姿は始めの頃の面

影など全く無かった。

「恨みは…無いとは言いませんが、どうでもいいです。…ただ、貴方に虐げられている人達を助けて欲しい、そんな願いを叶える為にここに来ました。」

勇輝がふうと一呼吸置いて言った言葉は決して大きくは無かったが覇気がこもっていた。

「な…………アイツらがなんだっていうんだ！放っておいてもたれ死んでいただけのようなヤツらだぞ！それを生かしてやってるんだ、何が悪いっ！」

マスターは開き直って語気を荒げてまくし立てる。

「俺がわざわざ生かしてやって使っているのだから俺の道具同然なんだよ！それを…」

「黙れっ!!」

なおも喚くマスターの言葉を勇輝の叫びと直後の銃声がかき消した。

「ああーっ!!足が！俺の足がーっ!!」

膝下に銃弾が命中してその痛みにマスターは足を抱えて転がった。

「もう余計な口を開くな。戯言は聞きたくもない…。」

「勇輝さん…。」

「もういいです。カナさん、最低限の治療をしてコイツを連れていくのでお願いします。」

拳銃をホルスターにしまって振り返り、カナにそう告げると真っ直ぐあの名も知れないな剣士の骸の元に歩いて向かった。

「助けてあげられなかったせめてもの償いだ。しっかり吊ってやらないな。」

近くに落ちている剣を拾って鞘に納めるとその体を持ち上げてマスターの机の上にそつと寝かせた。

それから部屋の中をある程度物色してめぼしい物はとりあえず収納して、天井にいくつかC4爆薬をセットした。

「カナさん、もう出ましようか。」

「ええ、こつちも準備できました。」

2人は縄で両手を縛られて包帯を巻かれた足を引きずるマスターを連れて部屋を出る。

「あつ…忘れてた。」

勇輝は最初の突入でおまけに仕留めた手下を見るとため息をついて両手を縛り、収納した。

崩れて吹き抜けになっている扉を抜けてしばらく歩くと爆弾のスイツチを押した。

後ろから爆音と少しばかりの風が届き、小さな地震を伴って部屋の天井が完全に崩れて埋もれた。

「安らかに眠れ。」

勇輝は振り返ることなく、先へと進んで行った。

囚われの王女

勇輝とカナがマスターの部屋に突入している頃……

「あとどんくらいだ？警備は？」

「もうすぐ……だけど、警備が少し手強い。」

レイルとシャリアが地下牢を指して走っている。

トンネルの道はマスターの部屋に通ずる道とは違って荒削りで炎の灯りが小さく薄暗い。

「造りが雑だな。」

「そうね…所詮はそれだけの扱ってことよ。」

「ケーネ王女もか？」

「……どうなんでしょうね…。あの扉の先が地下牢よ。20人足らずが囚われているはず……警備は確か雇われ者だった。」

「よし、あと少しだ…待ってるよ。」

「アル……。」

錆びかけた簡素な扉の前に2人が立ち、呼吸を整える。

そして、レイルが取っ手に手をかけるとシャリアに目配せをする。

シャリアがそれに小さく頷いて応えるとレイルが勢いよく扉を開けた。

「ーッ!?誰だ?」

目の前に広がっているのはトンネルよりもさらに暗い空間で両側にうつつすらと鉄の檻が照らされている。

真ん中の通路に数人の男が剣に手を掛けて睨んでいる。

「………あ?おめえはあのチビガキの…、面会はまだ先だろ。さっさと出る。もう1人は誰だ?」

1人が近づいて顔を見るとそう言った。

「俺は王女に会いに来た。通してくれねーか?」

レイルが即興で頼み込む。

「ん?そんなことは聞いてたか?」

「いや、俺は聞いてねーな。本当にあってるのか?」

男達がお互いの顔を見合わせながらざわざわし始めた。

「そんな話は聞いてないってよ。どういふことか説明してもらおうか。」

男達が剣を抜き、構えた。

「チツ…」

「意味無いじゃない…。」

「うるせー、どっちみちこうなってただろ。」

レイルがふてくされて剣を抜き放った。

「はあ…サツサと済ませるわ。」

シャリアも短剣を持つて構える。

「お前ら…何をしようとしてるのか解ってるのか？あのガキがどうなってもいいのか!？」

「ーツー！」

「……………あつ？……………」

喚いていた男の胸元には短剣が突き刺さっていた。

少しして服に血が滲み始めてやっと状況を理解するとともに男は後ろに倒れた。

「アルには……………手を出させない！」

「クソツ！コイツ…マジだっ！」

「全く……………突っ走りやがって…。まあ、俺ものんびりするつもりはないけどな。」

シャリアに一足遅れてレイルも突撃する。

そうして戦いが始まった。

「があつ…」「ぐふつ…」

「チクシヨーっ！なんだよコイツら！」

歴戦のレイルと閉所での乱戦に適したスタイルのシャリアにそこいらの傭兵が敵うわけもなく次々と斬り伏せられていった。

3分も経たない内に傭兵は残り数人になっていた。

レイルとシャリアの後ろには10人ばかりの傭兵が倒れている。

「これのどこが手強いんだ？大したことないな。」

「そうね…やってみたら案外弱かったわね。」

ジロリと傭兵を睨む。

「クソ…あれはまだなのか?」「もうすぐだ、それまで…」

「何がもうすぐなんだ?」

「……うっ……」

レイルが前に出ると傭兵達は後退りした。

「何か企んでるようだな?まさか人質でも使うつもりか?それをやったらお前ら本当に命はないぞ、俺はともかくアイツは手がつけれなくなるけどいいのか?」

「……………」

傭兵達は青ざめているが後退りを続けて距離を離している。

「まあいいさ、逃しはしないぞ!」

レイルとシャリアが再び突撃する。

「間に合った…へへ、喰らえ!」

傭兵が後ろを振り返って前を向き直すとニヤケていた。

「なんだ?」

「終わりだっ!死ね!」

そう言う傭兵達が一斉にしゃがんだ。

その直後に”何か”がその後ろに見えた。

「チツ!」

「えっ…!?!」

シャリアは突然真横の鉄の檻に突き飛ばされた。

だが、その時に数本の矢が目の前を通り過ぎるのを見た。

そして自分を見て安堵の表情を浮かべるレイルの姿も……

「ううっ、はっ!…なんで……………」

頭を少しぶつけて閉じていた目を開くとそこには矢が刺さっているレイルの姿があった。

「大丈夫だ……急所に近い矢は防いだから大したことないさ。」

「なんで…私なんかを……………」

矢はレイルの左の肩と腕に刺さっていた。

右にいたシャリアを突き飛ばしたために左に集中していたようだ。

だらんとぶら下がっている左手からは血が流れて滴り落ちている。

「クソツ！1人仕留め損なってるぞ！装填急げ！」

「分かってるよ！急かすな！」

傭兵達が騒いでいる。

どうやらボウガンを用意していたらしい、3本の矢を同時に発射できる特別製を2挺同時に撃ったようだ。

「そんな余裕は無いわ……。」

「ギヤアツ」「ぐふっ……」

シャリアは無言で傭兵達を倒していく。

「た…頼む！殺さないでくれっ！」

最後の1人が尻餅をついてそれでもなお後ろに下がろうとする。

「……………」

「やめとけ、コイツにはやってもらいたいことがあるからな。」

レイルがシャリアの肩に優しく手を置く。

「……………分かった。」

シャリアが力を抜いて短剣をしまった。

レイルはすでに手頃な布を巻いて応急処置をしていた。

血が滲んだ布が生々しい。

「おい、ケーネ第二王女の所に案内しろ、それと全員の解放だ。鍵を寄越せ。もし、嫌ならアイツにバラバラにされるかもしれないぞ。」

「ひいっ！わ…分かった。こっちだ。」

完全に戦意を喪失した傭兵は青ざめた顔で立ち上がった。

しばらくしてレイルと傭兵が沢山の鍵を持って戻ってきた。

「コイツで弟を解放してやれ、俺は王女の所に行く。」

レイルはシャリアに鍵を1つ投げるとまた踵を返した。

「待って！」

「……………なんだ？」

シャリアの突然の呼びかけにレイルは立ち止まり顔だけを向ける。

「さっきは…どうして助けてくれたの？」

「あ…ああ、それか。」

レイルは顔だけでなくしつかりとシヤリアに向き合った。

「まあ、あれだ。せつかく用意してやった服をダメにされたくはなかったからな。本当に迂闊すぎだつての。」

「……そう、……ありがとう。」

シヤリアがそう言ったのを聞くとレイルは再び奥へと歩いて行った。

それを見送ると鍵を握りしめてアルが居る檻へと走って行った。

「アル!!」

「お…姉ちゃん?どうしたの?」

檻の中には少し痩せた少年が座っていた。

「ほら、これ…この檻の鍵よ。もう自由になれるのよ!」

ガチャリと鍵を開けて中に入るとシヤリアはアルを抱きしめた。

「ほんとう?本当に自由なの?」

「そうよ。もう、あんな辛い目には合わなくていいの。」

「お姉ちゃん……泣いてる?」

まだ完全に状況が分かりきっていないアルがシヤリアの涙に気付いた。

「えっ……そうね。嬉しいから泣いてるのよ。ここから出て一緒に暮らせるんだから。」

「それなら、あそこの子達も一緒にいい!一緒にいろいろなお話とかしてたんだ。……だめ?」

アルが反対側の檻の方を指差して無垢な顔を向ける。

「ええ、大丈夫よ。みんな出られるから。」

「やった!」

衰弱気味なので大人しめだったが、喜んでいるのは分かった。

「それじゃ、行きましようか。」

「うん!……お姉ちゃん、ちよつと歩けなさそう。」

アルの細い足は立っているだけで精一杯ですでに震えている。

「いいわ、背中に乗りなさい。」

シヤリアがアルの前でしゃがむと背中に乗せた。

「行くわよ。大丈夫?」

「いいよ。」

2人は檻から出た。

「ここか?他の檻よりはマシンなようだが…。ここの鍵を渡せ。後は全部の檻を開ける。…サツサと行け!」

「はいいいーっ!」

鍵をジャラジャラと鳴らしながら傭兵は走り去って行った。

「ふう…よし!」

鍵を握り、呼吸を整えると檻の前に立った。

「誰ですか?もう食事ですか、早いですね。」

暗い檻の奥から懐かしい声が聞こえてくる。

その声はか細く、弱っていたが、レイルは本物だと確信した。

「違います。貴女を助けに参りました。ケーネ王女。」

「ーッ!なんですって!」

驚きの声とともにその主が檻に近づいてきた。

その姿は2年前に見た時よりもひどくみすぼらしくなっているが、特徴はあの時のままで美しさを感じさせる。

「ついに…ついに見つけましたよ。2年前のあの日からずっと探しておりました。よくぞご無事で…。」

「2年前?!まさか、あなたは…!」

王女は檻に手を掛けて顔を近づける。

「ええ、そうです。あの日、貴女が命を救った兵士です。あれからずっと恩返しをするために探しておりました。」

「そうでしたか…あなたも助かったんですね。それだけが気掛かりだったのです。そのあなたが助けに来てくれるとはすごい巡り合わせですね。」

レイルが鍵を開けて扉を開くと王女がゆっくりと出て来た。

王女がレイルの正面に立つとレイルはサツと跪いて敬意を表した。

「顔を上げてください。マスターは?」

「そちらは実力のある者が押さえています。」

「それでは……ここにいる人々をお助けしなさい。」

「はい！」

再び頭を下げ、礼をするとレイルは王女を連れ立って傭兵から半分の鍵を分捕って作業を開始した。

作業をしばらくしていると反対側からアルを背負ったシャリアが歩いて来た。

「そつちも無事だったようだな。」

「ええ……そちらこそ。」

王女とレイル、そしてシャリアとアルが真正面から合流した。

「レイルさん、そちらの方は？」

「……………」

レイルはバツが悪そうな顔をして頭を掻いていた。

「大丈夫……自分で言う。アル、ちよつと待ってて。」

シャリアがそう言つてアルを降ろすと、ケーネ第二王女の前に立ち、跪いた。

「私はシャリア、2年前に貴女を連れ去った者です。」

「……ツ………そうでしたか。」

王女は静かにそう言つたとシャリアは俯いたまま言葉を続けた。

「処罰ならなんでも受けます。……ですが、弟だけは助けてください！」

シャリアは声を上げて慈悲を求める。

「顔をお上げなさい。貴女に事情があつたということは分かりました。レイルから貴女の協力が無ければ助けることはできなかつたということも伺つてます。ですから……今後の人生で人のために尽くせるように生きなさい。それができるのなら私は何も言いません。」

「……！……寛大な処置、感謝致します！」

シャリアは言葉の後半では涙声になっていた。

その涙を隠すように頭を下げると、手で拭つて立ち上がった。

「さあ、貴女も手伝ってください。その子は私が見ておきましょう。一緒にここで過ごしていましたから話も何度かしたことがあります。」

す。」

王女はアルに小さく手を振るとそう言った。

「本当にありがとうございます。……アル、しばらく王女様と一緒に居て。」

「うん、わかった。」

シャリアはアルを王女の近くに連れて行き、レイルと共に作業に参加した。

「結構な人数がいるんだな。ほとんどはチビや体の弱い奴が多いみたいだが。」

レイルが最後の鍵を開けてそう呟いた。

「ほとんど人質として生かされていたから……動ける人はみんな私みたいに従わされてた。早く彼らにも教えてあげないと。」

「じゃあ、こいつら引き連れて行くか？自力で歩くにはキツそうな奴が多いぞ。」

レイルは人質の予想外の多さと衰弱に頭を悩ませていた。

「とにかく、彼らにもこのことを知らせて味方にしないと……歩ける人だけでも連れて行かないと信じてもらえないかもしれないから。」

「はいはい、分かったよ。その間俺は残りの動けない奴を王女と一緒に見とくよ。」

レイルがやれやれといった感じに役目を引き受ける。

「お願い……それじゃあ、動ける人を探してくるわ。……そうだ、あなたには謝りたいことがある。」

「なんだよ。」

シャリアが真剣な雰囲気話しかける。

「あの時のボウガンのこと……私はあのボウガンがある事を知っていた。なのに、あんな簡単な策に気づけなかった。そして……あなたに傷を負わせた。……ごめんなさい。」

「またそんなことかよ。いいんだよ、んなことは。そんなんでチビと一緒に生きていけるのか？とにかく、もっと気をつけるんだな。」

「ええ……そうね。それじゃ、行ってくる。」

レイルは左手を押さえながらその後ろ姿を見送った。

作戦終了

「久しぶりに外に出れるんだ…。」

「もう自由なのか…?」

シャリアの後に続いて歩いている数人がふらつきながらも力強く地下道を進んでいる。

・・・アルもそうだけど、みんなずっと人質として生活していたから…、でもこれからは彼らも自由になるのね。・・・

先頭を歩くシャリアは時々振り返って彼らが付いてこれているか注意していた。

彼らは衰弱気味ではあるが大切な人に1秒でも早く会いたいという思いがその足を前に進ませていた。

「みんな、あと少して私達の仲間がいる場所に……………」

シャリアの言葉を遮るように地響きと何かが崩れる音が聞こえた。

「なんだ!?今のは…地震!?!」

「ここも崩れちゃうんじゃないのか!?!」

突然の事態に一団は軽いパニックになっていた。

「みんな!落ち着いて!大丈夫だから、あと少しなので進みましょう。」

いち早く冷静さを取り戻したシャリアがなんとか場を治めて再び進み出した。

・・・今の衝撃は…、あの2人は大丈夫かしら…。・・・

シャリアは不安を胸に抱きながらも勇輝とカナを信じて歩く。

「そういうえば、あなたはなぜケーネ女王を誘拐したんですか?2年間もそのままというのも引つかります。」

勇輝はマスターの両手を縛っている縄を引っ張りながら歩いている途中に振り返って尋ねた。

「別に大した理由はないさ…政争や獣人の国との交渉で上手く利用できないかと考えたのだが、いい使い所が無くてな。」

マスターは諦めの表情を浮かべながら自嘲するように話した。

「そんな目的で……あなたは最低な人です！」

勇輝の横を歩いていたカナが怒りを露わにしてマスターに詰め寄ろうとする。

「カナさん、よしましょう。この人は然るべきところで裁かれます。」
勇輝が手を伸ばして制止させる。

「勇輝さん……でも……、分かりました。」

カナは少し納得いかないようだったが引き下がってくれた。

……ああは言ったものの僕だってコイツは気に入らなくて仕方がない。……けど、僕らが私的に何かをやっても虚しいだけだ。カナさんにそんなことをさせるなんてもつてのほかだ。コイツは罪を償わなければならぬ。……

「それから……先日獣人の国の使節の野営地に刺客を送りましたね？目的を話してください。」

勇輝が再び尋問する。

「グレアムが俺の元にいるはずのケーネ王女にこつぴどく言い負かされたと聞いてな。そいつの正体を探ると同時に交渉を頓挫させようと思ったのさ。失敗しても、プライドを傷つけられたグレアムが仕返しに放ったということにすればサビーナ家の失脚も狙えるしな。まさか、ここまで辿られるとは思ってもみなかったよ。」

応急処置された足を引きずらながら次々と話をする。

……やけにペラペラ話すなコイツ……。シヤリアさんの襲撃はそういうことだったのか、失敗しても政争の駒にされる予定だったとはな……。つくづく外道なヤツ。……

「そうですか。では教えてあげます。この人がケーネ王女としてグレアム王子と交渉した方ですよ。」

勇輝がカナを指差しながらマスターにあからさまに話した。

「ほう、えらく似てると思ったが、やっぱり影武者か……。獣人の国もなかなか策を講じているようだな。」

マスターはそこまで驚くような様子を見せずにカナを一瞥して歩き始める。

薄暗い地下道の先にあの時シヤリアたちと別れた分岐点の空間が

見えてきた。

そしてさらに近づくとも輝は複数人の人間がいることに気づいた。

人がいることに気づいたも輝はすぐに魔力レーダーを使用したか、地下道という狭い空間で広域展開すると、戻ってくる魔力がごちゃごちゃで少し気分が悪くなった。

なんとか周りにはバレないように抑えたが、流石にキツかったので異次元から水を少しだけ取り出して飲んだ。

「も輝さん？喉が渴いたんですか？」

急に水を取り出して少しだけ飲んでまたすぐに収納したも輝にカナが不思議そうに聞いてきた。

「あ…ああ、ちよつとだけ水が飲みたくなつたんですよ。カナさんは大丈夫ですか？」

「いえ、大丈夫です。あれ？なんか物音がしますね。……っ！シャリアさんたちと別れたところに何人かいるようです！」

誤魔化すようにカナに聞き返したが、断られた。その直後に前を向いたカナが耳をピンと立てて気配を察知した。

「ええ、どうやらそのようです。敵か、味方か……。」

も輝はさつきと同じ失敗をしないように前方だけに絞った指向性レーダーを出力低めで使用した。

まだ乱反射か何かで違和感がある程度様子はわかった。

「カナさん、判りました。数は10人くらい……これは…シャリアさんもいますね。」

ちよつと出てきた吐き気を堪えてカナに報告する。

「良かった…。味方でしたね。も輝さん、先を急ぎましょう！」

「そうですね。」

…おかしい、レーダーの反応にはレイルさんがいない…。レーダーの出力が低いからか？何もないといいんだが……。……

も輝は若干の不安を抱きながらも進んだ。

「も輝さん！あれっ！シャリアさんですよ！」

「向こうもなんとかなったみたいですね。」

ある程度人が判別できる距離まで近づくとカナが早速シャリアの姿を見つけた。

「なっ……、アイツは……裏切ったのか……。」

マスターもシャリアの姿を見て状況を理解したようで、驚いていた。

「なかなか手強かったですよ、彼女は……。あそこにいるということは人質もなんとかできたということですね。一応、彼女を止めますけど多少は痛い目にあわされるかもしれないですね。」

勇輝がそう言うともマスターの顔が青くなった。

それだけのことをしてきたのだから報復を恐れるのは当然だ。

そのまま数分歩き続けてやっとシャリアたちと合流した。

「シャリアさん、早かったですね。……彼らが人質ですか。随分と弱ってますね。」

「ええ、でも彼らはここまで歩けただけまだマシよ。奥には残り半分以上は残ってる。」

勇輝とシャリアが言葉を交わす。

「シャリアさん、レイルさんはどうしたんですか？」

カナが勇輝の後ろから出てきて質問した。

「ああ、彼は……動けなかった人たちと一緒に残ってる。……ちよつと怪我をしてるけど、無事よ。アルも……王女も無事。」

途中で少し間が空いたがシャリアが状況を教えてくれた。

「そうでしたか。安心しました。これからどうするんですか？」

「私の仲間に彼らを見せてもう自由になったということを教えてあげないと……。それから……マスターは……。」

シャリアがそう言っている時に勇輝とカナが魔法で出した氷が砕かれた。

「っ！カナさん！下がって！」

勇輝が氷の近くにいたカナを引っ張ってシャリアたちの方に寄る。

大小の氷の破片の散らばる奥には20人ばかりの男女が短剣や弓、やりといった様々な武器を持って構えていた。

彼らは闘志を燃やしているが、シャリア同様に殆どがかなり若かった。

先頭に立っている杖を持った少女が魔法で氷を破壊したようだ。

一触即発の場にシャリアが進み出て彼らと向き合った。

「みんな！もういいのよ！私たちはもう…マスターに従わなくていいの！」

「何を言っているんだ、俺たちには人質が…」

後ろにいる男が諦めの感情を交えて呟いているのをシャリアが遮る。

「人質も解放したわ。これでもう心残りはないでしょ！」

シャリアはそう言っただけで後ろにいる解放した人質たちを指差した。

「あ…あれは…」「あの子は！」

集団がざわつき始めて動揺している。

…あとはもう一つの確固たる証明だな。彼らが全員来たら守りきれぬ自信はないけど、やるか…

「皆さん！こつちを見てください！これが誰かわかりますか？」

勇輝が注目を集めて縄を強く引っ張るとマスターがバランスを崩して勇輝の前に転んだ。

「あなた達の大切な人を酷い目に遭わせた張本人です。つまり、あなた達を縛り付ける人質もいなければ命令をするマスターももういないんです。武器を収めてください。私たちは助けに来たのです。」

マスターの顔がわかるように少し強引にマスターを引っ張り上げて彼らに見せる。

「ほら、言っただでしょ。あなた達はもう戦わなくていいのよ。」

シャリアが勇輝の横に立ち、そう言うのと彼らは武器を握っていた手を解いて武器を落とした。

「兄ちゃん！」

見たところ7歳かそこらの男の子が集団の前にいた少年に駆け寄っていった。

「お前っ…大丈夫だったか…？」

「うん！あの人たちが出してくれたんだよ！」

「そうか……良かった……良かったなあ……。」

少年は目に涙を浮かべながら男の子の頭を撫でた。

……やっぱりこうでなくちゃな。……

勇輝がさらに前に進み出て、ざわついている集団に声を上げる。

「ここにいない人たちもみんな無事です！ マスターはもう、あなたたちに命令することはできません。なんなら今すぐに迎えに行つてあげてみてはどうでしょうか。さあ、まずは再開と自由な喜びを分かち合つてください。」

勇輝がそう言い終えると何人かが、解放された人たちの中に飛び込んで各々の家族や大切な人と抱き合った。

それを見た残りの者も次々と自分の愛する人を探しにやって来た。

「とりあえずは一件落着ですかね。」

再開と自由を喜ぶ声や大切な人を探す声に溢れている中勇輝がシヤリアとカナに向けて肩の力が抜けたように呟く。

「ええ、でもこれだけの人がいっぺんに外に出ても、どうやって暮らしていけばいいのか……。」

シヤリアは少し下を向いて不安そうに言った。

……確かに、今までマスターに従わされる生活しか知らない人が多いし、何より人質だった人はかなり弱っている。さて、どうしたもんかなあ……。

勇輝が黙って考え込んでいるところにカナが2人の間に入って来た。

「あの……それならノースさんに頼んでノシヨで暮らせるようにしてあげるのはどうですか？」

カナの発言に勇輝とシヤリアは一瞬固まったがすぐに思考を回復させて提案の内容を理解した。

「そんなことできるの？」

「確かに……ノシヨとしてもケーネ王女が戻ってくるところに一緒に行かせたらいいかも……、というかケーネ王女に頼んだら早くないですか？」

勇輝が自分の発言で王女の存在を思い出して提案する。

「そんなこと引き受けてくれるかしら…。」

シャリアはまだ、心配なようだ。

「とにかく頼むだけでもやってみましょう。それではレイルさんと王女様のところに行きましよう！」

3人は地下牢の方向へと向かおうとした時に勇輝が持っている縄のことを思い出した。

「忘れてた…、あなたはどうしますか？…といってもここで1人になつたら多分皆に無茶苦茶にされると思いますけど。」

半ば放心気味のマスターに勇輝が面倒そうに声をかける。

「頼む…付いて行かせてくれ…。」

マスターはか細く、今にも消えそうな声だ懇願する。

「仕方ないですね。じゃあシャリアさん、これお任せします。」

「わかったわ。」

勇輝はマスターにつないでいる縄をシャリアに手渡した。

「ヒイッ！」

縄を受け取ったシャリアがマスターを見て少し微笑むとマスターは怯え出した。

「…まあ、僕も見てるから大したことはしないだろうけど、今は結構怖かったな。…」

そうして勇輝とカナ、シャリアに加えて血の気が完全に引いたマスターは地下牢への道を進んで行った。

カナとケーネ

人質の解放も無事に終わってシャリアと合流できた勇輝とカナはマスターを引つ張つりながら地下牢に向かっていた。

「本当にレイルさんは大丈夫なんですか？」

「ええ、腕に矢を受けたけど応急処置も自分でやってたわ。」

あまりに道中が暇なので勇輝は合流した時と同じような質問をした。

シャリアが持っている縄に繋がれているマスターは終始だんまりを決め込んでいる。

恐らくは極力目立たないようにしているのだろう。

「そういえばシャリアさんはこの後はどうするんですか？」

カナが突然口を開いた。

「……そうね、特に考えてないわ。アルの面倒も見ないといけないし……ノースや王女の慈悲を願うしかないわね。」

シャリアは少し考え込んでからそう答えた。

「なら、私達と一緒に旅をしませんか？私達もあてがあるわけではないですし、何よりきつと楽しいですよ！」

「えっ!?……でも……私には……」

シャリアはいきなりの提案に言葉を詰まらせていたが、勇輝が割って入った。

「カナさん、残念ですけどそれは難しいです。」

「えっ、どうしてですか？」

カナが意外そうに尋ねる。

「彼女の弟はまだ幼いですし、私達の旅に付いて行くことは厳しいでしょう。」

「でも……シャリアさんだっていますし……」

「一番は……守りきれれる自信がありません。今回の件でよく分かりました。今までなんとかやってこれましたけど、私は……弱い。」

カナの言葉を遮ってそう言い放つと勇輝は俯いた。

「そんな……そんなことないですよ！だって……私を十分守ってくれた

じゃないですか！」

カナが声をあげて勇輝の言葉を否定してくれているが、勇輝にはそれが余計に辛かった。

「なんかあったの？地下に入る前とはちよつと違うようだけど。」

シャリアがなだめるように声のトーンを和らげて聞いてきた。

「私達がマスターと対峙した時、私は青髪の青年と戦いました。」

「それって……！まさかアイツがいたなんて……。」

シャリアが驚きの声を上げた。

「シャリアさん、ご存知なんですか？」

「私達の中で一番の強者よ。年長者でもあったからいろいろと世話にもなったわ。そいつと戦ったのね……。」

「はい、最初は剣で戦って圧倒されました。そのあと銃に切り替えてなんとか勝ちました。でも、今考えてみたら、私が銃に切り替える余裕も与えずに倒せていたはずなんですよ。」

「手加減か……アイツがやりそうなことね。」

「私はそのおかげで今ここにいます。彼だつて……大事な人がいたはずなのに。そして、初めて……人を……。」

「殺したー その言葉を言うことができなかった。」

「勇輝さん……。」

「そうだったのね……。私はもう初めてのことはいつだったか忘れてしまった。けど、彼らのことは全て覚えているわ。……マスターの政敵やその護衛、最後にどんな顔をして何を言っていたか……。」

シャリアの眼は真剣そのものだった。

多くの人を手に掛けてきたからこそその言葉には不思議な重みがあった。

「そして、その度に誓うの……この人が生きるはずだった分まで生きてやるつて。幸せになつてやるつて。間違つているかもしれない……でも決して彼らを殺して良かったとは思っていない！」

最後に語気を強めて言い放ったシャリアは息を吸って落ち着くと、勇輝に優しい目を向けた。

その目は先程とは打つて変わつて慈しみがこもっている。

「だから、あなたも自分のした事を否定しないで。でないとな彼の思いも無かったことになってしまう。あなたはあなたの正義を貫いただけ。」

その声はいつものように少しトゲのあるようなものではなく、優しいものだった。

・・・全く、年下2人に慰められるとか防大のみんなが知ったら笑いや者だな。何やってるんだか……でも、人を殺すことを何にも気に留めないなんて防大どころか自衛隊でもそうそう無理だろうな。……ミサイルとかならともかく直接自分の手でやるのだから。なら……少しは頼つてもいいのかな？少なくともシャリアさんは年下だけど経験は僕よりも圧倒的に上だ。……

「そうですね、少しは落ち着きました。ありがとうございます。でも、やっぱり一緒に旅をするのは私がもっと強くないとだめですね。」

少し気分が晴れた勇輝とその一行は地下牢への道を進む。

「けっこう適当に掘られていますね。マスターのところとは違って。」

勇輝が地下牢に近づくにつれて雑な造りになっていくトンネルを見回しながら呟いた。

「レイルも同じこと言ってたわ。まあその程度の扱いつてことよ。」
「だれかさん」にとってはね？」

シャリアが少しドスをきかせて後ろを向くとマスターがビクツと震えた。

・・・見ててなかなか滑稽だな。僕らにとっては短い時間しか見えないけどシャリアさんたちにとっては積年の怨みがあるから笑い事ではないかな。……

そしてついに地下牢に到着した。

扉を開けると開け放たれた檻が並んでいる光景が広がっていた。

「よお、あんたらも無事に終わったみたいだな。大きな揺れがあったから心配したぞ。おっ？その真つ青の奴がマスターか？……って、やっぱりコイツはカイゼル公じゃねーか！」

レイルが左腕を押さえながらやって来てマスターを見ると驚愕した。

「やっぱりそうでしたか。となると政治的にもちよつと面倒ですかね？」

「いや、これだけの事をしでかしてたんだ。証拠もたんまりあるし、言い逃れもできんだろう。獣人の国との外交問題もあるしな。」

「やれやれと呆れているレイルの言葉を聞いて勇輝がレイルに声をかける。」

「あの、ケーネ王女と話がしたいのですが。」

「ああ、分かった。こつちだ。」

「なんか案内されているようだが、道は一本しかないので案内の体をなしていないと心の中でツツコミながら奥へと進んだ。」

すると人質だったと思しき小さな子供達に囲まれている獣人の女性があった。

「本当に…そつくりだ…。」

心の中でもそう思い、口から飛び出した勇輝の言葉にその女性は気づいてこちらを向いた。

「王女様、こちらは今回の件で協力してくれた方々です。」

レイルがいつのまにか王女の側について紹介をしていた。

「あら、そうだったのね。私がケーネ第二王女、国王ゾディアス・エルの次女、です。今はこんな格好で申し訳ありません。」

子供達に囲まれたまま、王女が立ち上がると名乗った。

「そんなことありません、お会いできて光栄です。私は冒険者をしている永遠勇輝というものです。こちらは…」

「同じく冒険者のカナです！」

勇輝が跪きながら自己紹介をしてカナの方も紹介しようとしたらカナがいきなり前に出て名乗った。

「ちよつと！カナさん！」

「構いませんよ。大して気にしませんから。それより…あなたが私の影武者さん？」

勇輝が慌てて止めようとするが王女が許した。

「は、はい！恐れ多くも私が影武者を勤めさせていただいております。」

カナが緊張からなのか上ずった声で答えた。

「確かにこれなら分らないわね。こんな偶然があるなんてね。」

「2人並んで見ると本当にどつちが本物か簡単には見分けられそうにないな。」

王女とレイルが気楽に話しているのを見て勇輝も口を開いた。

「あの！実はケーネ王女にお願い事があるんです！」

「あら、どうしたんですか？」

「今回の件で解放された人質とマスターの命令に従わされていた人達をノシヨで預かっていただけませんか？」

「なっ!?マジか?」

勇輝の発言にレイルが驚くが、ケーネ王女は黙って俯きながら考えていた。

「そうですか。私も彼らとここで過ごしました。できるのならば支援はしてあげたいです。しかし、私は2年も国を離れていましたので。父上に頼んではみませんが、完全な保証はできない事を承知してください。」

「もちろんです！お心遣い感謝します。」

勇輝が頭を下げるとケーネ王女は、ニツコリと微笑んでいた。

「大丈夫ですよ。父上は私のおねだりには甘かったですから。」

・・・あれ？案外大したことなさそう。なんか僕だけ必死になつた感じか？まあ、いいや。・・・

「そういえば、カナさんでしたね？」

「はい！」

「ちよつと頼みがあるのだけどいいかしら？」

「はい、お構いなく。」

王女がカナの方を向いて呼びかける。

「ああ、そんなにかしこまらなくていいわよ。あなたにはこの人たちも手当てをしてほしいの。ここには衰弱とかあまり動けない人もいるから回復魔法で少しでも治してあげて。」

「わかりました！全力で頑張ります！」

カナは二つ返事で了承すると張り切って治療に乗り出した。

その後はしばらく皆で雑談やらをしていたが、思ったよりカナの練度が上がっていたようで予想より早く終わったので、全員を引き連れて外へと向かった。

狭い階段を長い列を作って登って行くと太陽の光が差し込んできた。

後ろの人達が感嘆の声を上げている。

・・・もうすぐだ、いろいろあったがもう少しで終わりだな。・・・

そう思いながら入り口をくぐり抜ける。

すると目の前に見慣れた人影があった。

「あれ？ノースさん、どうしてこんな所に？」

「それはこちらの台詞と言わせてもらいますよ。貴族の居住エリアで何をしていたんですか？」

ノースは数人の兵士とともに変装をして勇輝らを待ち構えていた。

勇輝はともかくシャリアを見られたらまずい。

「おい、どうしたんだ？後ろがつかえてるぞ……ノースッ!?お前がなんでここにっ？」

後ろの人をかき分けてレイルが出てくるとすぐにノースと鉢合わせして勇輝とほとんど同じ反応をした。

「はあ、レイルまで……どういふことか説明してくださいよ。」

ノースがため息をついてジリジリと詰め寄る。

「ちよつと、あんた達さっさと退きなさいよ。……あつ……。」

固まっているレイルの後ろからさらにシャリアが出てきて彼女も状況を理解したがすでに手遅れだった。

勇輝は大きくため息をつき、レイルは額に手を当てている。

「お前っ！脱走したはずなのに……なんでレイル達と一緒にいる！」

兵士たちがシャリアに隠し持っていた短剣を抜いて構える。

「くっ……。」

シャリアは武器はとらないが身構えていた。

「レイルさん、どうかしたんですか？後ろがつかえていますよ。」

なんとさらに後ろからケーネ王女まで出てきた。

ノース達を除いて全員がフリーズした。

「カナさん！どうしてレイル達がこの女と一緒にいるんですかっ!? 教えてください！」

「はい？私はこっちですよ。」

ノースがあるうかとかケーネ王女に向かって問いかけたら勇輝の後ろにいたカナがひよっこり出てきた。

「えっ？カナさんが…2人……？」

ノースが混乱しだした所にケーネ王女が口を開いた。

「私はケーネ第二王女です。あなたはノシヨの家臣ですね。お話をしましょうか。」

「ええええーっ!!」

ノースがおかしな声で叫び、兵士は動揺してキョロキョロしていた。

勇輝とレイルはやっちゃったなと天を仰いだ。

望郷の月

しばらく静寂が周囲を包んでいた。

普段の声とは全く違うような声で絶叫したノースに近く、の兵士もたじろぎ、レイルは額に手を当ててそっぽを向いている。

ケーネ王女は突然の大声には少し驚いたものの、それ以外の変化はない。

自身の仕える国の王族相手に無礼をはたらくという大粗相に勇輝は若干どころではない気まずさを感じ、無関係を装ってこの場を抜け出したいと思っただが、カナが当事者の一部ということで（といっても一方的に間違われただけだが）そうもいかない。

「え……だって……ケーネ王女は……え……え……？」

ノースはやつと落ち着いたと思っただけならまだ錯乱している。

……そりやそうだよな。2年前にいなくなつて生存も絶望視されてた王女様が急に目の前に現れたんだもんな。気の毒に……。……勇輝は心の中でノースに手を合わせながら成り行きを見守ることにした。

「レイル……あの方に説明をしてくださる？」

「はいっ、わかりました。」

ケーネ王女がレイルに呼びかけるとレイルがそれに応えてきびきびとノースの前に出た。

兵士達はレイルを前に武器を下ろした。

「ノース、ここがわかつたのは大方勇輝にお前の魔法を込めた紙を渡したんだろ。まあ、それはいいか。……改めて言うが、あの方は本物のケーネ第二王女だ。」

レイルがノースの肩に手を置いてはつきりと告げる。

「おいおい……冗談だろ？……本当なのか？」

レイルに触れられて落ち着きを取り戻したノースは恐る恐るといった風に尋ねる。

「詳しいことは後で話す。とりあえずは急いで野営地に戻ろう。……ちよつと”オマケ”がいるけどな。」

レイルが言葉の最後でニヤついてノースの肩をポンポンと叩くとケーネ王女とその後ろにいた集団を見る。

「「えっ？」」

ざわざわとしている解放されたマスターの人質たちを見てノースと兵士は急激な胃痛に襲われた。

その後たくさんの人を引き連れて街中を進む勇輝たちは終始注目を集めながらも無事に野営地にたどり着いた。

街の門を通る時にノースが衛兵と色々も揉めたりしていたようだったので勇輝は少し申し訳なく思った。

10分ばかりの交渉の末に門をくぐり抜け、野営地にたどり着いたら今度は残っていた兵士たちが大騒ぎした。

大人数を収容する想定などしているわけもなかったのでてんやわんやだった。

だが、勇輝やレイルだけでなくマスターに従わされていた者たちも積極的に協力してなんとか問題は解決させた。

流石に食料は足りなかったので勇輝の異次元空間に入れて置いた備蓄を提供した。

中でも腹を空かせて待ちきれなさそうだった人たちに調理済みで収納していた料理を出したら大絶賛だった。

ノースはケーネ王女とレイルの2人と話し合っていて伝令を飛ばしていた。

その顔は……青ざめていて、しきりに腹が痛そうにしていた。

良い胃薬が手に入ったらあげようと思った。

「いやあ、ちよつと申し訳ないことをしてしまいました。」

「ははは……何を言ってるんですか。第二王女が無事に戻ってきたんですよ。良いことですよ……。」

すでに野営地は夜の闇に包まれ、料理ができるものは総動員されていて美味しそうな匂いが漂っている。

その中で勇輝はノースと話していたが、ノースの目は笑っていない

かった。

「だ、大丈夫ですか？」

「ああ…胃が痛い…もう楽になりたい…。いつその不満をアトリアの外交官にぶつけてやろうか…フッフ…。」

「ノースさん?!」

…やばい、今日一日にストレスが集中してノースさんが壊れかけてる…。カナさんだと思って話しかけたら相手が王女で、いきなり大量の人を預かって、しかも彼らをノシヨで引き取るように進言して…、極め付けはアトリアの貴族が捕まった状態でやってきたことだろう。そりゃきついだろうな…。

1人不気味に笑うノースから離れた勇輝はぶらぶらと歩いていると太めの木の枝に座っている人影を見つけた。

「シャリアさんでしたか。どうしたんですか、そんなところで。アル君はどうしたんです？」

適当に声をかけて尋ねるとシャリアはチラツとこちらを見てまたすぐに空の月を見上げた。

「アルならもうすぐご飯ができるからってそっちの方に行ってるわ。私は…月が綺麗だなんて。今まで月明かりだけを頼りに戦うこともたくさんあったけどこうしてゆっくり眺めることがなかったからちよつと新鮮に見えたの。」

「確かに綺麗な満月ですね。」

空に浮かぶ月は元の世界で見たものと全く変わらない姿を見せている。

そのことが勇輝にほのかな望郷の念を抱かせた。

「私の故郷は自然の美しさを様々な表現で彩っていました。もちろん月も…。」

勇輝は芸術や美しい景色などにはあまり興味を示さなかったが、心身ともに厳しい鍛錬を重ねる防大生活を経て若干の変化を遂げた。

休日之夜、外出を終えて防大の寮に帰るときにふと見上げた夜空に浮かぶ月を見てなんとも言えない気分になるのだった。

もうすぐ休日が終わって再び慌ただしい平日が始まるという憂鬱

な感情と雲ひとつない夜空にたった一つ輝く孤高の月への憧憬が入り混じり悲壮感にも近いものを感じるようになっていた。

その時は我ながら趣深くなったものだと思っていたが、今では元の世界との共通点として自身の支えにもなっていた。

「そうだったの…。試しに何か教えてくれる?」

「え?…:…んー…:… どうしようかな。」

シヤリアからの突然の要求に首を傾げて唸る。

しばらく唸って捻り出した記憶にちょうど良さそうなものがあつたのでそれに決めた。

「見る人に…もののあはれを知らずれば…:…月やこの世の鏡なるらん…:。大昔の偉い人が詠った詩で見る人あらゆる物の情緒を思い起こさせる月はまるでこの世の鏡のようであるという意味です。…どうでしょう?」

…防大に入る前に国語の古典で出てきた短歌だったと思う。何か覚えていたが確かこんな意味だったはず…:…。…

記憶の隅にあつたぽつと出の歌を出してちよつとドヤっているのが自分でも想像できる。

「へえ…:この世の鏡…:か。面白いことを考えるものね。でも、確かに月を見て人それぞれいろんなことを思うわね。…:…あなたは何を思うの?」

シヤリアは深く考え込むように月を見上げると不意に勇輝にそんな質問を投げかけた。

「ちよつと故郷に帰りたくなつた…:…というところですかね。遠く離れた地でもこの月は故郷で見たものと全く変わらずに輝いているのですからね。色々と思ひ出させられます。」

「そう…。私は特に故郷といった感じのものはないからちよつと羨ましい…:かな。」

シヤリアが呟くように言うと言輝の前に飛び降りた。

距離が近かつたので勇輝は少し驚いて後ろに飛び退く。

「私はそろそろアルのところに戻るわ。あなたけつこうおもしろいよね。それじゃ。」

シャリアは勇輝にいたずらっぽく微笑むと背を向けて軽く手を振りながら歩いていった。

「帰りたい……か。」

自分の気持ちを確認するかのよう一人呟くともう一度月を見上げた。

若干の霞に覆われていたがそれを物ともせず月は輝いていた。

シャリアと別れた後、勇輝も夕食を食べるために野営地の中心へと戻った。

美味しそうな匂いとまともな食事を食べられて喜びの声を上げている人々にふと温かい気持ちになった。

「あつー勇輝さんーどこ行ってたんですか？探したんですよ。」

自分も食事を受け取ろうと急ごしらえの調理場に向かっていてカナが懐に飛び込んできた。

「おっと、カナさん……まあ、ちよつと散歩しました。」

「そうだったんですね。もうご飯ができてますから食べましょう！今日のご飯はとっても美味しそうですよ！」

勇輝の手を取って引つ張るカナはらんらんと目を輝かせて尻尾はぶんぶん振られている。

そんな無邪気な姿を久し振りに見た気がしてほっこりした。

……ここに来てから王女を演じなきやいけなかったり戦ったりと忙しかったからなあ。年相応にはしゃいでいる方がやっぱりかわいいよな。……

本来のカナの姿を見て癒されていると食事を配っている場所に到着した。

手伝いをしていた少女から渡されたパンとスープを受け取ると異次元からテーブルとイスを出して座った。

「いただきます！」

きちんと手を合わせてパンをかじり、さつそくスープを啜ってみる。

「おお、確かに美味しいですね。」

見た目はなんの変哲も無い野菜のスープだが、素材の味を上手く活かして尚且つ絶妙な味付けでそれをさらに引き立てている。

「なんでも、ケーネ王女のために用意されたものを王女様がみんなにも食べて欲しいと言ってこうなったら嬉しいですよ。」

「へえ、そうだったんですね。とても優しいんですね。」

繊細な味に舌鼓をうちながらパンを口に運ぶと日持ちを重視していて味気のないパンでも美味しく感じられた。

カナも美味しそうに食べている。

それを見て、勇輝もまた食べ進める。

今この時だけは全てを忘れて幸せを噛み締めていた。

「そういえば、ケーネ王女が見つかった以上、私達の受けた依頼はうやむやになってしまいましたね。結局どうなるんでしょうか？」

「そうですねー、グレアム王子を振ったところで目的はほとんど達成したようなものですけど微妙ですね。」

「何より、戦争を回避しないといけませんし。マスター……カイゼル公の処遇についても色々あるでしょうし。」

ある程度食事を終えて現実的な話に戻った二人は今回の依頼について話していた。

依頼の目的はあくまでもカナがケーネ王女を演じてグレアム王子との交渉に臨むということで、求婚を見事に叩き潰したのだから問題はないと考えられる。

しかし、本物のケーネ王女が見つかったことでその主旨が無意味になってしまったのも事実である。

「ノースさんに聞いてみますか？」

「うーん……今ノースさんは……気を病んでるからあまり仕事の邪魔はしたくないな。」

勇輝の脳裏にハイライトの消えた目で笑うノースを思い浮かべて思いとどまった。

「まあ、今日は休みましょう。考えても進展なさそうですし……ノースさんも休ませておきますか。」

「そうですか、じゃあもう寝ますね。……あつ、馬車はケーネ王女が使ってるんです。……」

カナが急に思い出して困った顔をしていた。

「それなら私がノースさんが使っていた馬車で寝るといいですよ。ノースさんには私があると行っておきます。」

……まあ、ケーネ王女を外で寝させるわけにはいかないよな。でも、カナさんのこともどうにかしてくれればいいのに。とりあえずノースさんをどうにかしないとなあ……。……

「いいんですか……？ それじゃあ、わかりました……。お願いしますね。」

何故かカナがちよつと嬉しくなさそうに答えたのに違和感を感じながらも勇輝はノースの説得に向かった。

ノースのいる詰所に向かおうとした時に後ろでカナが「そうだったこれなら！」とか言っていたが特に気にせず進んだ。

その後ノースに馬車はカナに譲った旨を話すと「いいですよ……。どうせ徹夜するつもりですから……。ふふ……。」と言った。

その時のノースの顔は見ていられなかった。

とりあえずノースの答えをイエスと解釈してカナのいる馬車のそばで適当な毛布を取り出して眠った。

今日だけ色々あったのですぐに眠りについた。

交渉のカード

「うーん…、ふぁー…。」

馬車の側で毛布にくるまって寝ていた勇輝は朝になり目を覚ますと大きな欠伸をした。

・・・毛布があつたからまだ寝れた方かな。流石に枕とかが何も無いのはキツかったな。今度何かしら調達しよう。・・・

目を擦りながらそう考えていると毛布の中に違和感を感じた。

「うん？」

まさか…と思いつつゆっくり中を見ると栗色の髪が目に入った。

いつの間にやら馬車の中で寝ていたはずのカナが潜り込んでいたようだ。

・・・どうやら毛布だけのお陰ではなかったようだ。やけに暖かいと思つたらそういうことか。……まあ、仕方ない、少しは甘えさせてあげるか。・・・

カナは王女を演じている間勇輝に甘えるのを我慢していたため今回はもう少しゆっくりすることにした。

・・・どうやらカナさんがこうやっていることにも幾分か慣れたみたいだな。ちよつとばかしこれが普通になっているようにも感じる。・・・

勇輝はそんな自分の変化もまあいいかと思うようになっていた。

あまりにも暇だったのでレーダーを使用してみる。

突然予期せぬ大所帯になってしまったため近くに多数の反応がある。

「あ…。」

勇輝はその中のある反応を確認して思わず口を開いた。

・・・ノースさん…ずっとそこにいたんですか……。本当に身体壊しますよ。・・・

ノースの地点が勇輝が寝る前に彼ががいた机から場所が全く変わっていないかったのだ。

もしかしたら机で寝ている可能性もあるがほぼ徹夜だったことは

容易に想像できる。

・・・なんか申し訳ないな。あとで何か労ってあげられないかな。・・・

働き詰めだったノースに申し訳ない気持ちになり、レーダーを切ると軽く目を閉じた。

「ははは……、出来たぞ……。これで戦争を止めさせてやる……。ハハハハッ！」

ノースは目の下のクマをアクセントに狂気をまとった顔をしていた。

そして自分の書き上げた紙を両手で掲げて椅子から立ち上がった。

「あれっ？・視界が歪んで……」

急に立ち上がったからだろうかノースは目を回して力が抜けたように倒れた。

「おーい！・ノース、起きてるかー？・っておいっ！・大丈夫か!？」

それから少ししてノースのもとにレイルがやってきたが、倒れているノースを見て大慌てで駆け寄った。

「なんだよ、寝てるだけじゃねーか。おどかしやがって……ん？・なんだコレ？」

寝息を立てているノースに安心して悪態をついたレイルは彼の手に握られている紙を手を取った。

「ふーん……、おおっ！・スゲー。やるじゃねーかよ。」

その内容を読んだレイルはノースを見てニヤリと笑うと紙を机の上に乗せてその場を離れた。

そしてまたしばらくして毛布を持ったレイルがやってきたノースにゆっくりとかけた。

「オレがいなくなった間に立派になったじゃねーか。」

レイルはそう呟くと肩を回して外に出た。

「はっ……いつのまにか寝てた。」

勇輝がもう一度目を覚ますとカナはいなくなっていた。

……どれくらい寝てたんだ？……………30分くらいか、カナさんはどこに？……………

腕時計を見てその後立ち上がり毛布を軽くはたくと異次元空間に収納した。

「あつー勇輝さん、おはようございます！朝食持って来ましたよ！」

突然後ろから声をかけられて振り向くとカナが2人分の朝食を持って立っていた。

そして何故かキラキラオーラが見えそうな雰囲気醸し出している。

「おはようございます。わざわざありがとうございます。」

勇輝も少し間を空けて挨拶を返すと朝食のスープを受け取った。

スープの僅かな温かみを感じて安心感に包まれた。

……この程度で取り乱すなんて人のことを言えないかもな…。カナさんを見て安心した。……

勇輝は自分の新たな変化になんとも言えない気分になり、スープを啜った。

「カナさん。」

「はい？どうしたんですか、勇輝さん？」

勇輝が呼びかけるとカナが食事の手を止めて勇輝の顔を見る。

「昨夜はよく眠れましたか？……………あの馬車はそんなにちゃんとしてないのでちよつと寒かったでしょうか？」

勇輝は気まぐれにちよつとした意地の悪い質問を試してみる。

「えっ？あ…ああ、大丈夫でしたよ…。勇輝さんは？」

カナは耳をピンと立てて目を少しそらし明らかにいつもと違う反応を返した。

「私は毛布だけでしたが、何故かそんなに寒くは感じませんでしたね。あの毛布そんなに暖かくなかったと思っただんですが。」

「へ…へえー…。そうでしたか…。よ…良かった…です。」

カナは勇輝の返答に顔を赤らめてもじもじしていた。

その顔はちよつと嬉しそうであり、尻尾はあからさまにそれを示していた。

・・・カナさん、気づいてないと思ってるんだなー。これはこれで可愛い。・・・

「さてと、とりあえずノースさんのところに行ってみましようか。」

「はいー!」

カナに癒しをもらった勇輝はノースのいる詰所に向かった。

「ノースさーん、います……か……。」

勇輝がノースを呼びながら詰所に入ったところで口の前に人差し指を立てたレイルが出て来たので声のボリュームを下げた。

「すまねえな。ノースのやつ寝ちまつてるからよ。」

「いえ、それなら仕方ないですよ。かなり無理してたみたいですから。」

カナが後ろを付いて来る中勇輝とレイルはノースが居る所へと向かう。

到着すると何故か地べたで仰向けになって眠っているノースの姿があった。

かなりやつれた顔をしていたが、やりきったという表情をしていた。

毛布がかけられているのはたぶんレイルがやったんだろう。

「ずいぶん派手に寝てますね……。」

「ああ、どうやら仕事を終えて立ち上がったところで力尽きたようだな。その証拠に……コレ見てみるよ。」

レイルは机の上にある紙を取り、勇輝に渡した。

「なんですか?……ふむ……。」

・・・どれどれ……交渉内容の変更……?カイゼル公による第二王女の拉致及び監禁を始めとした行為に対する嚴重な抗議を行う。……しかしカナによる影武者交渉の事実の露見を避けるため拉致監禁に関しては言及せず、野営地に対する襲撃の首謀者としての講義を中心とする……か。確かに今回の件はサビーナ家と対立しているカイゼル公への有効打……いや、決着をつけることになり得る。それはいいカードになるな。……

「すごいですね。今回の事件をうまく外交のカードに利用するなんて。でもかなり緻密に練られてますね。カナさんのことがバレないやうにも対策を考えられてる。」

読み終えた紙をレイルに返すと彼は再び紙を机の上に戻した。

「だろ？後はこれに沿って交渉をするだけってことだ。それまでは休ませてやらうぜ。それだけの仕事をコイツはやったんだ。」

レイルはノースに視線を移すとそう優しく言った。

「そうですね。ノースさんはこの後も交渉を実際に進めることもやらないといけないですからね。じゃあ私たちはお暇しますか。」

「あの、ノースさんをちゃんとしたところで寝かせた方がいいんじゃないか。……」

カナがそう言ってノースに近寄って行った。

「やめとけ、下手なこととして起こしちゃうよりはこのままの方がいいからよ。ほっとくのが一番だぜ。」

レイルが手を出してカナを止めた。

「うーん、分かりました。」

カナは仕方なく踵を返して勇輝の後について詰所を後にした。

しばらく後になってやっとノースが目を覚ましたらしく交渉チームが慌ただしく動き始めたのを勇輝たちは見た。

しかし、ノースは勇輝たちと話すのも朝食を食べることも後回しにして大急ぎで馬車に乗って交渉に向かいに行った。

「すごい早さで行っちゃいましたね。」

「それだけ自身があるってことでしょうかね。確かにあのカードはなかなか強力ですからね。これならあちら側もかなりの譲歩を迫られるはずですよ。ノースさんを信じましょう。」

「はいー！」

勇輝とカナはノースの交渉の成功を祈り馬車を見送った。

喧騒の合間に

ノースたちが交渉に赴いてからは野営地も少し落ち着いていた。

警備のため兵士が交代で巡回などをしているが、保護された者たちも大人しくしているため、平和そのものであった。

「今回もまた慌ただしかったですね。結局アトライアの街ではギルドに寄った以外はゆっくりできませんでしたし……。」

勇輝がため息混じりに隣にいるカナに語りかける。

「そうでしたね、宿を取るはずがなんだかんだでみんな野営地に泊まる羽目になっちゃいました。……そうだっ！それなら今からちよつと街に行きませんか？」

カナが手を合わせて元気な声で提案してきた。

「うーん……大丈夫ですかね……、私たちだけいいんでしょうか？」

勇輝は今交渉に臨んでいるノースやここを警備していたり、保護した者の面倒を見ている兵士たちに申し訳なく感じていた。

「やっぱり申し訳ないですよ。私たちも何か手伝えることを……。」

「行って来いよ！せっかく嬢ちゃんが誘ってるんだぜ！」

「えっ!?れ……レイルさん!?脅かさないでくださいよ。」

提案を断って何か協力をしようと言っている途中にいきなり背後から背中を強く叩かれて勇輝は前に大きくよろけた。

その声と慌てて振り向いて見た顔で相手がレイルだと分かって肩の力を抜く。

「悪い悪い、ちよいと聞いてたけどいらん遠慮をしていたもんだからな。アンタらも十分頑張ったよ。こっちは大丈夫だから遠慮せず楽しんでこい！カナもけっこう窮屈だったろう？もつと甘えとけ。」

「うう……／＼／＼」

レイルの言葉にカナは下を向いて顔を赤く染めた。

レイルはそれを見てさらにニヤけると踵を返して怪我をしていない手を振りながら歩いて行った。

「ああまで言ってもらっては断れませんね。そ……それじゃあ、行きますか。」

「は…はいっ！」

バツが悪そうに頭をかきながら勇輝がカナに顔を向けて話すとカナも顔を上げて少し上ずった声で返事をした。

そして2人は野営地を後にして街へと出かけて行った。

もう何度も見た豪華な部屋、何度も合わせたしかめっ面…：ノースたち交渉団はアトライア城内の会議室で交渉のテーブルについていた。

しかし、今回は以前よりも自信と余裕のオーラを滲ませている。

対するアトライア側は「また来たのか、ご苦労なことで」と言いたげな顔を向けて座っている。

「それで、今回はどうしたんですか？開戦はあくまでも第一王子の指示ですからどうしようもないですよ。」

外交官（アトライア）がため息を吐き、呆れ顔を向けて口を開いた。

「いえ、今回はまず抗議したことがありまして…。」

「おや…：抗議とおっしゃいましたか？いったい何のことですか？」

ノースが落ち着いて切り出すと外交官は不思議そうな顔をして反応した。

「単刀直入に申しますと、先日そちらからの刺客に私達の野営地が襲撃を受けました。目的は第二王女、そして我々だったようですね。」
「なっ…：なんだって…？どうしてそうだと言いつけるんだ!？」

外交官の表情が一変し、ノースに言葉を返すとともに部下と思われる人に何かを耳打ちすると彼は足早に部屋から出て行った。

「詳細をお話しさせていただけると、深夜に我々の野営地に刺客が侵入しました。その者は我々の方で捕縛しましたが、自供によりアトライア側によるものと判明しました。」

「馬鹿な！そんなことがっ！…：知らないぞ…。」

外交官がテーブルを叩いて小さく呟いていると外交官の部下が走って戻って来て外交官に耳打ちで話した。

「今確認をしたが、そのような事実はないとのことだ。ただの夜盗のデマかせだったのではないのか？」

部下の情報を聞いて顔の汗を拭い少し落ち着きを取り戻した外交官はノースに再び言葉を投げかける。

「おや、そうですか。おかしいですね、その刺客を送り込んだのはそちらの重臣だった筈なのですが、把握されてないのですか？」

ノースは緊張を表に出さないように口角を少し上げて新たな揺さぶりをかける。

「なんだとっ!? 一体何の根拠があつてそのようなことを言うのだ!」

ノースの客観的に見て煽りに近い言葉を受けて外交官は語気を強めて言い放つ。

「そうですか…本当にご存知なかったんですね。ではお教えします。今回、刺客を送り込んだのは………カイゼル公です!」

「か…カイゼル公っ!!……だど……」

ノースの言葉に外交官は驚愕の表情を見せてしばらく固まっていた。

それに反比例するように汗が流れ落ちている。

「刺客が自供した情報からカイゼル公の指示によるものと断定し、さらなる襲撃を未然に防ぐため調査をしたところ彼の私兵と戦闘になりましたが……、その結果カイゼル公を拘束することになりました。……なお彼はあっさり自供しておりこの件は明確な国際問題と捉えることができます。……たとえばカイゼル公の独断によるものだとしても。」

さらに詳細を話すとき外交官の顔はみるみる青ざめてきた。

「こ、この件は我々の立場では判断が困難なため……第一王子をお招きする……」

やっと口を開いた外交官は交渉する者として降伏にも等しい判断を下した。

「そうでしたか、それではお待ちしていますね。」

ノースは余裕たつぷりに答えると外交官が部屋を出ていくのを見送った。

しばらく待つと外交官がまたやって来た。

「もうすぐ第一王子が入られる。くれぐれも失礼のないように。私にとつたような態度は絶対にしないでくれ。」

「判りましたよ、さつきは申し訳ありませんでした。」

先程の交渉の時と打って変わり、必死な様子で懇願して来た外交官にノースはあつけに取られて不憫に思い謝った。

その後外交官が退出して会議室に分厚いマントを羽織って気怠そうに入ってきたグレアム第一王子をノースがジト目で睨む。

グレアムが入ってきた際立ち上がったノース達はグレアムが座つた後に席に着いた。

「さて、どうやら大事になっているようだが、カイゼルのやつがなんだったって？」

グレアムはどこか他人事のように尋ねてきたが、カイゼル公に対する言い方に敵意に近いものがあつたのをノースは見逃さなかつた。

「ええ、先日我々に刺客を送り込んで襲撃を行ったのですが、その後紆余曲折あつてカイゼル公を拘束することとなりました。」

外交官の話を大して聞いていなかつたようだったのでノースはもう一度説明した。

「ふーん、いい気味だな。」

「この事はご存知でしたか？また、関与はありましたか？」

「知らん、どうせアイツが勝手にやった事だろう。」

相変わらずの態度であつたが、嘘でなければグレアムが知らないという事はカイゼル公の完全な独断によるものという事になる。

「判りました。しかし、カイゼル公の独自の行動だとしてもそちらの重臣である方がそのような事をしたというのは大きな問題となります。もちろん最終的には陛下にもその責任が発生します。」

「あつ？なんだと？どうしてそうなるんだ！」

ノースの話を頬杖をついて聞いていたグレアムは突然怒りを露わに語気を強めた。

「たとえば、彼の独断でも家臣の起こした事の責任は国家元首にも及びます。今は陛下がこの国の代表なのでしょう？決して他人事では無いのです！」

ノースも一步も引かないため部屋の中の空気が張り詰めている。

「しかし……、この問題をなかつた事にする方法もございます。」

「ほう、言ってみろ。」

對抗姿勢から急に口調を和らげ、新たな方法を提示する。

「陛下が一言、開戦を取り止めると言っていただけたら我々もこの件はなかつた事に致します。それなら全てが丸く収まります。」

「なっ……だが……、他は無いのか？」

「ええ、我々はどうしても戦争を避けたいのです。そちらも少なくない被害を被りますよ。それでも、引かないとおっしゃるのならこの件を公表して問題にすることも辞さないですよ。そうしたら現体制への反対派も生まれることでしょう。それは良くないと思いますが、いかがでしょうか。」

ここぞとばかりにノースは畳み掛けてグレアムを追い詰める。

あくまでグレアムは交渉スキルをはじめとする政治手腕は未熟であるからこそノースは有利に運んでいる。

交渉相手がグレアムになった時点で勝ちが決まったようなものだったのだ。

「クソッ！なんなんだよ！イラつくなあ！」

グレアムが机をバンバン叩きながら悪態をつくのを見ればノースは表情一つ変えず見つめている。

「陛下、まだ話には続きがあります。きつと陛下にも良いものとなりますよ。」

ノースはしっかりとグレアムの目を捉えて自分のペースに引き込む。

「開戦を中止していただけたら今回拘束したカイゼル公をそちらに引き渡します。そのあとはご自由にどうぞ。確かカイゼル公はサビーナ家とは政敵なんですよ。今回の全ての責任を彼に押し付けて失脚させればかなり国内の地盤固めができるのでは？襲撃以外にも彼の悪事を握っていますよ。」

「それは本当か!?それは良い案ではないか！」

ノースの提案にグレアムは思い切り食い付き、あまりの勢いの良さ

にノースは思わずニヤリと笑った。

「それでしたら中止していただけますか？」

「ああ！もちろんだ。」

グレアムは二つ返事で開戦の中止を決定した。

「それでは今回の事件は全てカイゼル公の独断によるもので、それをグレアム王子が見事に阻止した……ということですのでよろしいですね。」

ノースはわざとらしく悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「ああ……そうだな。カイゼルをオレが成敗した。」

グレアムは最初に不思議そうな顔をしたが、その意味を理解するとワルい顔をしてつぶやいた。

「それでは今後は是非獣人の国とも友好に。」

「いいだろう……だが、ケーネ女王は諦めないぞ！」

ノースがスツと立ち上がって手を出すとグレアムもまた立ち上がってノースの手を握った。

それを見てノースの後ろにいた交渉団はガッツポーズをしたりそれぞれの嬉しさを表現していた。

「獣人にもなかなか面白いやつもいるもんだな。」

「有難いお言葉です。これから一旦戻ってカイゼル公を引き渡しますので準備をお願いします。」

「いいだろう。……おいっ！だれか来い！」

グレアムが家来を呼んで指示を送るのを見届けて、交渉団は部屋を後にした。

「いやー、楽しかったですね。」

「はい！耳と尻尾を隠さないといけないのは面倒でしたけど、それ以外は良かったです。」

勇輝とカナは短い時間だったが、アトライアの街を散策し、既に街を出て野営地に向け帰路に着いていた。

勇輝は新たに食料の備蓄と前回必要だと感じた枕を確保していた。

……よし、これくらい用意しておけばいいだろう。資金的にはま

だまだ余裕もあるし。・・・

「あれっ？勇輝さん、なんか野营地の方が騒がしいですよ。」

カナが帽子を取って耳をピンと立てて勇輝に言った。

「何かあったんでしようか？ちよつと急ぎましようか。」

「はい！」

荷物を全て異次元空間に収納しているので身軽だった2人は野营地に向けて走り出した。

「あつ、あの馬車……ノースさん帰ってきてますね。」

「本当ですね。騒がしいのも関係してるんでしょうか。」

2人が野营地に近づくと次第に様子が分かってきた。

兵士たちがせつせと展開していた天幕などを撤収しては馬車に積み込んでいる。

「あの……ちよつといいですか？」

「ハイっ！何でありますか？」

勇輝は近くにいた兵士に話を聞くことにした。

「ちよつと今の状況を教えてください。」

「ああ、ノースさんが遂に交渉を成立させたのであります！交渉団はカイゼル公を先方に引き渡すためにもう一度アトライア城に向かい、引き渡しが終われば我々はノシヨに帰還することになったのであります！今はそのための作業をしております！」

「それはすごいじゃないですか！……でも、保護した人たちはどうするんですか？どう考えても馬車が足りませんよ。」

兵士から話を聞いて2人は喜んだのもつかの間、保護した者のことを思い出した。

「そちらはこれから交渉団が先方にカイゼル公を引き渡す際に手配をしてもらうとのことであります！小規模のキャラバン並の規模になってしまいますが、友好の証明としてアトライアの兵士の護衛もつくとのことですよ！」

兵士は常に大声ではつきりと話してくれたのですぐに理解できた。

……こりや大成功じゃないか。ノースさんもなかなかやるもんで

すね。これで僕らも依頼完了ということか。・・・

「ありがとうございます。私も何か手伝いましょうか。」

「な…なら私も手伝います!」

勇輝「手伝いを願いとカナも一緒に手を挙げた。

「感謝します!それでは詰所にいるレイルさんのところへ向かえば手伝えると思うのであります!」

勇輝とカナは小走りでレイルがいるという詰所へと向かった。

「おう、もう戻ったのか。」

「ええ、おかげさまで楽しめました。ありがとうございます。」

詰所に着くとすぐにレイルを見つけて言葉を交わす。

「どうやら忙しいようなので私たちも何か手伝おうと思ったもので。」

勇輝がそう言うときカナもうんうんと頷く。

「そうか、それなら助かる。それじゃあアンタの魔法の…あの…:便利なヤツで大きな荷物を片付けてもらえねーか?」

・・・ああ、異次元空間のやつか。確かに明確な名前がないから呼びにくいよな。なんか名前でも考えておくか?ゲ○トオブバ○ロン

「いや、違うな。やっぱり後でにしよう。・・・」
「分かりました。お安い御用ですよ。それじゃあカナさんも一緒に来てください。」

「はい!分かりました。」

結局勇輝の異次元空間に残りの物資や荷物を全て放り込むことになったので野営地はかなりサツパリとした。

「いやー、結構な量を入れたので疲れましたね。これでもけっこう楽できたと思いますけど。」

「そうですね。皆さんとひたすら異次元の門に物を運び込むだけでしたからね。そういうえば皆さん門の中に入ったらすぐく驚いてましたね。」

「それはそうですね。珍しいものがたくさん入ってますからね。」

勇輝達は一通りの作業を終えて軽食を食べていた。

勇輝とカナの手にはアトライアの街で買ったサンドイッチのような料理がある。

「うん、けつこうおいしいな。……ノースさん達早く戻って来ないでしようかねえ。ちよつと退屈です。」

サンドイッチもどきをかじり勇輝がぼつりと呟く。

「このまま戻って依頼が終わったら私たちどうしましょうか。結局私に關することは何も分かりませんでしたね……。」

カナも同じように呟いたが、それは不安を含むものでどこか儂げな雰囲気を漂わせている。

「大丈夫ですよ、きつと何か手掛かりが見つかりますよ。まだ始まったばかりじゃないですか。」

勇輝はカナの前に立つと安心させるために優しく諭すように語りかける。

「そ……そうですね……、本当にケーネ王女とはただのそっくりさんだったんでしょうか……。それとも何か關係が……。」

「それは分かりません。けど、今回はカナさんのおかげでノシヨの危機を救って獣人と人間の友好を築くきっかけを作れたようなものです。それは誇ってもいいと思います。」

「私なんて……結局勇輝さんに助けられてばかりですよ。」

カナは耳を伏せて下を向いて卑下の言葉を漏らした。

その肩は若干震えていた。

……マズイな、こんな時どうすればいいんだ？どうにかしてあげたいけど、自分も同じような事があった時には誰もいなかったから分からない……。何かないか？……

次第にカナの嗚咽が聞こえてきたが、勇輝は何も声をかけられずにただ佇んでいるだけだった。

帰路にて

ノースたちの乗る馬車が戻ってきたのは日が傾き始めるかどうかという時間だった。

交渉団だけでなく、アトライア側の兵士達の馬車も5台後に続いている。

：：向こうの兵士が協力してくれるのか。交渉がよほど上手くいったんだな。・・・

勇輝は適当な切り株に座って彼らがやってくるのを眺めていた。

その側にはうつすら涙を残して眠っているカナもいた。

・・・どうしようかなあ、そろそろ起こしてあげるか。出発もだけど、夕食も早めに食べた方がいいだろうし。・・・

「カナさん、起きてください。ノースさん達が戻りましたよ。」

「んん……あつ……いつのまにか寝てしまいました……。見苦しかったですよね……？」

カナは少し唸った後すぐに起き上がり目を擦ると弱々しく尋ねた。

「いえ、そんなことはないですよ。私も少し思うことがあったものですから。」

「思うところ……ですか？」

勇輝の含みのある言葉にカナは首を傾げる。

「さつきまでカナさんのことについて考えていたんです。」

「私のこと……？」

「はい、カナさんが言っていた『結局助けられてばかり』ということについて……さつきは何も言えませんでした。けど、私だってカナさんにも他の人にもたくさん助けられています。そしてカナさんもたくさんの人を助けています。」

「えっ……？でも、私は……」

「私はほんのかすり傷程度しか治せません。誰かを労ってあげること……でもっ！カナさんはそれができます！はじめは人見知りが強かったカナさんも今では見ず知らずのたくさんの人を魔法で助けられるようになりました。」

「う…それは…」

「ここにいたくさんの人たちだって、カナさんにも助けられているんですよ。……だから自分のことを悲観しないで。」

最後の言葉は特に感情が込められていた。

それはカナだけでなく過去の自分にも向けられている。

「そ…そうですね。私が間違つて…」 「いや、そうじゃないっ！」

勇輝はカナの言葉を強く遮つてカナはきよんとしている。

「間違つてなんかいません。ただ…それだけじゃないと、そう言いたかっただけなんです。その負の面もカナさんの一部なんですから…。」

勇輝の声は次第に力を失いつつ最後は絞り出すように言い放った。

それはかつての勇輝がずっと求めていた、誰かにかけて欲しかった言葉であり、頭ごなしの否定ではなく、理解の伴わない楽観の強要でもない…ささやかな肯定だった。

…僕だつて誰かに肯定されたかった。でも自分の悲しさを誰かに伝えると皆マイナス思考だと、暗いことを考えるなどそれだけだった。否定の言葉だけ…そして誰にも打ち明けることをしなくなつて…自分も同じ状況にいたからこそ分かる。ただ認めて欲しかったんだ。カナさんも僕と同じだ。…

「勇輝さん…、私…。」

「カナさんは今のままでもいいんです。無理に変わったりしなくていいんですよ。」

勇輝はそう言うその後ろを向いて俯いた。

…そう、ただ変われることを求めるんじゃない。変われないから苦しんでるんだ。今のままでいいんだと、悪いことじゃないんだと…それだけでも…

「っ!?か…カナさん!？」

「そのままじっとして…ください。」

勇輝は背後からカナに突然抱きつかれて驚いて振り向こうとしたが、カナに止められて、大人しくすることにした。

身長差はそこまでなく、背中全体にほのかな温もりを伝えている

が、特に一部分に柔らかい感触に包まれている。

耳元近くで囁くようなカナの言葉に勇輝は動く気は起きなくなつた。

「勇輝さん、やっぱり私は勇輝さんに助けられてばかりです。でも、今度は悲観じゃないですよ。嬉しいんです。勇輝さんの言葉で私は救われたと思います。」

「そう…ですか。私もそう言ってもらえて嬉しいです。私も…昔同じような考え方で悩んでいましたから。」

「勇輝さんが？そう言われるとノシヨにいた時のあのことも……。同じだったんですね。」

「カナさん…、もういい…ですか？」

「ごっ…ごめんなさい！すぐに離れます！」

そう言い慌ててカナが離れた後の背中は少し寂しかった。

勇輝が振り向くとカナは紅くなった顔をうつむきがちに横に向けて両手の指をツンツンと合わせている。

…久しぶりに見るな、こういうカナさんを。なんかこつちまで恥ずかしくなってきた。…

なぜか勇輝も顔が熱くなりだしてカナのことを直視できなくなつた。

「も…もうそろそろ私たちも出発の準備をした方がいいですねー…。」

「そ…そうですね。」

2人揃って気まづくなり、そそくさと馬車へと向かった。

ノース達が戻ってからは素早く事が運んだ。

すでに粗方の物は撤収して出発の準備も整っていたので、各々の割り当てられた馬車に乗り込んで次々と出発した。

列の先頭にと最後尾、そして中央の王女と交渉団の乗る馬車の前後にノシヨとアトライアの兵士が乗る馬車が配置されている。

「へえ、コヨースカで暮らしていたのね。そこでは獣人はどれくらい住んでらっしゃるの？」

「正確には判りませんが…少なくとも無いと思います。それに、耳と

かを隠して生活していますけど街には獣人の事も配慮してある店などもたくさんありました。」

「そうなんですね。街では一応の関係が保たれているみたいで安心しました。これからもっと友好を深めてノシヨのように獣人と人間が共に仲良く暮らせるようになって欲しいですね。——」

勇輝とカナはケーネ第二王女の希望で同じ馬車に乗っていた。

先程からカナと色々な話をしているが、やはりそっくりすぎて判別がつきにくいので、服装でかろうじて見分けている。

・・・まるで双子を見てるようだな。カナがいつものローブじゃなくて往路で着ていたドレスだったら分かんなかったかも……いや、大きな違いがあるじゃないか！……

勇輝は失礼ながら王女のとある部分を見て決定的な違いを発見してしまった。

「勇輝さん？私のドレスに何か付いているのですか？」

「アツイエ、何もありません。」

カナとの話で盛り上がっていた王女が突然勇輝の方を向いて尋ねたので少し目を逸らしてカタコトっぽい返答になってしまった。

・・・胸元を見比べていたなんて言えるわけ無いじゃないか……。王女殿は大変”高貴”なスタイルでいらっしやる……

王女と同席ということでドリル服装で座っている勇輝は少し窮屈だった。

服装の物理的な窮屈さに加えてお世辞にも広いとは言えない馬車に男女1：2であり、少々居づらいのもあった。

しかし、それを表に出すほど勇輝の表情筋は無いので、振る舞いだけ気をつければなんとかなる。

「そういうえば勇輝さんとカナさんはどのように会ったのですか？」

「えっ？あ……ああ、私がコヨースカのギルドで手頃な依頼をさがしていた時にカナさんから声を掛けられてパーティーを組むことになったんです。」

「まあ！意外ね。最初はカナさんが声を掛けたなんて。素敵じゃない。」

王女が手を合わせて嬉しそうにカナを見ると、当の本人は顔を赤らめて下に向けている。

・・・控えめに言って可愛いな…。・・・
勇輝と王女はそんなカナを見て楽しんでいた。

そんなこんなで雑談に花を咲かせてしばらく過ごしていると最初の休止地点に到着したようで馬車が停止した。

「あら、今日はここで夜を過ごすみたいね。こんなに綺麗な夜空を見たのは久しぶりよ。なんとって監禁されていたんですもの…ふっ。」

「そうですか。それにしても王女様はとても気丈なんですね。長い間監禁されていらっしやっただのに他の子供達のことを気に掛けたりされて、とても素晴らしいです。」

馬車から顔を出して空を見上げていた王女に勇輝はそう言うとき王女は勇輝の方に振り向いてにこやかな表情から真剣な顔になった。

「私ももちろん辛かったわ。でもね…あんなに小さな子たちまで辛い目に遭っているんだもの。嘆くことは簡単だけど王女としてそれはできなかったし、何より1人の人としてあの子たちを助けてあげたかったのよ。それだけよ。」

そう言い切った王女は立派な王族たる覇気を纏う第二王女の姿を見せていた。

・・・すごい…。強いと少しちがう、王族としての誇りと優しさの織り成す力とでもいうのかな。やっぱりあの王様の娘なんだな。…：「さあ、あなた達もみんなを手伝ってあげて。お話とても楽しかったわ。ありがとう。」

「い…いえ、王女様とお話を出来て光栄です！」

「こちらこそありがとうございます。身に余る幸せです。」

「全く、そんなに畏まらなくていいのよ。まあいいわ、行って来なさい。」

王女の言葉に勇輝とカナはお辞儀をすると馬車を降りて野営と食事の準備の手伝いに参加した。

救出した人質に加えてアトライアからの兵士も混じってかなり賑やかな野営になり、食事ももはや宴会の様相を見せていた。

最初はノシヨの兵士とアトライアの兵士の間は微妙な距離感があったが、酒の力も手伝っていつの間にかやらすつかり馴染んでいた。

中には肩を組んで陽気に歌ったり騒いでる者もいた。

王女もその場に居たが、その様子を見て心の底から嬉しがっているように見えた。

「これからお互い仲良くできるんですかね?」

カナが勇輝の隣でパンを手に話しかけてきた。

「どうでしょうね。でも、これまでよりはきつと良くなるんじゃないですかね。それぞれの代表者の頑張りにかかっています。」

勇輝もパンをかじりながら考えを述べる。

「あつ」

「どうしたんですか?カナさん。」

カナが突然声を上げたので勇輝はパンを食べる手を止めた。

「そういえば、元々の発端の1つはグレアム王子がケーネ王女に結婚を申し込んだことですよ?つまり、あの王子が王女様に惚れたってことですよね。」

「そうですね。……ああつ!そういう事ですか。」

勇輝はカナが言いたいことを理解して納得した。

……国のトップである王族が獣人に惚れてこんな行動を起こしたんだ、本当に見下したりしてるんならそんなことになるはずがない。彼らも獣人の事が心から嫌いなわけじゃないんだ。それなら分かり合える余地は大いにあるじゃないか。……

「確かにこの事に双方の人々が気がついたら考えも変化しますね。人間の国のトップが獣人に恋したんですから。」

「そう考えるとロマンチック…なんですかね?」

「国同士を巻き込んでやられると困りますけどね…。」

勇輝が苦笑するとカナもクスクスと笑った。

「ゆ…勇輝さんはど…どんな風にすす…好かれますか?!?」
「へっ?」

薄暗いかがり火の明かりでもわかるくらいに顔を赤くして発言したカナに勇輝は素つ頓狂な声を上げて思わずパンを落つことした。

それは別に鈍感なわけではない勇輝には十分すぎるほどの衝撃を与える一言だった。

問に答えていたらどうなったんだろう。その希望に合わせた？難しい事言われたらどうしよう…。でも、もつと大事な問題は……………」

「私は…勇輝さんのことが……………好き？」

思わず口から出た言葉にカナは少し戸惑いを見せる。
「……………私は勇輝さんと一緒に居たい。それは変わらないけど…この気持ちは少し違う…？これが好きってことなのかな？……………」

「ううー……………分かんないよ……………」

カナは頭を抱えて俯いて弱々しく呟いた。

「何が分からないの？」

「えっ？……………シヤリアさん!?いつからそこにつ!？」
カナが声のする方に振り向くとシヤリアが腕を組んで木に寄り掛かってカナを見下ろしていた。

「アルを寝かしつけてちよつと歩いていたら、なんか木の裏から呻き声みたいなのが聞こえたのよ。そしたらあなただったってわけよ。それで何か悩みでもあるの？」

ゆつくり立ち上がったカナに説明をするシヤリアが最後に出した質問にカナはビクツツと肩を動かした。

「な……………なんでも無いですよ。」

カナはシヤリアから顔を逸らして答えた。

「あなた、誤魔化すのが下手ね。それじゃバレバレよ。なんか好きってのも聞こえたけどー」

「き……………聞いてたんですか!？」

「その反応も白状するのと変わらないわよ。本当にあなたたちよろいわね。」

「あう……………」

カナは耳をしゅんと下げて縮こまった。

「とにかく、話してみなさい。年はほとんど変わらないけど経験は豊富よ。色恋に関しては微妙だけど。」

シヤリアは組んでいた腕を今度は腰に当てて胸を張った。

「うーん……………それなら……………、私は勇輝さんと一緒に居たいということ望んでいます。けど、だんだんと近くにいるときに自分が少しおかし

くなったりしちゃうんです。自分でもこの気持ちが何なのか分からないんです。やっぱりこれが好きということなんでしょうか？」

「そうね、それは私も流石に断言はできないわ。でも、似たようなものは一足先に経験したわ。」

「えっ！シヤリアさんも？」

「私のはちよつと違うけどね。私たちはこの後ノシヨに保護されるでしょう？それからなんだけど、レイルも冒険者のパーティの活動拠点をノシヨに移す事にするそうなの。そして彼は私にメンバーにならないかつて声をかけたの。その時胸の奥で、暖かい気持ちが溢れてきたの。その前からなんだかんだで私の事を気にかけてくれたのが私にも分かってたからその気持ちに気付いた。きつと私は…レイルのことが好きになつちやつたみたいなのよ。」

シヤリアは、レイルの話をし始めた辺りから若干上の空な雰囲気を漂わせていた。

・・・へえ…シヤリアさんがこんなになるなんて…もしかして私も？ちよつと心配になってきた。・・・

「ちなみにレイルさんは？」

「彼は気付いていないと思うわ。私も気持ちを告げるかどうかはまだ分からないわ。…カナ、あなたのも近いものだと思うわ、今はそれを自分の中ではつきりさせるだけでいいんじゃないかしら。そこから先はあなた次第よ。」

シヤリアはそう言い終えると後ろ手を振りながら去っていった。

・・・そつか、私次第…か。私はどうなんだろう…勇輝さんは私の事どう思ってるのかな？迷惑だったりしないかな？…やっぱり分からないよ。・・・

シヤリアが去った後もカナはしばらく頭を抱えていた。

夜が明けて、楽しく騒いでいた両国の兵士達も気分を切り替えて片付けと出発の準備をしている。

勇輝とカナはあの後会う事なく別々の馬車で眠った。

「あつ、おはようございます、カナさん。」

「お……おはようございませす……。」

勇輝がカナを見つけて声をかけるとカナは返事だけを返してよそよそしくそっぽを向いた。

……えっ？ 僕何かしちやった？ たぶん昨日のことだよな、何があつたんだ？……

「カナさん、昨日の事だけ……」

「おう、勇輝！ここにいたのか。ちよつと手伝ってくれ。」

「えっ、ちよつと……。」

勇輝がカナに尋ねようとしたところでレイルが現れて勇輝を引つ張られて連れてかれてしまった。

引つ張られながら後ろに見えたカナは未だに顔を逸らしていた。

……仕方ない、さつさと終わらせて後で聞か……

「レイルさん、何をすればいいんですか？」

「それがな、今回の野営が終わったら日を跨がずにノシヨに向かいたいんだ。ちようど今ギリギリの距離なんだよな。そこであなたにも必要のない野営用の荷物とかも収納してもらいたいのさ。荷物が軽くなれば、十分に間に合うからよ。」

「そうでしたか、それなら手を貸しましょう。」

そのままレイルとともに荷物が集められている場所へと向かった。

「よし、これで全部ですか？」

「ああ、今ので最後だ。助かったよ。本当に兄ちゃんには世話になってるよ。」

テント用の布を異空間に放り込んで勇輝が兵士に尋ねると感謝をされた。

「勇輝、ご苦労だったな。これでも食えよ。」

「レイルさん、ありがとうございます……なんですかこれ？」

勇輝がレイルから手渡されたのは干し肉だったのだが、いつもと少し違う感じがした。

違う動物のものなのだろうか肉の色合いが、少し薄い色をしている。

「コイツはなあ、ワイバーンの肉だよ。凶体はデカイが数が少なく、おまけに倒すのも一苦労だから貴重なんだぜ。」

「へえ、ワイバーンですかあ……もしかしてこれですか？」

勇輝は以前ミサイルで撃ち落としたワイバーンのことを思い出して記念に取っていた首を取り出してレイルに見せた。

「うわっ……脅かすなよ。確かにコイツだな。アンタも仕留めた事あったのな。それじゃ食ったこともあったか？」

突然出てきたワイバーンの首にレイルは少し身構えたが、気を取り直して質問してきた。

「いや、食べられるとは知りませんでしたよ。それより、移動中に突然襲われたものでしたから。この首と状態の良さそうな鱗をいくらかといった感じです。」

「そうか、なら首は錬金術師辺りに売ればけっこうするぞ。鱗も使い勝手が良くてドラゴンよりは劣るがそれなりに貴重だ。」

「そうなんですな、いいことを聞きました。とりあえずこれはありがたいくらいいただきます。」

勇輝はワイバーンの首をまた収納すると干し肉を少し齧ってみた。普通のものよりかなり頑丈で顎が疲れそうだが、噛むほどに独特の味が広がる。

不思議とクセはあまりなく硬い以外は食べやすかった。

「けっこういいですね、美味しかったです。」

「おうーそれなら良かった。さて、そろそろ出発と行こうか。俺はノースに知らせてくるからアンタは馬車に戻ってな。そうだ……せつかくだからカナにもコイツを食わせてやれ。じゃあな。」

レイルは勇輝にもう一切れの干し肉を手渡すと走って行った。

「さて、戻るか。」

勇輝は干し肉を齧りながら馬車へと向かった。

「あら？あなたたち何かあったの？」

「またもやケーネ王女と同じ馬車にカナと乗ることとなった。」

しかし、馬車に乗る前から相変わらずカナは顔を合わせてくれな

い。

王女も流石に違和感に気づいて2人に尋ねる。

「いえ、何も。」あつ……………」

2人の返事が被り、2人が短い間顔を見合わせてカナはすぐに逸らしてしまった。

「あらあら、どうしちやったのかしら。そうね……勇輝さん、席を外してくださいさる？ちよつと2人でお話をしたいの。」

「えっ？分かりました。」

勇輝は少し疑問を残しつつも馬車を出てノースたちがいる馬車に行った。

「どうしたんですか？勇輝さん、もうすぐ出発ですよ？」

「いや、今度はこっちに乗らせてください。なんでも王女様がカナと話をしたいということですから。」

「ああ、そうだったんですね、それなら少し狭いですがどうぞ。」

「ありがとうございます。それではお邪魔します。」

勇輝が馬車に乗って少しすると馬車の一団は出発した。

「あの、お話しって……。」

「大したことじゃありませんよ。カナさん、あなたたつてもしかして勇輝さんのことがお好き？」

「ふえっ!?いや……その……。」

王女が身を乗り出してカナに顔を近づけて言った言葉にカナはたじろいだ。

「ふふっ、可愛いわね。いいじゃない。恋っていいものよ。」

王女はどこか楽しそうな表情で両手を合わせている。

「で……でも、勇輝さんが私のことをどう思ってるのか分からないから心配なんです。」

「その気持ちも分かるわ。でも、だからつてつれない態度ばかりだったら離れて行っちゃうわよ。もつと大胆に行かなきゃね。それに勇輝さんは大丈夫だと思うわよ。今までだって悪くされてないんでしょう?」

「そ…そうですけど。やっぱり怖いんですよ。」

カナは震える声で自身の心情を吐露する。

「やっぱりそうよね。それはあなたの勇気次第ね。でも、そんなに心配することはありませんよ。何よりこんな可愛い子に好きって言われて嫌になる男なんてそうはいませんよ。」

自身の瓜二つの人にそれを言うのは自分に言っているようなものではないと言葉をカナはかろうじて飲み込んだ。

「1つ心配があるとすれば勇輝さんがカナさんを子供っぽく見ているかも知れないということくらいかしら。それもあなたの振る舞いで簡単に無くせるわ。あなたには私に無いものがあるんですもの。」

楽しそうに話していた王女が話の後半で目の輝きを少し無くして自分の胸に手を当てたのを見てカナも何を言おうとしているのか察して顔を赤らめた。

「それはそうと、もっとお話ししましょう！まだ到着まではたっぷり時間があるからいろいろ聞かせてちょうだい。まずはいつから好きになったの？」

「ううー……」

カナはその後しばらく王女との恋バナに付き合わされることとなった。